京都府遺跡調査報告集

第191冊

平成30年・令和元年度国営緊急農地再編整備事業
「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告
金生寺遺跡第３～５次

２０２３

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

金生寺４・５次Ａ～Ｆ地区全景（東から）

⑴５次調査Ａ１地区井戸ＳＥ210上層出土遺物

⑵５次調査Ａ１地区溝状遺構ＳＤ220出土遺物

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や、地域の歴史教育などにも活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。また、これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する亀岡市金生寺遺跡第３・４・５次調査は、近畿農政局の依頼を受けて実施しました。今般、整理等作業が完了し、調査成果をまとめましたので、『京都府遺跡調査報告集第191冊』としてここに刊行する次第です。

金生寺遺跡は、曽我部町の南西に位置し、大阪府能勢町から池田市に通じる摂丹街道の隣接地に形成された集落遺跡です。発掘調査では、平安時代後期から中世の掘立柱建物や井戸、溝など検出しました。当該地では、初めての大規模調査であり、当時の土地利用の実態を明らかにすることができました。

本書が、学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるための素材として、ご活用いただければ幸いです。今後、これらの調査成果は、地域史や日本史研究を進めるうえで、重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました近畿農政局をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和５年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　井　上　満　郎

例　　言

１．本書に収めた報告は下記のとおりである。

平成30年・令和元年度国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告

２．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
金生寺遺跡 第３～５次	亀岡市曽我部町犬飼 中金生寺ほか	平成30年５月14日～ 平成30年９月18日 平成30年12月３日～ 平成31年３月７日 平成31年４月17日～ 令和２年３月19日	近畿農政局	荒木瀬奈 黒坪一樹 山本　梓 引原茂治

３．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

４．土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

５．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

６．現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本 文 目 次

平成30年・令和元年度国営緊急農地再編整備事業
「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告

挿図目次

付 表 目 次

写 真 目 次

図 版 目 次

平成30年度・令和元年度国営緊急農地再編整備事業
「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告

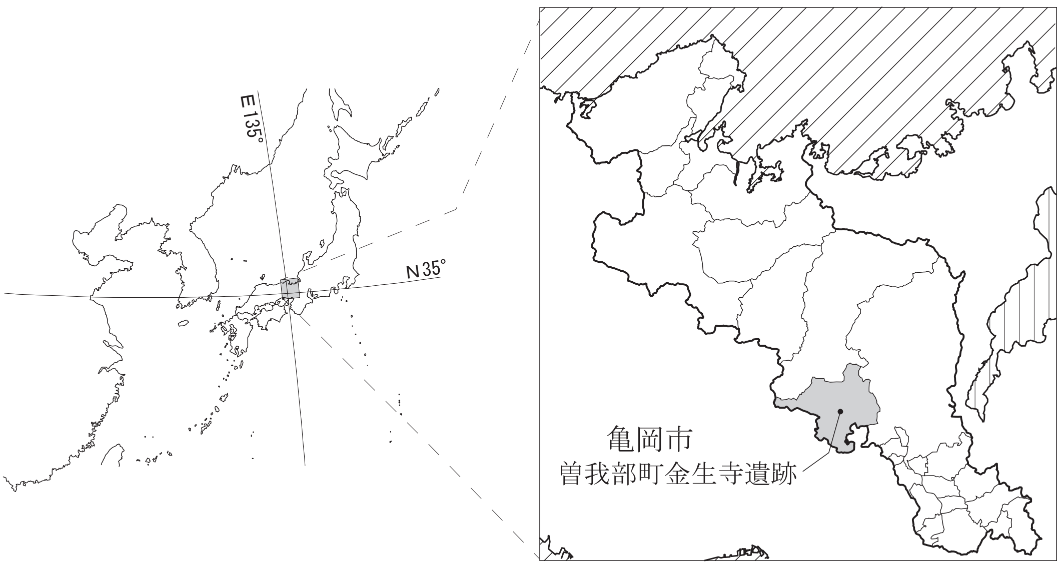
１．はじめに

京都府中部に位置する亀岡市では、桂川右岸の比較的緩やかな傾斜地を利用して、水稲を中心とした土地利用型農業の経営が行われてきた。しかしながら、農地の多くが狭小で不整形であることや、近年の機械の大型化に伴い道路の整備、用水等の整備が必要な状況である。また、農業従事者の高齢化等の様々な問題が顕在化し、耕作放棄地も散見されるなど、農業生産基盤の脆弱化が進んでいる。このため、一級河川桂川右岸に位置する亀岡中部地区の農地において、平成26年度から農林水産省近畿農政局亀岡中部農地整備事業所により、亀岡市土地利用の整序化・担い手への農地利用集積を進めるための区画整理を行い、農業経営の合理化と構造改善を図る国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」事業が行われてきた。

このうち亀岡市稗田野工区では、当事業に伴い公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成27年度から佐伯遺跡の発掘調査を行い、平成30年度に整理報告が完了した。また、平成30・令和元年度に発掘調査した犬飼遺跡第２・３次調査の整理報告が令和３年度に完了した。

曽我部工区での発掘調査は平成30年度より着手し、春日部遺跡、金生寺遺跡、犬飼遺跡、與野遺跡の調査を継続して行っている。本書で報告する金生寺遺跡は、曽我部工区に遺跡範囲の全域が含まれることから、京都府教育委員会による現地踏査、亀岡市教育委員会の小規模調査などを経て、農林水産省近畿農政局と京都府教育委員会の協議が行われ、発掘調査について当調査研究センターが依頼を受けた。

現地調査にあたっては、曽我部町、稗田野町、吉川町、東別院町、西別院町、本梅町、東本梅町、宮前町、畑野町、大井町、千代川町、亀岡西部の各自治会に御高配を賜るとともに、多くの



第１図　調査地の位置

地元の方々にご参加いただいた。また、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会に指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

なお、調査に係る経費は、農林水産省近畿農政局が全額負担した。

本文は、調査担当者が執筆した。　（村田和弘）

〔調査体制等〕

＜金生寺第３次＞

現地調査責任者	調査課長	小池　寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第１係長	細川康晴
	同　調査第１係調査員	浅田洋輔
調査場所	亀岡市曽我部町犬飼中金生寺ほか	
現地調査期間	平成30年６月11日～平成30年９月18日	
調査面積	968㎡	

＜金生寺第４次＞

現地調査責任者	調査課長	小池　寛
現地調査担当者	調査課調査第１係長	村田和弘
	同　調査第１係副主査	竹原一彦
	同　同　調査員	荒木瀬奈
	同　同　調査員	山本　梓
	同　同　調査員	橋本　稔
調査場所	亀岡市曽我部町法貴コモ原	
現地調査期間	平成30年12月３日～平成31年３月７日	
調査面積	3,806㎡	

＜金生寺第５次＞

現地調査責任者	調査課長	小池　寛
現地調査担当者	調査課調査第１係長	村田和弘
	同　調査第１係副主査	引原茂治
	同　調査員	荒木瀬奈
	同　調査員	山本　梓
	同　調査員	尾崎裕妃
調査場所	亀岡市曽我部町法貴コモ原	
現地調査期間	平成31年４月17日～令和２年３月19日	
調査面積	5,232㎡	

＜令和４年度整理作業＞

整理作業責任者　調査課長　　　　　　小池　寛

整理作業担当者　調査課調査第３係長　　村田和弘

同　調査第３係主任　荒木瀬奈

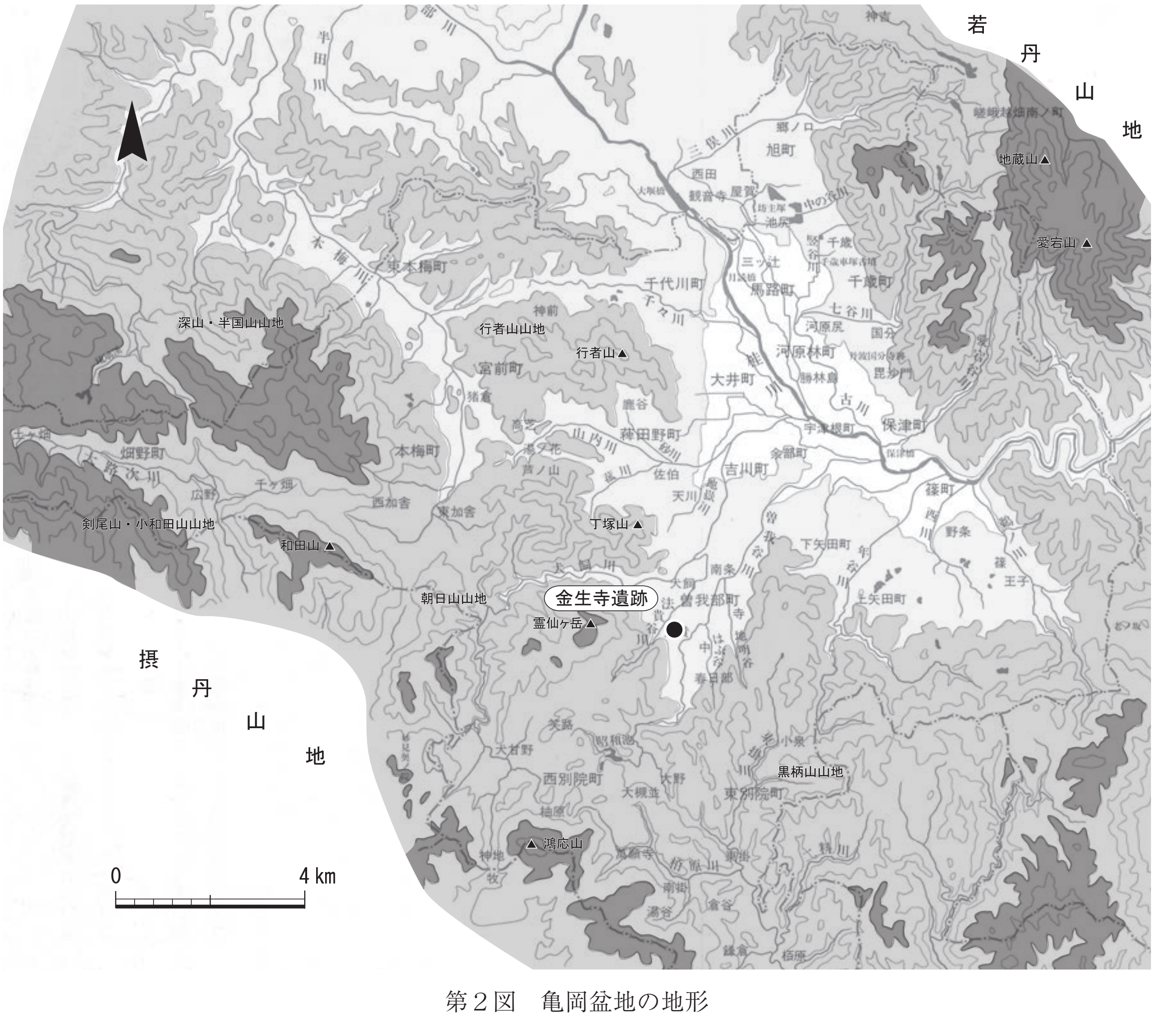
整理作業期間　令和４年４月１日～令和５年３月31日

２．位置と環境

１）地理的環境

亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、西側と南側が大きく突出した四角形状を呈している。面積約222.84k㎡で、東西約24.6㎞、南北約20.5㎞の広さをもつ。北は南丹市、東は京都市、南及び西は大阪府高槻市・茨木市・豊能郡能勢町・同豊能町に接する。

金生寺遺跡の所在する亀岡市曽我部町は亀岡盆地の南西端にあたる。大堰川（桂川）の支流である犬飼川・法貴谷川・曽我谷川が形成する扇状地が広がり、周辺を丹波帯と呼ばれる泥質岩、砂岩、チャートを主とした堆積岩で、一部に石灰岩を含む山地が取り囲む。扇状地は、緩く北に低く傾いた平らな地形と、山麓に見られる急斜面の扇状地が複合した合成扇状地と考えられる。金



第２図　亀岡盆地の地形

生寺遺跡が立地する扇状地西側は、霊仙ヶ岳から供給された砂岩、粘板岩、花崗岩、石英閃緑岩、その風化物である真砂土からなる。

また、曽我部町には大阪方面各所へと通じる交通路が２本あり、現在でも交通量が多い。金生寺遺跡のすぐ西側には旧摂丹街道である国道423号線が通っており、亀岡市西別院町、大阪府能勢町を経て池田市に通じる。法貴谷川を挟んで東側には、旧茨木街道である府道407号線が通り、亀岡市東別院町を経て大阪府茨木市に至る。これらの道は、近世に整備された、亀山城下から峠や谷筋を通って摂津方面に向かう道であり、前者は関明神越道、後者は鳥居嶺道として『五畿内志』にもみえる。近世には法貴村など一部の村が高槻藩領であった時期もあり、丹波の中でもとりわけ摂津との関係が深い地域である。

２）歴史的環境

金生寺遺跡が所在する曽我部町域の遺跡の様相を中心に述べる。

曽我部町では、令和４年度時点で弥生時代以前の明確な遺構は確認されていないものの、犬飼遺跡にて、弥生時代中期後葉～後期のものとみられる有孔磨製石鏃が出土している。また、正式な報告は今後行う予定であるが、金生寺遺跡の北部で令和３年度に行われた第10次調査地にて、窪地状地形から縄文時代後期の土器が出土している。これらの遺物から、今後、弥生時代以前の遺構の検出が期待される。

曽我部町を取り囲む丘陵上には、15の古墳群、合計250基程の古墳・古墳状隆起が分布することが知られており、亀岡盆地内でも、西部の鹿谷古墳群や小金岐古墳群などが分布する行者山山麓部に次ぐ密集状況である。古墳以外の遺跡の状況は不明瞭であったものの、近年の発掘調査の成果により、竪穴建物や溝状遺構等の存在が確認されている。時期の判明する遺構は古墳時代前期後半からで、犬飼遺跡で開析谷から前期後半～中期前半の護岸遺構や溝状遺構等が検出されている。また､犬飼遺跡と金生寺遺跡で大規模な井堰や水路が存在したことが明らかになっており、この時期に同地域の開発が進展したと考えられる。なお、現状では明確に前期に比定できる古墳は見つかっていないものの、犬飼遺跡で川西編年Ⅱ期の前期後半～中期初頭の埴輪片が少量出土している他、穴太古墳群で筒形銅器が採集されている。中期では、春日部遺跡にて中期中頃の竪穴建物が確認されている。この時期の古墳としては、穴太古墳群で、５世紀後半の須恵器・円筒埴輪が採集されている12号墳や、５世紀末葉の竪穴式石室をもつ16号墳、５世紀後半～末の方墳である南条３号墳が挙げられる。後期になると、春日部遺跡で竈をもつ竪穴建物が複数検出されている。丘陵部には前述のように多くの古墳が築造されており、発掘調査が行われたものは、法貴峠20号墳、桜峠18号墳、中西山(春日部) １号墳、法貴北５号墳があり、いずれも後期後半以降に比定できる。

飛鳥時代は、古墳時代と比較して盆地全体で集落の形成がやや低調であり、曽我部町内でも当該時期に属する遺構は多くないものの、犬飼遺跡で検出された開析谷にて、木材を集積した遺構があり、近隣に木材加工に関わる施設の存在が想定される。また、丘陵部の古墳の中では、南条４号墳で無袖式横穴式石室から７世紀前半頃の遺物が出土している。近年調査された法貴北5号

第３図　周辺遺跡分布図(国土地理院　1/50,000)

墳からは、飛鳥時代の遺物が出土しており、この時期の追葬が確認できる。

古代の亀岡盆地内では複数の古代寺院が知られており、曽我部町では、白鳳寺院とされる與野廃寺の存在が想定される。近隣には、延喜式内社である與能神社があり、その御旅所付近で、開墾時に本薬師寺系の軒丸瓦１点と軒平瓦２点が採取されている。また、付近には礎石が残されている。

奈良時代では、犬飼遺跡で掘立柱建物が複数検出されている。また、犬飼遺跡第10次調査では、条里地割に関係する畦畔が確認されており、畦畔に伴う耕作土層からは奈良時代後半の遺物が出土している。墓域としては、南条火葬墓群の１号墓は８世紀後半頃のものと考えられる。

平安時代になると、春日部遺跡にて、平安時代後期の方形区画溝の一部と、その内側から掘立柱建物や柵列が検出されている。なお、近年の調査によって、区画溝の外にも、平安時代前期～末に渡る掘立柱建物が複数確認されている。

中世前期には、近年の調査により、金生寺遺跡や犬飼遺跡の複数地点で、掘立柱建物や井戸、墓域等の遺構とそれに伴う多くの遺物が確認されている。また、法貴峠20号墳では、墳丘を一部削平してつくられた方形の石組遺構を検出しており、遺物ともあわせて13世紀の墓の可能性がある。南条火葬墓群でも、13世紀後半から14世紀前半のものが確認されている。

当該時期では、犬飼遺跡にて確認された13世紀後葉～14世紀前葉の堀で囲まれた居館が特筆される。この堀は２条確認されており、いずれも幅約８m、深さ約２mを測る大規模なものである。堀の内側の２つの区画から掘立柱建物や土橋などが検出されている。居館は14世紀前葉で機能を終え、堀は15世紀まで維持管理が行われた後、埋め戻され、耕地化した部分と基幹水路として踏襲された部分に分かれる。なお、前述したいずれの遺跡も14世紀前半には遺構が確認できなくなり、中世後期頃には現状の集落に近い位置に居住域が形成されていた可能性が高い。

曽我部町内で確認されている中世城館としては、酒井氏が城主と伝わる法貴館跡や、亀岡盆地内でも屈指の縄張りをもつ法貴山城、周辺に「城ヶ裏」や「垣内」などの城館関連地名を残す寺村館跡、『丹波志桑田記』に、上原（福智）氏が応永元（1467）年より居住したとされる犬飼城跡などがある。

天正３（1575）年には、明智光秀による丹波国攻略が開始され、天正５（1577）年には亀山城を攻め落とした。犬飼城も天正10（1582）年に落城している。天正８（1580）年には光秀は丹波29万石に封せられ、亀山城を整備するなど近世の城下町の礎を築いた。[注１]

３．調査の経過と方法

１）調査の経緯

金生寺遺跡は、亀岡市曽我部町法貴・中・寺に所在する。平成22・23年度に亀岡市教育委員会による小規模調査が行われ、遺跡地内の広い範囲に遺構面の広がりが認められることとなった。[注２]

平成30年度の第３次調査以降、当センターが継続的に発掘調査を行っており、令和５年１月現在で10次の調査が行われている。各地区の位置と概略は第５図・付表１のとおりである。本書で

は、平成30年度に行った第３・４次調査、令和元年度に行った第５次調査の報告を行う。

２）各調査の概要

（１）第３次調査

亀岡市教育委員会が平成22・23年度に実施した第１次調査、第２次調査の成果を受け、平成30年度前半期に実施した小規模調査（Ａ・Ｂ地区）と本調査（Ｃ地区）である。複数のピットを検出した。

調査期間は平成30年６月11日～平成30年９月18日で、調査面積は968㎡である。

（２）第４次調査

平成30年度後半に、Ａ・Ｂ・Ｃ地区にて複数か所にトレンチを設定し、小規模調査を行った。また、塚状の隆起が確認される箇所の現状の測量調査を行い、周辺も含めてＡ２トレンチとして表土掘削を行い、集石遺構を確認した。

調査期間は平成30年12月３日～平成31年３月14日で、調査面積は3,806㎡である。

（３）第５次調査

平成31（令和元）年度には、第４次調査で遺構を検出したＡ地区とＢ１・５トレンチを拡張して面的調査を行うとともに、小規模調査区として新たにＤ・Ｅ・Ｆ地区を設定し、Ｄ地区で２か所、Ｅ地区で３か所・Ｆ地区で13か所にトレンチを設定し調査を行った。

調査期間は平成31年４月17日～令和２年３月19日で、調査面積は5,232㎡である。

（４）整理報告作業

調査終了後から令和４年度にかけて整理報告作業を行った。出土遺物については、台帳登録、洗浄作業を行い、その後注記・接合作業を行った。その作業と並行し、報告書に掲載する出土遺物の選別及び実測作業、写真撮影等を行った。陶磁器類については、図化を行うことができなかったものに関しても、全ての個体の集計を行った。

本報告で使用した遺構図は、現地で作成したもののほか、空中写真撮影を基に作図した平面図を使用した。

３）調査の方法

（１）地区割りの方法について（第４図）

第３次調査では、調査範囲・調査面積ともに限定的だったため、地区割は設定していない。

第４次調査では、Ａ・Ｂ・Ｃの３地区で小規模調査トレンチを設定し、調査を行った。なお、第３次調査のＡ・Ｂ・Ｃ地区と、第４・５次調査のＡ・Ｂ・Ｃ地区はそれぞれ同名であるが別地点の調査区である。また、Ａ地区では、小規模調査区をＡ１トレンチ、面的調査が決まっていた塚状の隆起箇所については、周辺も含めてＡ２トレンチとした。Ｂ地区では10本、Ｃ地区では４本の小規模調査トレンチを設定し、調査を行った。

第５次調査では、第４次調査で遺構・遺物を確認したＡ１トレンチ、Ｂ１・５トレンチを拡張して面的調査を行った。また、新たにＤ・Ｅ・Ｆの３つの地区を設定し、Ｄ地区で２か所、Ｅ地区で３か所、Ｆ地区で13か所に小規模トレンチを設定し、調査を行った。

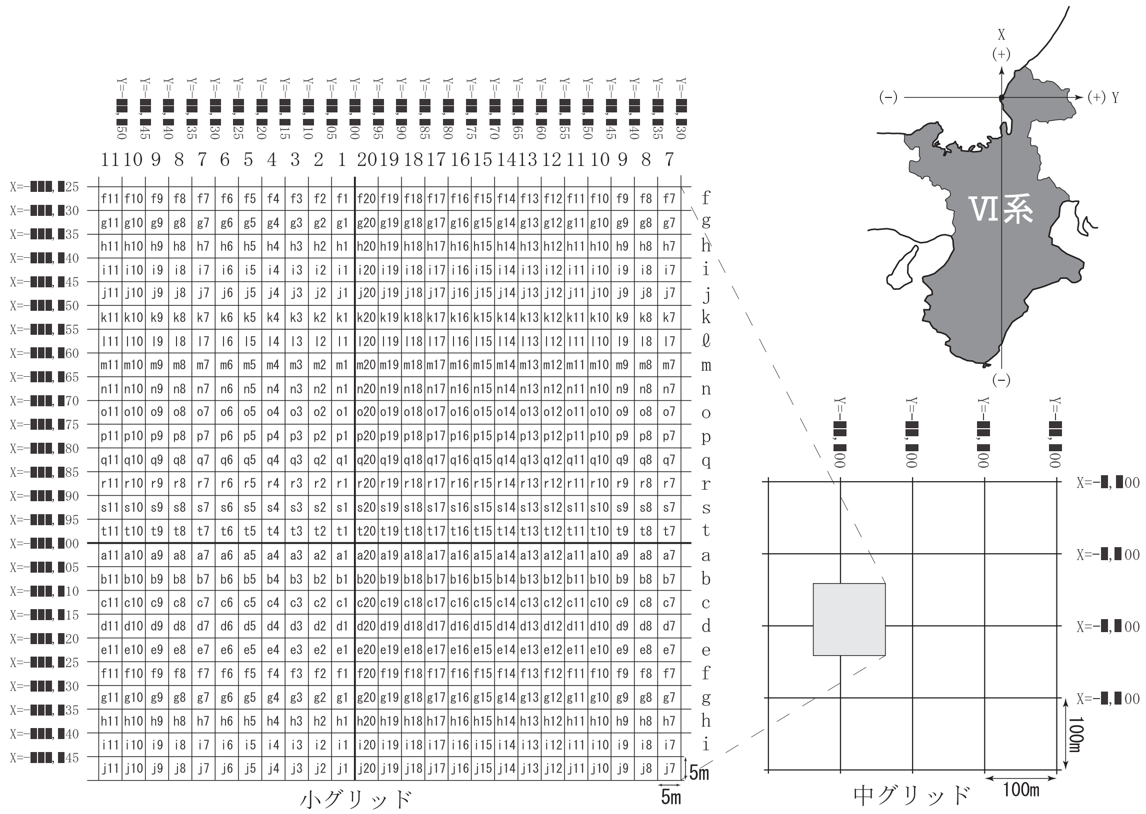
遺物の取り上げに対応するため、平面直角座標系を利用した５ｍのグリッドを設定した。Ｘ・Ｙの座標値のうち、整数値の下２桁が00となる線を基準に100ｍ四方の中グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ20等分した。Ⅵ系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かってＸ・Ｙの絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北からＡ～ｔ、東西方向は東から１～20として、各グリッドの名称はＡ１、Ａ２などとする。

（２）遺構番号について

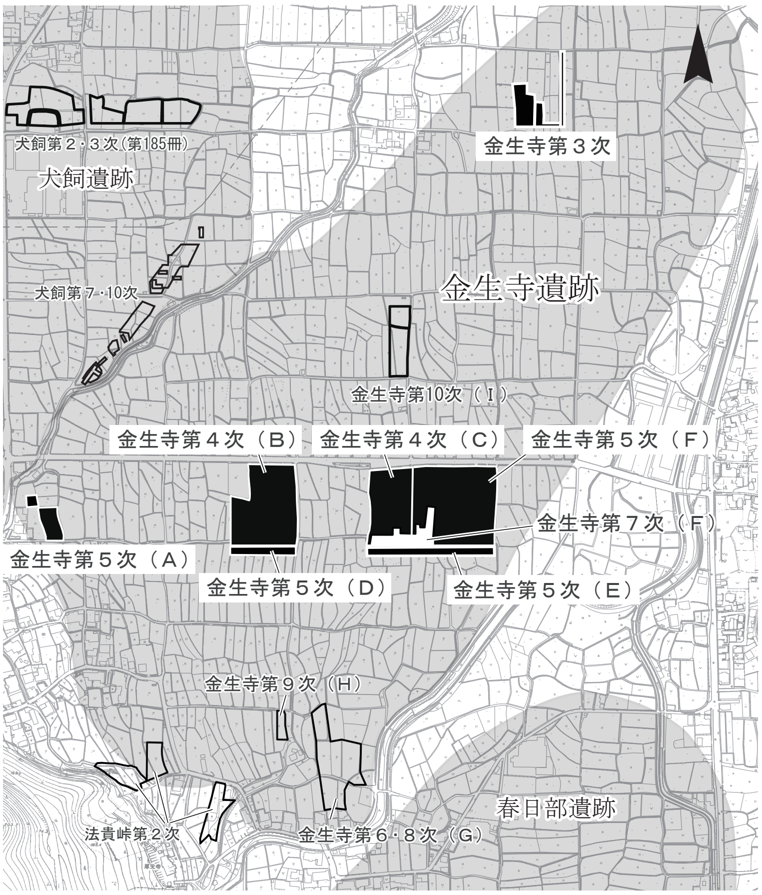
第３次調査ではＡ・Ｂ地区における５か所の小規模調査区、Ｃ地区の調査区それぞれで、遺構の性格を示す略号の後ろに１から順に番号を付した。第４・５次調査においては、最初に着手し、面的調査を行ったＡ地区は１から番号を付した。Ｂ地区の面的調査地については、Ａ地区との混同を避けるため、501から番号を付した。

それぞれの遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。本書で使用した略号は以下の通りである。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴・ピット、ＳＸ：その他の遺構



第４図　調査地区割図



第５図　調査地点位置図

付表１　金生寺遺跡調査一覧

次数	調査区	調査期間	調査面積	調査機関	調査要因	主な成果	報告書等
第１次	－	平成 22 年２月	92 ㎡	亀岡市教育委員会	ほ場整備	範囲確認	亀岡市文化財報告書第 82 集
第２次	－	平成 23 年 11 月～ 12 月	132 ㎡	亀岡市教育委員会	ほ場整備	範囲確認	亀岡市文化財報告書第 82 集
第３次	Ａ・Ｂ（小規模調査）Ｃ	平成 30 年６月 11 日～平成 30 年９月 18 日	968 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	時期不明のピット	本報告
第４次	Ａ・Ｂ・Ｃ（小規模調査）	平成 30 年 12 月３日～平成 31 年３月７日	3,806 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	12 世紀から 13 世紀前半の掘立柱建物、井戸、溝状遺構	本報告
第５次	Ａ・Ｂ（第４次継続）Ｄ・Ｅ・Ｆ（小規模調査）	平成 31 年４月 17 日～令和２年３月 19 日	5,232 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備		本報告
第６次	Ｇ（小規模調査）	令和元年 10 月１日～令和元年 12 月 20 日	1,049 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	範囲確認	京都府センター情報 139 号
第７次	Ｆ（第５次継続）	令和２年４月 17 日～令和２年 10 月 29 日	1,700 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	古墳時代前期から中期前半の水利関連遺構、条里に関する畦畔	京都府センター情報 139 号
第８次	Ｇ（第６次継続）	令和２年５月 18 日～令和２年 10 月 29 日	2,206 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	12 世紀末から 13 世紀後半頃の土坑・溝状遺構	京都府センター情報 139 号
第９次	Ｈ	令和３年６月２日～令和３年 10 月 14 日	310 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	古墳時代の遺物を含む谷地形	京都府センター情報 141 号
第 10 次	Ｉ・小規模調査	令和３年 10 月４日～令和３年 11 月 30 日	880 ㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	縄文時代から古墳時代の遺物を含む窪地状地形	京都府センター情報 142 号

(1)金生寺遺跡第３次

１．はじめに

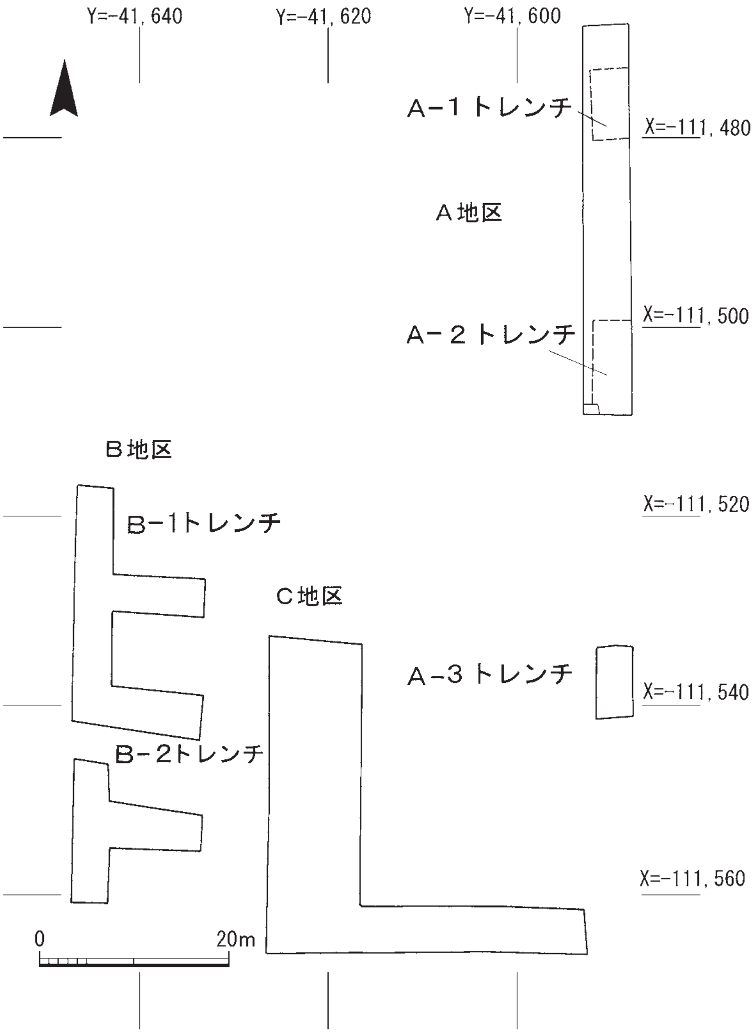
金生寺遺跡は、亀岡市曽我部町の法貴・中・寺の３地区にまたがる遺跡で、土師器、須恵器の遺物散布地とされている。東西に集落遺跡である與能遺跡と犬飼遺跡がそれぞれ広がっている。法貴谷川、曽我谷川、犬飼川などの河川が流れ込む合成扇状地の平野部にあって、周囲の丘陵部には古墳時代後期群集墳が多く分布し、東西に茨木街道と摂丹街道がはしる交通の要衝とされる位置にある。今回の調査地点は、金生寺遺跡範囲の北西寄りで、犬飼遺跡に近接している。調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い実施した。調査期間は、平成30年６月11日から同年９月18日までで、掘削面積は968㎡である。

２．調査区設定と調査経過

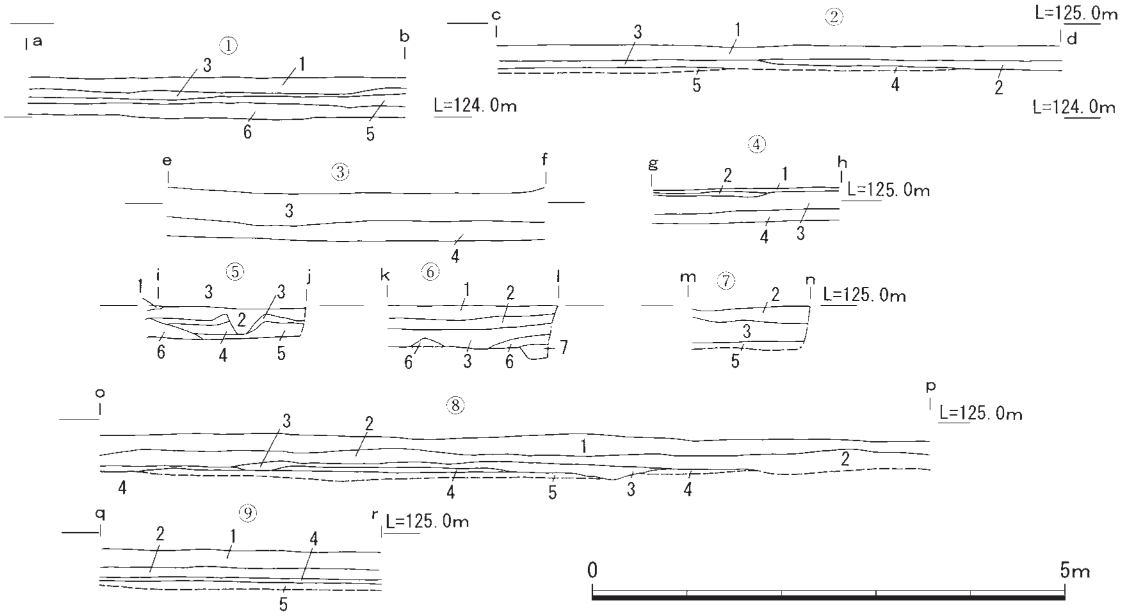
調査区は、調査対象地の東側において小規模調査を行うＡ地区、その西側に同じく小規模調査を行うＢ地区、そしてさらに中央部に面的本調査を行うＣ地区とした(第６図)。さらに小規模調査のＡ地区にＡ－１･Ａ－２･Ａ－３の３か所、Ｂ地区にはＢ－１・Ｂ－2の２か所にトレンチを設定した。トレンチ内で顕著な遺構・遺物の存在が確認できれば、協議を経て順次拡張していくこととした。

掘削はまず重機による耕作土除去から始めた。そして耕作土を下層の掘削土と分け置きつつ、下層を面的に掘り下げていった。その後、人力による掘削作業に移り、各地区の壁面及び平面の精査を進めた。掘削深度は地表下約0.3～0.5ｍを測る。

結果、Ｂ地区では顕著な遺構は確認できなかったが、Ａ地区Ａ－１トレンチから隅丸方形の



第６図　調査区・トレンチ配置図



A地区　東壁①・②
1．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）極細砂
2．オリーブ黒色（5Y 2/2）シルト
3．オリーブ黒色（10Y 3/1）シルト〈暗赤褐色（2.5YR 3/2）シルトを斑に含む〉
4．暗灰黄色（2.5Y 4/2）極細砂
5．黒褐色（10YR 2/2）シルト〈暗褐色（10YR 3/4）極細砂を斑に含む〉
6．暗褐色（10YR 3/4）シルト〈オリーブ褐色（2.5Y 4/3）シルトを斑に含む〉

B1トレンチ　北壁③　東壁④
1．オリーブ褐色（2.5Y 4/4）極細砂
2．黒褐色（10YR 2/2）シルト
3．暗オリーブ色（5Y 4/3）極細砂
4．黒褐色（10YR 2/2）シルト

C地区（本調査区）　北壁⑧　東壁⑨
1．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）極細砂
2．オリーブ黒色（5Y 2/2）シルト
3．オリーブ黒色（10Y 3/1）シルト
4．暗オリーブ色（5Y 4/4）極細砂
5．黒褐色（10YR 2/2）シルト

B2トレンチ　東壁⑤・⑥　北壁⑦
1．黒褐色（10YR 2/2）極細砂
2．オリーブ黒色（5Y 3/2）細砂
3．暗オリーブ色（5Y 4/3）極細砂〈直径5㎜大の礫少量含む〉
4．暗オリーブ色（5Y 4/4）極細砂
5．オリーブ黒色（5Y 3/2）極細砂
6．オリーブ褐色（2.5Y 4/4）極細砂
7．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）シルト
（褐色（10YR4/6）極細砂と炭化粒少量含む）

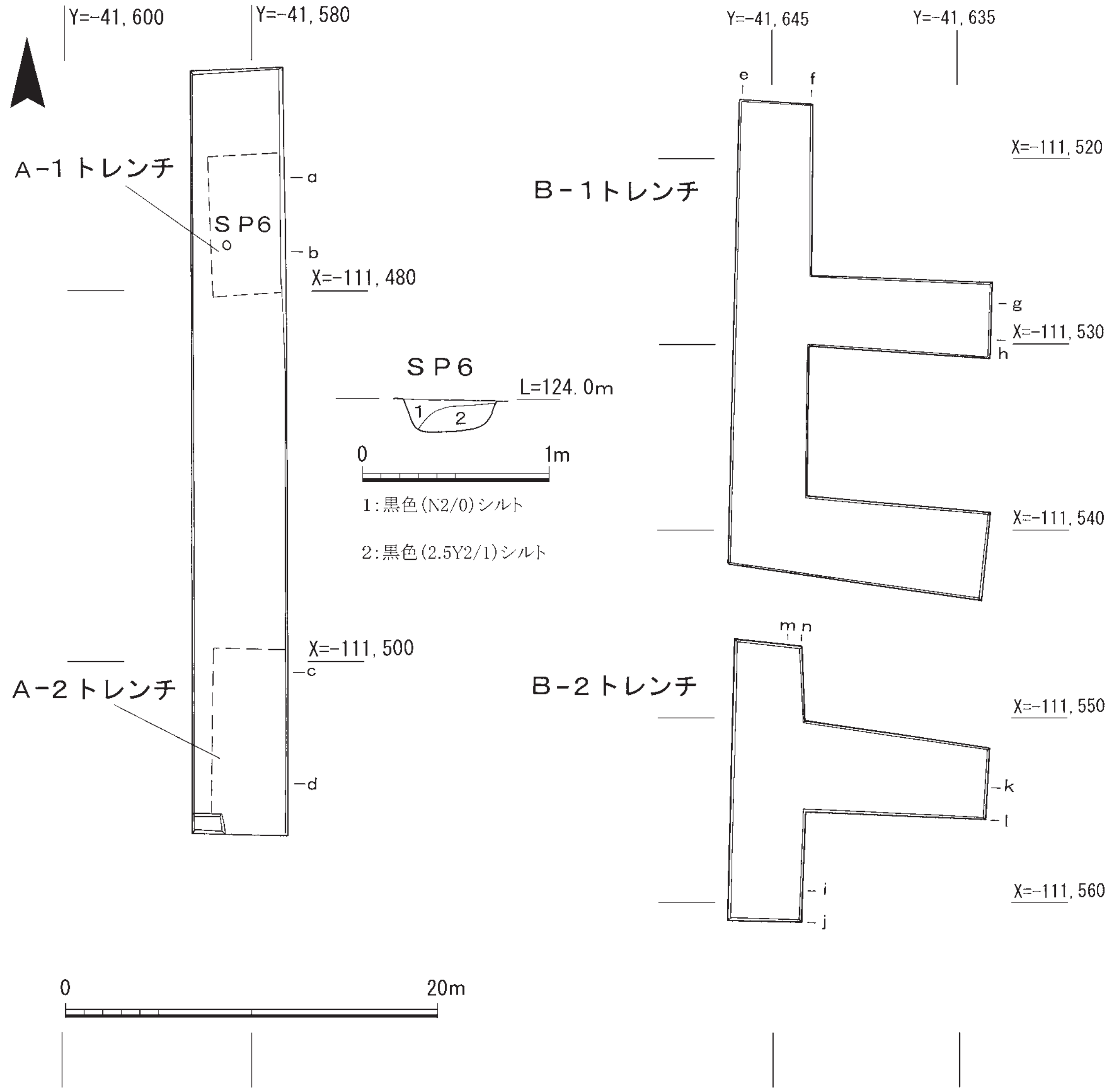
第７図　調査区・トレンチ土層断面図

ピットを検出した。さらなる遺構の有無を確認するためＡ－１トレンチとＡ－２トレンチを繋ぐ形で調査区を拡張した。本調査区であるＣ地区では、合計５基のピットを検出した。各トレンチと調査区の精査及び記録作業を経て空中写真撮影を実施し、現地作業を終了した。

３．検出層位

Ａ地区のＡ－1からＡ－3トレンチの土層堆積状況は、東壁断面にて説明することができる。第７図①・②のとおり、東壁断面は６層に分けられる。第４層はシルトではなく、少し細かな礫混じりの砂層面であるが、安定して堆積してはおらず、南側のＡ－３トレンチでは第３層のオリーブ黒色シルト面に移り変わる。

Ｂ地区の土層堆積状況は、北壁と東壁の部分で代表できる。同図③～⑦のとおり、Ｂ－１トレンチでは４層に、Ｂ－２トレンチでは、7層に区別された。このＢ地区もＡ地区同様、第３層～



第８図　検出遺構図１（Ａ・Ｂトレンチ）

４層・５層（Ｂ－２トレンチ）はシルトではなく極細砂の層位がみられるが、安定した面としては捉えられず遺構の存在は確認できなかった。

本調査のＣ地区の土層堆積状況は、同図北壁⑧及び東壁⑨により5層に分けられる。

第１層：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）極細砂、第２層：オリーブ黒色（5Y 2/2）シルト、第３層：オリーブ黒色（10Y3/1）シルト、第４層：暗オリーブ（5Y4/4）極細砂、第５層：黒褐色（10YR 2/2）シルトである。第４層で極細砂層がみられるが、全体的にシルト層が卓越し、湿地的な景観が想定される状況である。

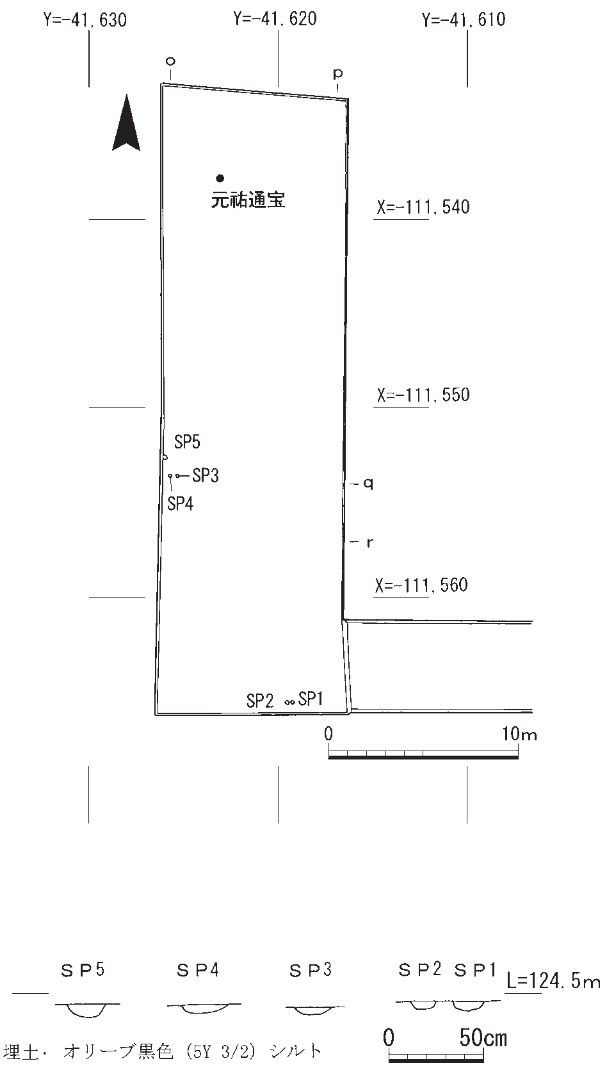
４．検出遺構

Ａ地区では北側のＡ－１トレンチから隅丸方形のピットSP６が１基検出された。平面形は隅丸方形で南北0.50m・東西0.45m、残存の深さは0.35mを測る。断面形はU字形で、埋土は２層に分けられ、いずれも有機質の多い黒色シルトである（第８図）。湿地的環境に置かれたものとみら

れる。平・断面の観察から柱や杭の痕跡は捉えられなかった。

Ｂ地区においては、遺構は検出はされなかった(第８図)。

Ｃ地区からは、５基のピットが検出された。いずれのピットも直径0.2m前後の円形かつ小規模なものである。深さは0.1mほどで、断面形はU字形である。埋土はいずれも還元された土壌のオリーブ黒色(5Y3/2)シルトである(第９図)。これらの配置からは、建物や柵などの遺構を抽出することはできなかった。

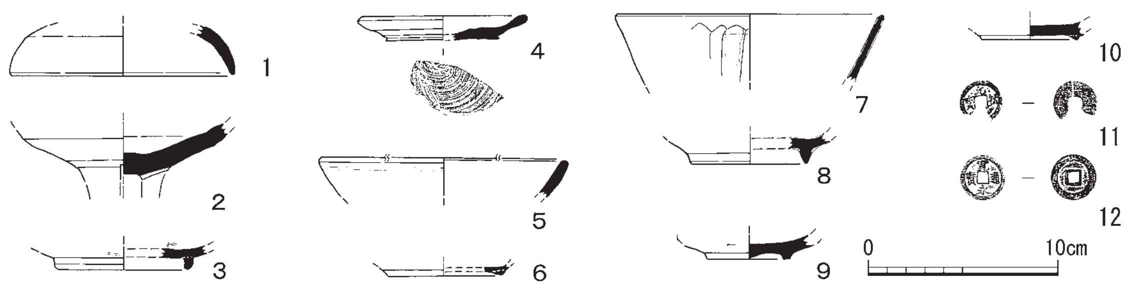


第９図　検出遺構図２(Ｃ地区)

５．出土遺物

遺物には、古墳時代から平安時代の須恵器や、鎌倉時代から江戸時代における土器および銭貨などがある。出土状況は遺構のなかったＢ地区からもみられ、特に地区による偏りは認められない。出土量は整理コンテナにして１箱分である。これらは遺構に伴わず、周辺河川の氾濫により運ばれてきたものが多いとみられる。すべて破片で土師器や瓦器などは摩滅が顕著である。10点の土器類と２点の銭貨を図化した(第10図１～12)。

１は須恵器杯蓋である。天井部からなだらかに丸みをおびて端部にいたるもので、古墳時代後期(６世紀末)のものである。２は須恵器高杯の断片である。脚柱部に２か所の透かしの切断面がある。３は貼り付け高台をもつ須恵器の底部断片で杯または椀である。４は淡い黄橙色を呈する



第10図　出土遺物

底部糸切り痕の土師器皿である。

５と６は瓦器椀の口縁部と底部の断片である。ともに細片でかつ摩滅が激しく内外面の調整は不明である。７は蓮弁文を有する龍泉窯系青磁椀の体部片である。８も龍泉窯系青磁椀の底部片である。９は唐津焼の皿の底部片である。17世紀前半頃のものである。10は肥前系伊万里の皿の断片である。11は北宋銭の元祐通宝（1086年初鋳）である。破損品で径2.2cm、厚さ0.1cmを測り、Ｃ地区北半から出土した（第９図）。12はＣ地区出土の寛永通宝（1636年初鋳）で、径2.4cm、厚さ0.1cmである。

６．まとめ

今回の調査では、数基のピットを検出したが、建物跡などの遺構の抽出はできなかった。また、ピット内から時期を特定できる遺物も出土せず、柱痕痕跡も判然としていない。湿地的な土層の堆積状況から、当地は集落が安定して営めるような場所ではなかったことがうかがえる。一方、出土遺物については、古墳時代後期から江戸時代に至る土器や銭貨が出土している。古墳時代の須恵器からは周囲の丘陵部に展開する群集墳を造営した集落の存在が推察される。また平安時代から鎌倉時代の龍泉窯青磁椀、瓦器椀、土師器皿、さらに近世陶磁器も出土していることから、古墳時代のみならず、古代から中世さらに近世に至っても、人々の往来や物資の流通は盛んであったと思われる。今後、金生寺遺跡は古代から近世の集落の存在や広がりに十分考慮しつつ調査をすすめる必要がある。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（黒坪一樹・浅田洋輔）

付表２　第３次調査出土土器観察表

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調　整	備　考
1	須恵器	蓋	B	掘削土中	11.8	2.6	－	2/12	灰（N7/0）	良精	内・外面ナデ	
2	須恵器	高坏	B -2tr	掘削土中	－	3.1	－	1/12	灰（N7/0）	やや密	内・外面ナデ	
3	須恵器	椀	A	北側東壁２層	－	1.3	6.8	1/12	灰（N7/0）	良精	内・外面ナデ	貼付高台
4	土師器	皿	B -2tr	掘削土中	8.6	1.3	－	口 1/12 底 4/12	浅黄橙（7.5YR8/4）	密	内・外面ナデ　底部糸切り痕	
5	瓦器	椀	C	掘削土中	－	2.0	－	1/12	灰（N4/0）	密	摩滅により不明	
6	瓦器	椀	C	北側西半	－	0.6	－	1/12	灰（N4/0）	密	摩滅により不明	高台三角形
7	青磁	椀	B -2tr	掘削土中	14.0	3.7	－	口 1/12 底 4/12	オリーブ灰（2.5GY6/1）	良精	内・外面施釉 蓮弁文	龍泉窯
8	青磁	椀	B	床土直下（礫層）	－	1.7	6.0	底 1/12	オリーブ灰（2.5GY6/1）	良精	内・外面施釉	龍泉窯
9	唐津焼	皿	C	西半部中央	－	1.3	－	底 3/12	灰白（５Y7/1）	密	内・外面施釉（内面１部無釉）　外面ケズリ　露胎	
10	伊万里	皿	C	西半部中央	－	1.1	－	底 3/12	灰白（7.5Y8/1）	密		

（2）金生寺遺跡第４・５次

１．調査の概要

第４・５次調査では、標高約130～146ｍに位置する範囲の中で、ＡからＦの６つの調査区を設定し、合計34か所にトレンチを配置し、面積約5232㎡の範囲で調査を行った（第11図）。平成30年度後半に行った第４次調査では、Ａ・Ｂ・Ｃ地区で調査を行い、Ａ１・２トレンチ、Ｂ１・５トレンチにおいて遺構･遺物を確認したので、第５次調査で範囲を拡大し、面的調査（Ａ１･２地区、Ｂ１・５地区）を行った。令和元年度の第５次調査では、この他にさらに東側に位置するＤ・Ｅ・Ｆ地区で小規模調査を行い、Ｆ５トレンチにおいて、遺構・遺物を確認した。Ｆ５トレンチ付近については、同年度の後半期に第５次調査の続きとして調査した部分と、翌年の令和２年度の第７次調査にて、Ｆ５トレンチとその周辺のF3・Ｅ１・Ｅ２・C3・C4トレンチ部分も含めて範囲を拡大し面的調査を行った。本項目では、平成30年度後半から令和元年度前半期に行った部分のみを報告する。

２．Ａ地区小規模調査

Ａ地区は、対象地内で最も高い標高約146m付近に位置し、現在の法貴集落の東端に相当する調査区である。対象地内の水田にＡ１トレンチを設定し、小規模調査を行った。また、Ａ１トレンチの北西部の標高約145m付近には、径2.0m、高さ0.2mの塚状の隆起が確認でき、この部分が遺構となるかどうか確認する為、調査前に地形測量を行い、調査区を設定し、面的調査を行った。いずれの調査区も、重機によってほ場全面の耕作土を除去したのち設定した。

Ａ１トレンチ　幅３ｍの「キ」字状の調査区を設定した。重機を使用して調査を開始し、現代耕作土・床土を除去した段階で、土石流跡と粘質砂からなる安定地盤を検出し、ピット・溝状遺構等を複数確認した。また、平安時代から中世にかけての瓦器や土師器等を多量に含む遺物包含層を検出した。特に東部の６区（第55図参照）にて、完形に近い土師器・瓦器椀・角礫が複数散乱する状態を確認した。トレンチ西端には土石流跡とみる砂礫堆積が存在し、砂礫面においても柱穴の存在を確認した。

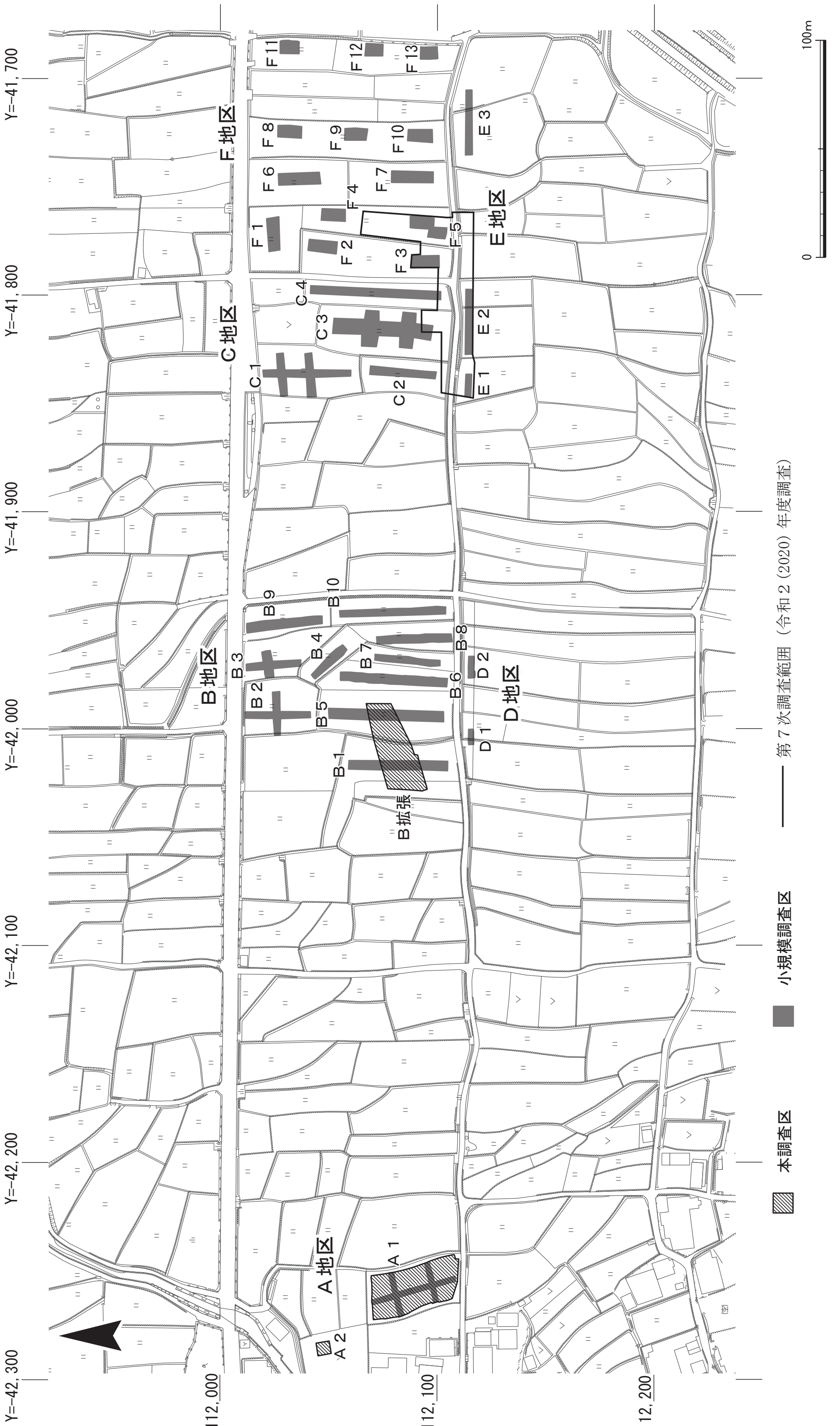
Ａ２トレンチ　塚状の隆起を中心に、2.5ｍ×2.5ｍの範囲の耕作土を除去した所、径約2.0m、高さ約0.5mの範囲で、角礫や一石五輪塔の一部等が無造作に集石する状態を確認した。集石遺構の全容を調査できるように周辺の範囲４ｍ×４ｍの方形のトレンチを設定し調査を行った。

３．Ａ１地区の調査

小規模調査として実施したＡ１トレンチ及びＡ２トレンチを拡張し、Ａ１・Ａ２地区とした。

１）基本層序（第14・15図）

Ａ１トレンチの北壁と東壁断面から基本層序を整理すると、現況の耕作土である表土の下に近現代の旧耕作土が堆積する。下層の耕作土掘削時には、中・近世の遺物の他に耕作時の人間や動



第11図　金生寺第4・5次各地区・トレンチ配置図

第12図　A１地区遺構配置図１(石材あり)

物の足跡を検出した。この層を除去し、標高145.8～146.1m付近にて平安から中世の遺構面を検出し調査を行った。また、ほ場整備の掘削深度よりもさらに深く、今回は調査対象外であるが、東壁面北半部付近で中世の遺構面より下層の標高145.4m付近にて、古墳時代の土師器や緑色凝灰岩製の管玉を含む層を確認した。このことから、遺物包含層あるいは下層遺構面が存在する可能性がある。東側壁面の断ち割りの結果、この層は調査区中央付近で途切れ、南側には続かず、

第13図　Ａ１地区遺構配置図２

後述する井戸ＳＥ210の断ち割りでも、下層は確認できない。このことから、古墳時代の遺物を含む遺物包含層あるいは下層遺構は調査地全域には続かず､北東部付近のみに部分的に分布する。標高145.2m付近にて、自然堆積層を確認した。したがって、①近現代の旧耕作土、②平安から中世の遺構面、③土石流堆積、④平安以前の遺物包含層、⑤自然堆積層の５層に区分できる。

Ａ１トレンチの特徴として、調査地内の複数か所で0.1～0.7m大の角礫が集中して堆積する状況が挙げられる。これらは調査地の西～南西部に位置する霊仙ヶ岳から発生した土石流による堆

積と考えられる。ＳＢ190・215やＳＥ210周辺では土石流は確認できないが、ＳＢ180やＳＤ220は土石流の礫群とほぼ同一の標高で検出しており、掘形内にも複数の礫が混入しており、土石流堆積の上に掘立柱建物を建設している状況である。また、東壁断面では、中世の遺構検出面より上層にも土石流堆積と見られる層が確認でき、頻繁に土石流が起こる土地であったと考えられる。このような土石流堆積は、後述するＢ～Ｆ地区の多くのトレンチでも確認でき、調査地全体で複数回の土石流が発生した状況が確認できる。これらの土石流間に小規模な安定地盤がモザイク状に存在するが、全時代を通して、建物等の明確な居住遺構が検出できた地区は第４・５次調査Ａ１トレンチのみである。

２）検出遺構

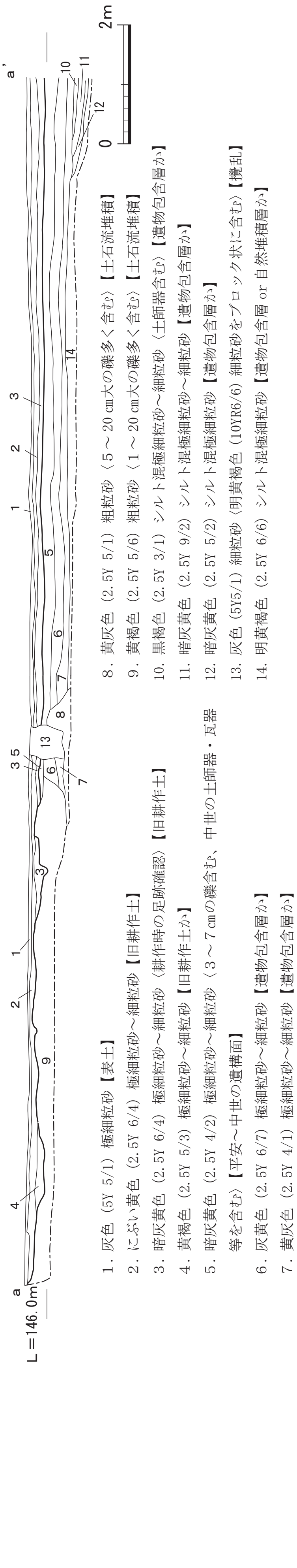
遺構面で検出した遺構には、掘立柱建物４棟（ＳＢ130・180・190・215）、井戸１基（ＳＥ210）、区画溝の可能性のある溝状遺構１条（ＳＤ220等）、その他の溝・ピット・土坑等があげられる。

遺構の分布をみると、調査区南側にやや集中する。特に、南側では溝状遺構やピットなどが重複している状況を確認した。これらの溝・ピットは浅く、明確な掘り方を持たないものが多い。また、南東部の６区（第４次調査時）、グリッドのｓ12・13、ｔ12・13の部分では、遺構検出段階で多量の遺物が出土した。

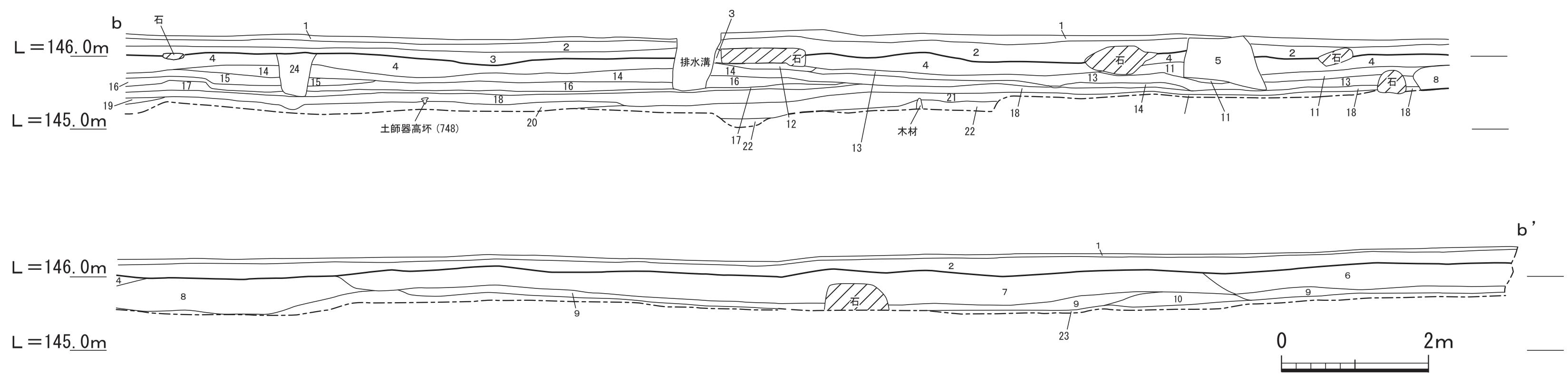
（１）平安時代から中世の宅地に関する遺構

①掘立柱建物

掘立柱建物ＳＢ130（第16図）　調査地北西部で検出した。調査区南側に位置するＳＢ180・190・215とは20m程離れており、現状では単独で位置する。主軸はN－85°－Eでわずかに北に振った東西棟の建物である。梁行２間（5.2m）、桁行３間（8.3m）を測る側柱の掘立柱建物である。柱穴の数は10基で、内部に、間仕切りの可能性のあるピットＳＰ68が１基確認できる。柱穴掘形はいずれも平面円形で、径0.3～0.4m、深さ0.3～0.4mを測る。柱痕は２基の柱穴で確認しており、径0.1～0.2mを測る。

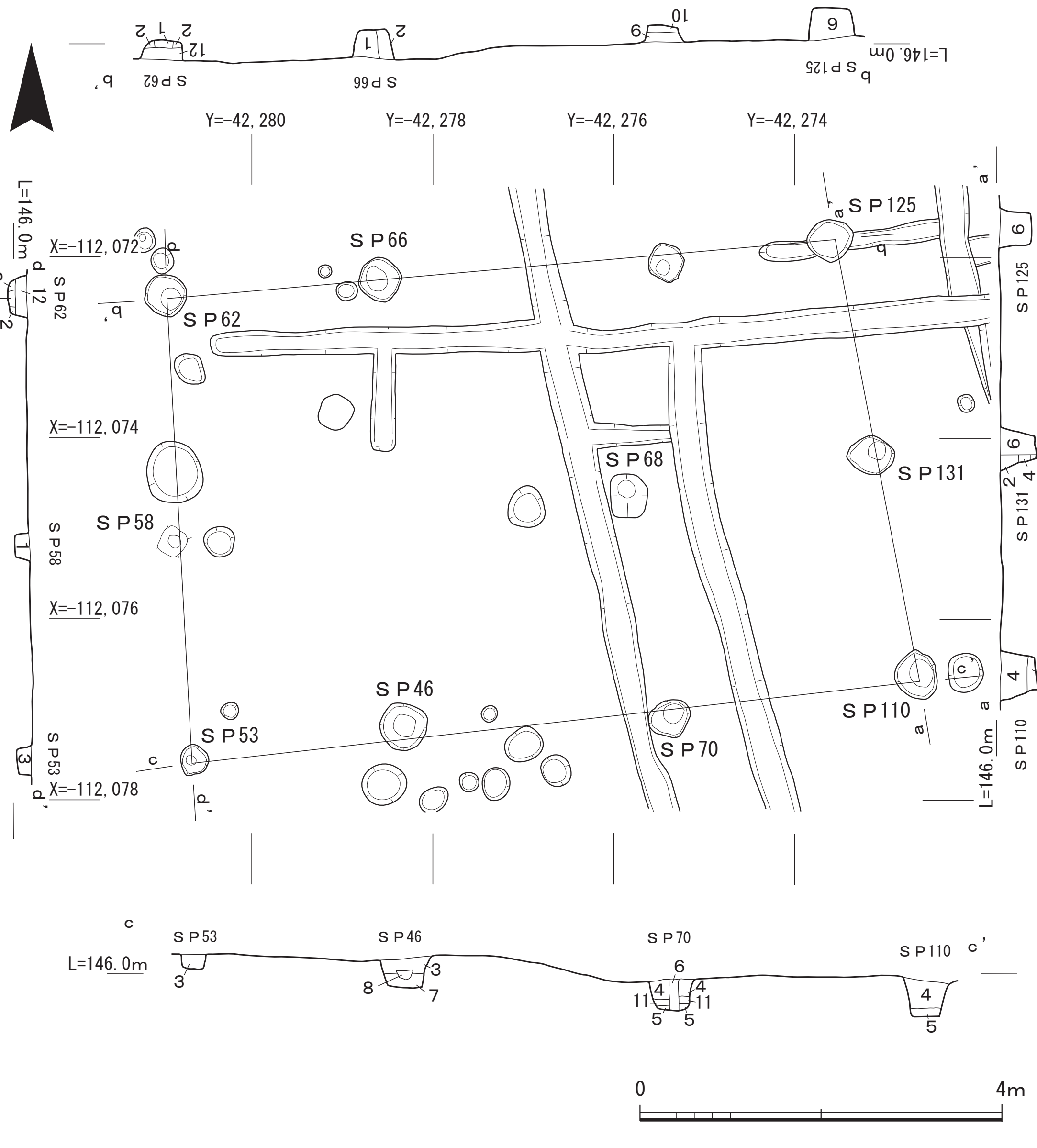


第14図　Ａ１地区北壁面土層図



1．灰色（5Y 5/1）極細粒砂【表土】
2．にぶい黄色（2.5Y 6/4）極細粒砂～細粒砂【旧耕作土】
3．暗灰黄色（2.5Y 6/4）極細粒砂～細粒砂〈耕作時の足跡確認〉【旧耕作土】
4．暗灰黄色（2.5Y 4/2）極細粒砂～細粒砂〈３～７㎝の礫含む、中世の土師器・瓦器等を含む〉【平安～中世の遺構面】
5．黄褐色（2.5Y 5/3）極細粒砂～細粒砂〈20 ～ 50 ㎝大の礫含む〉【土石流堆積】
6．灰黄色（2.5YR 6/2）極細粒砂～細粒砂〈５～ 20 ㎝大の礫 10 ～ 15％含む〉【土石流堆積】
7．灰黄色（2.5YR 6/2）極細粒砂～細粒砂〈３～ 100 ㎝大の礫 15 ～ 30％含む〉【土石流堆積】
8．灰黄色（2.5YR 6/2）極細粒砂～細粒砂〈３～ 50 ㎝大の礫 30 ～ 40％含む〉【土石流堆積】
9．暗灰黄色（2.5YR 4/2）極細粒砂～細粒砂【溝状遺構ＳＤ220 埋土】
10. 灰色（5YR 4/1）極細粒砂～細粒砂【溝状遺構ＳＤ220 埋土】
11. 灰オリーブ色（5Y 5/2）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
12. 黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
13. 灰オリーブ色（5Y 5/2）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
14. 黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
15. 灰黄色（2.5Y 6/7）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
16. 黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
17. 黒褐色（2.5Y 3/1）シルト混極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
18. 暗灰黄色（2.5Y 9/2）シルト混極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
19. 暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混極細粒砂【遺物包含層か】
20. 明黄褐色（2.5Y 6/6）シルト混極細粒砂【遺物包含層か】
21. 灰色（5YR 5/1）極細粒砂～細粒砂【遺物包含層か】
22. 緑灰色（7.5GY 5/1）シルト混極細粒砂～細粒砂【自然堆積層か】
23. にぶい黄橙色（10YR 6/4）極細粒砂～細粒砂〈５～ 10 ㎝大の礫３％含む〉【自然堆積層】
24. 褐灰色（10YR 5/1）極細粒砂～細粒砂【ＳＤ72 埋土】

第15図　Ａ１地区東壁面土層図



1．黄灰色（2.5Y 5/1）シルト混細粒砂〈２～５cm大の礫含む、柱痕〉
2．灰黄褐色（10YR 5/2）シルト混細粒砂～中粒砂〈２～10cm以下の角礫含む〉
3．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混極細粒砂～細粒砂〈２～20cm大の礫含む〉
4．黄灰色（2.5Y 5/1）シルト混極細粒砂～細粒砂
5．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混極細粒砂～細粒砂
6．褐灰色（10YR 5/1）シルト混細粒砂〈５cm大の礫含む〉
7．灰黄褐色（10YR 5/2）シルト混細粒砂〈小礫含む〉
8．灰黄褐色（10YR 5/2）細粒砂～中粒砂〈２～10cm大の角礫を多く含む〉
9．黄灰色（2.5Y 5/1）シルト混細粒砂〈２～５cm大の礫を含む〉
10．にぶい黄褐色（10YR 5/4）細粒砂〈５～20cm大の角礫を多く含む〉
11．黄褐色（2.5Y 5/3）シルト混細粒砂
12．にぶい黄褐色（10YR 5/4）細粒砂〈２～20cm大の角礫含む〉

第16図　掘立柱建物ＳＢ130実測図

柱間寸法は、桁行は1.9～2.4ｍで、中間の柱間のみ3.0～3.2ｍと広くなっている。梁行は2.4～2.7ｍを測る。床面積は37.9㎡を測る。柱穴ＳＰ62から土師器皿、ＳＰ46から瓦器椀が出土した。

掘立柱建物ＳＢ180（第17図）　調査地南東部で検出した。南側に行くにつれ、大きさ0.1～1.0ｍ大の角礫が増加することから、土石流の上にＳＢ180を建築している状況である。主軸はＮ－９°－Ｗでわずかに西に振った南北方向に長軸を採る。梁行３間（5.0ｍ）、桁行３間（8.3ｍ）を測る総柱の掘立柱建物となる。柱穴は16基確認しており、いずれも平面円形であり、径0.3～0.4ｍを測り、深さは0.15～0.2ｍと浅いものが多く、ほとんどの柱穴掘形で、角礫が確認できる。柱痕は確認できたものでは径0.15ｍを測るものの、ほとんど確認できず、柱を抜き取った後に埋め戻された柱穴も複数あると考える。また、柱穴内に根石の可能性がある礫を検出したものもある。柱穴の内の１基である北辺の西から２番目の柱穴ＳＰ147からは、完形の土師器皿（第30図４）が出土している。この土師器皿は建物廃絶時に柱を抜き取った直後に埋納されたと理解できる。柱間寸法は桁行が2.4～2.8ｍで南東隅のみやや広がる。梁行は1.6～1.8ｍを測る。床面積は41.5㎡を測る。

柱穴からは、細片であるが土師器皿、瓦器椀、瓦質土器の羽釜等が出土している。ＳＰ147から出土した土師器皿の特徴から、12世紀後半から13世紀初頭に廃絶したと考える。

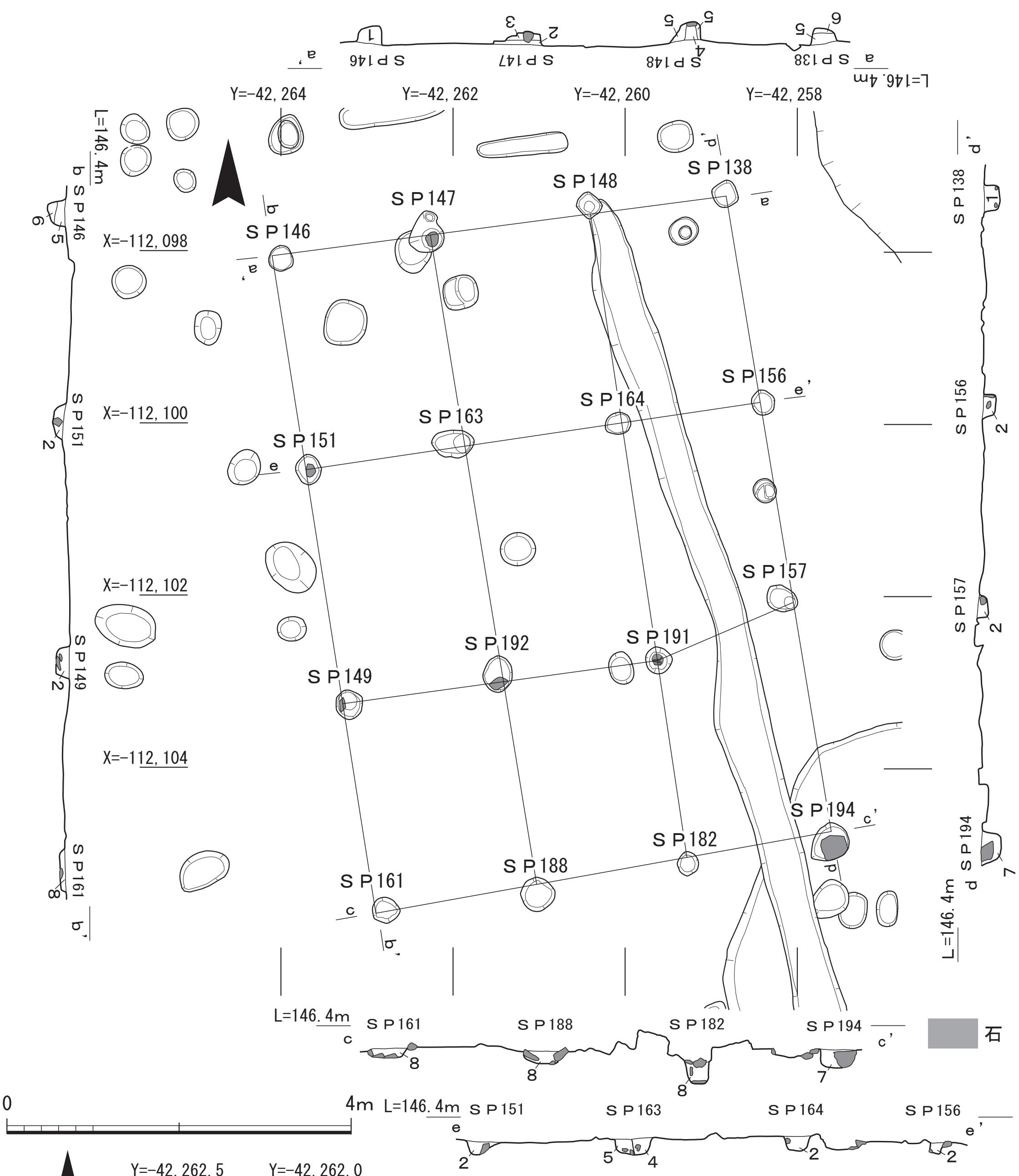
掘立柱建物ＳＢ190（第18図）　調査地中央やや南よりの地点で検出した。主軸はＮ－12°－Ｗでわずかに西に振った南北方向に長軸を採る。梁行２間（4.5ｍ）、桁行２間（５ｍ）を測る。柱穴列はやや揃わないものの、総柱の掘立柱建物である。柱穴は９基確認しており、いずれも平面円形であり、径0.3～0.4ｍ、深さ0.15～0.35ｍを測る。柱痕は確認できたものでは、径0.2ｍを測る。柱間寸法は、桁行は1.8～3.1ｍで東側の柱穴列にややばらつきがある。梁行は2.3～2.5ｍを測る。床面積は22.4㎡を測る。柱穴からは、砕片であるが、土師器皿、白磁等が出土している。

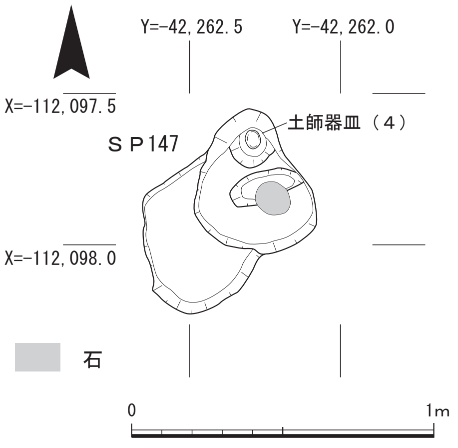
掘立柱建物ＳＢ215（第18図）　調査地南西部で検出した。主軸はＮ－１°－Ｗで東西方向に長軸を採る。梁行１間（3.0ｍ）、桁行２間（4.5ｍ）を測る側柱の掘立柱建物となる。柱穴は５基確認しており、いずれも径0.25～0.3ｍ、深さ0.15～0.3ｍを測る。なお、北東隅の柱穴は確認できず、根石の可能性のある礫を確認した。柱痕は確認できたものでは径0.2ｍを測る。柱間寸法は、桁行は2.0～2.7ｍで東側が広い。梁行は2.7～3.0ｍを測る。床面積は13.5㎡を測る。

小結　掘立柱建物の方位はいずれも北から１～12°西に振る。南東部のＳＢ180・190・215については、近接・重複して分布することから、３基が同時に存在していたのではなく、それぞれが１ないし２棟ずつ存在していたと考える。また、ＳＢ180と190は近接しているので、同時期併存とは考え難い。ＳＢ190と215は小規模なので、倉庫等の付属屋であろう。各掘立柱建物の帰属時期については、それぞれの柱穴から出土した遺物は細片であり、不明瞭であるが、13世紀前半頃までには廃絶したと考える。

②井戸ＳＥ210（第19～25図）

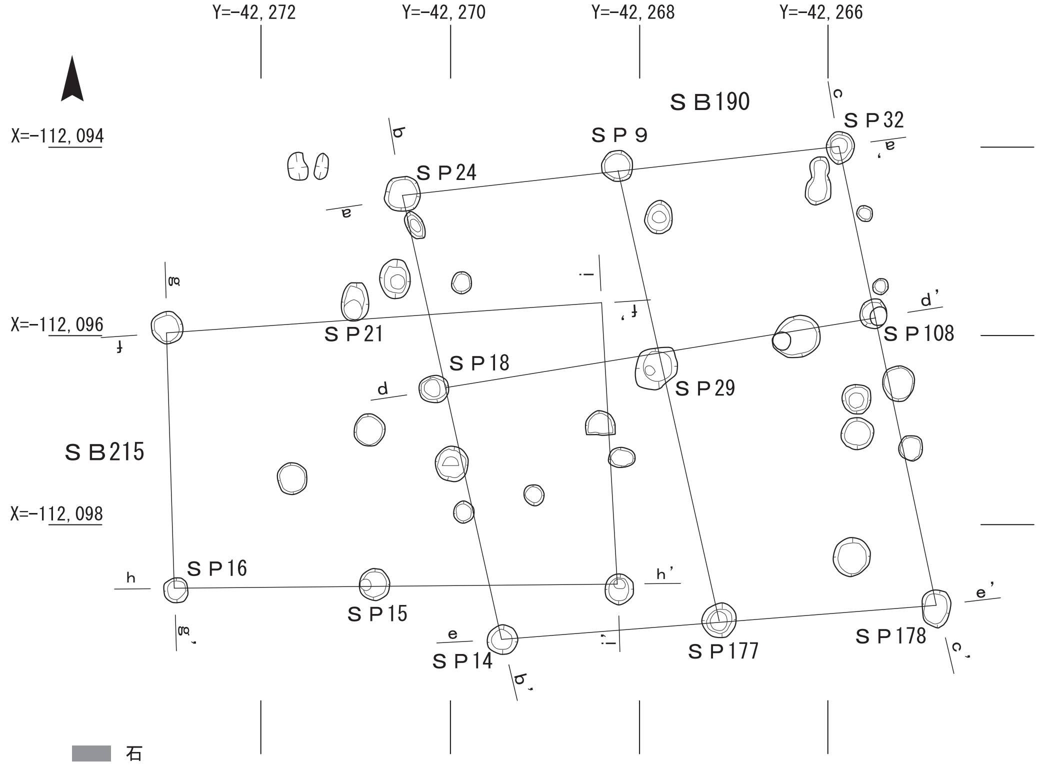
調査地南東部の標高146.1ｍ付近で検出した。東に溝状遺構ＳＤ220、南に掘立柱建物ＳＢ180等が近接して分布する木組みの井戸である。井戸底部付近まで人力掘削を行い、安全を考慮して重機による断ち割りを行った。

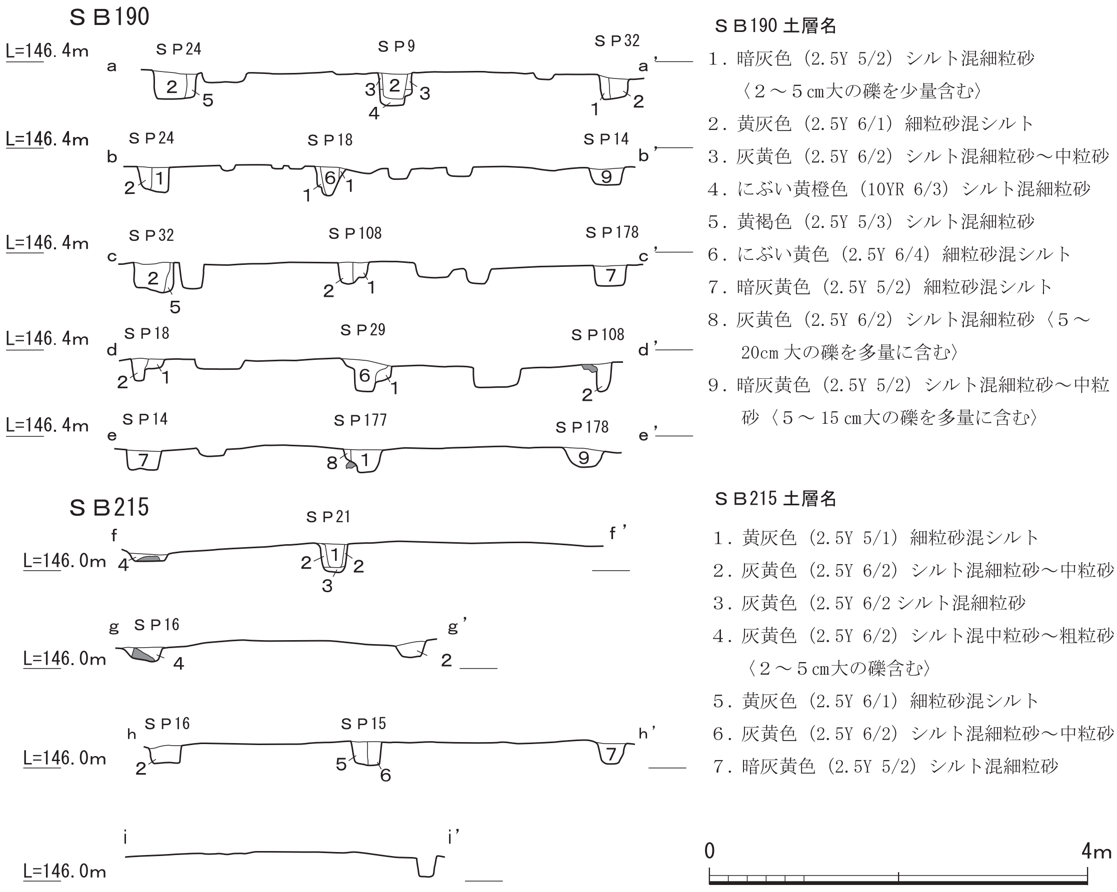




1．灰黄褐色（10YR 6/2）シルト混細粒砂〈５～15㎝大の礫含む〉
2．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混細粒砂〈５～30㎝大の礫含む〉
3．褐灰色（10YR 6/1）細粒砂混シルト
4．褐灰色（10YR 6/1）細粒砂混シルト〈柱痕か〉
5．黄灰色（2.5Y 6/1）シルト混細粒砂～粗粒砂〈５㎝大の礫含む〉
6．にぶい黄褐色（10YR 4/3）シルト混細粒砂～中粒砂
〈５～15㎝大の礫を多く含む〉
7．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混細粒砂～粗粒砂〈５～30㎝大の礫含む〉
8．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混粗粒砂〈５～30㎝大の礫多く含む〉

第17図　掘立柱建物ＳＢ180実測図(左下はSP147の拡大)





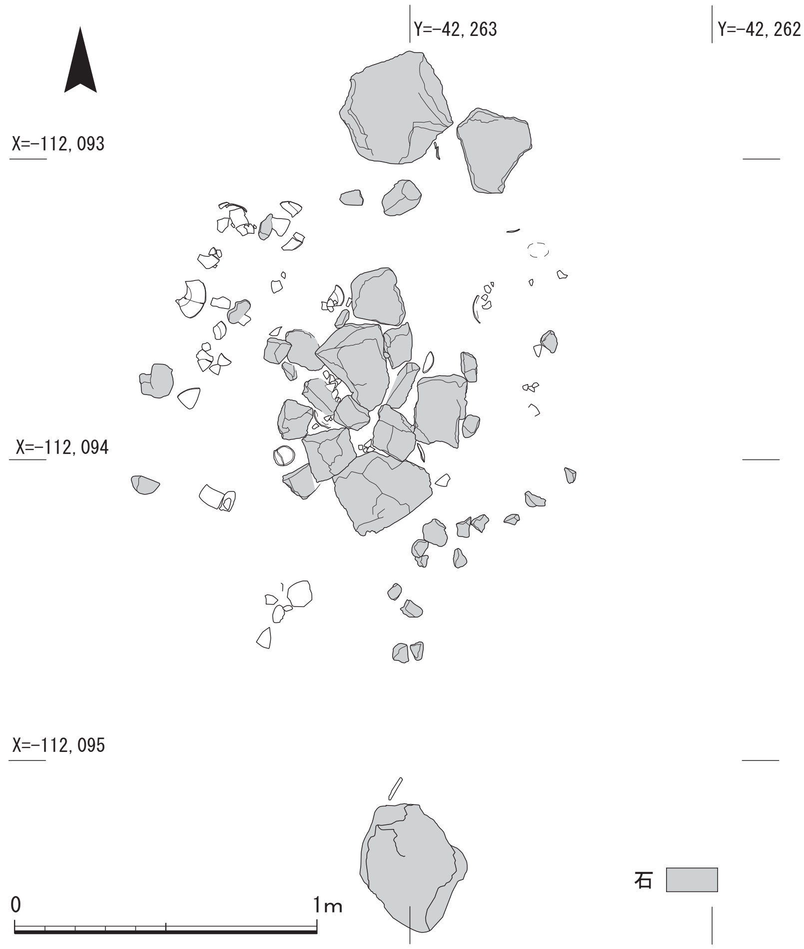
ＳＢ190 土層名

1．暗灰色（2.5Y 5/2）シルト混細粒砂〈２～５㎝大の礫を少量含む〉
2．黄灰色（2.5Y 6/1）細粒砂混シルト
3．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混細粒砂～中粒砂
4．にぶい黄橙色（10YR 6/3）シルト混細粒砂
5．黄褐色（2.5Y 5/3）シルト混細粒砂
6．にぶい黄色（2.5Y 6/4）細粒砂混シルト
7．暗灰黄色（2.5Y 5/2）細粒砂混シルト
8．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混細粒砂〈５～20cm 大の礫を多量に含む〉
9．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混細粒砂～中粒砂〈５～15 ㎝大の礫を多量に含む〉

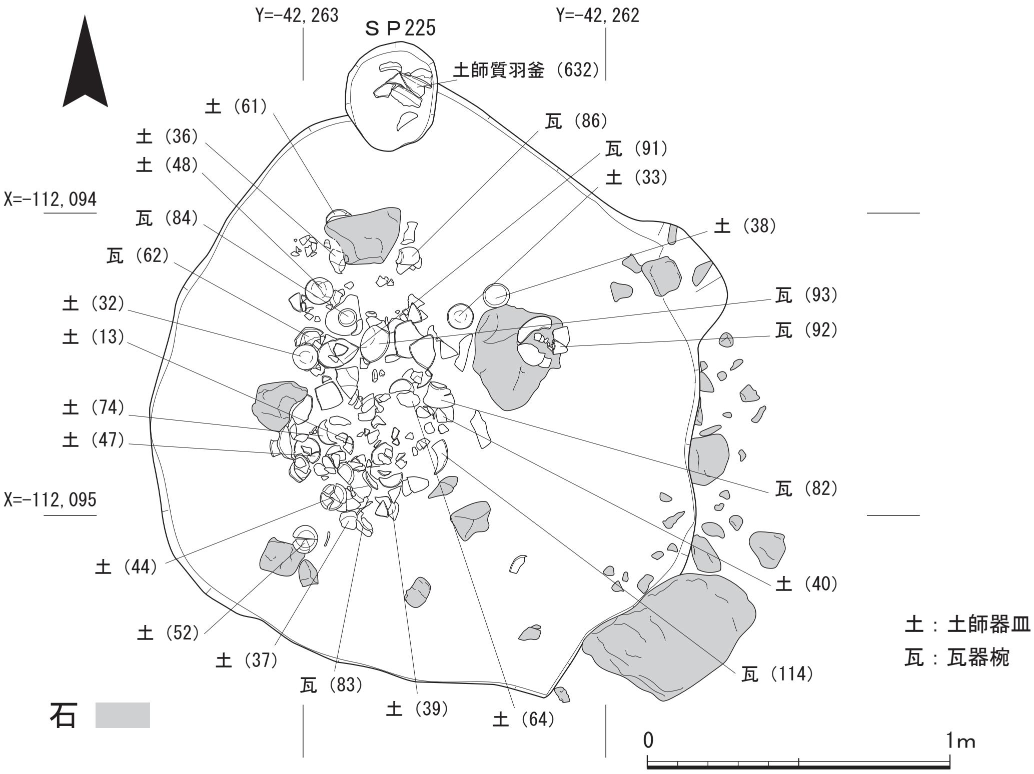
ＳＢ215 土層名

1．黄灰色（2.5Y 5/1）細粒砂混シルト
2．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混細粒砂～中粒砂
3．灰黄色（2.5Y 6/2 シルト混細粒砂
4．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混中粒砂～粗粒砂〈２～５㎝大の礫含む〉
5．黄灰色（2.5Y 6/1）細粒砂混シルト
6．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混細粒砂～中粒砂
7．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混細粒砂

第18図　掘立柱建物ＳＢ190・215実測図



第19図　井戸ＳＥ210検出状況図



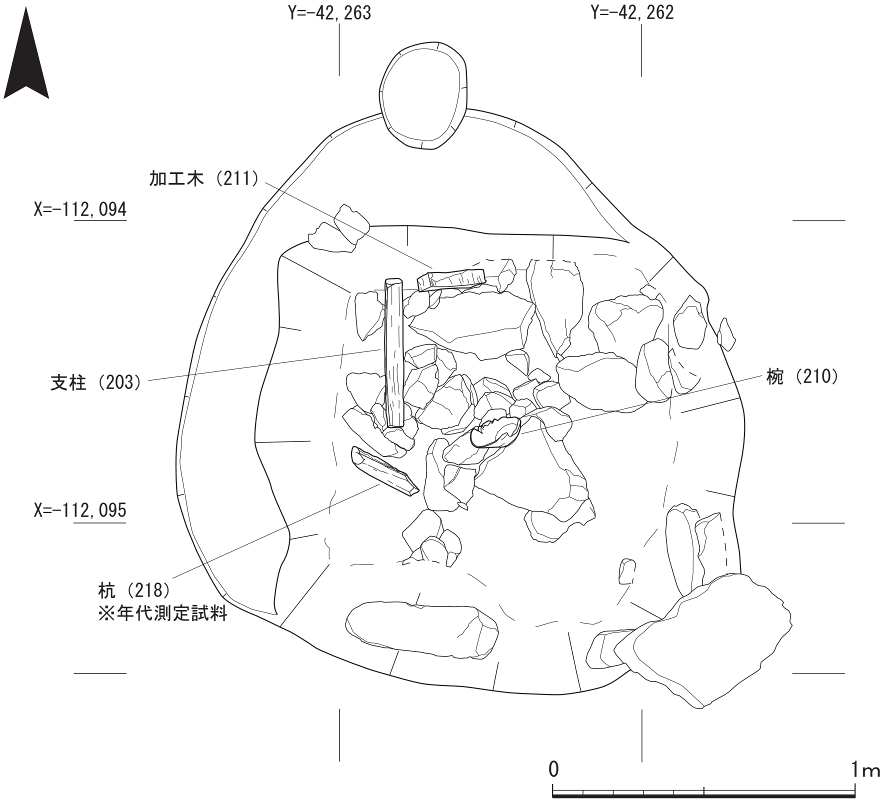
第20図　井戸ＳＥ210上層土器検出状況

井戸上層　ＳＥ210を中心とする径約8.0mの範囲（グリッドｓ13、ｔ13）では、直上の包含層掘削段階から、完形に近い土師器皿と瓦器椀が多数散乱する状態を確認した。この付近には、土師器皿・瓦器片と共に、0.1～0.5m大の角礫もやや集中するように検出している（第19図）。これらを除去し、長軸1.90m、短軸1.85m程の不整楕円形の輪郭を検出し、一段下げた段階で、完形の土師器・瓦器椀等が多数折り重なるように集積した状態で出土した（第20図）。土器の中には底部を上に向けて出土しているものも多く、人為的に投棄されたと考える。調査中は、この時点では土坑と認識しており、畦と遺物を記録・除去し断ち割りを行ったところ、湧水が激しくなるとともに、土器・木製品・木材・角礫等が出土し、更に掘り進めると井戸枠の支柱が四隅に設置されている状態で出土したことから井戸と判明した。最下段の井戸枠支柱の頂部付近より上部を上層とすると、上層の断面は逆台形に近く、井戸枠部材を抜き取るために、井戸掘形を土坑状にわずかに拡張して掘り込まれている印象を受ける。上層からは、土師器皿・瓦器椀・瓦器皿等が出土した（第32～34図）。

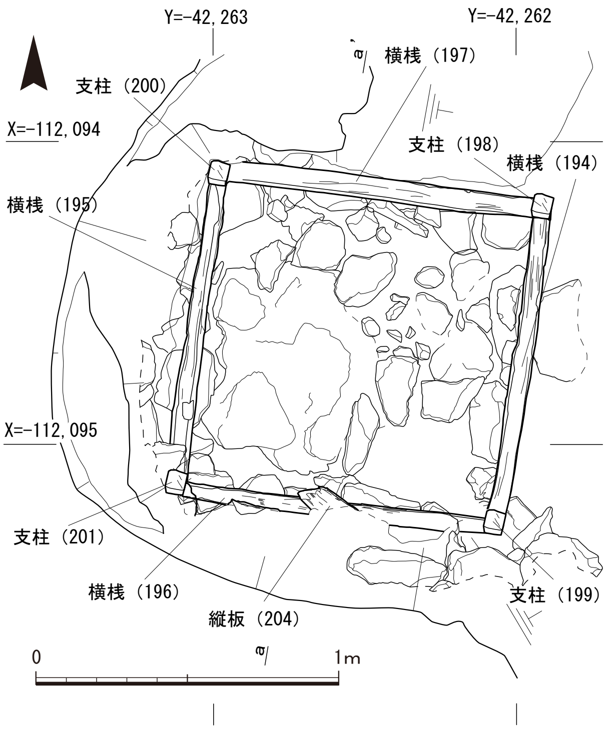
井戸内部　井戸掘形の平面形は隅丸方形で、規模は一辺1.6m、深さ1.35mを測る。内部に木製の井戸枠が部分的に遺存していた。井戸枠の構造は、一辺約1.2mの方形で、縦板組支柱横桟留となる。主軸は、最下段の横桟を基準にすると、5°程東に振っており、掘立柱建物や後述する溝状遺構ＳＤ220の主軸と合わない。井戸枠底部の横桟は、三枚枘差で接続される。支柱は接合のための加工などを施さず、そのまま四隅に立てて置かれている状態を確認した。これらの横桟と支柱の周りを囲うように縦板が配置されていたと考えられる。井戸枠内部には、前述のように、0.1～0.5cm大の角礫が堆積し、この角礫の間に土師器皿・瓦器椀片・木製品・木材等が混在する状況で出土した。これらの状況から、井戸廃絶時に井戸枠内に遺物や角礫を投棄し、井戸埋没後にその上部に完形の土師器皿・瓦器椀等を意図的に投棄したと考えられる。井戸枠内の木材・木製品の多くは、最下段の支柱の頭が見える標高付近で多く出土している。廃絶直後に、最下段の手前まで井戸枠部材を回収していったが、最下段は縦板の多くを回収後、支柱と横桟はそのままにし、埋没を開始したとみられる。上層の遺物と比較して、井戸枠内の土師器・瓦器椀には完形の個体は確認できず、上層のものより古く、時期差がある。また、出土した木製品・木材の中には、井戸枠部材として使われていたものの他、椀・もえさし・杭・不明木製品等も複数出土している。

井戸枠の直下には、0.2～0.5m大の扁平な角礫が敷かれている状況を確認した。隙間なく丁寧に敷き詰められているというより、大小さまざまな角礫を組み合わせるように配置されており、所々隙間が認められるものの、石材上部は概ね平坦になる。最下段の横桟の四隅の直下には、周辺よりやや大きく、平面方形に近い石材が配置されている。ＳＥ210検出面から石敷き上面までの深さが約１ｍを測る。石敷きの下部に青灰色シルト質土からなる層を１層確認しており、この層より下部は砂礫土で構成される自然堆積層となる。よってこの土は石敷きの裏込め土の役割を果たすと考えられる。

以上を基に、井戸の構築と埋没過程を復元すると次のようになる。



第21図　ＳＥ210井戸内部木製品等出土状況



第22図　ＳＥ210井戸枠残存部検出状況

第23図　ＳＥ210井戸枠下の石敷き検出状況

構築過程　①掘形を掘削する。②底部に裏込め土を設置し、角礫を敷いて平坦面を作る。③井戸枠を組む。

埋没過程　①井戸枠上部を解体し、上半部の掘形を拡張して下半部の井戸枠を解体できるようにする。②解体して抜き取れる井戸枠を抜き取った後、最下段の横桟・支柱と周辺の部材の一部を残し、井戸枠内に土器・木製品・井戸枠部材・木材や0.1～0.5m大の角礫を投棄する。③最下段の部材が埋まった付近で、椀状の木製品や、複数のもえさし等が出土していることから、この付近で一旦埋没を中止し、何らかの作業を行った可能性がある。④廃絶直後には、当時の地面付近まで埋められたと考えられる。その後、地盤の緩み等による陥没が考えられ、その度に陥没部分を埋めなおした可能性がある。⑤宅地の廃絶時に、溝状遺構ＳＤ220と同様に、すでに埋没していた井戸の上層の陥没部分に、完形の土師器皿・瓦器椀が多数投棄される。

時期　上層と井戸内部の遺物の特徴から、ＳＥ210の使用時期は12世紀前半頃まで、廃絶・埋没時期は12世紀前半から中頃、上層での最終の遺物の投棄は12世紀後半から13世紀前半と考える。なお、後述する溝状遺構ＳＤ220に投棄された遺物も12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。ＳＥ210自体の廃絶は、建物を含む宅地の廃絶よりも早く、宅地自体の廃絶時に上部の陥没部に遺物を投棄した。

この他に、ＳＥ210の埋土については、花粉分析・大型植物遺体分析、井戸枠内埋土から出土した木材(第40図218)については、放射性炭素年代測定を行った(付編１)。

③溝状遺構

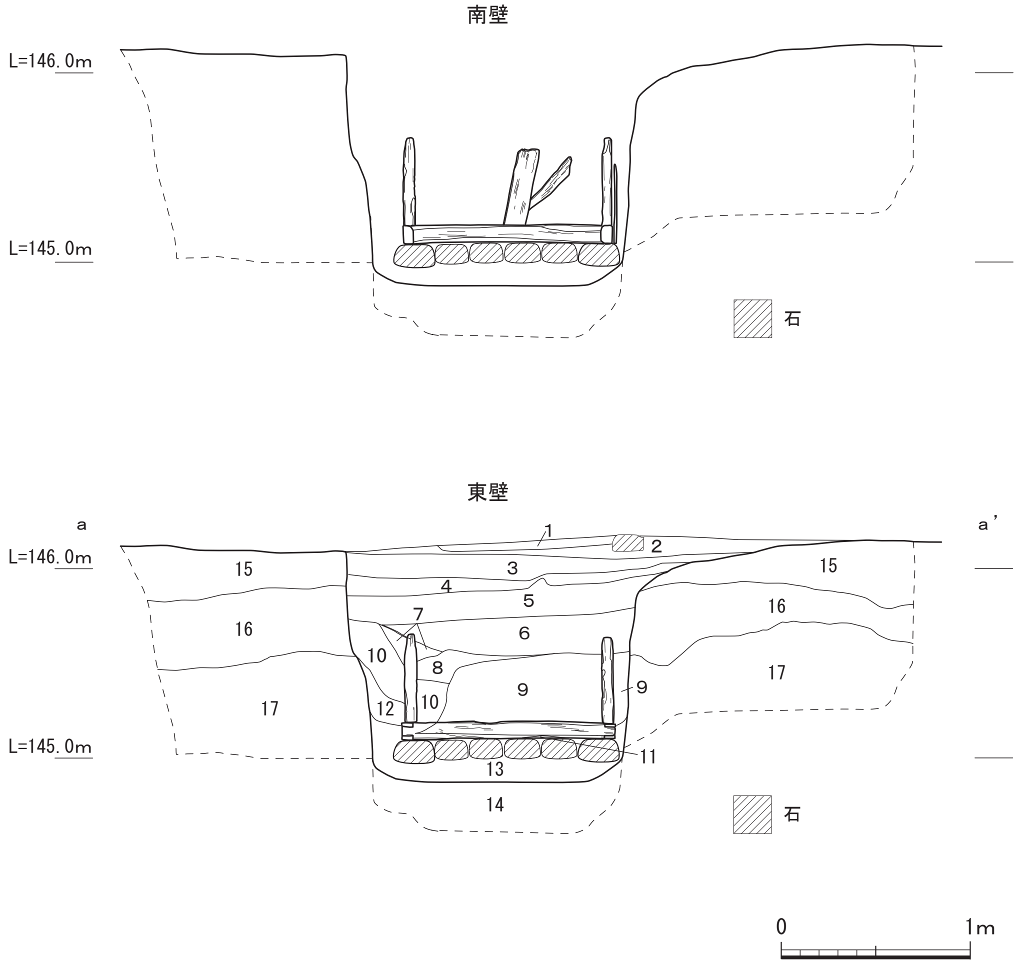
溝状遺構ＳＤ220(第26・27図)　調査地東・南東部付近にて検出した。検出長約20.5m、同幅約1.5m、同深さ約0.3mを測る。溝の東肩部を検出しておらず、正確な断面形状は不明であるが、西側の立ち上がりはやや緩やかであり、あまり整形された印象は受けない。また、北に行くほど浅くなる。部分的な検出のため、本来の形状は不明だが、溝状遺構は南北方向に長軸を採り、主軸はＮ－20－Ｗで20°程西に振り、ＳＢ180に沿うように掘削されている。埋土は２層に大別でき、遺物の多くは下層の黄灰色砂質土中、特に底付近で出土している。遺構内全域で、完形を含む多数の土師器(皿等)、瓦器(椀、皿等)と少量の須恵器(甕、東播系錬鉢)等が出土したが、特に上述のＳＢ180やＳＥ210の東側隣接地点(グリッドｔ12付近)では、多数の完形の土師器、瓦器椀が折り重なって出土した(第27図)。中でも瓦器椀は複数枚が重なって出土している状況である。また、これらの遺物とともに、0.1～0.7m大の角礫も多く出土したことから、埋没後も土石流があったと考えられる。ＳＢ180・190・215、ＳＥ210などの宅地の可能性のある建物群に沿うように位置することから、宅地の区画溝となる可能性がある。底部付近の出土遺物の特徴から、埋没時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

この他に、ＳＤ220の埋土については、プラントオパール分析を行った(付編1)。

(2)平安時代から中世までの宅地以外の遺構

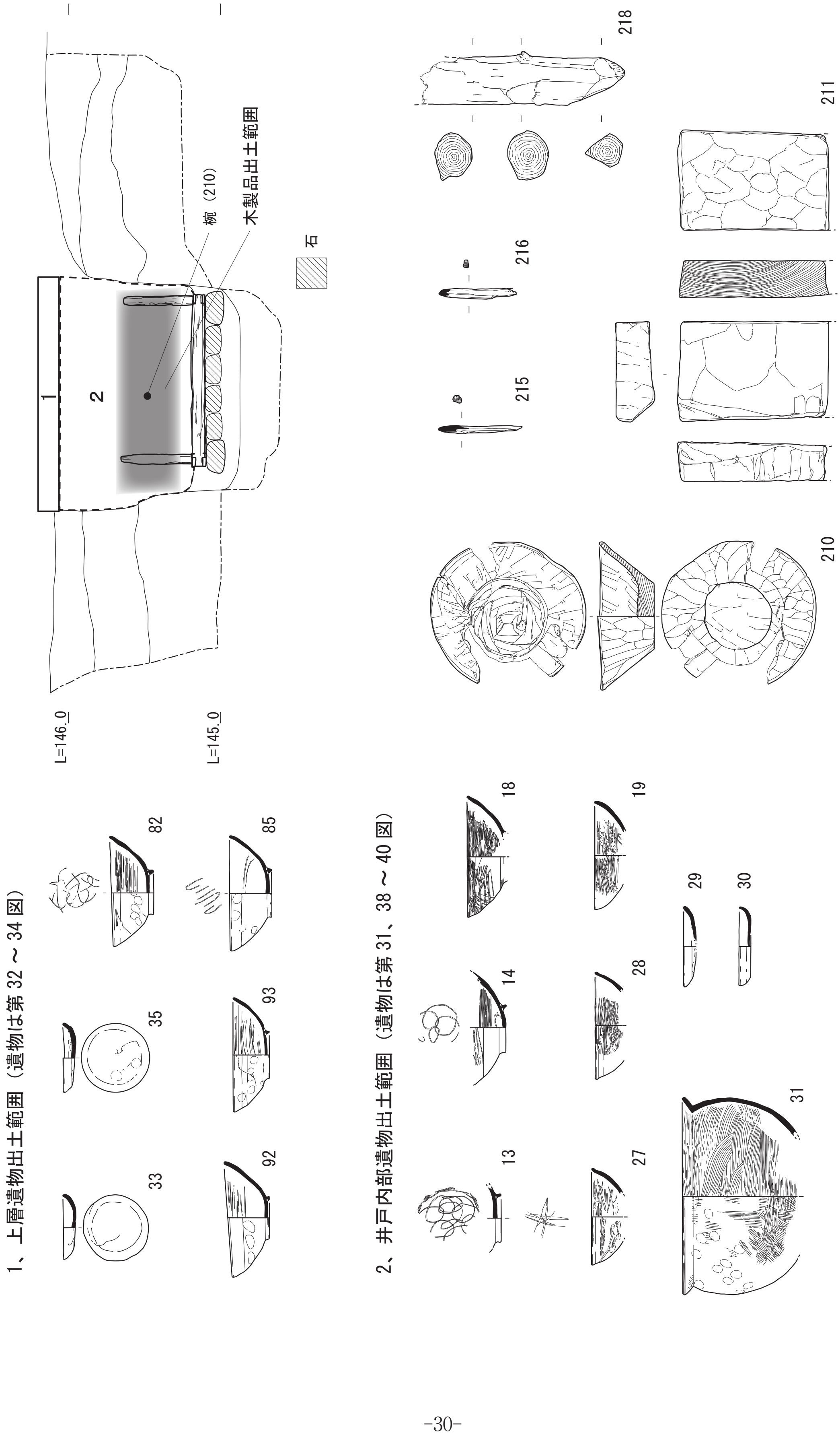
①各種土坑(第28図)

土坑は６基確認した。いずれの土坑も平・断面ともに不整形であり、出土遺物も細片で時期幅

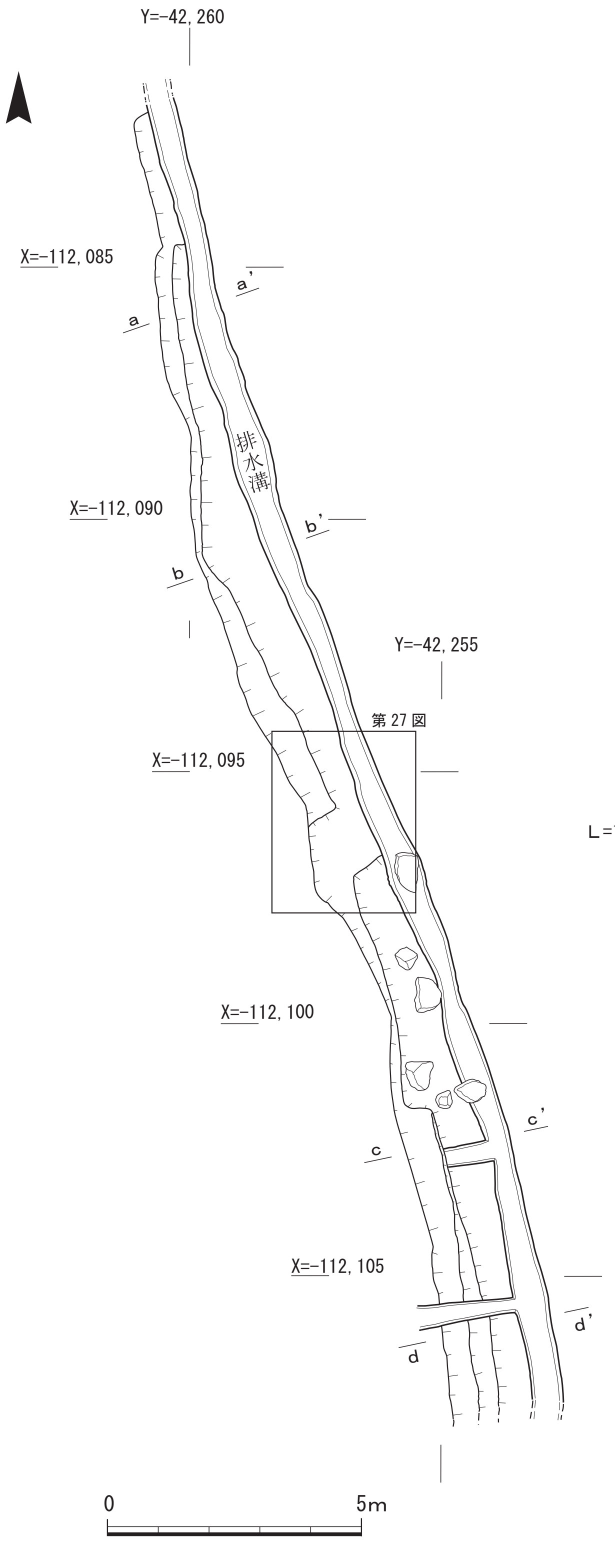


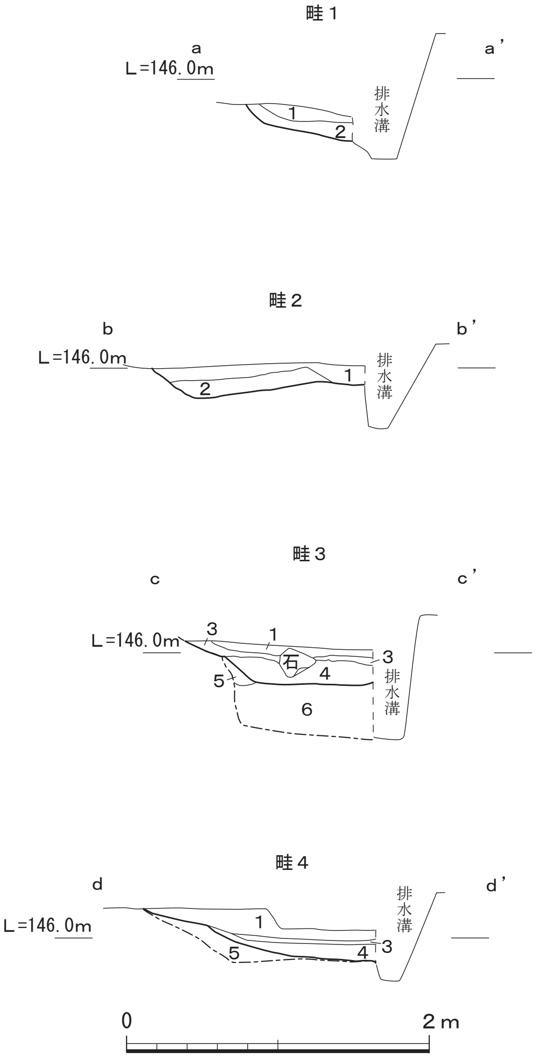
1．褐灰色（10YR4/1）細粒砂＜埋没後遺物投棄時埋土＞
2．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂～細粒砂、鉄分＜埋没後遺物投棄時埋土＞
3．褐色（10YR5/1）極細粒砂～細粒砂、鉄分＜廃絶後埋没土＞
4．黄褐色（2.5Y6/1）極細粒砂～細粒砂、鉄分・炭化物＜廃絶後埋没土＞
5．灰色（5Y5/1）シルト混極細粒砂、鉄分＜廃絶後埋没土＞
6．灰色（5Y5/1）極細粒砂混シルト、鉄分・炭化物＜廃絶後埋没土＞
7．褐色（10YR4/4）極細粒砂～細粒砂、＜廃絶後埋没土＞
8．灰オリーブ色（5GY4/1）シルト混極細粒砂＜廃絶後埋没土＞
9．暗緑灰色（10GY4/1）シルト、20～50cm大の角礫多く含む＜廃絶後埋没土＞
10. 暗緑灰色（5G4/1）シルト、20～50cm大の角礫含む＜廃絶後埋没土＞
11. 灰オリーブ色（7.5Y5/2）極細粒砂～中粒砂、砂質＜使用時埋土 or 廃絶後埋没土か＞
12. 暗緑灰色（10GY4/1）極細粒砂混シルト＜井戸枠縦板裏込め土＞
13. 青灰色（5BG6/1）シルト、10cm大の角礫含む＜井戸枠底部付近裏込め土＞
14. にぶい黄色（2.5Y6/4）細粒砂＜自然堆積層＞
15. にぶい黄橙色（10YR6/4）細粒砂＜自然堆積層＞
16. 明黄褐色（10YR6/6）細粒砂 10～30cm大の角礫含む＜自然堆積層＞
17. 緑灰色（10G6/1）シルト混極細粒砂、10～20cm大の角礫含む＜自然堆積層＞

第24図　井戸ＳＥ210断面図



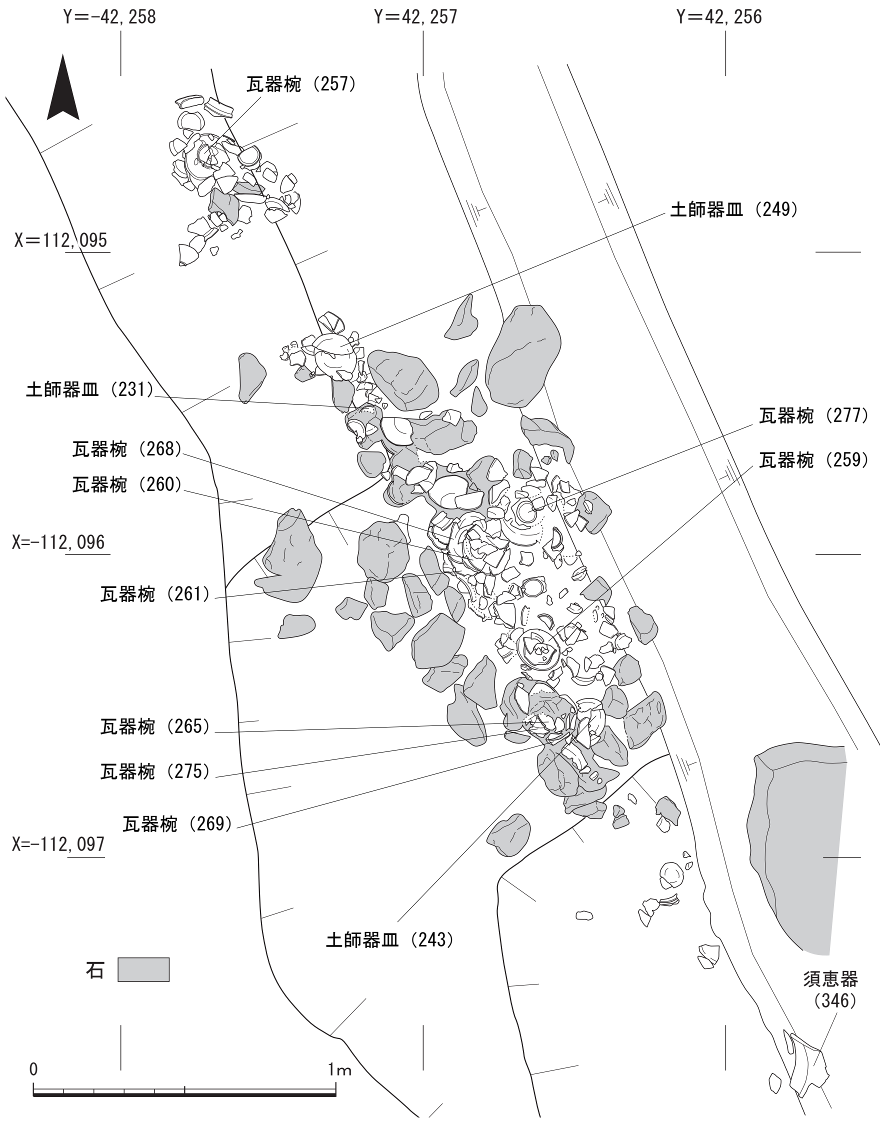
第25図　井戸ＳＥ210遺物出土位置断面図



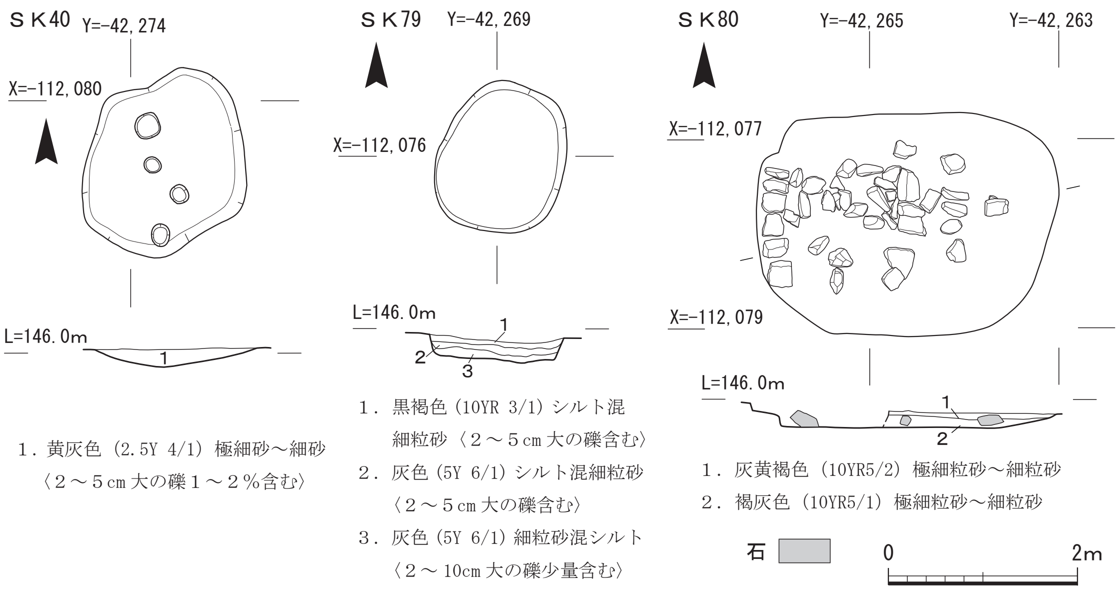


1．暗灰黄色（2.5Y 5/2）細粒砂
2．黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒細～細粒砂〈炭化物を粒状に２％含む〉
3．暗灰黄色（2.5Y 5/2）細粒砂〈鉄分多く含む〉
4．黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒砂～細粒砂〈炭化物を粒状に３～５％含む、遺物多量に含む〉
5．灰黄色（2.5Y 6/2）極細粒砂～細粒砂
6．黄灰色（2.5Y 6/1）極細粒砂～細粒砂〈３～ 10 cm 大の礫を 15 ～ 20％含む〉

第26図　溝状遺構ＳＤ220実測図



第27図　溝状遺構ＳＤ220土器出土状況図



第28図　土坑ＳＫ40・79・80実測図

があり、大半は混入と考えられる。土坑ＳＫ80は、後述する、宅地以後の耕作溝と考えられるＳＤ90等を削平しており、これらよりも新しい時期の遺構と考えられる。その他の土坑の詳細な時期は不明であるが、出土遺物から中世以降のものと考える。

土坑ＳＫ40（第28図）　調査地の北西付近で検出した。平面は不整楕円形であり、径1.8m、深さ0.2mを測る。埋土は１層である。掘削中に、土師器・瓦器・須恵器等が出土した。

土坑ＳＫ41（第13図）　調査地の北西付近で検出した。平面不整楕円形で、長軸2.0m、短軸1.4m、深さ0.15mを測る浅い土坑である。埋土は１層である。掘削中に土師器・瓦器・青磁等が出土した。

土坑ＳＫ79（第28図）　調査地の北付近で検出した。平面不整楕円形で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は３層に分けられる。掘削中に土師器等が出土した。

土坑ＳＫ80（第28図）　調査地北東部で検出した。平面不整楕円形で、長軸3.2m、短軸2.2m、深さ0.2mを測る。検出・一段下げ段階で、0.2～0.4m大の角礫が散乱している状況を確認した。これらの角礫は、西側に一部列状に並ぶ可能性のある部分も見られるものの、全体的には人為的に積まれたような様子は確認できず、埋土中より0.3～0.4m大の礫を複数確認した。いずれの礫も底部から浮いた状態で確認している。周辺の耕作溝の可能性のある溝状遺構を削平することから、中世以降の時期に帰属する遺構と考えられる。掘削中に土師器・瓦器・須恵器等が出土した。

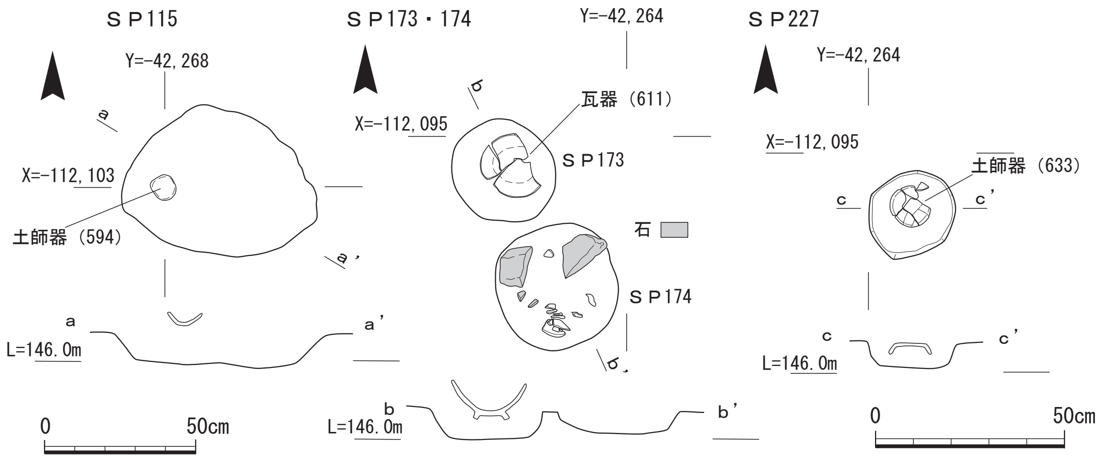
土坑ＳＫ116（第13図）　調査地西側で検出した。平面不整形で、長軸4.0m、短軸2.3m、深さ0.15mを測る。掘削中に瓦器等が出土した。

土坑ＳＫ226（第13図）　調査地の南東側で検出した。平面は不整形で、長軸3.7m、短軸3.3m、深さ0.15mを測る浅い土坑である。耕作溝に掘り込まれる。埋土は１層に区分できる。掘削中に土師器等が出土したが時期は不明である。

②各種溝（第13図）

調査地北東部から東部を中心に、幅0.2～0.3mを測る耕作溝の可能性のある溝状遺構を約25条確認した。これらの溝は、いずれも深さは0.2～0.3mと浅く、埋土も１層で構成されるものがほとんどである。遺物を確認できた溝の大半は土師器・須恵器・瓦器・陶磁器等の破片を含むものであり、混入の可能性が高い。各溝の主軸方位を見ると、北部に分布しており、南北方向で主軸を5°程西に振るもの（ＳＤ41・71・73・74・79等）、同じく北部に分布しており、東西方向で主軸を5～10°程北に振るもの（ＳＤ72・82・93・35・34等）、南側に分布し、南北方向で主軸を15～20°程西に振るもの（ＳＤ20・103・105等）、上記に含まれず、途中で屈曲するもの（ＳＤ12・89等）などが認められる。遺物の時期等から、宅地の廃絶以降の耕作溝と考える。これらの溝は重複しているものも多く、長期間に渡り、場所を変えながら耕作地として利用されたと考えられる。以下では、耕作溝以外の溝となる可能性のあるものについて述べる。

溝ＳＤ235・236　調査地北東隅部で検出した。北端部のみ検出しており、さらに南側にのびる。検出長1.2～1.4m、深さ0.2～0.4mを測り、それぞれ北端部でわずかに屈曲する。時期の判明する遺物も出土しなかったことから、時期不明であるものの、すぐ北側にはＳＢ180が位置しており、宅地に伴う門等の痕跡となる可能性がある。



第29図　ピットＳＰ115・173・174・227実測図

③ピット（第29図）

柱痕跡が確認出来ず、建物の柱穴とならない用途不明のピットは約100基確認した。分布状況を見ると、北西部のＳＢ130付近と、南東部のＳＢ180・190・215付近に多く分布する。瓦器椀や土師器片を含むものもあるが、ほとんど深さ0.1～0.2m程と浅く、埋土も１層である。

各ピットから出土している遺物を見ると、ピットの時期は①建物・井戸・溝状遺構と前後する時期のもの（ＳＰ167・173・225・227等）、②①の廃絶後のもの（ＳＰ115等）に区分できる。また、特に、南東部の掘立柱建物や井戸の周辺に位置するピットからは、埋土中から残存率の良い土師器や瓦器が出土する状況が確認できた。

この中で、特に残存状況の良好な遺物が出土したピットについて以下に詳述する。

ピットＳＰ115　調査地南西付近にて検出した。径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は１層である。溝ＳＤ20を掘り込む。検出時に完形の土師器皿（第53図594）が出土した。土師器皿の特徴から、時期は16世紀前半から中頃と考えられる。

ピットＳＰ167　調査地中央付近にて検出した。径0.25m、深さ0.2mを測る。埋土は１層である。瓦器椀（第54図608）等が出土した。

ピットＳＰ173　調査地南東付近にて検出した。西にＳＥ210が隣接する。径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土は１層である。検出時に口縁部に沈線のある瓦器椀（611・612）等が出土した。

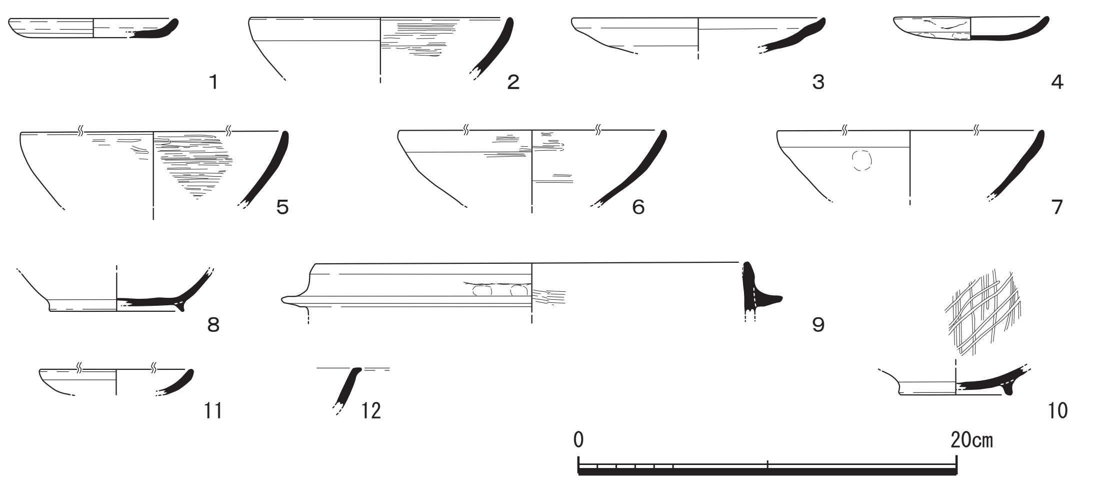
ピットＳＰ225（第20図）　調査地南東付近にて検出しており、ＳＥ210の北側を掘り込む。径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土中から土師器皿等（629～632）が出土した。ＳＥ210の最終の埋没時とＳＥ210上層の埋没直後に掘削された可能性がある。

ピットＳＰ227　調査地南東付近で確認した。径0.2m、深さ0.2mで、埋土は１層である。一段下げの段階で土師器皿（633）が逆さ状態で出土した。

この他、遺物も出土せず、時期不明の落ち込み・掘り込み等を数基検出した。

３）出土遺物

出土遺物の内、835点を図化した。個々の遺物の法量等の基本的な情報は、巻末の観察表に記



第30図　掘立柱建物出土遺物

述しており、そちらを参照していただきたい。

（1）掘立柱建物出土遺物（第30図）

掘立柱建物ＳＢ130　１は柱穴ＳＰ62から出土した土師器皿である。２は柱穴ＳＰ46から出土した瓦器椀である。内面のみ、口縁端部から下方へやや密なミガキが残る。

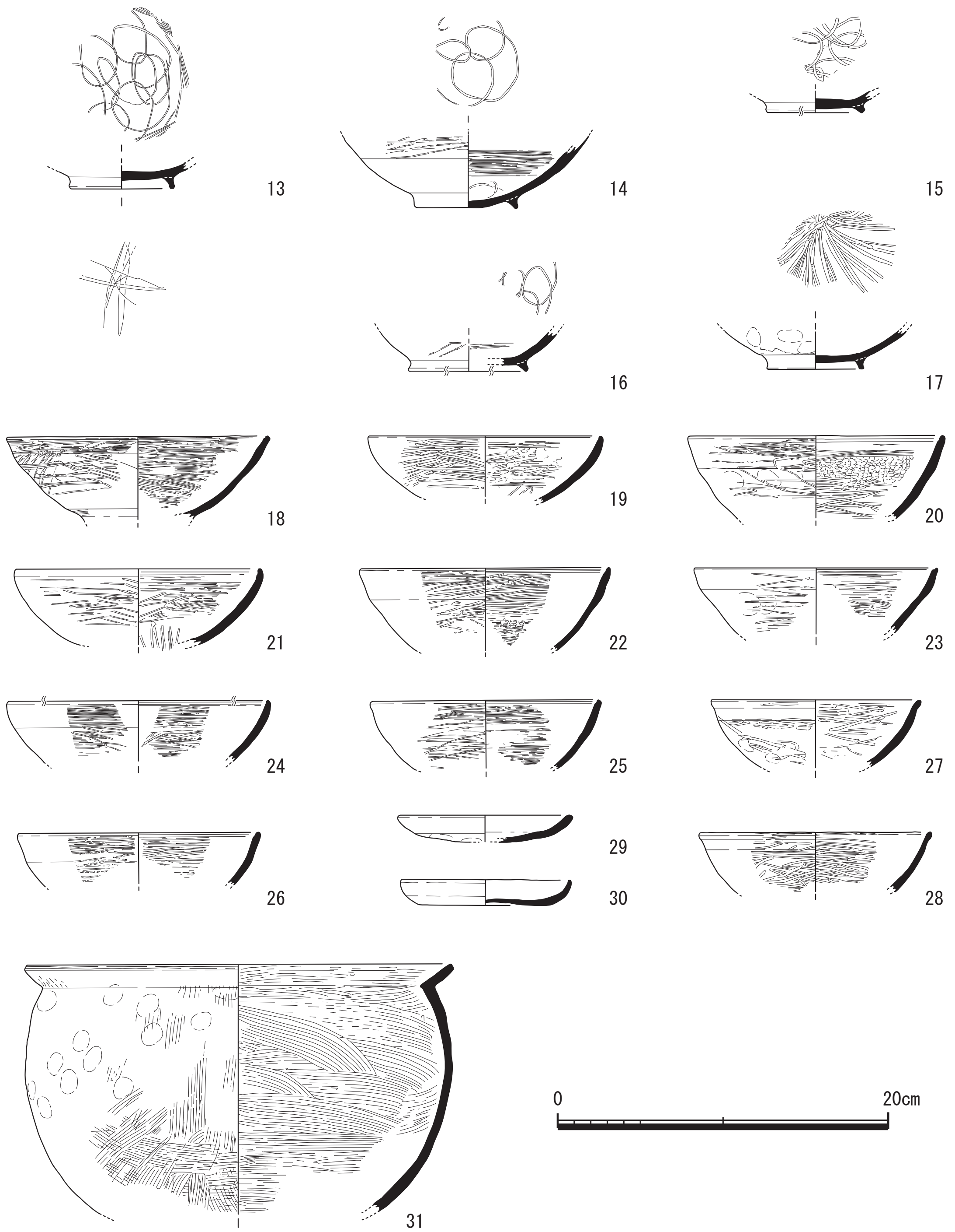
掘立柱建物ＳＢ180　４は柱穴ＳＰ147から出土した完形の土師器皿である。口縁部付近に粘土接合痕が残るものの、器壁は丁寧にナデが施される。色調は灰白色を呈する。同じ柱穴からは、６の瓦器椀口縁部も出土した。５は柱穴ＳＰ22から出土した瓦器椀であり、内面に密なミガキが施される。７と８は柱穴ＳＰ151から出土した。柱穴ＳＰ195からは、３の土師器皿、10の瓦器椀、９の瓦質土器の羽釜が出土した。10の見込みには、ジグザグ状の暗文が２方向から施される。

掘立柱建物ＳＢ190　11は柱穴ＳＰ29から出土した土師器皿である。12はＳＰ32から出土した白磁椀Ｖ類の口縁部である。

（2）井戸ＳＥ210出土土器

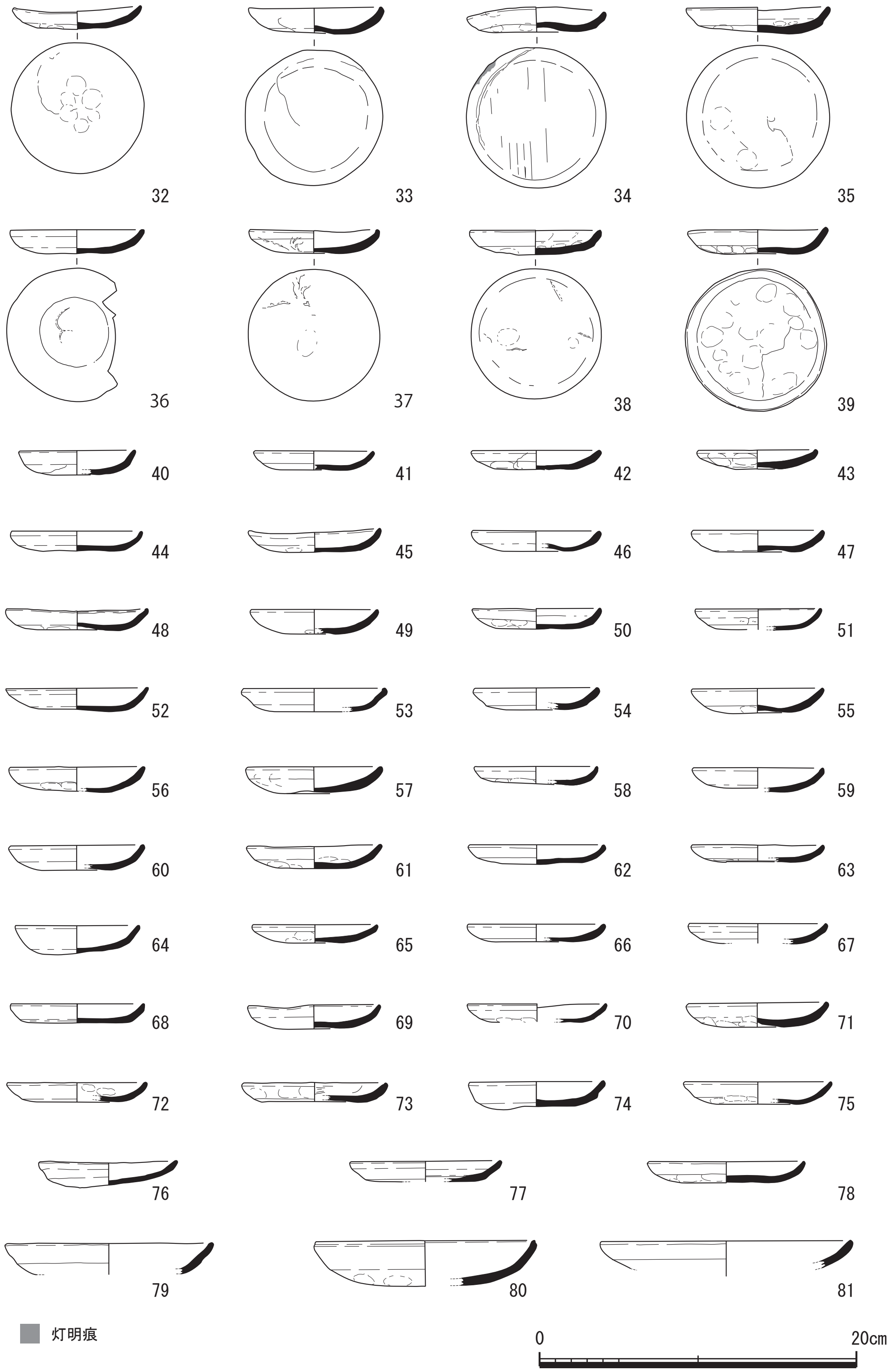
井戸ＳＥ210（第31～36図）　ＳＥ210出土遺物はその出土状況に応じて、井戸枠内、上層、検出時の３つに大別して報告する。

ＳＥ210井戸枠内遺物（第31図）　13～28は瓦器椀である。13～17は底部付近のみ残存している。13～16の内面見込みの暗文は長楕円の連結輪状のものである。13の高台内側には星形のように見える線刻が残る。14は底部残存資料の中でも比較的残存状態が良く、特徴として内面のミガキが同心円状にシャープかつ密に施されており、大和型の様相を呈している。17の内面見込みの暗文は放射状のものであり、図化しなかった資料も含めてこのタイプの暗文はこの個体のみである。18～28はいずれも口縁部が残存している。図化しなかった資料も含めて、井戸枠内から出土した瓦器椀の大半が、外形の丸みが強く口縁端部に沈線の入る楠葉型の様相を呈している。18のように、口縁端部より５mmほど下部の外面に強めのナデを施したものや、19のように、口縁端部を成形する際に、若干内側に折り返しているものも確認できた。また、19、20、22については、口縁端部から椀の中ほどあたりまでの内面のミガキが一切の隙間なく密に施されている。製品をよ

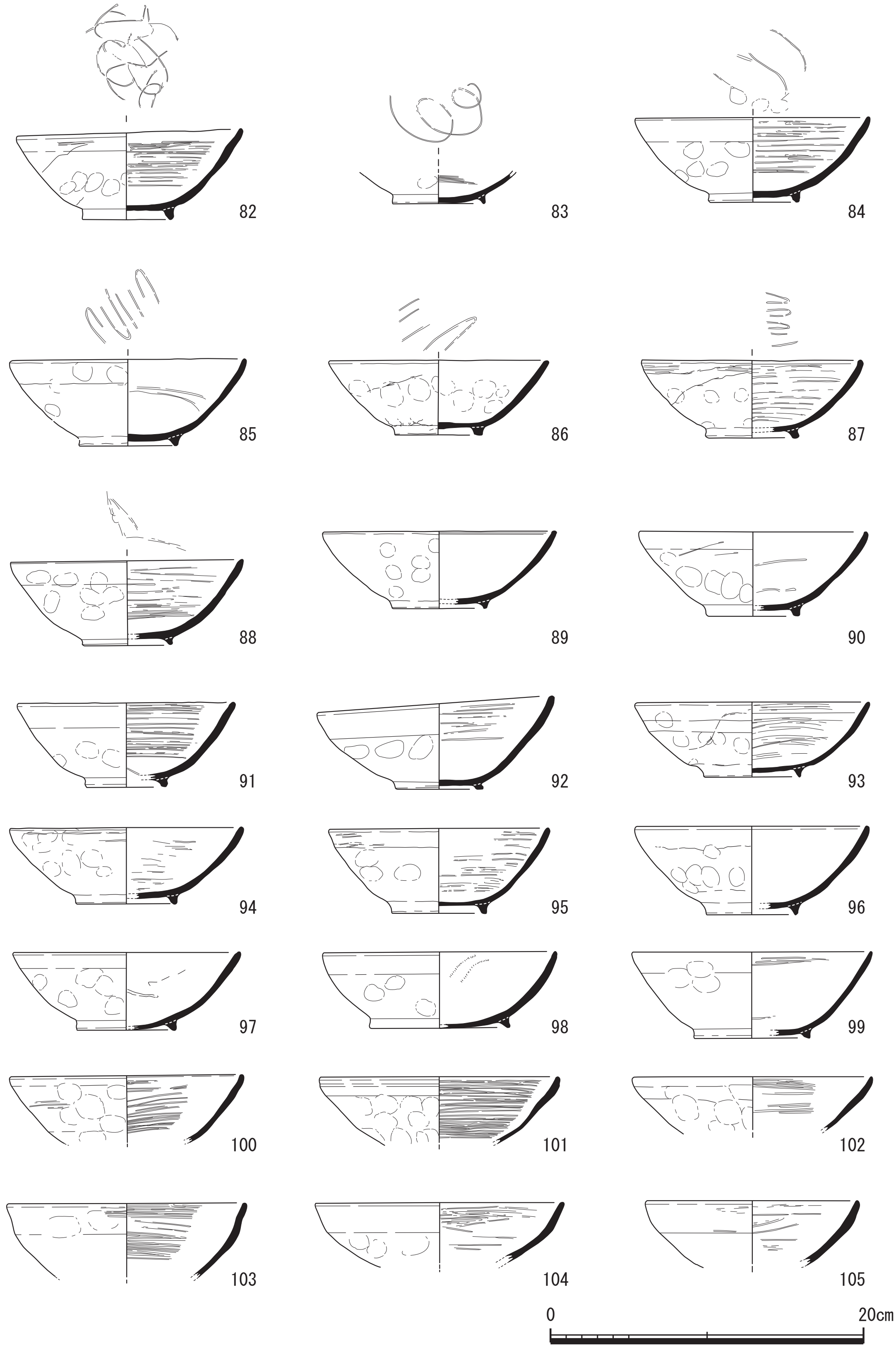


第31図　井戸SE210井戸枠内遺物

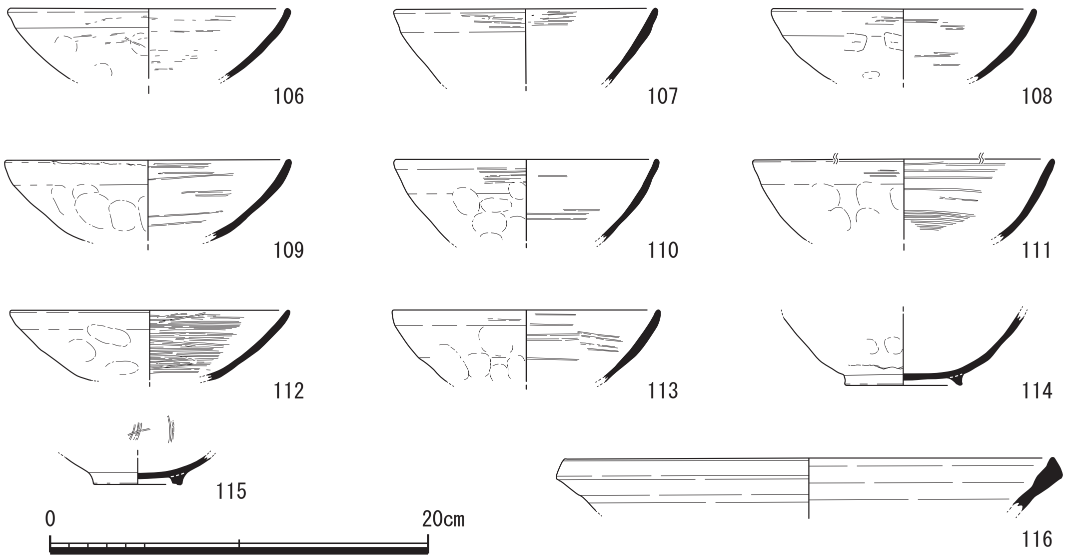
りシャープに仕上げることを目的としていると考えられ、工具をこまめに往復させながらミガキを施すため、一単位ごとのミガキが重なり合い、ミガキの端部がうろこ状に見える。23は口縁端部の内側に段をもつ。口縁端部の仕上げ調整を行う際に、工具を真上からあてることで、楠葉型のような沈線ではなく段が成形されていると考えられ、口縁端部に段をもつこと、段の成形の過程で口縁部の形状がやや外反気味になっていることから、大和型の製品と考えられる。27・28は内面のミガキの幅が３～４㎜と太く、隙間なく施されている。口縁部に沈線が入らないことも合わせて、和泉型の製品と考えられる。井戸枠内で出土した瓦器椀については、その大半が口縁部



第32図　井戸ＳＥ210上層出土遺物(土師器)



第33図　井戸ＳＥ210上層出土遺物(瓦器)



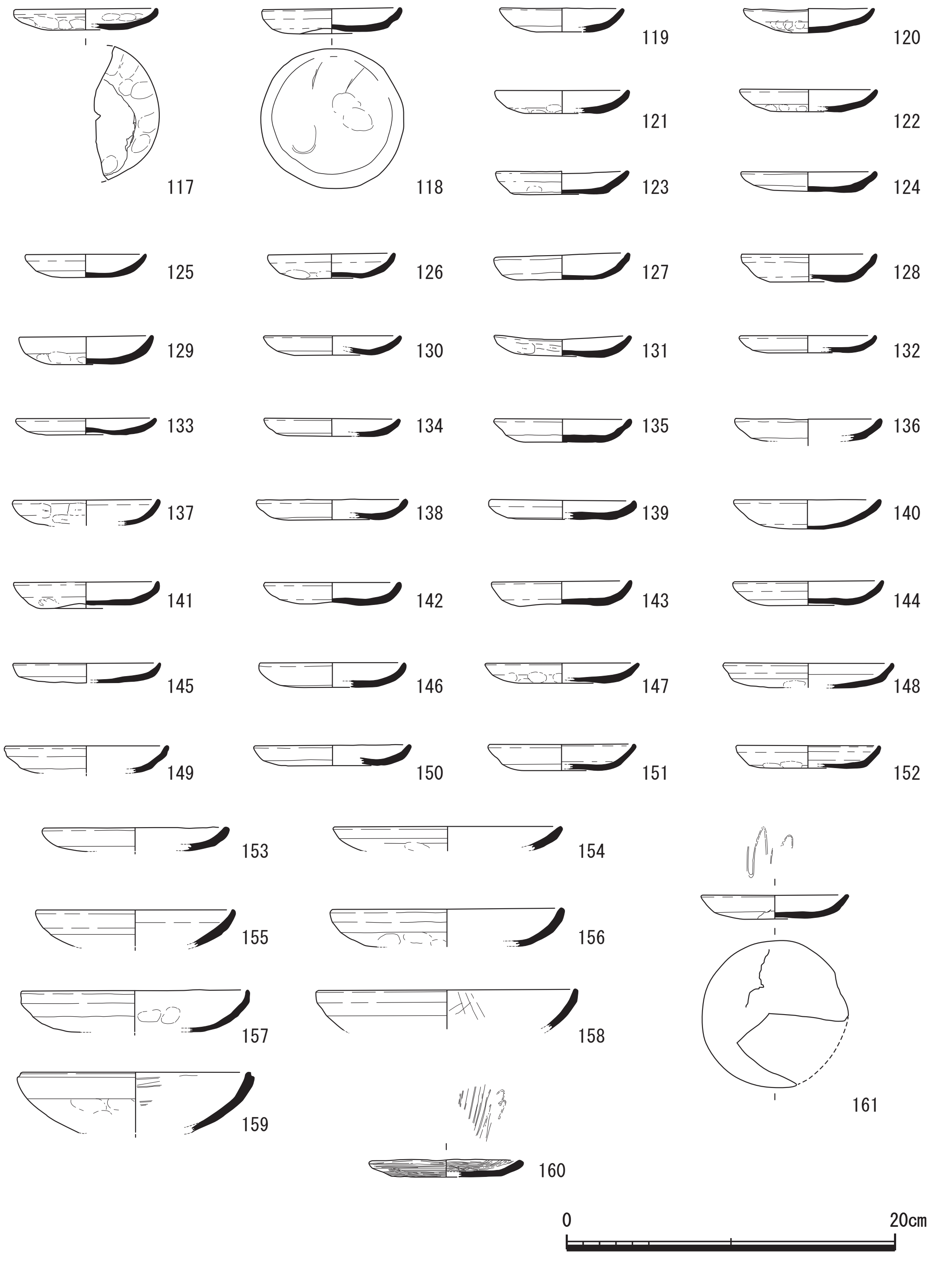
第34図　井戸ＳＥ210上層出土遺物（瓦器ほか）

に沈線もしくはそれに相当する調整を確認できる個体であり、体部内外面のミガキも密であることなどから、12世紀初頭から半ばに差しかかる頃に相当する。29、30は土師器皿である。31は土師質の鍋である。内外面ともにハケメが入り、体部外面に指頭圧痕が残る。

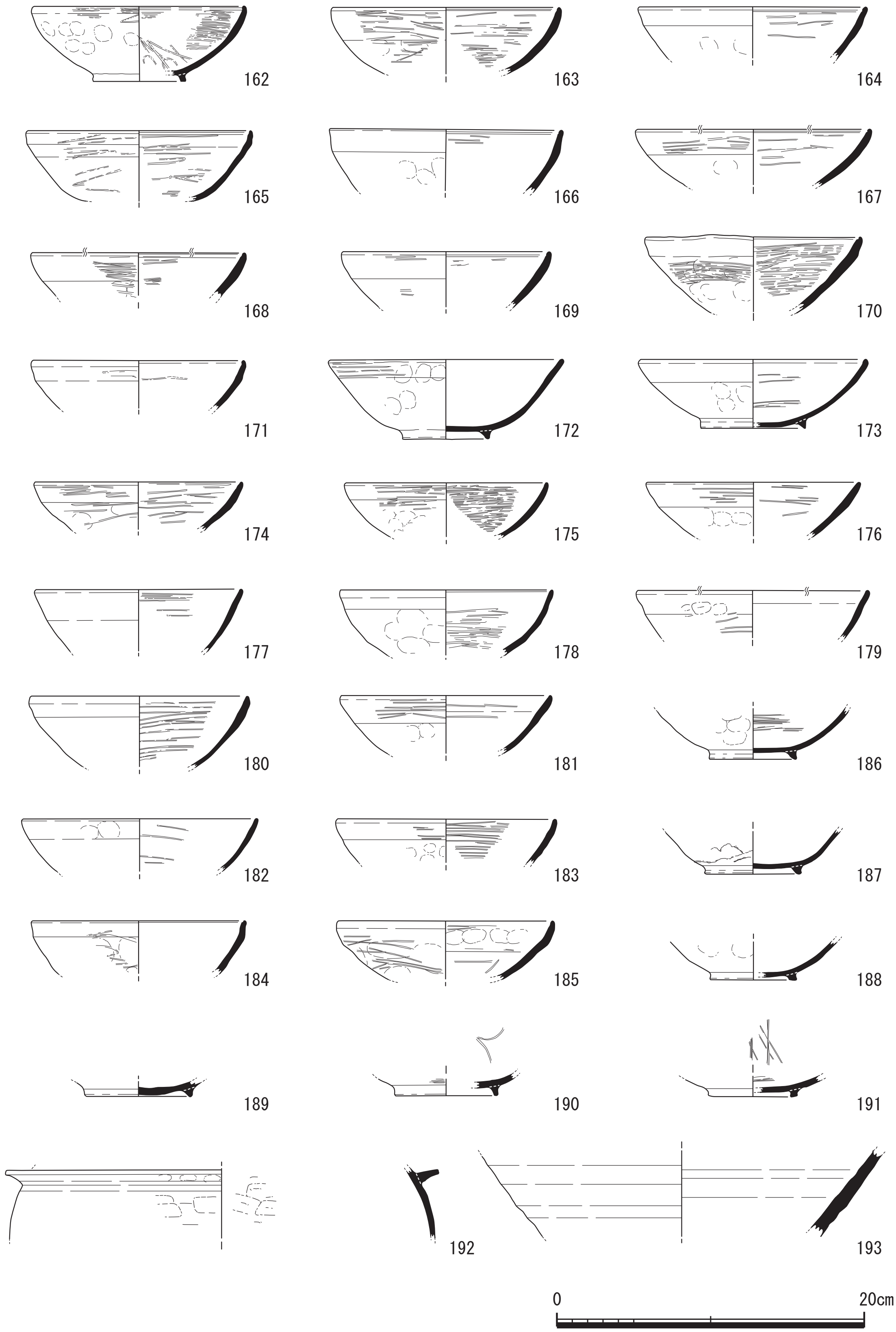
ＳＥ210上層出土遺物（第32～34図）

32～38・40～81は土師器皿である。土師器皿の形状は口縁端部付近と体部中ほどやや底部寄りにナデ調整による段をもつ個体が多く、胎土は灰白色を呈するものと、明橙～橙色を呈するものがほぼ半数ずつ存在している。平尾編年に拠るところの５Ｂ・６Ａ段階に該当すると考えられ、12世紀半ばから13世紀に差しかかる頃に相当する。39は瓦器皿である。82～115は瓦器椀である。井戸枠内出土の瓦器椀と比べて、外面のミガキはごく一部を除きほぼ見られず、成形時の粘土紐の接合痕がはっきり見て取れる資料も散見される。内面のミガキも個体間の差は認められるものの、全体的に粗めに施されている。口縁部の沈線もほぼ見られない。内面見込みの暗文は、確認できる個体がさほど多くはないが、連結輪状のもの（82・83）に対してジグザグ状のもの（85～87）とおそらくジグザグ状のもの（84・88）が多数を占める。口縁端部より下に１～２cmの箇所に段をもつ個体、高台径が比較的大きい個体も多く、ＳＥ210上層より出土した瓦器椀はほぼすべて丹波型の製品である。116は東播系の須恵器鉢である。

ＳＥ210検出面出土遺物（第35・36図117～193）　117～150、153～159は土師器皿である。土師器皿の形状は、口縁端部に強めのナデが入り、底部寄りにナデ調整による段をもつ個体が多く、胎土は灰白色を呈するものと、明橙～橙色を呈するもの両方存在するが、井戸上層出土資料と比べて灰白色を呈するものの割合が多い。器高が低い個体が多く、６Ａ・６Ｂ段階に該当すると考えられ、12世紀末から13世紀前半に相当する。151・152・160・161は瓦器皿である。163～192は



第35図　井戸ＳＥ210出土遺物(土師器・瓦器)



第36図　井戸ＳＥ210出土遺物(瓦器)

瓦器椀である。残存状態の良好な資料が少なく、井戸枠内及び井戸上層出土資料との比較が難しいが、前出の資料と比べて口径の小さな個体が多く、口縁下部に顕著な段を認められる個体が目立つことが特徴としては挙げられる。土師器皿の相当時期に合致すると考えてよいだろう。192は土師質羽釜の体部、193は須恵器鉢の体部である。

（３）井戸ＳＥ210井戸枠部材（第37・38図194～204）

井戸ＳＥ210の内部から出土した木製の井戸枠部材と、井戸枠内から出土した木製品・木材29点を図化した。

横桟（第37図194～197）　横桟は最下段に使用された４点のみ出土した。長さ111.0cm、幅8.2～9.8cm、厚さ5.6～6.6cmを測る。樹種はブナ科クリ属クリである。各横桟は隅角にて三枚枘差で結合されており、東西に設置された194と195は両端部の枘が凸状で、南北に設置された196と197は凹状を呈する。４本とも断面形は方形であるが、中央に行くにつれ、角が丸くなり台形状になる。194から196の３本にはその傾向が顕著に認められ、意図的な面取りの可能性がある。いずれも、幅約４cmの手斧痕と考えられる加工痕が確認できる。特に、井戸枠内側に向いていた面や上面にて、手斧痕が明瞭に確認でき、内側中央付近から双方の端部に向かって、手斧痕が密に施される傾向が伺える。

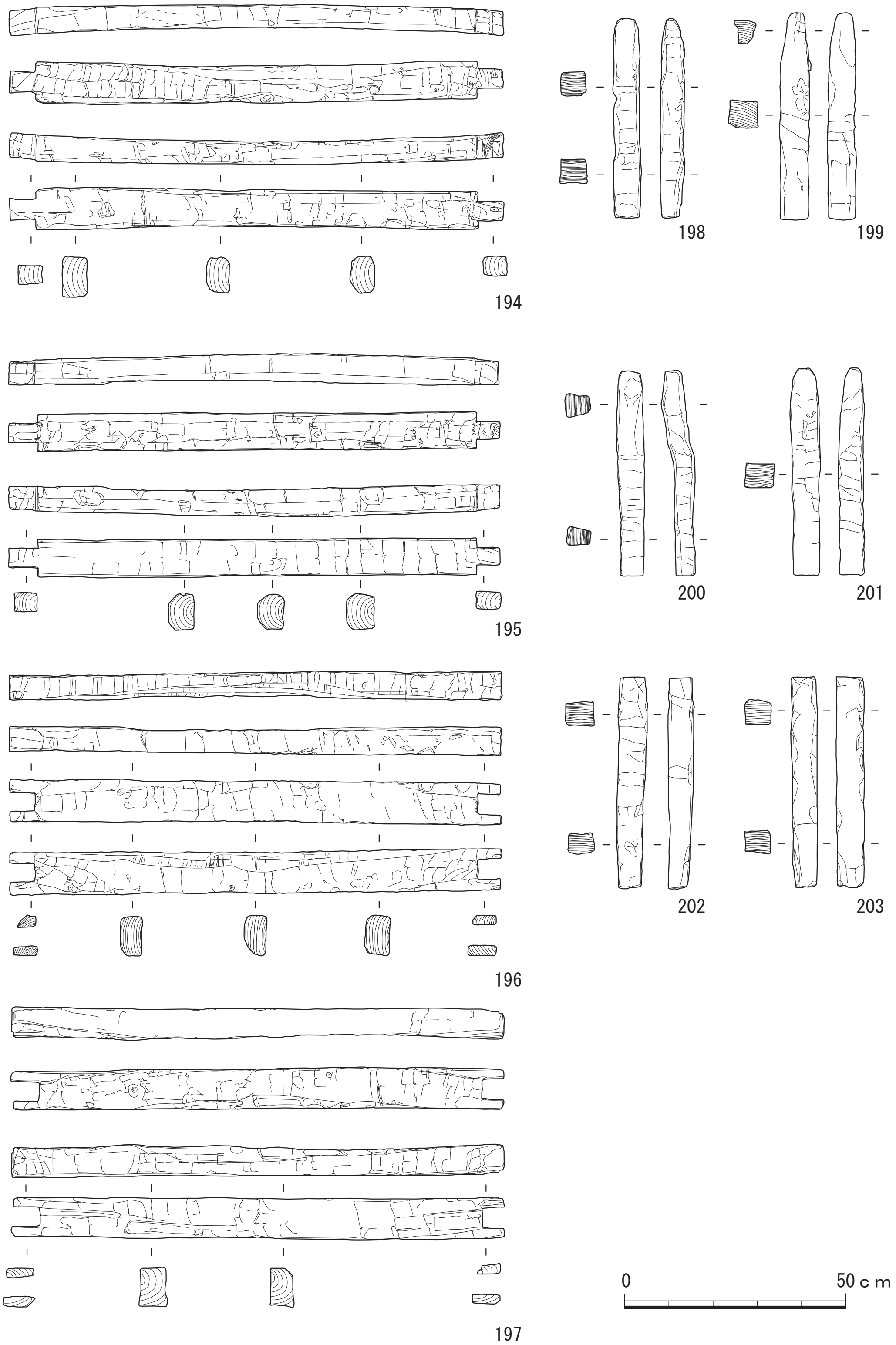
支柱（第37図198～203）　支柱は、可能性のあるものを含めて６点出土した。198～201は最下段の横桟の４隅に設置されていた。いずれも長さ45.2～48.2cm、幅6.0～6.5cm、厚さ5.4～6.0cmを測る断面四角形の角材である。樹種は横桟と同様にブナ科クリ属クリである。198は北東、201は南西、199は南東、200は北西のそれぞれの隅部に置かれている状態で出土した。いずれも上部先端の腐食が顕著であり、特に200の北西隅の支柱は、長軸がずれるほど湾曲している。調査時の乾燥の影響もあるが、廃絶後の一定期間露出していた可能性も考えられる。202・203は、井戸枠内掘削中に出土した。原位置から移動しているものの、法量が最下段の支柱と近似し、樹種も同一のブナ科クリ属クリであることから、２段目以上の段の支柱であったと考える。いずれも両端に切断の痕跡と考える加工痕が確認でき、最下段の支柱と比較してあまり腐食を受けておらず、廃絶直後の解体時に、回収されずに埋没したと考える。

縦板（第38図204）　縦板は、設置された状態で出土したものを１点図化した。204は、井戸枠南辺の最下段の横桟の外側にて、やや傾いた状態で出土した。板目材であり、樹種はヒノキ科アスナロ属である。一方の端部が弧状にカーブするように切断されており、井戸枠内側では幅４cm程の面取りが認められ、外側では段差をつけるように加工されていることから、桶の底部などからの転用材と考える。上部は腐食している。

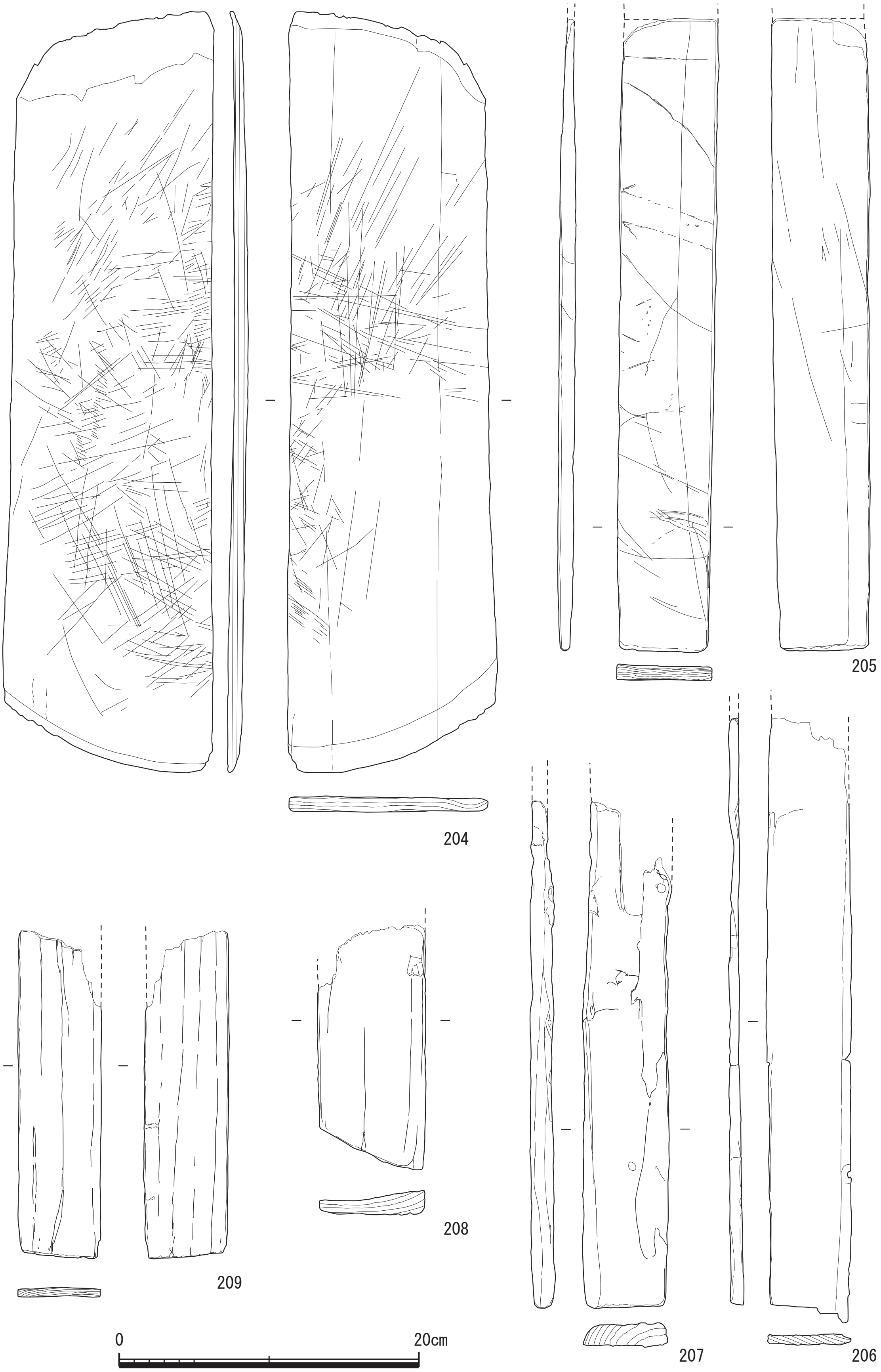
（４）井戸枠内出土の木製品・木材（第38～40図205～222）

205～209は、井戸枠内掘削中に出土しており、法量から、縦板の一部となる可能性がある。井戸廃絶時に抜き取られたものの、回収されずに投棄されたと考えられる。樹種は205がヒノキ科ヒノキ属、206・209がマツ科ツガ属、207がスギ科スギ属スギ、208がマツ科モミ属である。

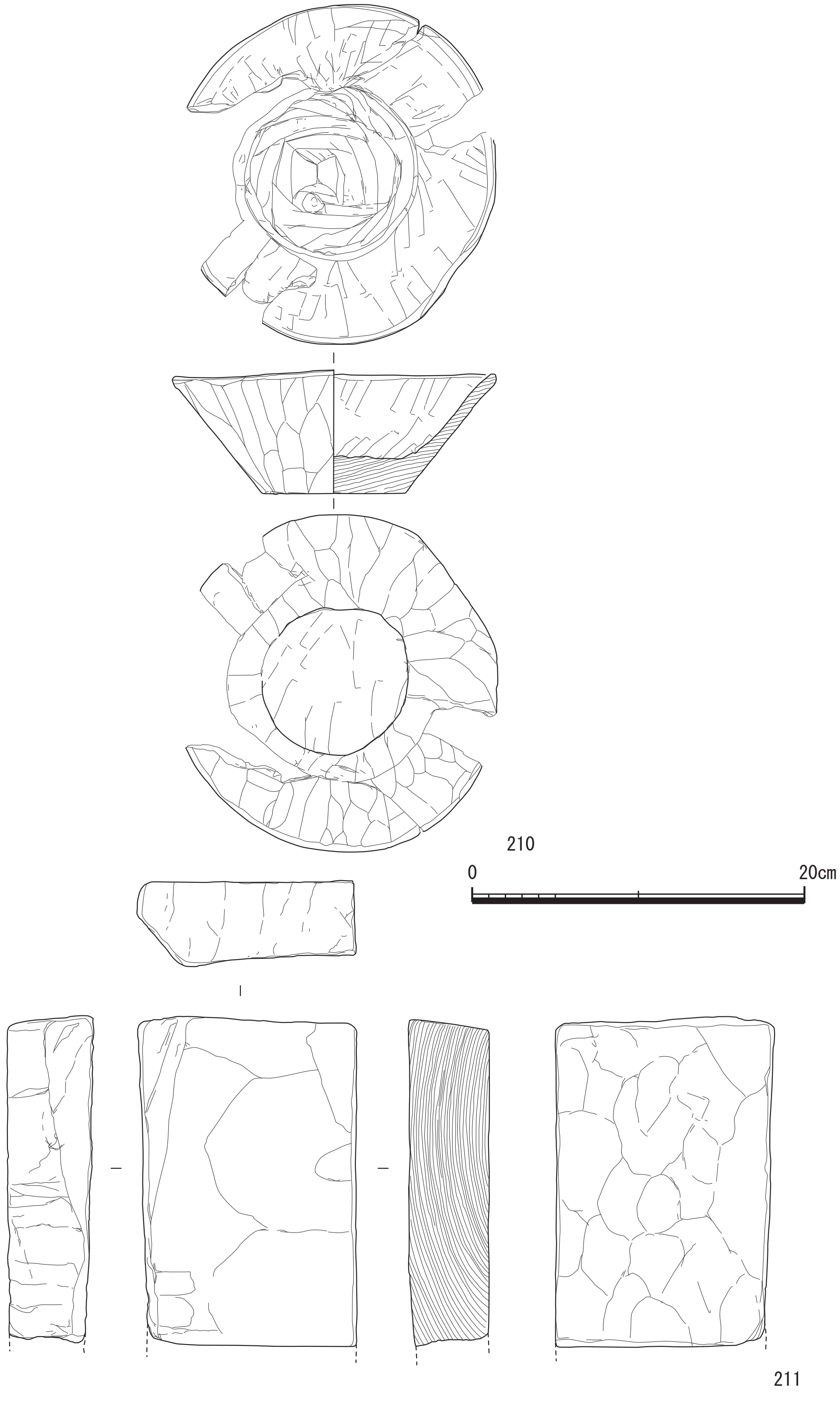
210は木製の椀である。木取りは横木取りであり、樹種はニレ科ケヤキ属ケヤキである。井戸



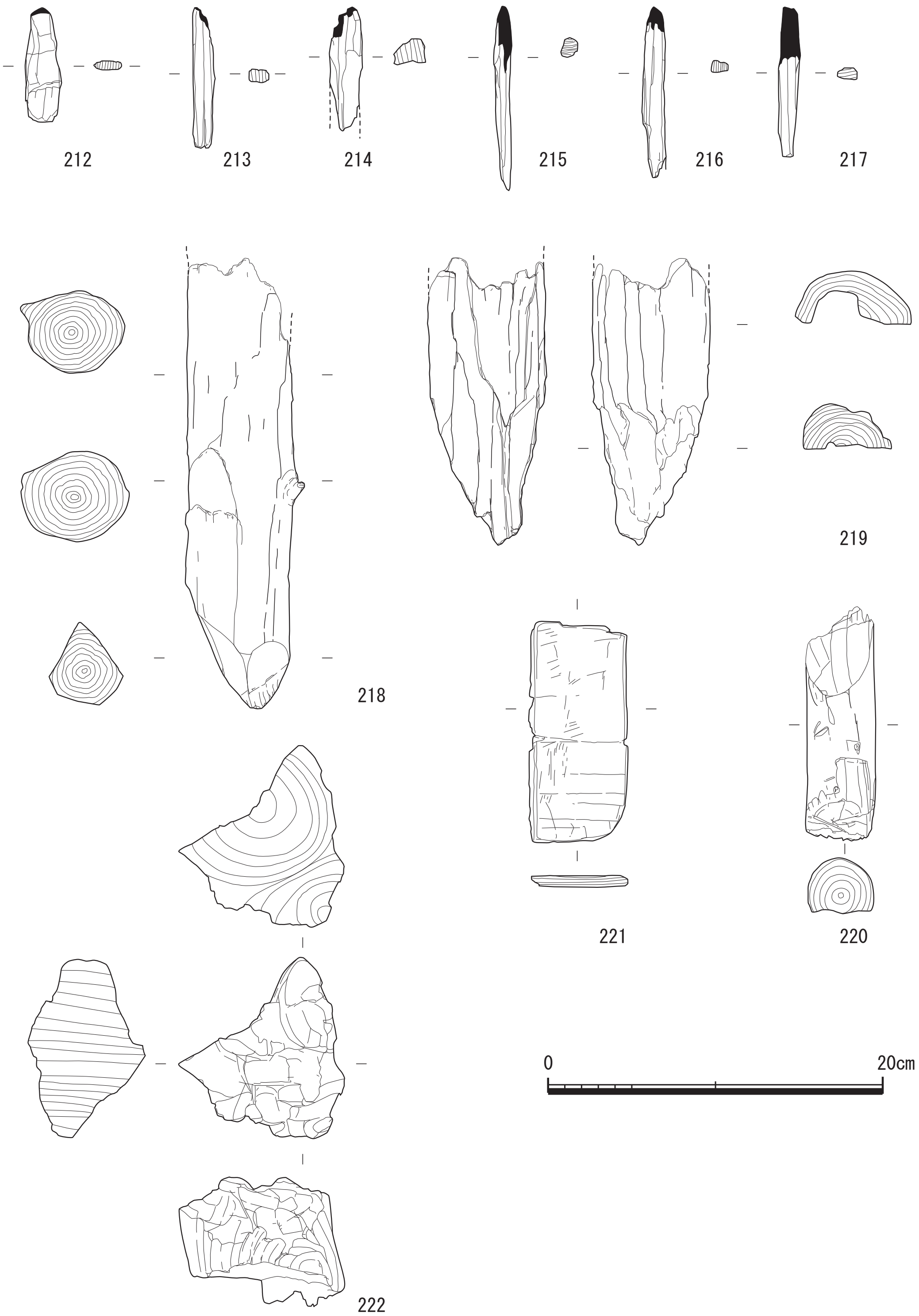
第37図　井戸ＳＥ210井戸枠部材１



第38図　井戸ＳＥ210井戸枠部材２



第39図　井戸ＳＥ210木製品１



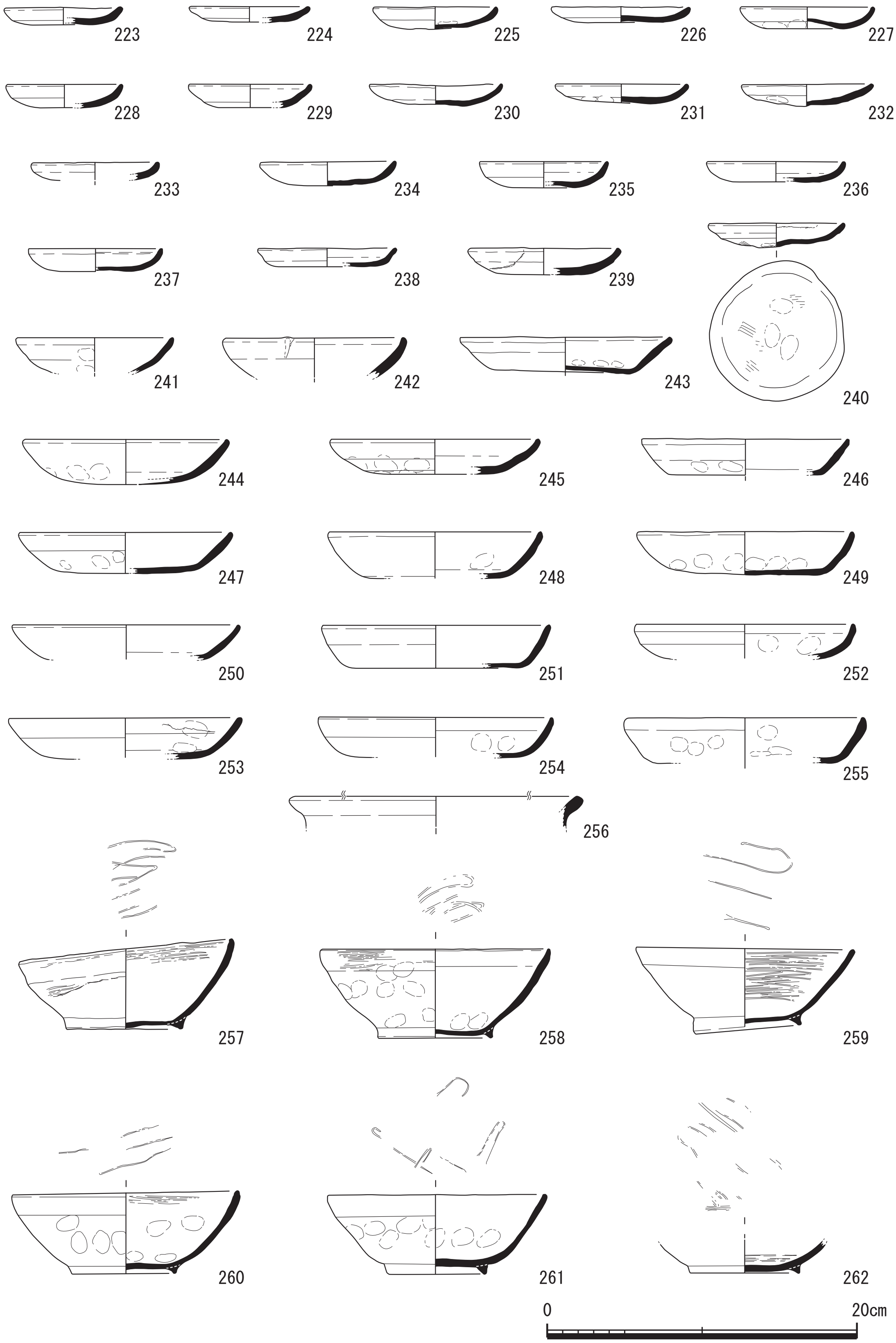
第40図　井戸ＳＥ210木製品２

廃絶時に内部に角礫や他の木製品・木材とともに投棄されたと考える。側面観はほぼ逆台形で、内外面に加工痕が確認できる。外面には、槍鉋によると思われる幅２cm程の不整方向の加工痕が全面に施され、口縁端部は工具を一周させ、面を形成する。内面は腐食の影響もあるが、外面と比較して加工が粗雑であり、特に底部は凹凸が残り、食器などとして日用的に使うには困難な印象を受ける。211は用途不明の方形の木材である。鋸による切断痕が確認できる。腐食している部分は確認できない。樹種はマツ科モミ属である。212～217はもえさしと考える。井戸枠内掘削中に出土した。長さ6.9～11.0cm、幅1.0～2.0cmを測り、212～214のような扁平なものと、215～217のような断面方形に整形された可能性のあるものが見られる。樹種は213・216・217がマツ科マツ属(二葉松類)で、215がマキ科マキ属イヌマキである。218は芯持丸木で杭と考える。表面に樹皮が残る。この資料は放射性炭素年代測定を行った(付編1)。219も芯持丸木と考えられ、半分は破損や腐食で失われている杭と考える。樹種はマツ科モミ属である。220は用途不明の芯持丸木で、一方に加工痕が見られる。221も用途不明であり、一部角を取るように加工されている。樹種はヒノキ科ヒノキ属である。222も用途不明であり、ほぼ全面に削ったような加工が認められる。樹種はヒノキ科ヒノキ属である。

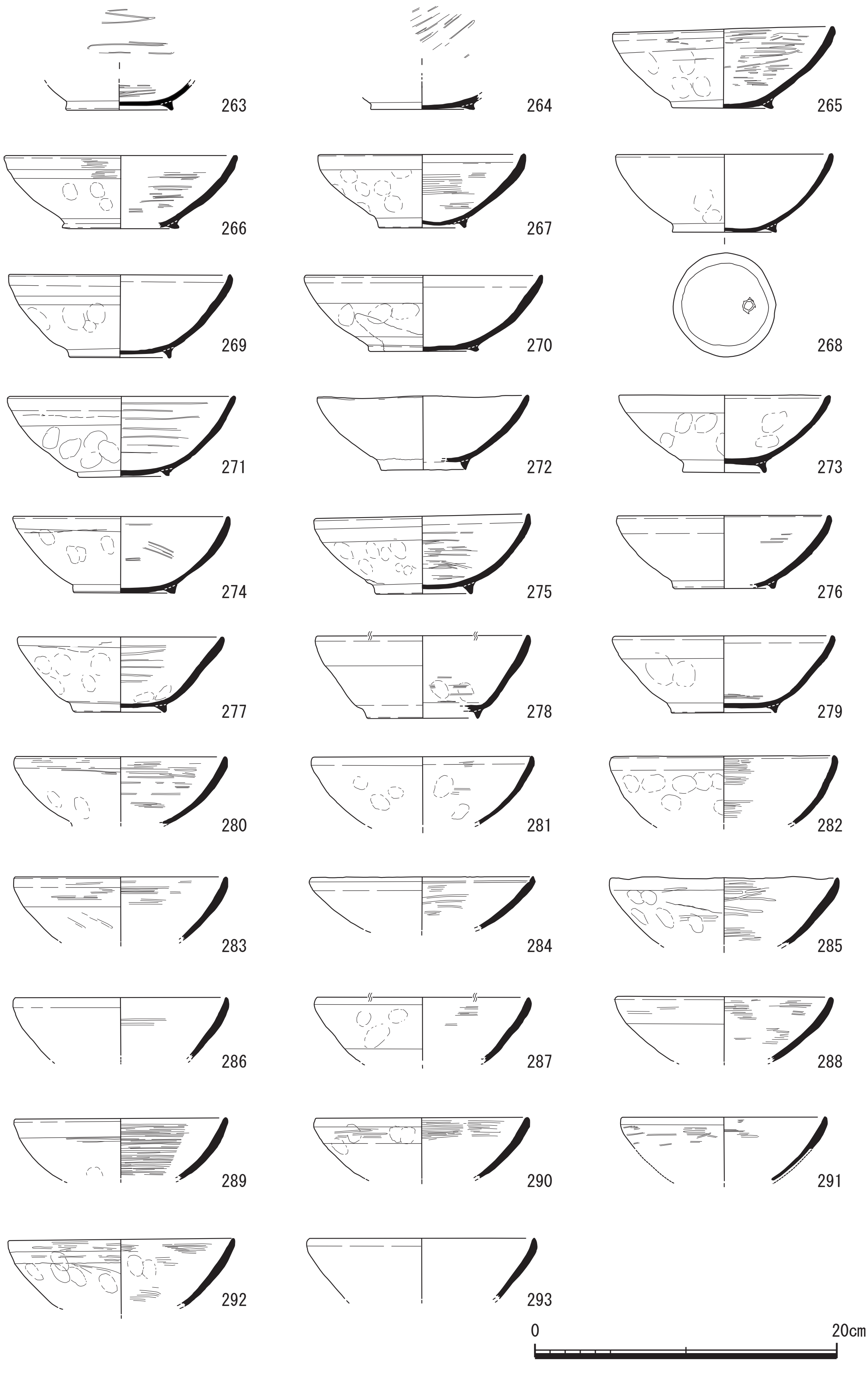
（5）溝状遺構ＳＤ220出土遺物(第41～50図223～512)

223～255、349～390は土師器皿である。土師器皿の形状は、SE210上層出土の資料にも多く見られた、口縁端部付近と体部中ほどにナデ調整による段をもつ個体が大半を占める。口径が８～９㎝程度の個体と、13～14cm程度の個体が見られるが、SE210上層及び検出面出土の資料と比べて、口径の大きな個体の割合が多い。また、口縁端部～底部の外形が直線的な個体がほとんどである。５Ｂ～６Ｂ段階に該当する資料と考えられ、12世紀半ばから13世紀前半に相当する資料となる。なお、349～351はいわゆる「て」の字状口縁をもつ個体であり、４Ｂ・４Ｃ段階に該当すると考えられ、11世紀半ば～12世紀に差しかかる頃に相当する。これについては、ＳＥ210井戸枠内出土資料の時期より半世紀近くさかのぼるが、ＳＤ220の掘削時期あるいは使用開始時期に当たるものと考えると、大きく矛盾はないだろう。257～337、394～483は瓦器椀である。瓦器椀の様相は、外面のミガキはごく一部の個体の口縁端部付近に施されている程度であり、成形時の粘土紐痕及び指頭圧痕が明確に見て取れる個体が散見される。ＳＥ210上層及び検出面出土の資料では、口縁端部より１～２㎝下に段をもつ個体が多く見られたが、ＳＤ220では同様のものよりも、口縁端部～底部の外形が直線的で、椀でありながら杯のような形状となる個体が一定数あった。瓦器椀の中には、先述した土師器皿の古相資料に相当する時期の個体は見られなかった。ＳＤ220出土遺物は、土師器皿、瓦器椀がその大半を占めるが、ＳＥ210出土遺物と比べると、その他の遺物を含む割合が多い。391～393は土師質甕、338～343、490～495は瓦質土器羽釜、344・345・487・488・489は瓦質土器鍋、346～348、504～507、510は須恵器甕、496～503は須恵器鉢、508・509は須恵器壺である。511・512は磁器である。集落で使用していた煮沸具・貯蔵具を廃棄したものか、土砂流入の際に混入したものかは定かではない。

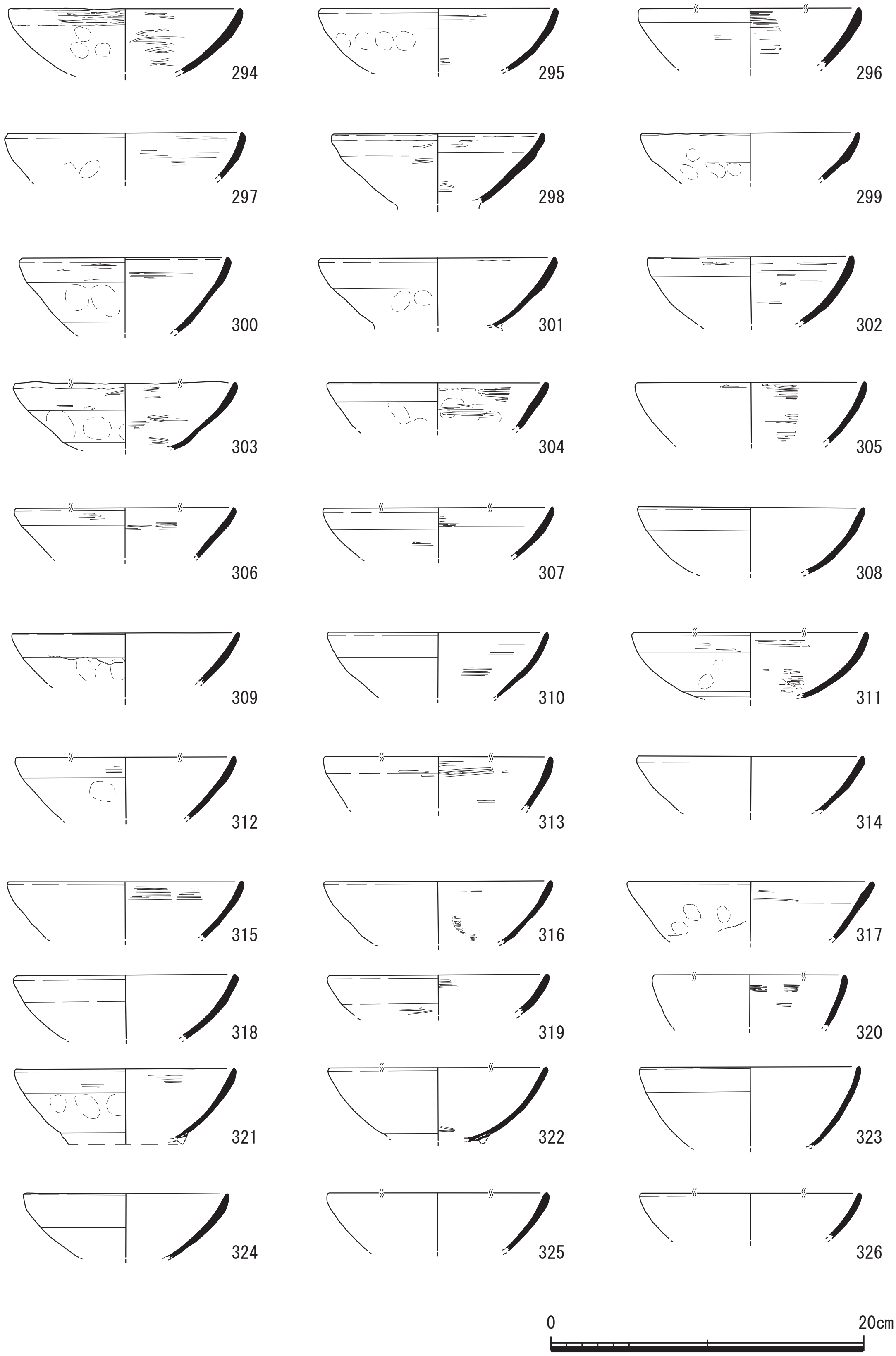
今回のＡ１トレンチの調査において、ＳＥ210及びＳＤ220の出土遺物については高い一括性を



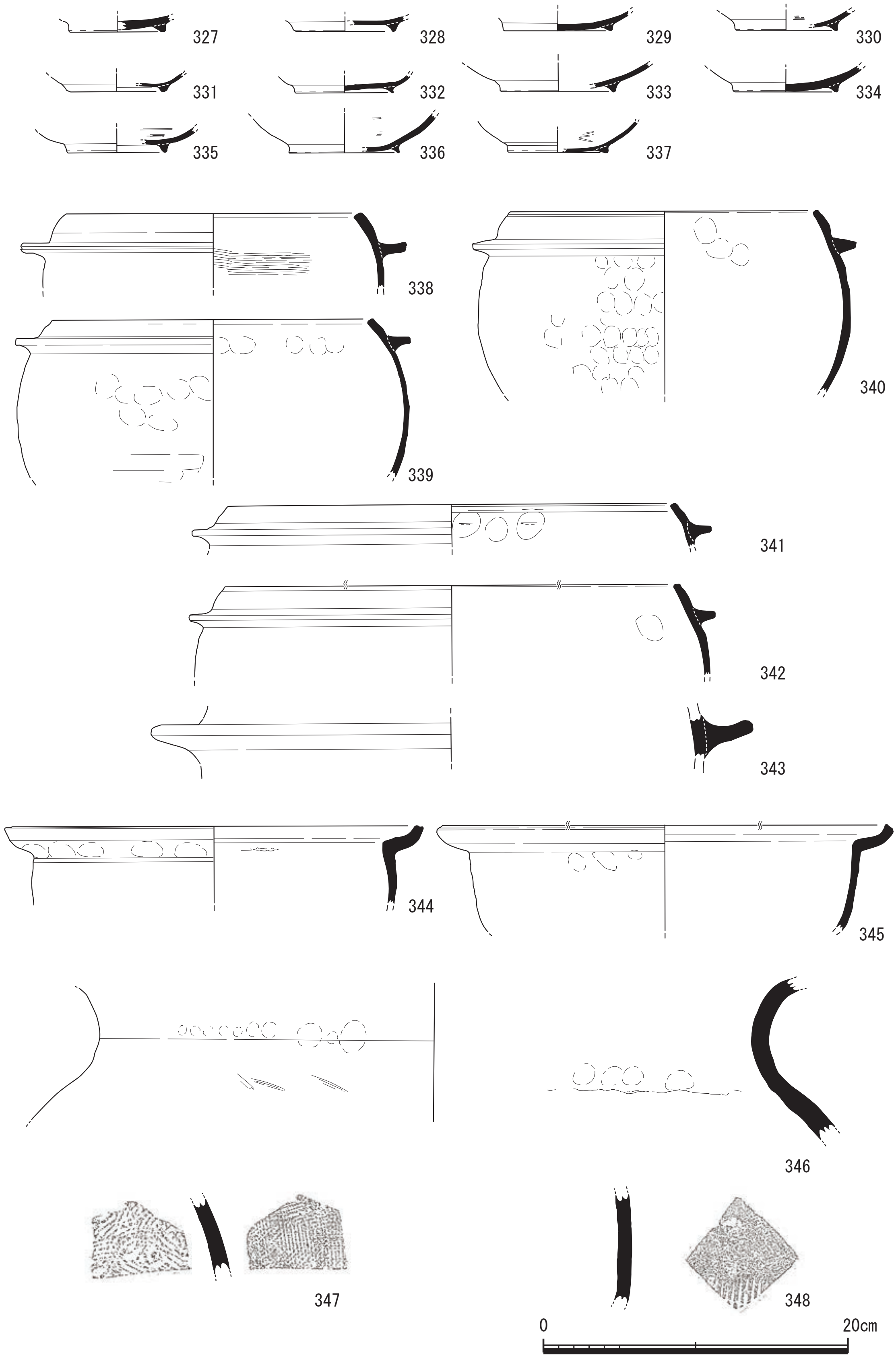
第41図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物１



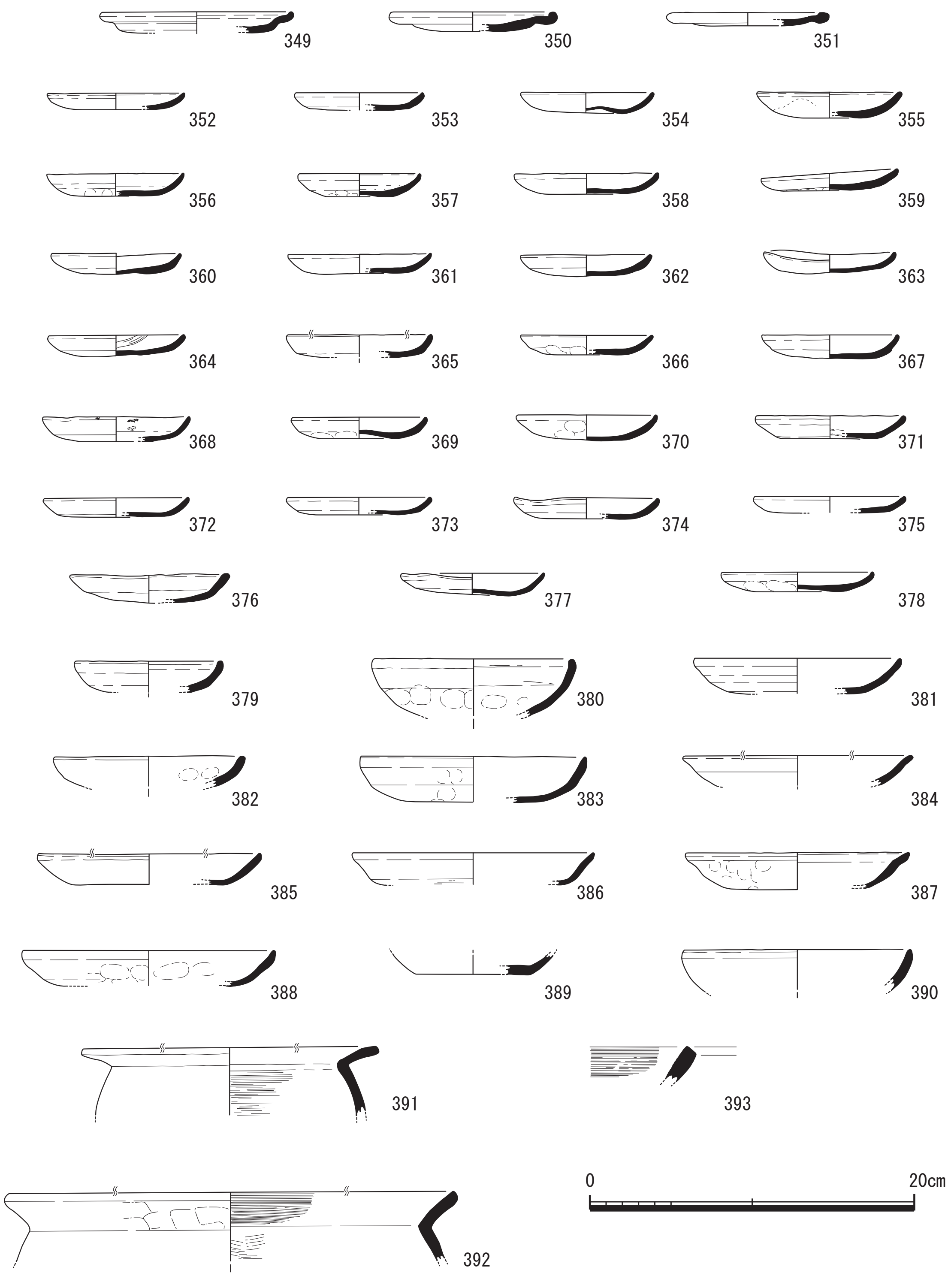
第42図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物２



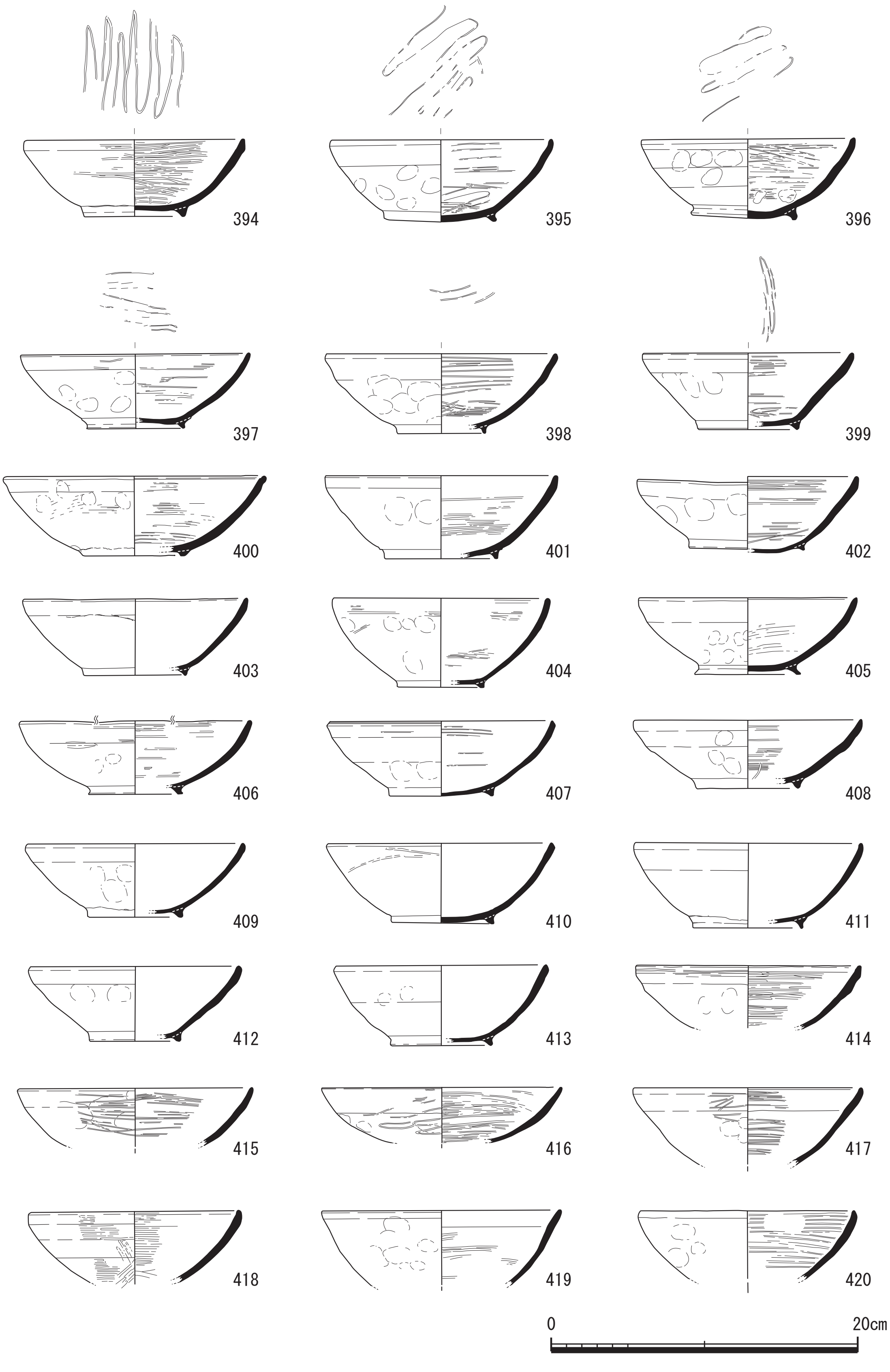
第43図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物３



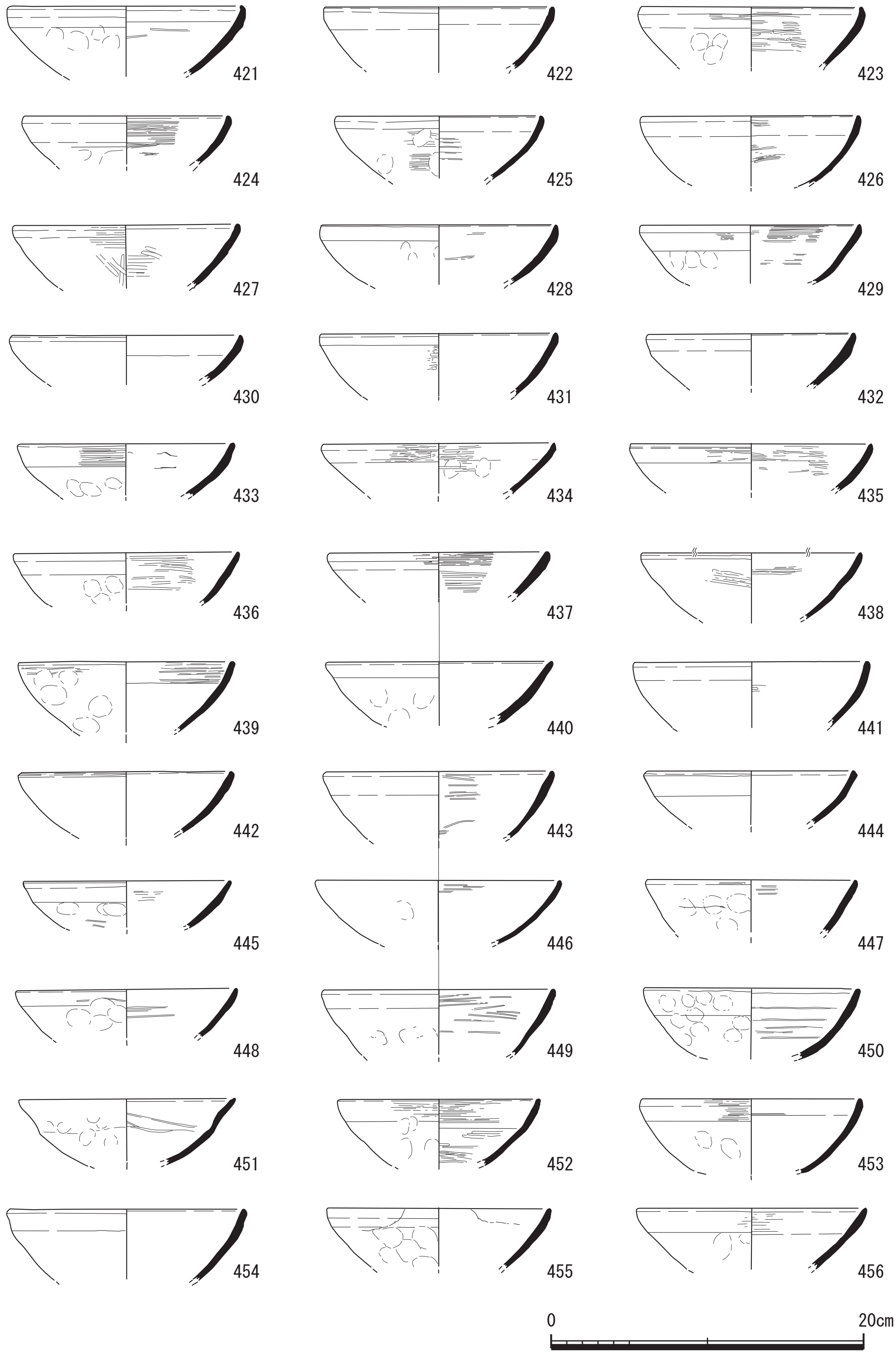
第44図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物４



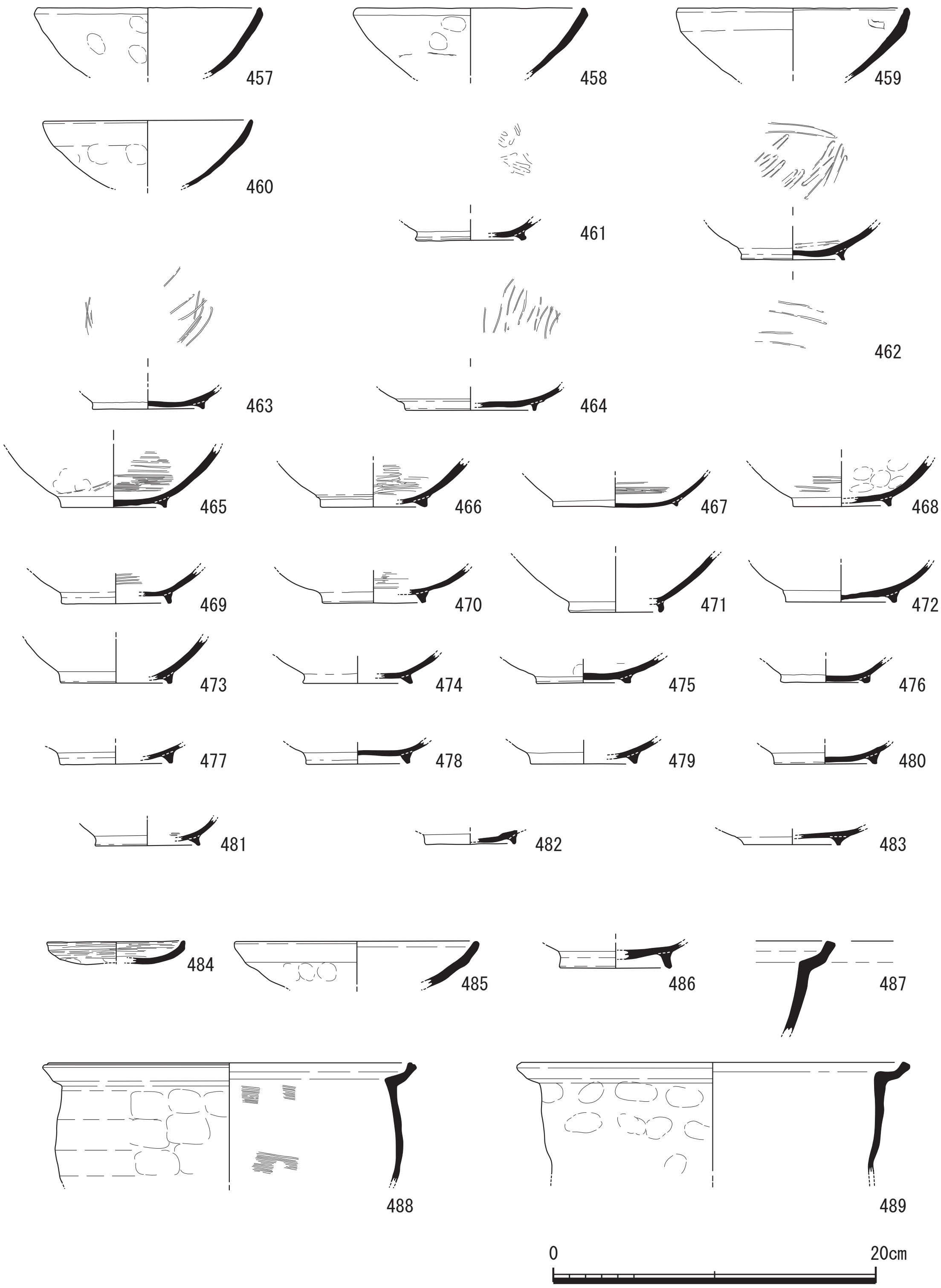
第45図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物５



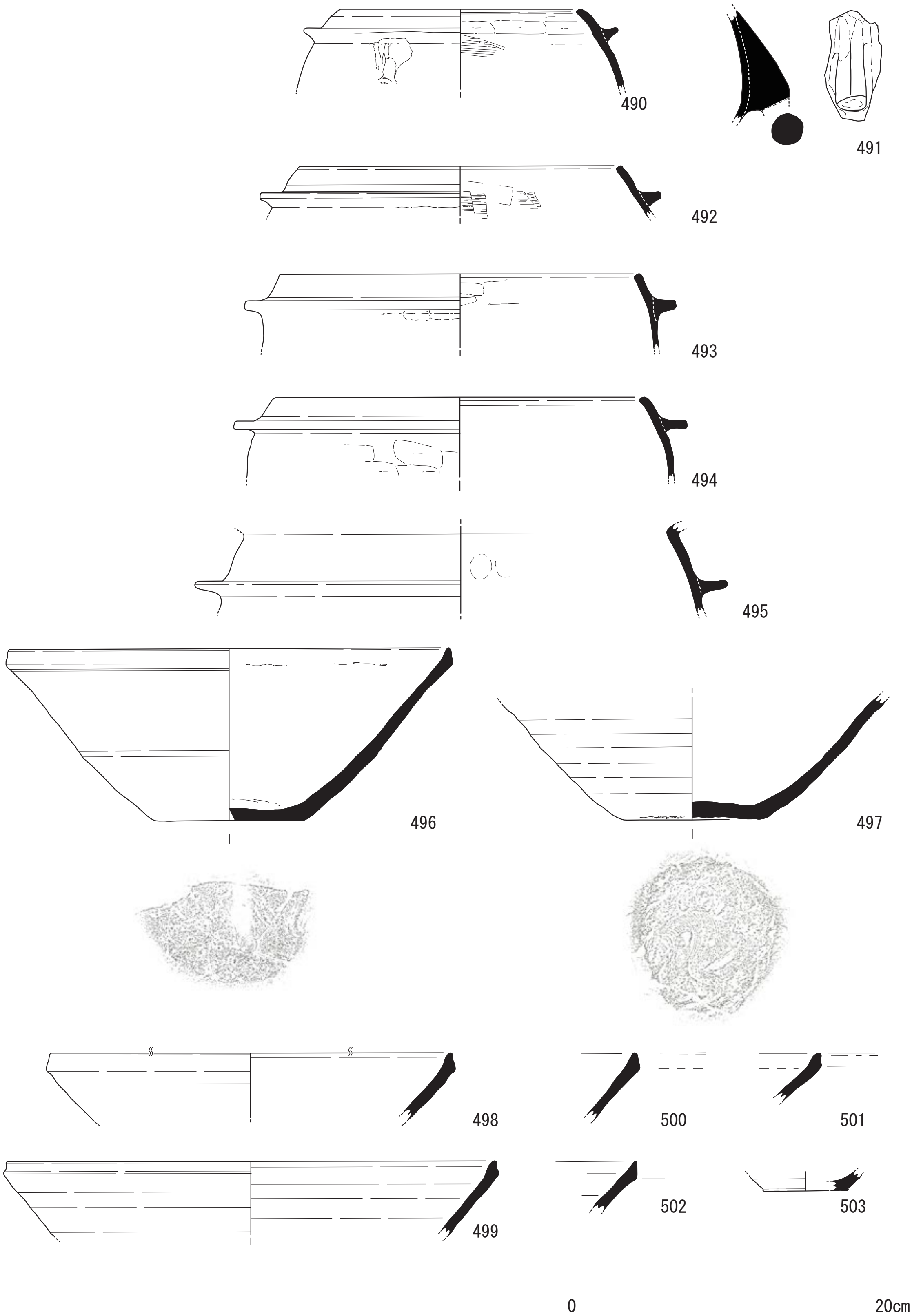
第46図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物６



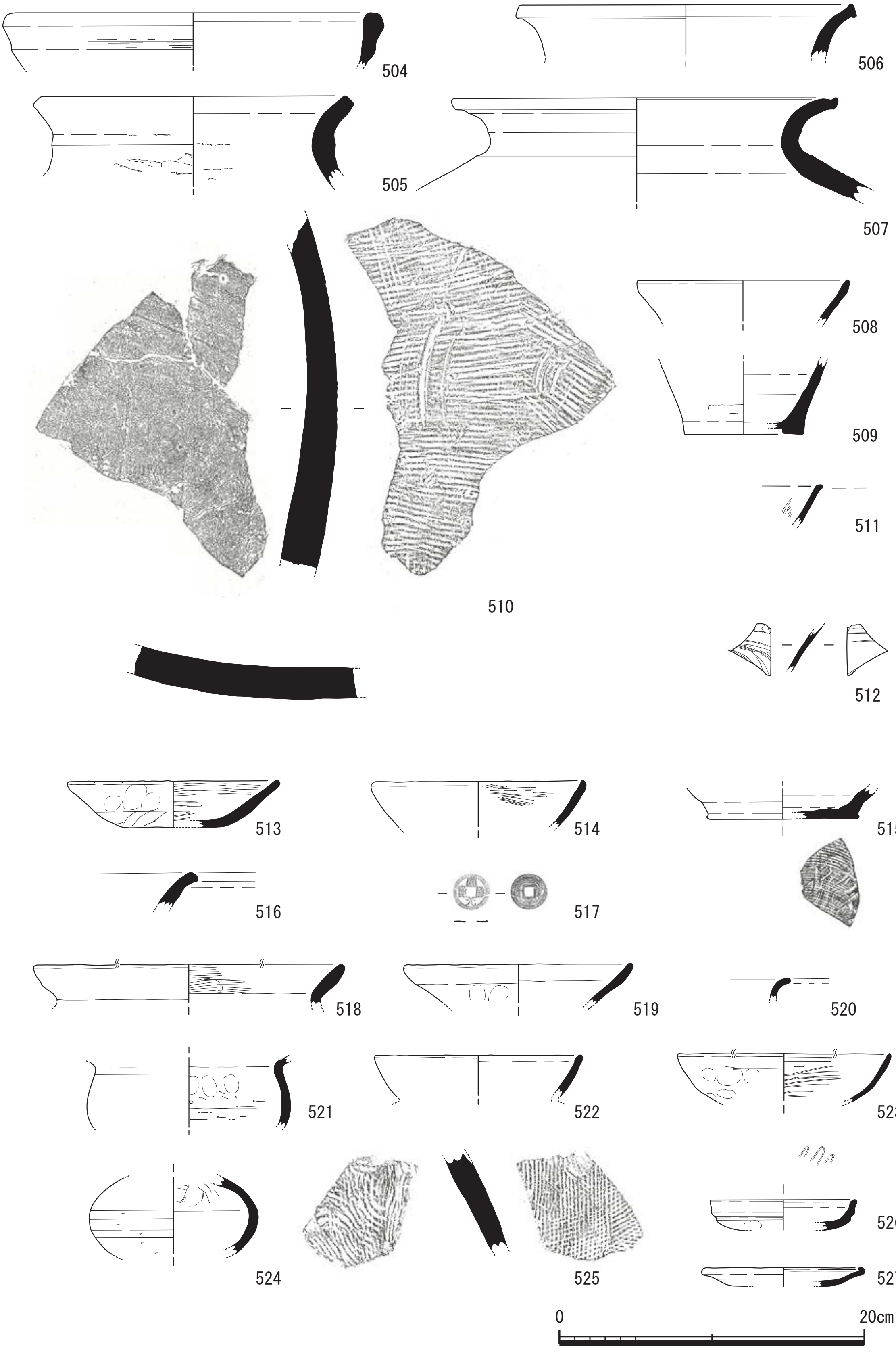
第47図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物７



第48図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物８



第49図　溝状遺構ＳＤ220出土遺物９



第50図　溝状遺構ＳＤ220、各種土坑出土遺物

もつ資料であり、双方の遺構の帰属する時期について検討してきた。ＳＥ210については、明確な掘削時期を示すと考えられる資料がなく、ＳＤ220の掘削時期との前後関係は不明であるが、双方の廃絶及び埋没時期については、12世紀後半から13世紀前半に段階的に進み、13世紀半ば頃には完全に埋没してしまったものと考えられる。（山本　梓）

（6）各種土坑出土遺物（第50図513～527）

土坑ＳＫ40（第50図513～517）　513は土師器の杯と考える。斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。外面下部に粘土痕のような筋が数本認められる。内面にはハケメとミガキが認められる。この形状のものは本例のみである。514は瓦器椀である。内面に細かなミガキがわずかに残る。515は須恵器の底部であり、底部外面に糸切痕が残る。516は須恵器甕の口縁部である。やや外反させ､口縁端部に面をつくる。517は唐銭の開元通寳である。621年初鋳である。

土坑ＳＫ41（第50図518～520）　518は土師器の甕口縁部である。口縁部内面に横方向のハケメが認められる。519は瓦器椀であり、逆台形の杯状となりそうである。520は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類の口縁部である。

土坑ＳＫ79（第50図521）　521は土師器で小形の鉢と考える。色調は灰白色を呈し、体部内面下半にはケズリが認められる。

土坑ＳＫ80（第50図522～525）　522は土師器の布留式甕の口縁部である。523は瓦器椀であり、内面のミガキの間隔は広い。524は須恵器の𤭯の体部片の可能性がある。525は須恵器甕などの体部片である。外面に施されているタタキメは細かく、溝ＳＤ89から出土した須恵器甕（第51図563）にも同様のタタキが確認できる。

土坑ＳＫ116（第50図526）　526は瓦器皿である。底部と体部の境界に沈線状のへこみが認められる。口縁端部はやや内傾する面をつくる。底部内面にジグザグ状の暗文がわずかに認められる。

土坑ＳＫ226（第50図527）　527は土師器皿である。口縁端部を内面に折り込む。

（7）各種溝出土遺物（第51・52図528～585）

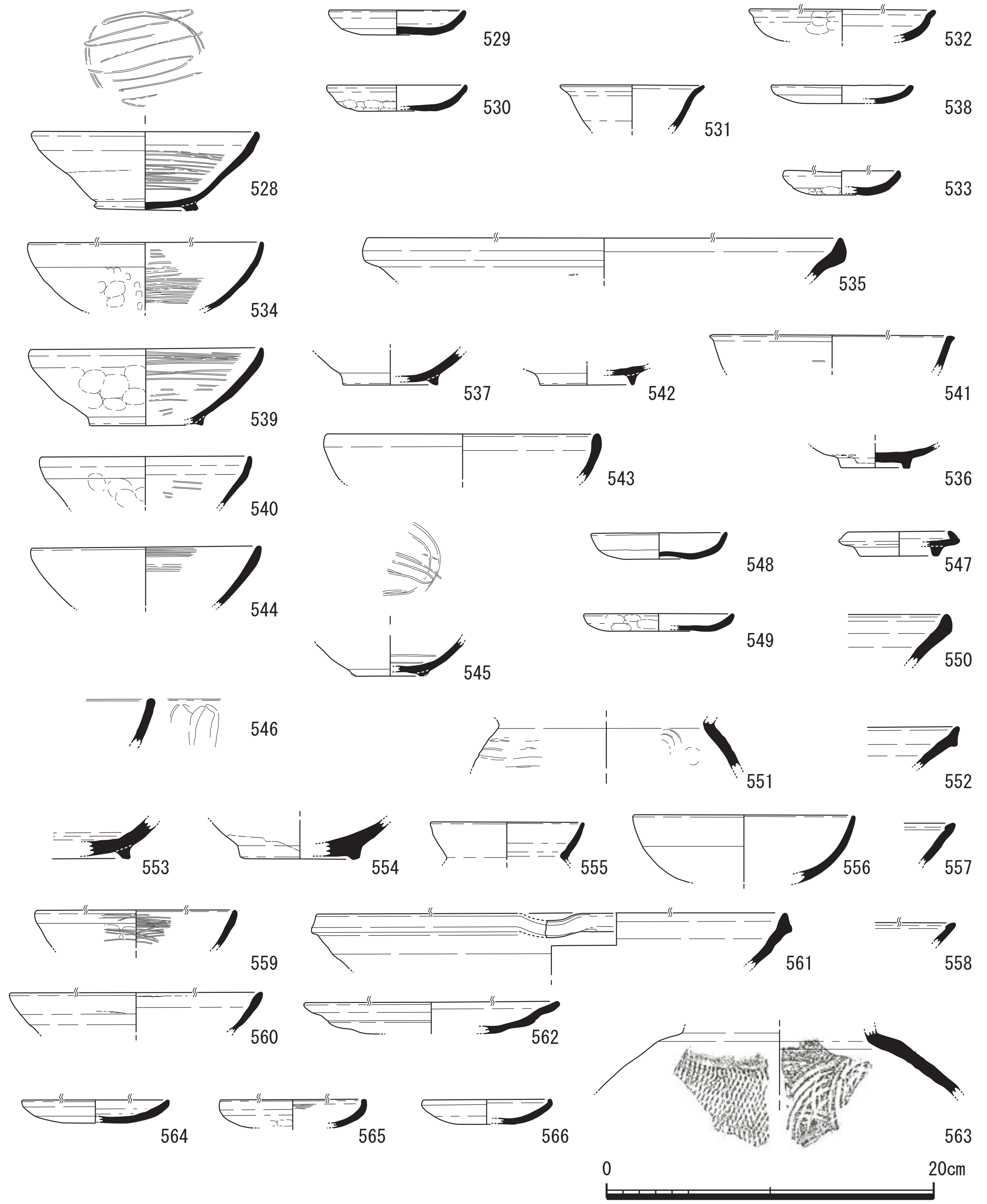
溝ＳＤ３（第51図528～530）　528は瓦器椀である。側面観は逆台形状の杯状であり、内面のミガキの間には間隔が認められ、見込みにはジグザグ状の暗文を施す。529･530は土師器皿である。530の底部には細かいユビオサエが認められる。

溝ＳＤ12（第51図531）　531は白磁の小皿である。口縁端部内面は口剝ぎになっており、釉薬を施さない。

溝ＳＤ20（第51図532）　532は瓦器皿である。口縁端部をやや外反させ、口縁部外面には軽い指押えが認められる。

溝ＳＤ34（第51図533～536）　534は瓦器椀であり、内面のミガキは密である。533は瓦器皿である。見込みにはわずかに暗文が確認できる。535は東播系須恵器鉢の口縁部である。536は白磁椀底部である。内面には、釉薬がかかっていない箇所が輪状に認められ、重ね焼きの際の痕跡と考えられる。底部外面には、釉薬を施さない。

溝ＳＤ35（第51図537・538）　538は土師器皿である。口縁端部は丸く収める。537は瓦器椀底



第51図　各種溝出土遺物１

部である。

溝ＳＤ34・35（第51図539～541）　539・540は瓦器椀である。539は内面の口縁部付近を中心にミガキを密に施す。540は539よりやや小型でより杯状に近くなる。541は白磁椀Ⅴ類の口縁部である。

溝ＳＤ42（第51図542・543）　542は瓦器椀底部であり、高台は逆三角形に近い。543は須恵器椀の口縁部である。口縁端部は真っすぐ立ち上がり、やや厚みを増して丸く収める。

溝ＳＤ71（第51図544～546）　544・545は瓦器椀である。545の高台は低く、見込みにはやや乱

れたジグザグ状の暗文が施される。546は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類の口縁部で、外面に蓮弁文を施す。

溝ＳＤ72（第51図547～550）　547～549は土師器皿である。547は残存率が悪いが、土師器で高台をもつコースター形の皿と考えられ、同形のものは本例のみである。色調は灰白色を呈する。550は東播系須恵器鉢の口縁部である。端部を上方に突出させて丸く収める。

溝ＳＤ73（第51図551・552）　551は土師器の甕か鍋であり、外面に横方向のタタキを施す。胎土はやや粗く、色調は黄灰色を呈する。タタキをもつ鍋は、福知山市大内城跡等でも類似する器種のものが出土している。552は東播系須恵器鉢の口縁部である。口縁端部外面に面をつくる。

溝ＳＤ74（第51図553・554）　553は須恵器の壺底部である。554は白磁椀の底部である。高台よりわずかに上部付近まで施釉される。

溝ＳＤ76（第51図555・556）　555・556は土師器である。555は甕口縁部と考えられる。556は椀の可能性がある。胎土は粗く、色調はにぶい赤褐色を呈する。この他に、図化していないが瓦器椀の小片も出土している。

溝ＳＤ77（第51図557～562）　557・558は土師器の布留式甕の口縁部細片である。559・560は瓦器椀である。いずれも細片であるが、559は内外面にミガキが認められる。561は東播系須恵器鉢である。562は土師器皿である。体部中央に強いナデを施し、やや窪ませる。

溝ＳＤ89（第51図563）　563は須恵器甕あるいは壺の口縁部である。体部外面に細かい格子目タタキを施す。

溝ＳＤ90（第51図564）　564は土師器皿である。色調は明褐灰色から橙色を呈する。

溝ＳＤ93（第51図565・566）　565・566は瓦器皿である。565は口縁端部を上方に立ち上げ、面をつくる。566は口縁端部を内傾させる。

溝ＳＤ103（第52図567～580）　この溝はＳＥ210を削平する。内部から多くの遺物が出土した。567～571は土師器皿である。口径が７～８cmを測る小形のもの（567～570・572）と、13cmを測る中形のもの（571）がある。573～580は瓦器椀である。574は外面にもミガキが確認できるものの、全体的に内面のみミガキが施される。575の外面には横方向にはしる粘土接合痕が確認できる。578～580は底部であり、高台がやや外反するもの（578）と、逆三角形状になるもの（579・580）がある。

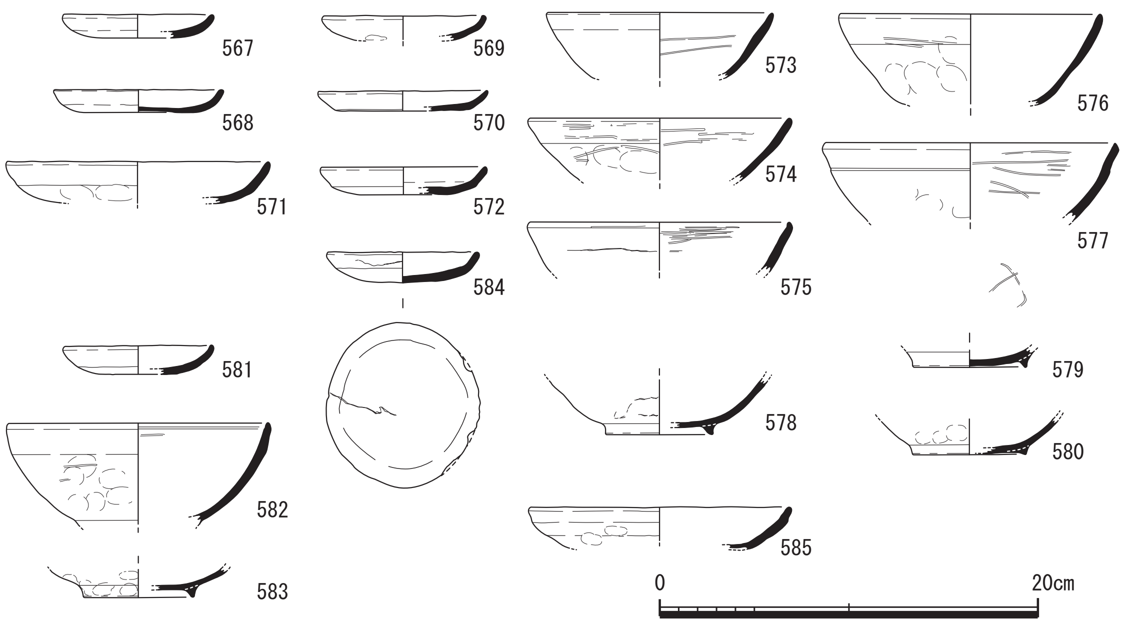
溝ＳＤ105（第52図581～584）　581は土師器皿である。584は瓦器皿で口縁端部から底部中央にかけてはしる粘土接合痕が１か所確認できる。582・583は瓦器椀である。582は口径が13.7cmとやや小型であるものの、口縁端部内面に沈線をもつ。

溝ＳＤ114（第52図585）　585は土師器皿である。口径は13.6cmを測る。外面は２段のナデが確認でき、中央部はわずかに厚みが増す。

（８）ピット出土遺物（第53図・第54図586～632）

ピットＳＰ１（第53図586・587）　586・587は瓦器椀である。586は内外面に密なミガキが施される。外面に粘土接合痕が確認できる。

ピットＳＰ８（第53図588）　588は白磁椀Ⅳ類の口縁部である。



第52図　各種溝出土遺物２

ピットＳＰ51（第53図589）　589は須恵器壺の底部と考える。色調はにぶい黄橙色を呈する。

ピットＳＰ56（第53図590・591）　590・591は「て」の字状口縁の土師器皿である。

ピットＳＰ97（第53図592）　592は瓦器皿で、底部内面にわずかにジグザグ状の暗文が残る。

ピットＳＰ107（第53図593）　593は土師器皿である。口縁端部を上方に摘まみ上げる。

ピットＳＰ115（第53図594）　594は完形の土師器皿である。遺構検出時に出土した。底部の平坦面は狭く、胎土に雲母を含む。平尾編年の10Ａから10Ｂ段階に相当し、16世紀前半から中頃と考えられ、時期的には後述するＡ２地区の集石遺構ＳＸ200に近い。

ピットＳＰ134（第53図595）　595は口縁部に沈線のある瓦器椀である。口径は12.6cmとやや小形である。

ピットＳＰ135（第53図596～598）　597は土師器の高台である。細片であり、全容は不明であるものの。同形のものは本例のみである。高台の高さは1.7cmを測る。596・598は瓦器椀の口縁部と底部である。

ピットＳＰ137（第53図599・600）　599は土師器皿である。口径16.8cmを測る大形品であり、口縁端部は丸く収める。600は瓦器椀である。側面観は丸みを帯びた椀状を呈する。

ピットＳＰ141（第53図601～604）　601・602は土師器皿である。口径はいずれも８cm前後を測る。603・604は瓦器椀である。603は杯状を呈する。

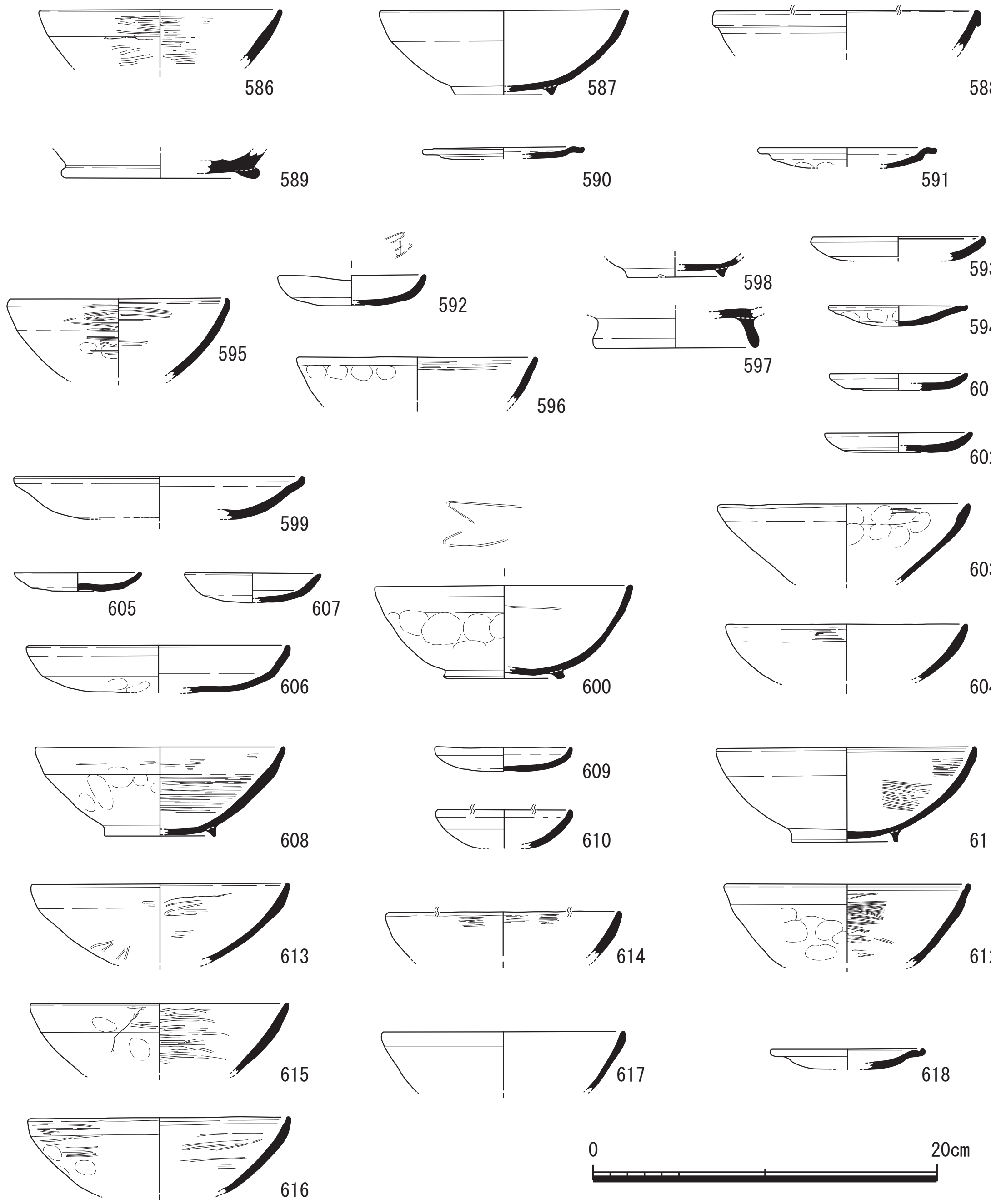
ピットＳＰ145（第53図605）　605は土師器皿である。

ピットＳＰ162（第53図606）　606は土師器皿である。口径は15.1cmを測る。

ピットＳＰ167（第53図607・608）　607は土師器皿である。608は瓦器椀である。ピット内底部付近で出土した。側面観はやや杯状に近い。内面のミガキはやや密である。

ピットＳＰ168（第53図609）　609は土師器皿である。口縁端部は上方に立ち上げる。

ピットＳＰ173（第53図610～612）　610は土師器皿で、口径は歪みがあるものの、小形で深さ



第53図　ピット出土遺物１

のある形状に復元できる。611・612は口縁部に沈線のある瓦器椀である。611は遺構検出時に出土しており、側面観は丸みを帯びた椀状で古い特徴をもつ。ともに内面に密なミガキがみられる。

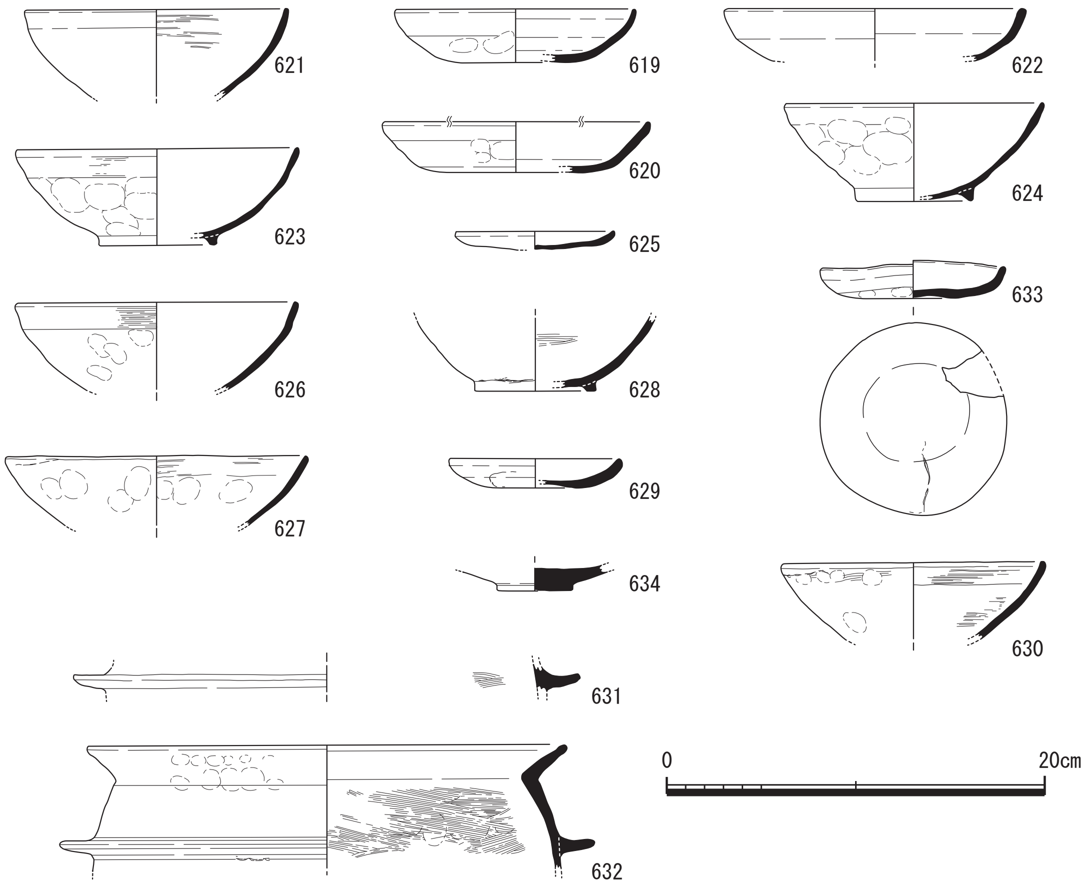
ピットＳＰ174（第53図613）　613は瓦器椀である。内面に粘土接合痕が認められる。

ピットＳＰ179（第53図614）　614は瓦器椀である。

ピットＳＰ184（第53図615・616）　615・616は瓦器椀である。615は外面に粘土接合痕が認められる。616は口縁端部に沈線を持ち、内外面に細かいミガキを施す。

ピットＳＰ191（第53図617）　617は瓦器椀である。ＳＰ191は、ＳＢ180を構成する柱穴である。

ピットＳＰ198（第53図618）　618は「て」の字状の口縁をもつ土師器皿である。



第54図　ピット出土遺物２

ピットＳＰ206（第54図619～621）　619・620は土師器皿である。619は口縁部がやや内湾し、丸みを帯びているのに対し、620は口縁の立ち上がりがやや屈曲する。621は瓦器椀である。

ピットＳＰ209（第54図622）　622は土師器皿であり、口縁端部は丸く収める。

ピットＳＰ211（第54図623）　623は瓦器椀である。摩耗が著しいが、やや丸みを帯びた椀状の側面観を呈する。

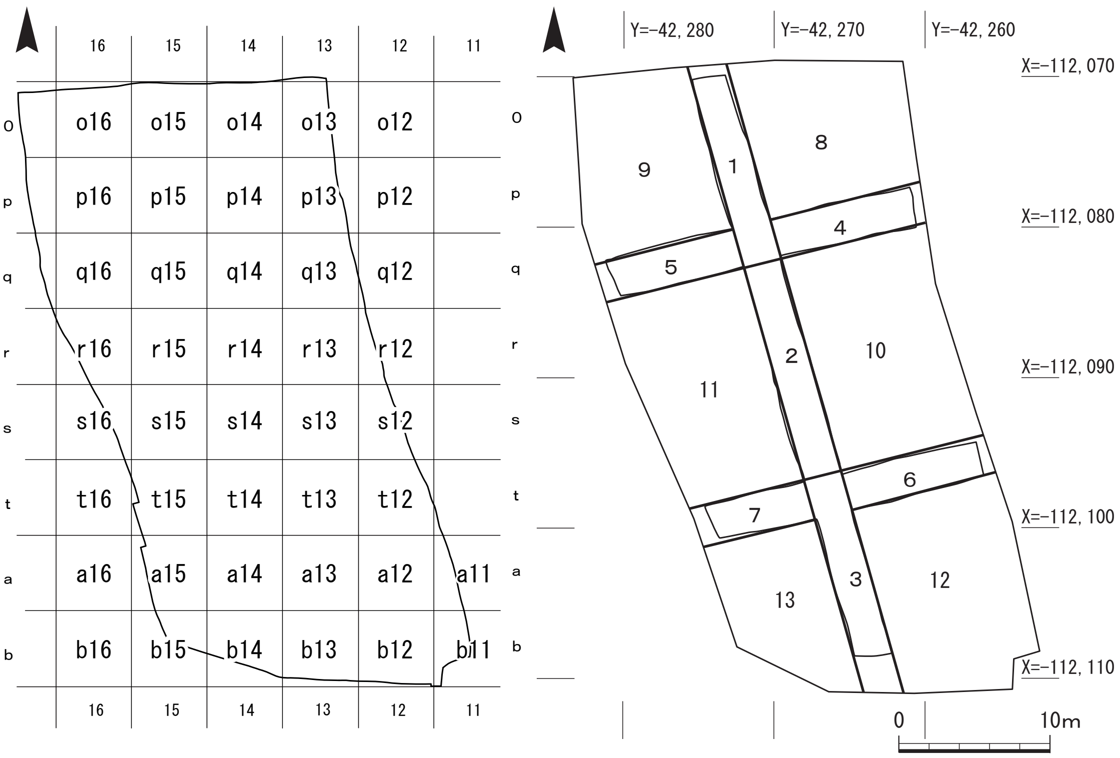
ピットＳＰ212（第54図624）　624は口径が12.6cmと小形の瓦器椀で、側面観は杯状となる。

ピットＳＰ213（第54図625・626）　625は土師器皿である。器高は0.95cmと低く、色調は淡橙色を呈する。626は瓦器椀である。

ピットＳＰ214（第54図627）　627は瓦器椀である。底部を欠損しているが、斜め上方に直線的にのびる。

ピットＳＰ218（第54図628）　628は瓦器椀底部である。高台は逆台形状となる。

ピットＳＰ225（第54図629～632）　井戸ＳＥ210の上層を掘り込むピットである。径0.3m程であるが、内部からは土師器皿・瓦器椀・瓦質土器・土師質土器が集中して出土している。629は土師器皿である。中心付近が薄くなる。630は瓦器椀である。口径13.7cmとやや小形である。631は瓦質土器の羽釜の鍔部分である。632は土師質土器の羽釜である。口縁は「く」の字状になり、端部を丸く整形する。内面にはヨコハケが施される。色調は浅黄橙色を呈する。



第55図　Ａ１地区トレンチ・グリッド配置図

ピットＳＰ227（第54図633）　633は土師器皿で、逆さ状態で出土した。全体的に歪みが認められるものの、２段のナデが施される。口縁端部から中心部に向かう粘土接合痕が１本確認できる。色調は赤橙色とやや赤味がかっている。

ピットＳＰ231（第54図634）　634は土師器の台付皿である。底部中央がわずかに窪む。

（９）グリッド・包含層の出土遺物（第56図～第59図635～759）

Ａ１トレンチの調査では、遺構面直上の旧耕作土掘削時や、遺構面精査時に多くの遺物が出土している。各グリッドと第４次調査時の地区割図は第55図に示した。各グリッドの出土傾向を見ると、特に、井戸ＳＥ210や溝状遺構ＳＤ220付近のグリッドｔ12・ｔ13・ｓ13からは、検出段階で多量の遺物が出土した。前段階の第４次小規模調査の段階でも、前述の３つのグリッド付近に相当する６区にて、多数の遺物が出土している。各グリッド・地区ごとに主な出土遺物について詳述する。

グリッドｔ12（第56・57図635～693）　このグリッドはＳＤ220の中でも特に多くの土師器皿と瓦器椀などの遺物が出土した部分（第27図）の直上に相当する。図化した遺物には、土師器（皿・甕・壺・高杯等）、須恵器（杯等）、黒色土器（椀）、瓦器（椀）、瓦質土器（羽釜・鍋）、白磁等がある。土師器皿の法量は、径８cm大の小形、径12cm大の中形、径15cm大の大形のものがあり、特徴的な形状のものとして、「て」の字状口縁、コースター形のものが認められる。また、650は底部に糸切痕が残る。651は土師器甕、652は土師器鉢、653は土師器鍋、654は脚部を欠損する土師器高杯と考える。黒色土器は９点図化している。682～688までは、色調はにぶい褐色～赤橙色を呈しており、一見すると土師器のように見える。これらは、焼成の際に酸素が混入し、焼成不良と

なった結果このような色調になったと考えられる。底部まで残っているものは、高い高台を有し、口縁端部よりやや下方に沈線を施す。689・690は黒色土器Ｂ類であり、器高に対して、底部径が小さい。外面には３方向からの分割ミガキ、内面には並行ミガキが認められ、見込みにはジグザグ状の暗文を施す。瓦器椀は、口縁端部に沈線が入るものは認められず、口径13.9～15.0cmを測るものが多い。656・664には密なミガキが認められる他、671のようなやや小形になりそうな個体も確認できる。674～677は瓦質土器の羽釜であり、679～681は鍋である。678は三足羽釜の脚部片と考える。691は須恵器の杯と考えられ、色調は灰白色を呈し、やや焼成不良である。外面には、ロクロメの単位が残る。692は杯Ｂ底部である。693は白磁椀Ｖ類の口縁部である。

グリッドｑ12（第58図694）　694は須恵器の鉢底部であり、糸切り痕が確認できる。

グリッドｑ13（第58図695～701）　695は緑色凝灰岩製の管玉であり、東壁面の排水溝掘削時に出土した。長さ2.2cm・直径1.7cmを測り、両面穿孔である。696は土師器皿であり、口縁部付近に煤の付着が認められることから、灯明皿と考える。698は口縁部に沈線を施す瓦器椀である。697は瓦器皿であり、口縁部を直立気味に立ち上げる。701は須恵器杯蓋である。699は瓦質土器の羽釜である。口縁端部に内傾する面をつくる。700は土師器の鍋であり、外面は横方向の削り、内面にはハケメが認められる。

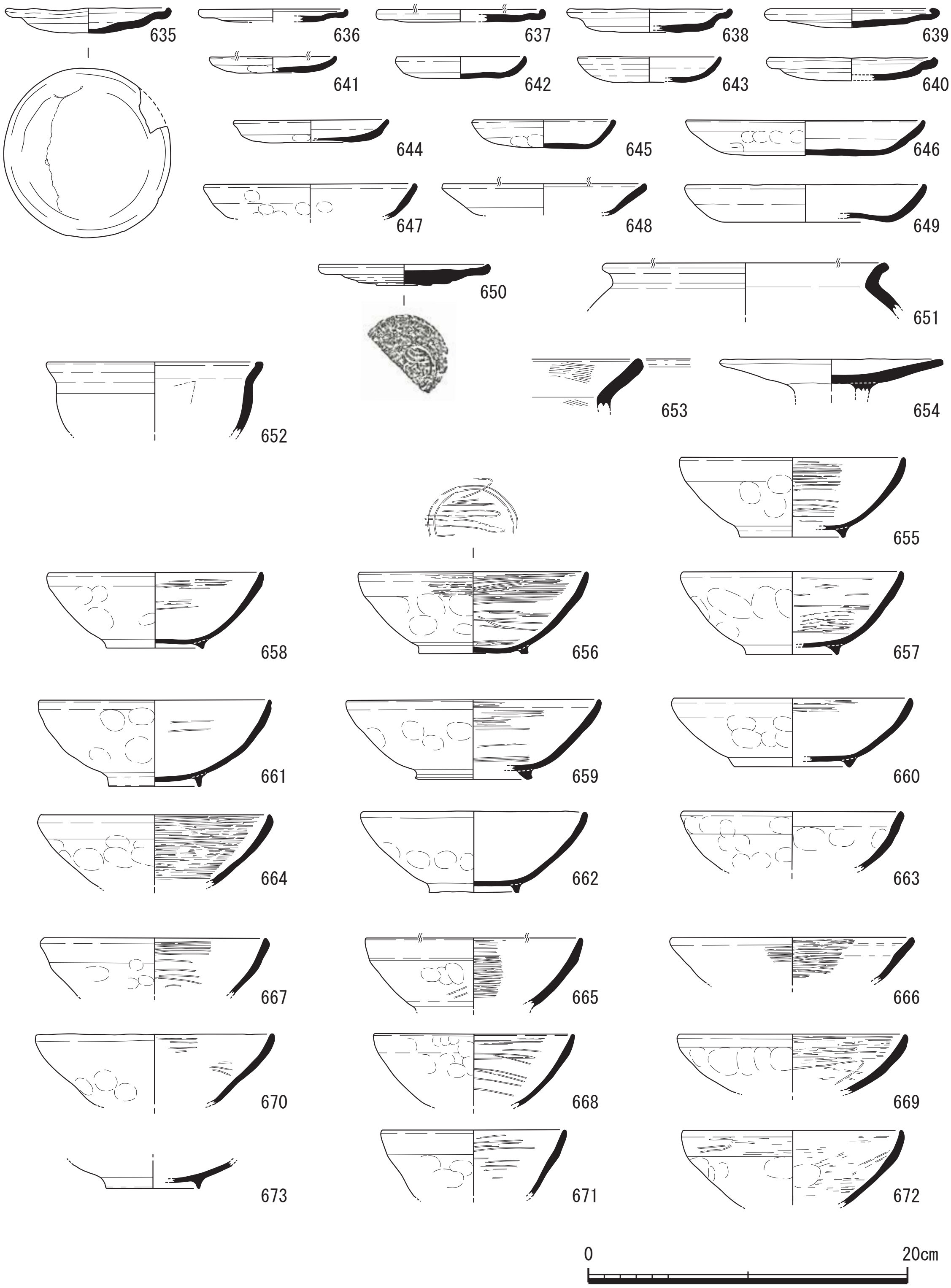
グリッドｒ13（第58図702～705）　702は土師器の甕口縁部と考える。端部を内面に折り込んでおり、この形状のものは本例のみである。703は土師器の鍋か羽釜の可能性がある。口縁部は短く、緩く外反する。胎土は粗く、色調はにぶい橙色～橙色を呈する。704・705は瓦器椀であり、704の内面全体に細かいミガキが確認できる。

グリッドｓ12（第58図706～710）　このグリッドはＳＤ220の直上であり、遺構検出時より多くの土師器・瓦器等が出土した。706・707は土師器皿である。特に707は口径15.4㎝を測る大形品であり、３段のナデを施す。708は土師質土器の羽釜と考える。厚さは1～1.5㎝と分厚く、胎土は粗い。摂津地域の釜と類似する。709は瓦質土器の羽釜である。口縁部は内傾し、内面にハケを施す。710は灰釉陶器椀の底部と考える。糸切り痕が確認できる。

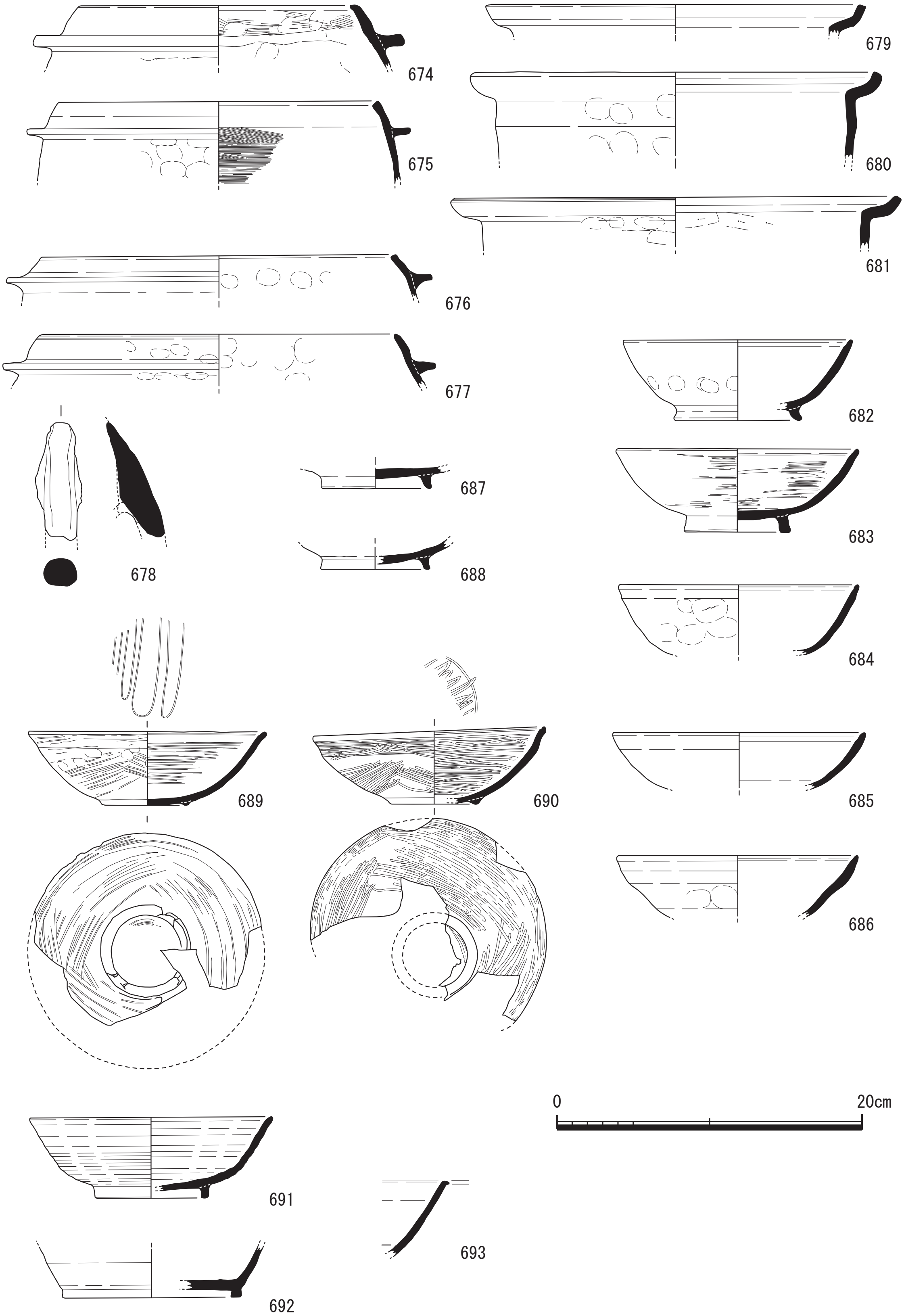
グリッドｓ13（第58図711～725）　このグリッドはＳＥ210・ＳＤ220の直上であり、遺構検出時より多くの土師器・瓦器等が出土した。711～713・715は土師器皿である。713の底部には粘土接合痕が残る。715は口径13.8㎝を測り、口縁部は外反する。714は瓦器皿である。716～725の10点は瓦器椀であり、いずれもやや集中して出土した。これらを除去し、精査を行ったところ、ＳＥ210を検出した。719・723はやや浅く、723の内外面には細かいミガキが施される。721の外面には粘土接合痕が確認できる。726は滑石製の石鍋の破片と考える。外面にケズリが施される。

グリッドｔ14（第59図727～729）　727・728は瓦器椀である。727の高台は台形状を呈し、内面にはミガキがわずかに残る。729は瓦器皿である。

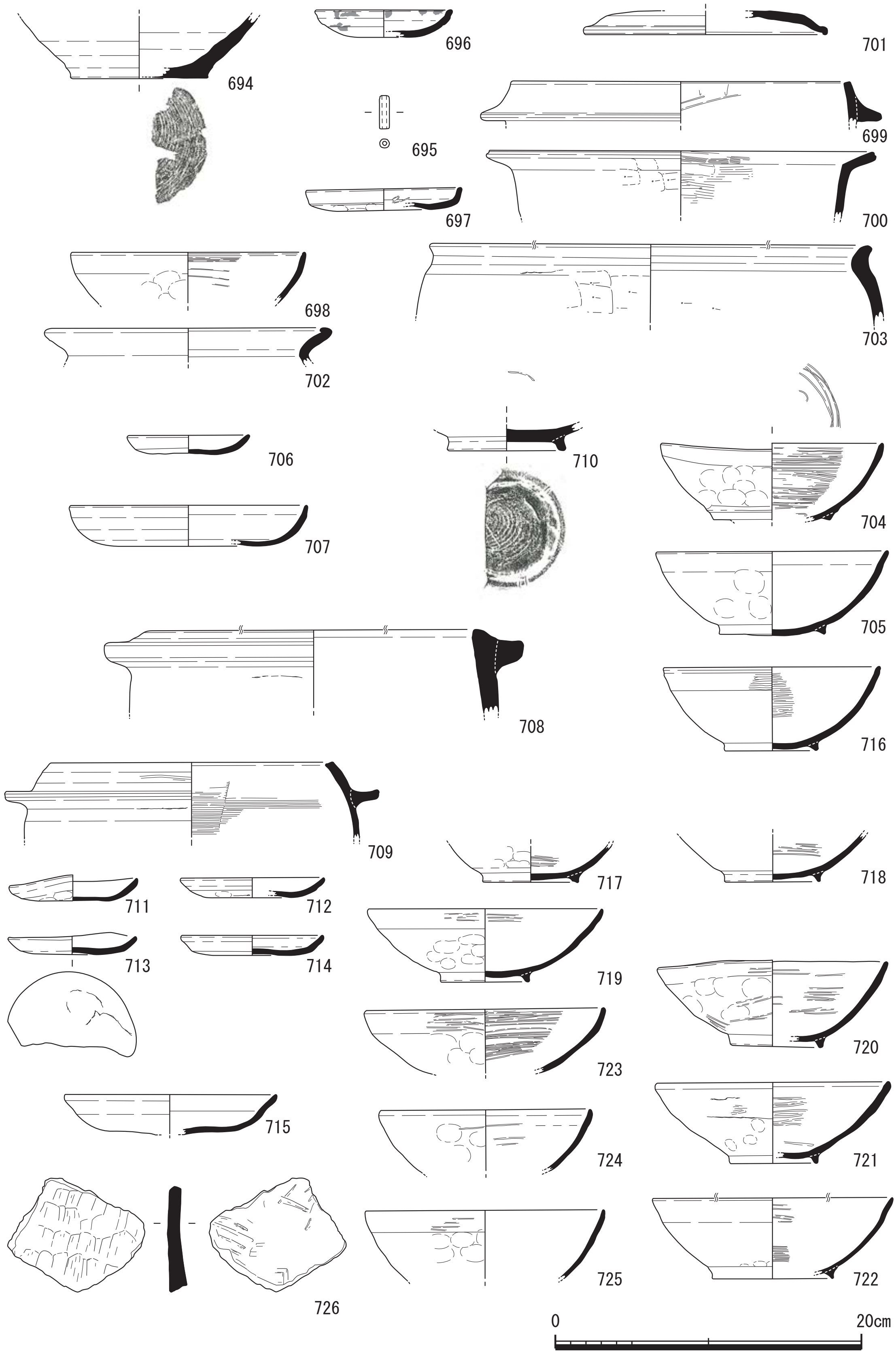
グリッドａ11（第59図730～732）　730は土師器皿である。口径14.9cmを測るやや大形のものであり、底部内外面にはユビオサエが残る。731は瓦器椀であり、側面観はやや杯状に近く、内面には細かなミガキが底部付近まで施される。見込みにはジグザグ状の暗文が残る。732は白磁椀



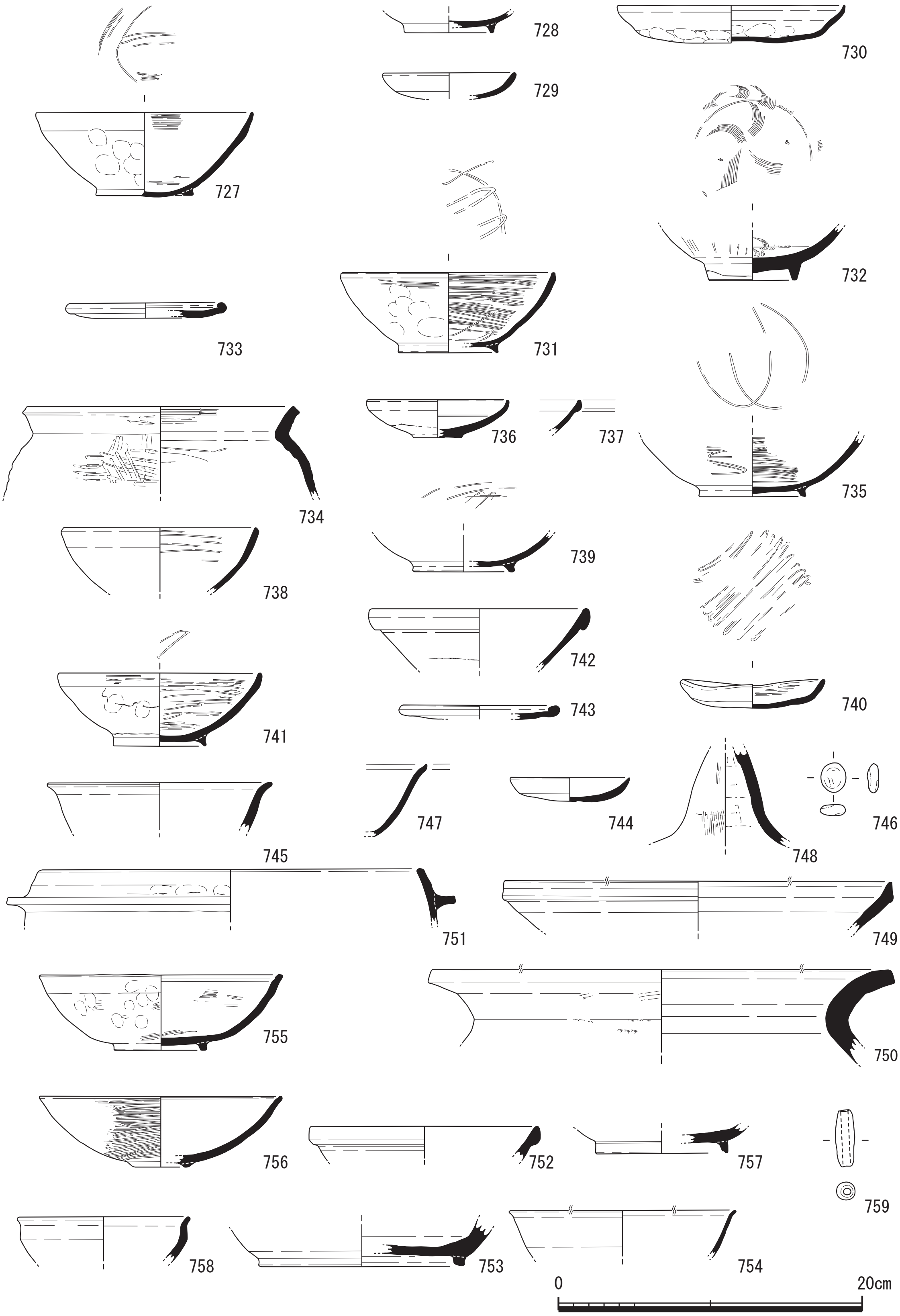
第56図　グリッド出土遺物 1



第57図　グリッド出土遺物２



第58図　グリッド出土遺物３



第59図　グリッド出土遺物４

の底部である。内面に櫛目文を施す。

グリッドａ12（第59図733～735・737・743～745・755・756）　733はコースター形の土師器皿である。734は土師器の鍋で、外面にタタキが認められる。色調はにぶい橙色から明褐灰色を呈する。735は瓦器椀で、内面に密なミガキが施される。737は白磁椀Ⅱ類の口縁部である。755・756は黒色土器である。755は焼成不良で褐灰色を呈し、口縁端部にはやや太い沈線が施される。また、内外面に細かいミガキがわずかに認められる。756は黒色土器Ｂ類であり、口縁端部に沈線が施される。口径15.8㎝に対して高台径は3.9㎝を測る。外面には密なミガキが施される。

グリッドａ13（第59図736・738～740・747）　736は白磁の小皿である。底部外面には施釉されない。738・739は瓦器椀である。740は瓦器皿である。全体的に歪みがあり、底部に細かいジグザグ状の暗文が明瞭に残る。747は白磁皿Ⅸ類の口縁部である。口縁端部内面には施釉しない。

グリッドｂ11（第59図741・742）　741は瓦器椀であり、内面の底部付近までミガキが施される。外面に粘土接合痕が残る。742は白磁椀Ⅳ類口縁部である。

グリッドｂ12（第59図743～746）　743・744は土師器皿である。745は青磁椀の口縁部である。746は碁石の可能性がある。灰白色を呈する。

グリッドｂ13（第59図749・750・752）　750は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部に面をつくる。749は東播系須恵器鉢の口縁部である。752は白磁椀Ⅳ類の口縁部である。

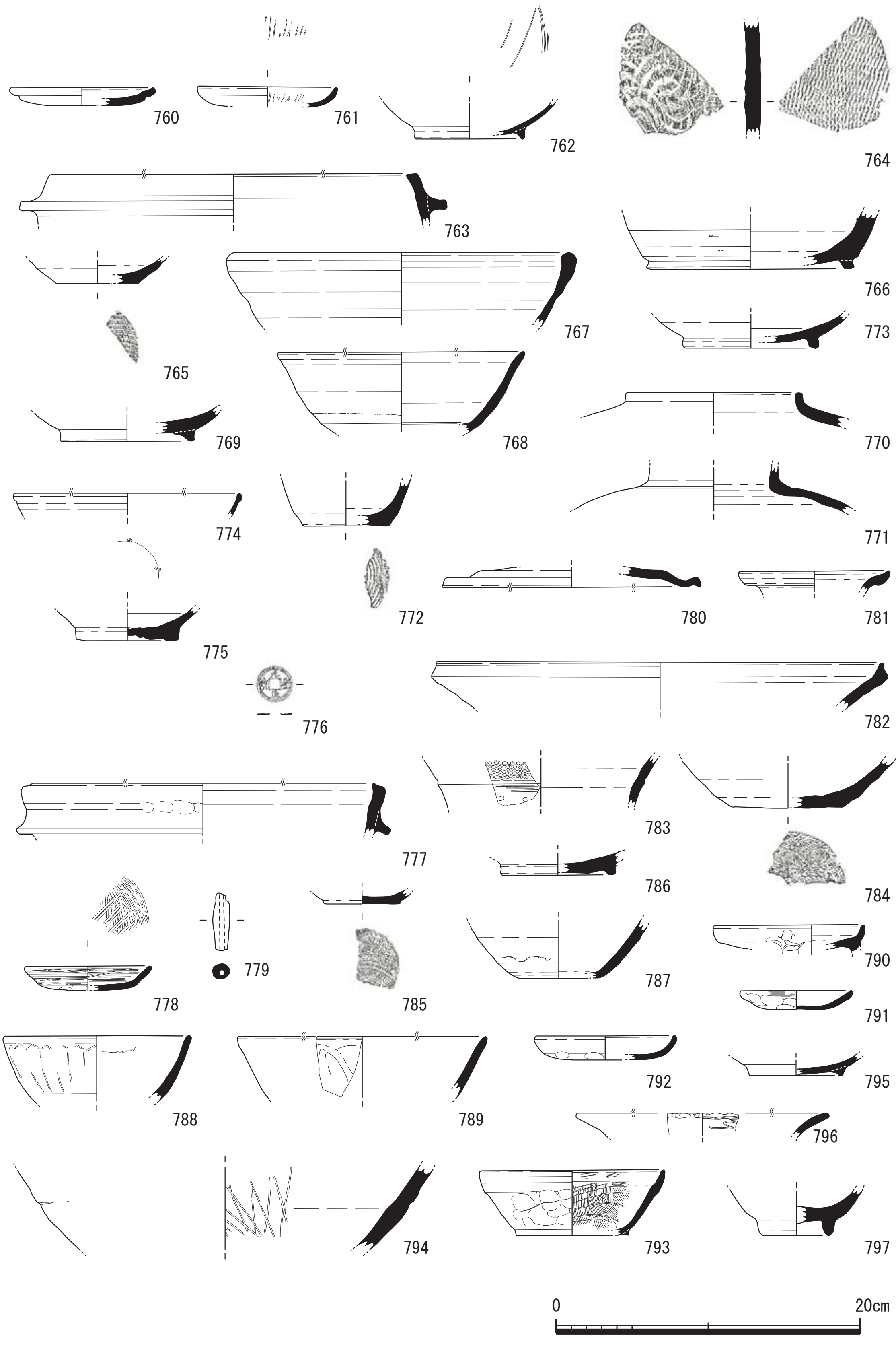
グリッドｂ14（第59図751）　751は瓦質土器の羽釜である。

その他精査時など（第59図）　748は土師器の高杯脚部である。東壁面北東部掘削時に出土した。屈折脚となり、古墳時代前～中期頃のものと考える。753は須恵器の壺底部と考える。754・757は緑釉陶器の口縁部と底部である。758は天目茶椀の口縁部である。759は土錘である。

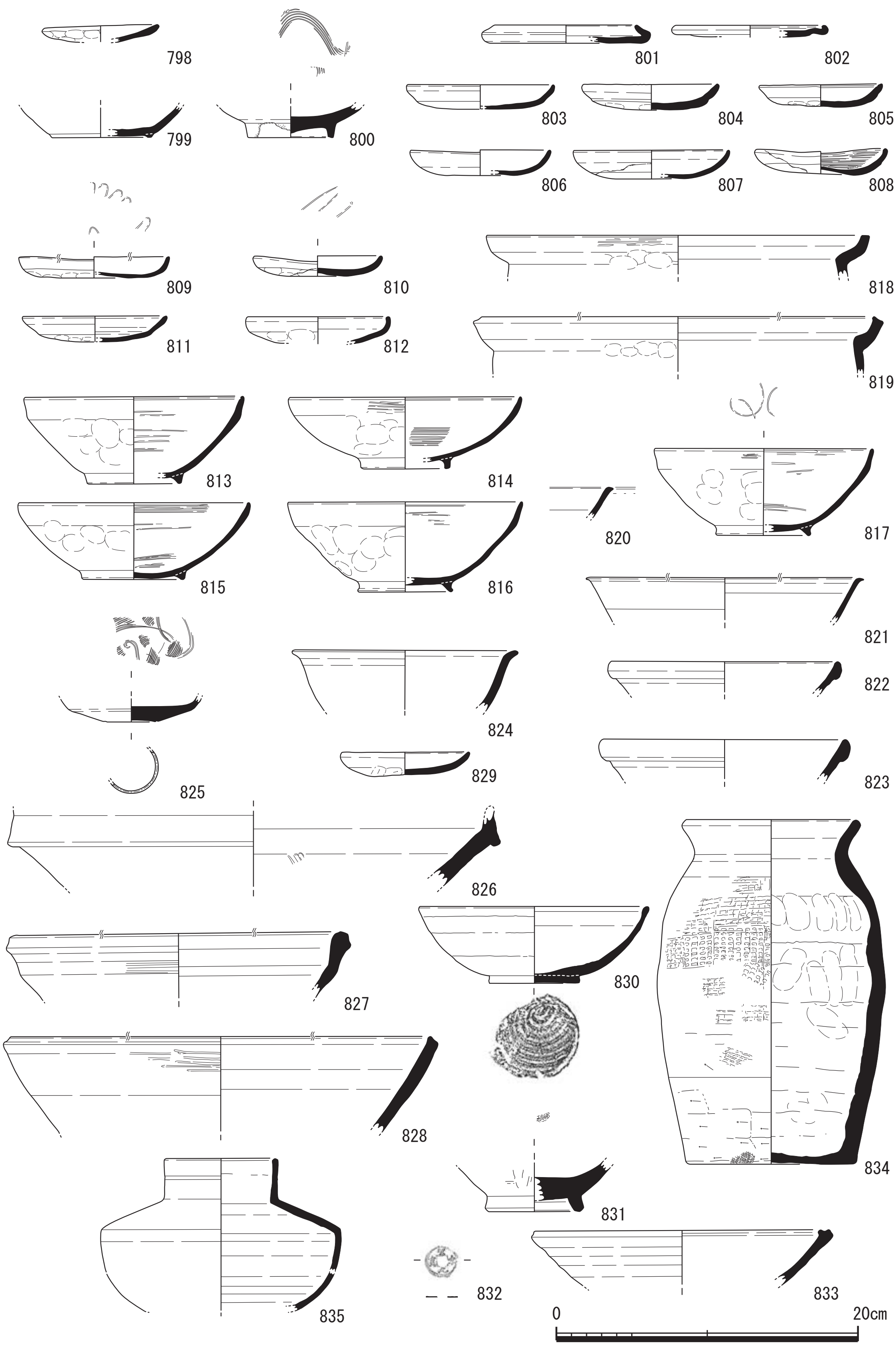
（10）第４次調査各地区出土遺物（第60・61図）

１区（第60図760～774）　760は土師器皿である。器壁はやや厚く、口縁端部はわずかに「て」の字状に屈曲させる。761は瓦器皿であり、底部内面にジグザグ状の暗文が認められる。762は瓦器椀であり、見込みにジグザグ状と思われる暗文が残る。763は瓦質土器の羽釜の口縁部である。口縁部は内傾し、端部に面をつくる。764～767は須恵器である。765は杯の底部であり、糸切り痕が認められる。766は壺底部と考える。767は鉢の口縁部であり、端部を丸く肥厚させることから、篠窯産と考える。768～772は灰釉陶器である。768･769はそれぞれ椀の底部と口縁部である。770は短頸壺の口縁部と考える。外面肩部に釉薬が認められる。771は壺の頸部から肩部である。772は小形の壺の底部で、糸切り痕が残る。773は緑釉陶器の椀底部である。全面にオリーブ黄色の釉薬が認められる。774・775は白磁である。774は白磁椀Ⅱ類の口縁部である。775は椀の底部であり、内面に重ね焼きの目跡が残る。

２区（第60図776～789）　780～785は須恵器である。780は杯蓋である。781は壺の口縁部と考える。782・784は東播系須恵器鉢の口縁部と底部である。783は壺などの頸部付近の破片である。上部に波状文、下部に竹管文が２か所確認できる。古墳時代のものと考える。785は杯の底部であり､糸切り痕が確認できる。779は土錘である。一方の小口は欠けている。778は瓦器皿であり、



第60図　第４次調査各地区出土遺物１



第61図　第４次調査各地区出土遺物２

内外面に密なミガキが確認できる。777は瓦質土器の羽釜の口縁部である。786は緑釉陶器の椀底部と考える。787は天目茶椀の底部である。788は古瀬戸の椀であり、表面には中国製の蓮弁文を模した線刻が施される。789は龍泉窯系青磁椀の口縁部であり、外面に蓮弁文が施される。776は北宋銭の元豊通寳である。1078年初鋳である。

４区（第60図790～797）　790・791は土師器皿である。790は付け根の部分のみ残存するが、底部に足が取り付く。792は瓦器皿である。791は油煙が付着しており灯明皿である。793は小形の瓦器椀と考える。側面観は逆台形状となり、内面には一次調整のハケの後、粗いミガキが施される。794は瓦質の擂鉢の体部である。斜格子状の摺り目が認められる。795は須恵器杯底部である。底部にわずかに糸切り痕が認められる。796・797は青磁である。796は龍泉窯系青磁皿であり、口縁部は輪花状となり、内面に線刻が施される。797は椀底部である。

５区（第61図798～800）　798は土師器皿である。799は須恵器杯の底部である。800は白磁椀底部であり、見込みに線刻が施される。

６区（第61図801～826）　この地区は、井戸ＳＥ210・溝状遺構ＳＤ220に近接しており、多くの遺物が出土した。801～807は土師器皿である。801・802はコースター形となる。807の外面には粘土接合痕が確認できる。808～812は瓦器皿であり、808の内面には密なミガキ、外面には粘土接合痕が確認できる。809・810の見込みにはジグザグ状の暗文が確認できる。813～817は瓦器椀である。813・814の口縁部には沈線が確認できる。817の見込みにはわずかに螺旋状の暗文が確認できる。820・821は白磁椀Ｖ類、822は同Ⅳ類の口縁部である。824・825は青磁である。825は龍泉窯系青磁皿であり、内面に櫛目文が施される。824は椀の口縁部である。826は備前焼のすり鉢である。色調は灰～黄灰色を呈する。

10区（第61図827・828）　827は須恵器鉢で、口縁部の形状から篠窯産と考える。828は瓦質土器の鉢である。外面の口縁部付近にわずかにミガキが残る。

11区（第61図829・831・832）　829は土師器皿である。831は青磁椀底部である。832は北宋銭の聖宋元寳である。1101年初鋳である。

12区（第61図830・833）　830は黒色土器椀Ｂ類である。底部に糸切り痕が残る。833は古瀬戸の鉢である。口縁端の突出部は釉薬が剝離している。色調は浅黄色を呈する。

その他精査時など（第61図834・835）　834は須恵器の長胴壺と考える。６区を中心に散らばって出土した。体部から肩部にかけてわずかに膨らみ、口縁部は「く」の字状に屈曲させる。外面上から中部には格子タタキが認められ、下半部はケズリを施す。底部はケズリとナデで整形され、底部付近には布目が部分的に残る。内面下半部には粘土紐の輪積みの単位が明瞭に残り、肩部から頸部にかけてはユビオサエが確認できる。835は中国製の褐釉の直口壺である。６区とＳＥ210上層付近に散らばって出土した。平滑に張った肩部から頸部が直線的に立ち上がる。釉薬は全体的に灰褐色であるが、口縁端部内面・頸部と肩部の境目の屈曲部・肩部と体部の境目付近に黒褐色の釉薬を線状に施す。この形状のものは本例のみである。

小結　包含層や精査時の遺物の時期幅を見ると、古相のものでは古墳時代の土師器・須恵器・

管玉、平安時代の緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・「て」の字状口縁土師器皿・コースター形土師器皿等から、宅地と前後する時期の土師器皿・瓦器椀・陶磁器等と中世前期から後期頃までの土師器・瓦器椀・陶磁器等が確認できる。出土量的には、宅地と前後する時期が多いものの、11世紀後半頃の「て」の字状口縁をもつ土師器皿や黒色土器も一定量出土しており、このことからも宅地の成立は11世紀にさかのぼる可能性が高い。対照的に、近隣の犬飼遺跡第２・３次調査で多く出土しているような、13世紀末から14世紀頃の瓦器椀やへそ皿は、図化していない破片も含めてほとんど確認できない。

なお、Ａ１トレンチ出土の土器10点について胎土分析を行っている（付編２）。　（荒木瀬奈）

４．Ａ２地区の調査

Ａ２地区は、Ａ１トレンチの北側に隣接する調査区である。この地区には、径約2.0m、高さ約0.2mの小規模なマウンドがあり、地元では「塚」と呼ばれていた。調査は、主に、この「塚」の内容確認を目的として実施した。

１）検出遺構（第62・63図）

調査では、集石遺構ＳＸ200を検出した。地元で「塚」と呼ばれていたものである。集石遺構ＳＸ200は、長軸3.4m・短軸2.4mの範囲に、主に拳大から人頭大の礫を、0.5mの高さに盛り上げて構築される。礫は旧表土と考えられる層の上に盛り上げられている。ほとんどが自然石であるが、わずかに石塔の部材も含まれる。特に、上部中央付近からは、四方に梵字を刻んだ立方体状の石塔部材が出土した。また、礫層中には、土器・陶磁器片などが含まれる。

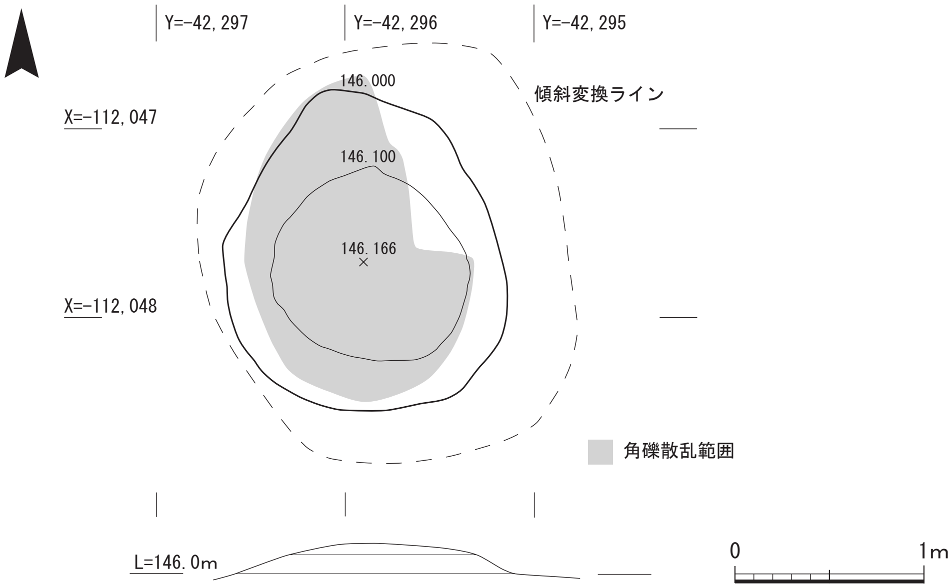
集石遺構ＳＸ200に伴う下部遺構の有無についても確認を行ったが、土坑等の遺構は認められなかった。また、円形・方形等の規格性の有無についても検討したが、それを示す明確な痕跡は認められなかった。

２）出土遺物（第64図836～852）

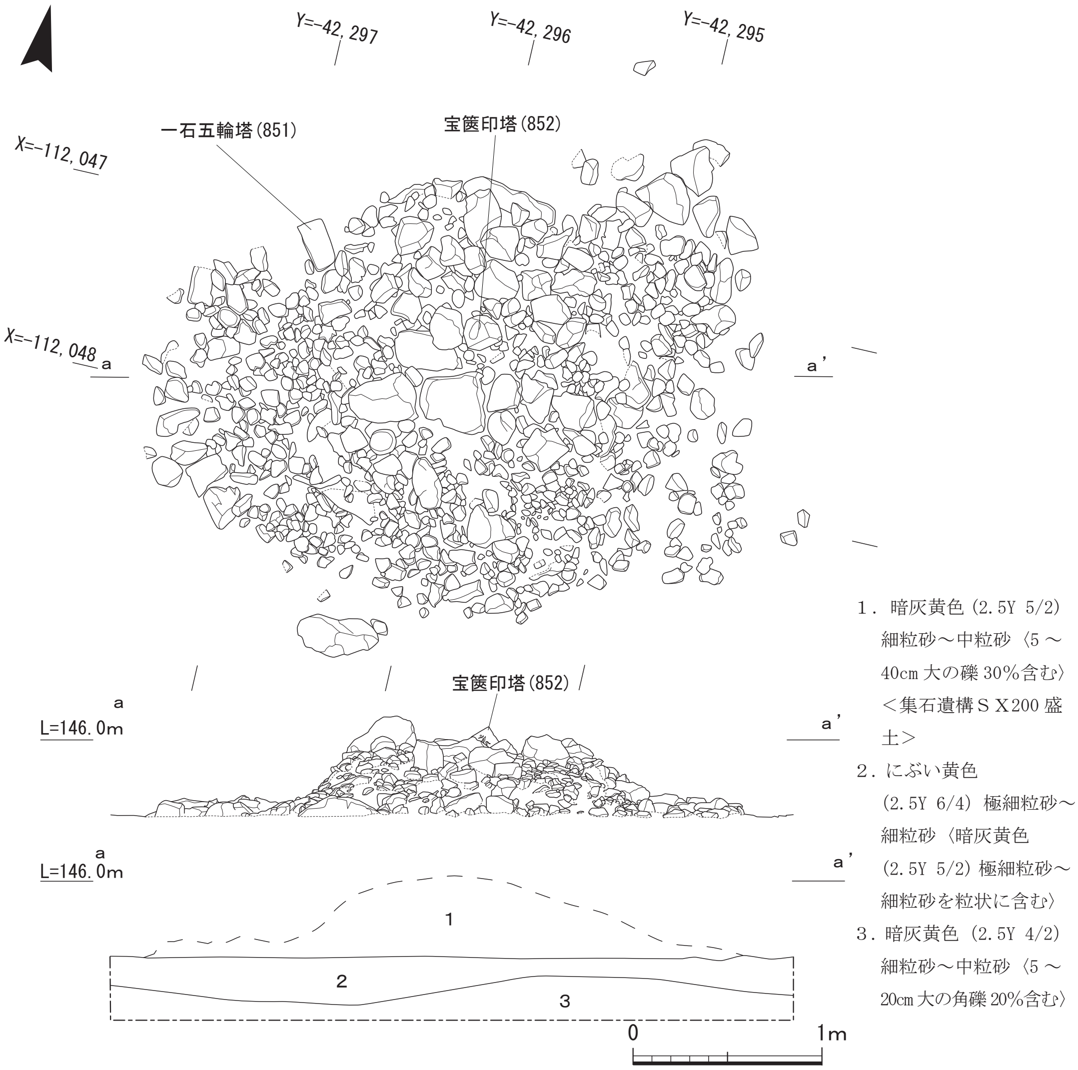
この調査区からは、土器、陶磁器、金属製品、石製品などが出土している。時期的には、中世から近世に及ぶ。しかし、ほぼ細片であり、断片的な遺物が多く、図示できるものは少ない。なお、法量等の詳細については、観察表を参照していただきたい。

836は土師器皿で、底部から口縁部が丸味をもって立ち上がる。Ⅲ期６Ｃ段階、13世紀頃のものとみられる。837は土師器皿で、平坦な底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。Ⅳ期10Ａ段階、16世紀前半頃のものとみられる。838～841は土師器皿で、平坦な底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。やや小形である。Ⅳ期10ＡもしくはＢ段階、16世紀前半から中頃のものとみられる。

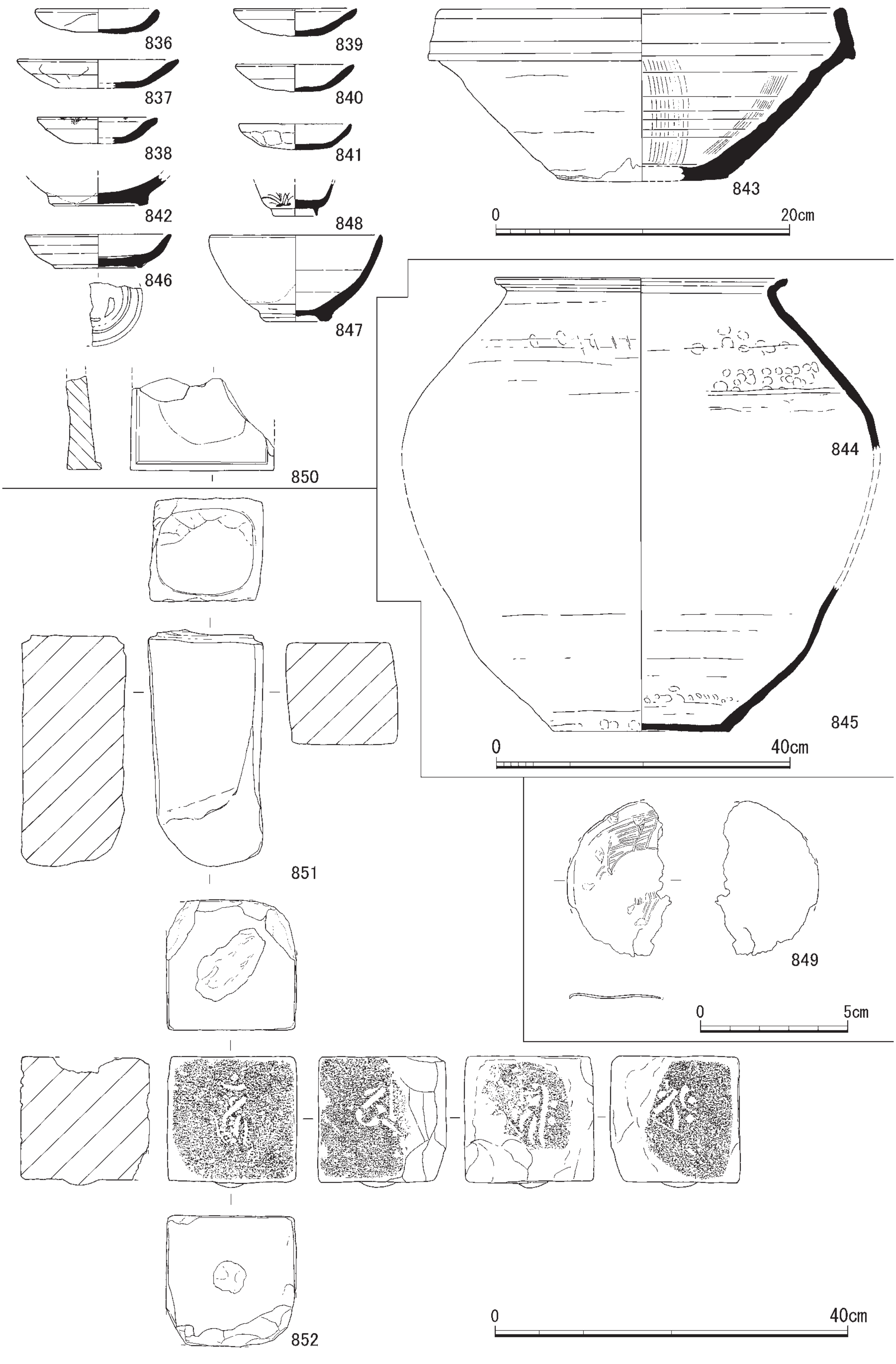
842は中国製の白磁椀の底部である。高台は低く、扁平である。白磁椀Ⅳ類に属するものとみられ、11世紀後半から12世紀にかけての頃のものと考えられる。843は備前陶器の擂鉢である。内面に、櫛状の器具で９本単位のやや幅広の摺目を施す。口縁部は幅広で、その形状などから、16世紀頃のものとみられる。844は丹波陶器の甕の上半部である。口縁部は外反し、内面に沈線状の段をもつ。肩部はやや撫肩になる。胎土は赤味を帯びる。14世紀後半から15世紀頃のものとみられる。



第62図　集石遺構ＳＸ200調査前実測図



第63図　集石遺構ＳＸ200実測図



第64図　Ａ２地区出土遺物

845は丹波陶器の甕の下半部である。胎土は844と類似しており、同一個体と考えられる。846は美濃陶器の灰釉丸皿である。高台内に輪トチの痕跡が残る。大窯期の製品で、16世紀頃のものとみられる。847は肥前陶器（唐津）の灰釉椀である。高台はやや竹の節状になる。17世紀初頭頃のものとみられる。848は肥前磁器（伊万里）の染付小椀である。外面に草花文を描く。17世紀後半から18世紀初頭頃のものとみられる。

849は、現存長5.2㎝の銅製品である。円形を呈すると考えられる。縁部を折り返す。器種、用途等は不明である。凸面にあたる部分に葉脈状の線刻がある。形状から、筒状容器の底部か蓋ともみられ、経筒の一部の可能性もある。あるいは、小形の和鏡状の銅板の鏡面部に仏像等を線刻した鏡像「御正躰」の可能性も考えられる。

850は石製硯である。周縁があり、中央部は使用痕で浅く窪む。板状に剝離する肌理の細かい石材を使用しており、底部は剝落している。851は一石五輪塔の地輪部である。梵字や銘文は刻まれていない。上面に水輪部の剝離痕がある。石材は安山岩系で、割石ではなく柱状の自然石を使用している。表面を粗タタキして方柱状に整形する。埋込式の一石五輪塔で、下半部埋込部は整形を略している。852は石塔の部材である。ほぼ立方体であり、上面に枘穴とみられる刳り込み、下面に枘がある。側面は、四面それぞれに、アク（不空成就如来、北方）、ウーン（阿閦如来、東方）、タラーク（宝生如来、南方）、キリーク（阿弥陀如来、西方）の梵字を刻む。石造物は、形状から五輪塔の地輪とも考えられたが、五輪塔地輪には刻まれない梵字があり、それ以外の遺物と考えられる。各面に刻まれた梵字は、上記のとおり、金剛界四仏を表しているものと考えられる。以上の点から、この石造物は宝篋印塔の塔身部と考えられる。すなわち、塔本体を主尊の金剛界大日如来とみなし、塔身部に四仏の種子を配して、金剛界曼荼羅の成身会を表しているものとみられる。石材は安山岩系である。この石造物は小形であり、宝篋印塔とすれば小形のものである。梵字の彫りも線状で浅い。以上の形状から、室町時代中頃から後半にかけての頃のものとみられる。

３）小結

集石遺構ＳＸ200は、まさに礫を集積した遺構である。構築時期については、礫層中から出土した遺物の内で最も新しいとみられる肥前磁器（伊万里）染付小椀が参考になる。すなわち、17世紀後半から18世紀初頭頃の近世前期頃が、その上限になると考えられる。

この遺構の性格については、明確な資料がなく、不明と言うしかない。ただ、礫層中から出土した遺物には、石塔部材などの仏教関連の遺物が含まれる。また、経筒の一部もしくは「御正躰」の可能性が考えられる銅板もある。丹波陶器甕は甕棺もしくは蔵骨器として、備前陶器擂鉢は蔵骨器の蓋として、使用された可能性も考えられる。土師器皿や陶磁器の椀・皿などは、仏前や神前、墓前などの供献にも使用されるものである。このように考えると、礫層中から出土した遺物は、宗教色の濃い遺物とも言えよう。かつてこの地に暮らした人々にとって、信仰や崇敬、その裏返しとしての畏怖の対象となるものともみられる。それゆえに、身近にそのようなものがあれば、日々の暮らしや耕作などには時として邪魔なものにもなる。このように考えると、この遺構は、決して粗略には扱えないものではあるが日常生活には障害となるものを集めて、礫とともに

積み上げ、拝礼供養の対象としたものとも考えられる。宝篋印塔の塔身部は、出土状況から、この「塚」の指標として頂部に置かれていた可能性も考えられる。

「塚」の北側には、法貴谷川が南西から北東に向かって蛇行しながら流下している。「塚」は、この川の東岸部付近に位置する。「塚」から一段下がった北側の東岸に隣接する場所には、４体の石仏が並ぶ。光背型のもの２体と尖頭板碑型のもの２体である。中世後期頃のものとみられるが光背型のものがやや古様である。いずれも阿弥陀如来坐像を刻出する。さらに川の東岸を下流に向かうと、石仏１体や道標１基が点在する。石仏は尖頭板碑型で、阿弥陀如来坐像を刻出する。中世後期のものとみられる。道標は上部が折損して失われているが、二面に文字が刻まれる。片面には、中央部に「僧都尭遍上人和□」、その向かって右側に「□丁丑歳」、左側に「□八日　右妙見道」と刻まれる。もう片面には「□見道　□講」と刻まれる。銘文の元号部分が失われているのが惜しまれるが、開蓮華文や細目に刻まれた文字から、近世のものと考えられる。この道標は、近世には法貴谷川東岸が北摂能勢の妙見宮への巡礼道であったことを示す。これは、この道が、巡礼道であるとともに、通行量が多い主要な道であったことをも示す。このような道の傍らに営まれた「塚」は、点在する石仏と同様に、多くの通行人からも拝礼供養されることを目途とするものとも考えられる。

今回調査した「塚」は、上記の通り、一種の供養塚と考えられる。また、道沿いに存在することからみて、一里塚のような、旅程の目印となっていたものとも考えられる。道標や石仏、「塚」などが通行する人々を導く、近世の川沿いの道の情景が、彷彿とする。いずれにしても、この遺構は、近世のこの地の景観を復元するための、主要な資料となるものと言える。　（引原茂治）

５．Ｂ 地 区 の 調 査

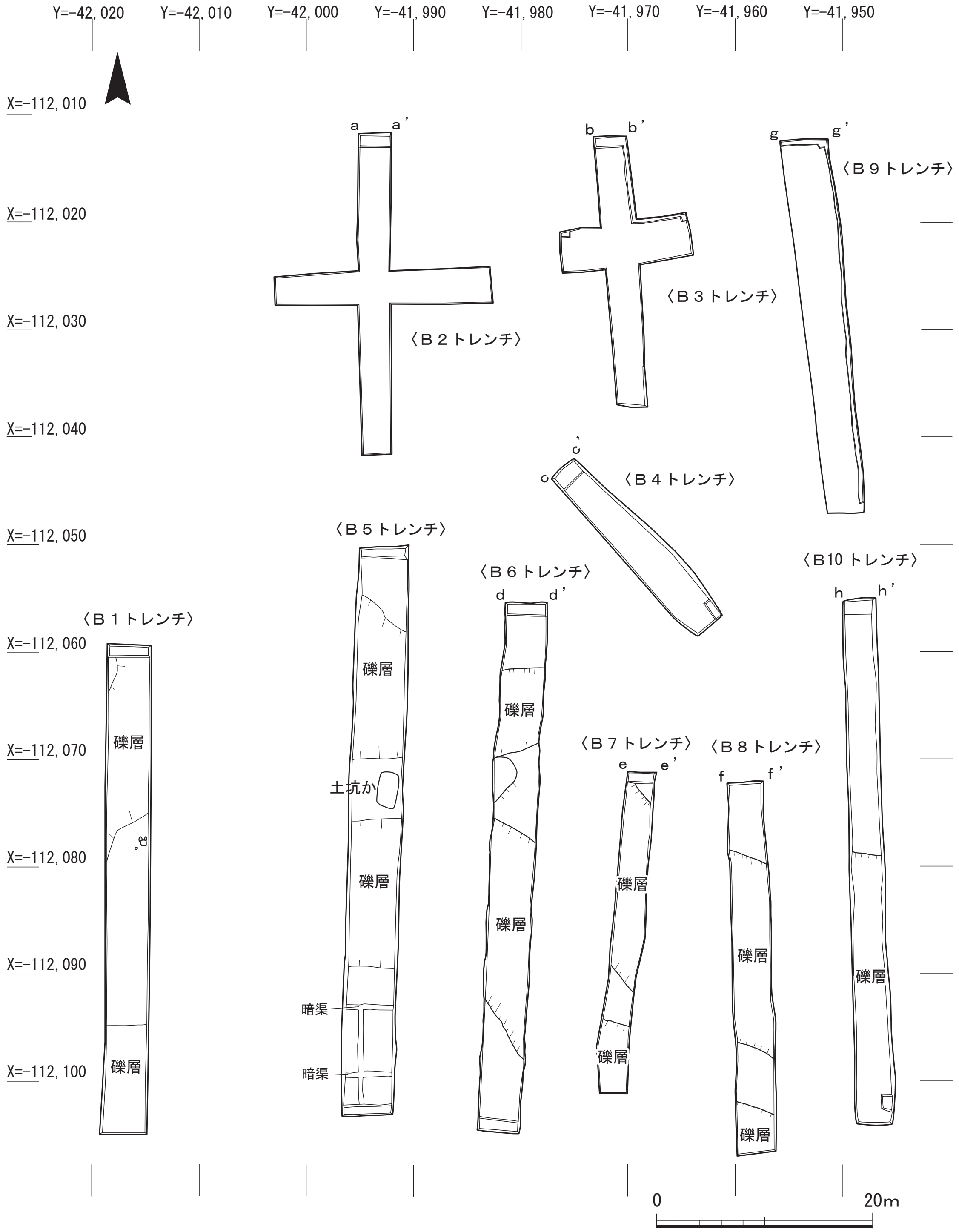
１）小規模調査（第65～67図）

調査対象地のほぼ中央部の標高136.0～138.5m付近をＢ地区とし、西から東方向に下る棚田状の対象地に10か所（１～10）の小規模調査トレンチを設定した。重機による耕作土の除去作業後、トレンチを設定し重機で掘削した後、人力による精査・遺構検出等を行った。以下では、各トレンチの概要について報告する。

Ｂ１トレンチ　幅4.2m、長さ45.8mの調査区である。表土下0.5mで、砂質土からなる安定地盤と東西方向の土石流と考えられる礫層を２か所検出した。また、トレンチ中央の安定面上にて、柱穴の可能性のある土色変化を２基確認した。東に位置するＢ５トレンチにも遺構の可能性のある土色変化があり、第５次調査において、これらを連結するように拡張し、面的調査を行った。

Ｂ２トレンチ　幅３mの十字状の調査区である。表土下0.8mで、シルト質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

Ｂ３トレンチ　幅３mの十字状の調査区である。表土下0.8mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行っ



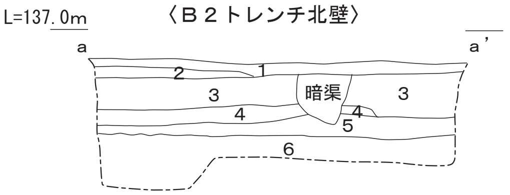
第65図　Ｂ地区小規模トレンチ配置図

たが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

Ｂ４トレンチ　幅2.8m、長さ20mの調査区である。表土下0.6mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂礫層を確認したのみである。

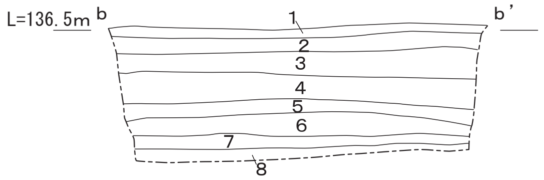
Ｂ５トレンチ　幅4.8m、長さ53mの調査区である。表土下0.5mで、砂質土からなる安定地盤と土石流と考えられる礫層を検出した。トレンチ中央の土石流に挟まれた安定地盤上にて、土坑

〈Ｂ２トレンチ北壁〉



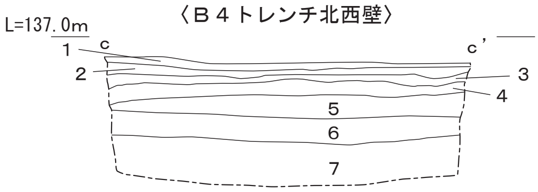
1．オリーブ灰色（10Y 5/2）シルト混じり極細粒砂
2．灰色（5Y 5/1）極細粒砂
3．灰オリーブ色（5Y 5/2）極細粒砂
4．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混極細粒砂
5．緑灰色（7.5GY 5/1）極細砂混シルト
6．暗緑灰色（10G 4/1）極細砂混シルト

〈Ｂ３トレンチ北壁〉



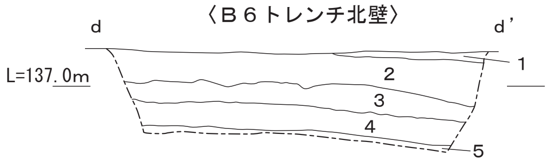
1．暗青灰色（5B 4/1）極細粒砂
2．灰色（5Y 4/1）細粒砂〈鉄・マンガンを5%程含む〉
3．灰色（7.5Y 4/2）細粒砂〈鉄・マンガンを10%程含む〉
4．黒褐色（2.5Y 3/2）極細粒砂〈鉄を10%程含む〉
5．オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中～細粒砂〈鉄を20%程含む〉
6．褐灰色（10YR 4/1）細粒砂〈鉄を10%程含む〉
7．オリーブ黒色（5Y 3/1）砂質シルト〈鉄を10%程含む〉
8．暗緑灰色（7.5GY　4/1）中粒砂〈鉄を5%程含む〉

〈Ｂ４トレンチ北西壁〉



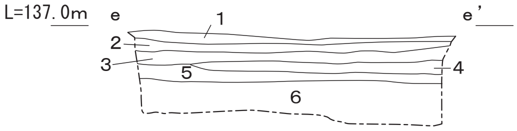
1．暗緑灰色（10GY 4/1）極細粒砂
2．緑灰色（10GY 5/1）極細粒砂〈0.1～0.2cm大の白い礫5%〉
3．緑灰色（10GY 5/1）極細粒砂〈0.1～0.2cm大の白い礫10%,1～3cm大の礫2%〉
4．緑灰色（7.5GY 5/1）細粒砂〈0.1～0.2cm大の白い礫10%〉
5．灰色(10Y 5/1)粗粒砂〈3～5cm大の礫15%〉
6．灰オリーブ色（7.5Y 5/2）粗粒砂〈5～15cm大の礫15%〉
7．緑灰色（7.5GY 5/1）極細粒砂

〈Ｂ６トレンチ北壁〉



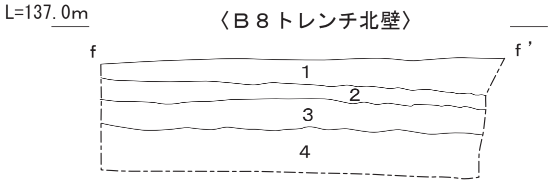
1．灰色（7.5Y 5/1）細粒砂
2．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト混極細砂
3．灰白色（7.5Y 7/2）シルト混極細砂
4．灰オリーブ色（5Y 5/2）砂質シルト
5．暗緑灰色（5G 4/1）砂質シルト

〈Ｂ７トレンチ北壁〉



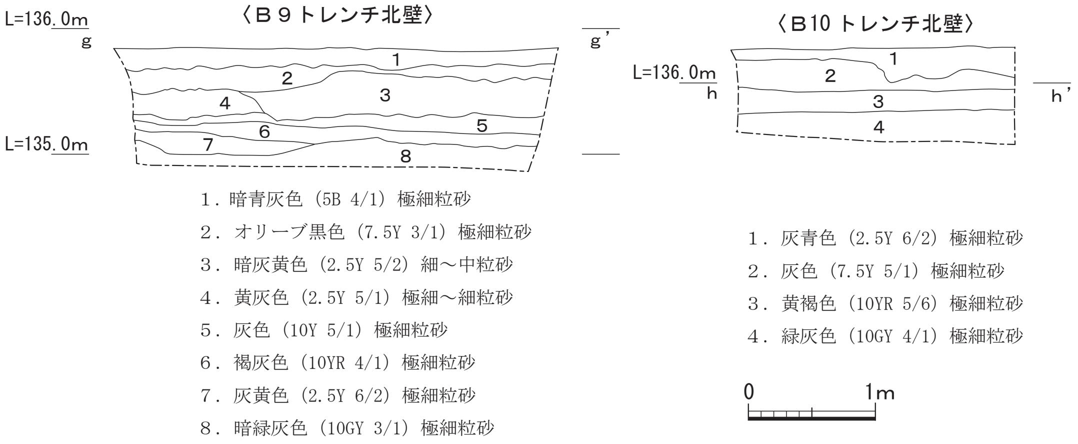
1．暗オリーブ灰色（5GY 4/1）細粒砂
2．暗緑灰色（7.5GY 4/1）細粒砂
3．暗緑灰色（5G 4/1）細粒砂
4．オリーブ灰色（10Y 5/2）細～中粒砂
5．灰オリーブ色（7.5Y 4/2）細～中粒砂
6．灰オリーブ色（7.5Y 4/2）細～中粒砂

〈Ｂ８トレンチ北壁〉



1．オリーブ灰色（2.5GY 6/1）極細粒砂
2．オリーブ灰色（5GY 6/1）細～中粒砂
3．明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）細～中粒砂
4．暗灰黄色（2.5Y 5/2）細～中粒砂

第66図　Ｂ２～４、６～8トレンチ断面図



第67図　Ｂ９・10トレンチ断面図

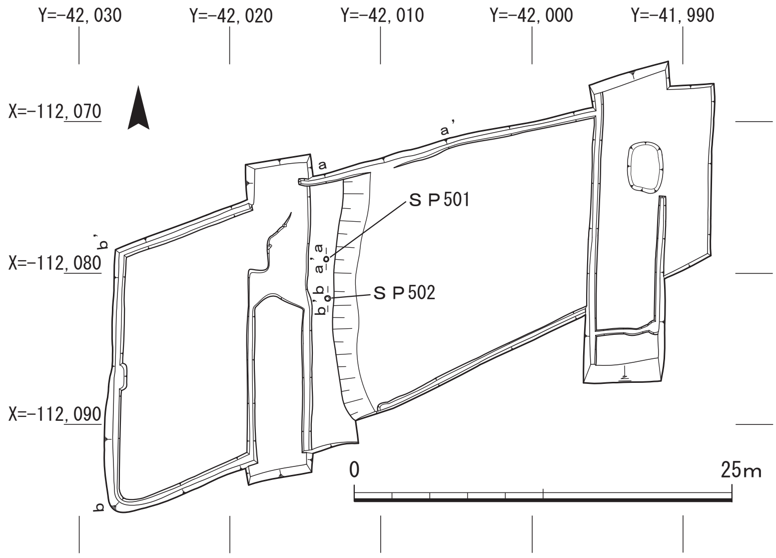
の可能性のある隅丸長方形状の土色変化や、南側にて暗渠を３本確認した。土色変化部分の一段下げを行ったところ、細片ではあるが、土師器を確認したことから、西に隣接するＢ１トレンチの遺構の可能性のある土色変化部分と連結するように拡張し、第５次調査にて、面的調査を行った。

Ｂ６トレンチ　幅3.8m、長さ49.2mの調査区である。表土下0.4mで、シルト質土からなる安定地盤と東西方向の土石流を数か所検出したが、顕著な遺構･遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

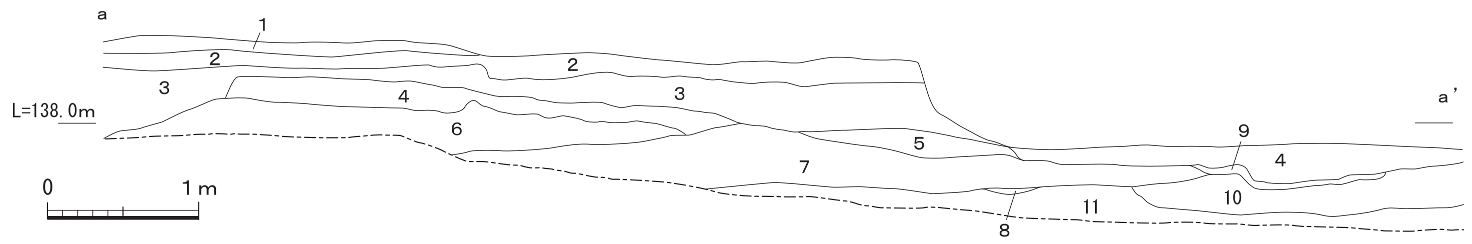
Ｂ７トレンチ　幅2.6m、長さ30.2mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤と東西方向の土石流を数か所検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

Ｂ８トレンチ　幅3.6m、長さ34.8mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤と東西方向の土石流を２か所検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂礫層を確認したのみである。

Ｂ９トレンチ　幅4.4m、長さ35.2mの調査区である。表土下0.6mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

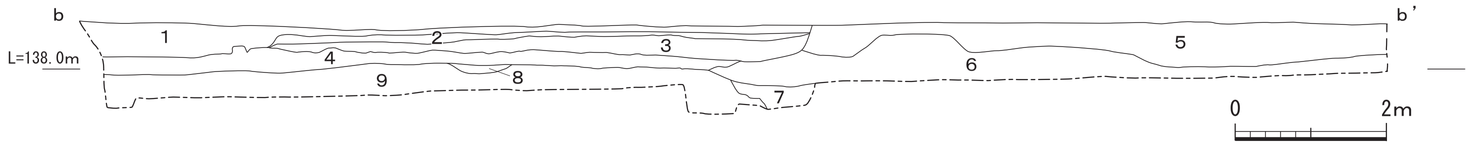


第68図　Ｂ地区遺構配置図



1．灰色（5Y 5/1）　細粒砂〈床土〉
2．灰オリーブ色（5Y 4/2）細粒砂〈旧耕作土〉
3．灰黄褐色（10YR 4/2）細～中粒砂〈１～２cm大の礫を１～２％含む〉〈土砂流入層〉
4．灰オリーブ色（5Y 5/3）細粒砂〈１cm大の礫を１％含む〉〈整地層〉
5．暗オリーブ色（5Y 4/3）細粒砂〈３～５cm大の礫を 10％含む〉
6．暗灰黄色（2.5Y 4/2）極細～細粒砂〈暗渠下部〉
7．オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中～細粒砂〈３～５cm大の礫を 50％含む、10 ～ 20 cm大の礫を 10％含む〉〈土砂流入土〉
8．灰色（5Y 4/1）粘土〈帯水層〉
9．灰色（10Y 4/1）シルト質砂〈帯水層〉
10. 黒褐色（2.5Y 3/2）細粒砂〈10 cm大の礫を 10％含む〉〈土砂流入層〉
11. 暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）中～粗粒砂〈５cm大の円礫を 20％含む〉〈土砂流入層〉

第69図　Ｂ１・５北壁面土層図



1．灰白色（5Y 7/2）細～中粒砂〈小礫含む〉〈耕作土〉
2．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混粗粒砂〈小礫少量含む〉〈耕作土〉
3．黄褐色（2.5Y 5/3）シルト混極細～細粒砂〈小礫少量含む〉〈耕作土か〉
4．灰黄褐色（10YR 5/2）シルト混極細～細粒砂〈小礫極少量含む〉〈耕作土か〉
5．灰オリーブ色（5Y 6/2）中～粗粒砂〈５～ 30 cm大の礫多量含む〉〈土石流か〉
6．にぶい黄色（2.5Y 6/4）シルト混中～粗粒砂〈５～ 30 cm大の礫多量含む〉〈土石流か〉
7．オリーブ灰（2.5GY 5/1）粗粒砂～小礫〈10 ～ 15 cm大の礫多量含む〉〈土石流か〉
8．灰色（5Y 4/1）シルト混極細～細粒砂〈耕作土か〉
9．灰オリーブ色（5Y 5/2）シルト混細～中粒砂〈小礫含む〉〈自然堆積層〉

第70図　Ｂ１西壁面土層図

B10トレンチ　幅３m、長さ48.8mの調査区である。表土下0.4mで、シルト質土からなる安定地盤と東西方向の土石流を数か所検出したが、顕著な遺構･遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂礫層を確認したのみである。

２）本調査（第68図）

（１）調査の概要

平成30年度の第４次調査にて、遺構・遺物を確認したＢ１・５トレンチの中央部付近を拡張して、面的調査を行った。調査区は標高138.5～139mに位置する。

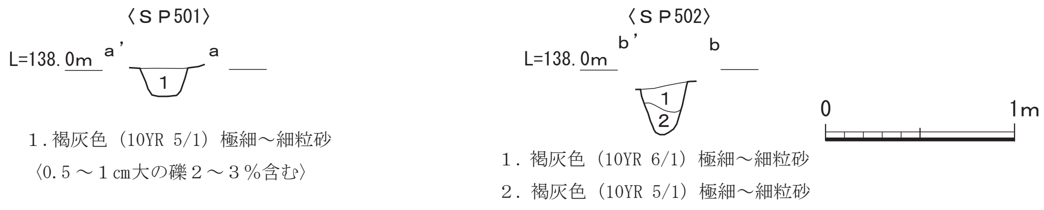
（２）基本層序（第69・70図）

基本層序は現代耕作土、旧耕作土を除去すると、西側の丘陵からの土石流等が堆積し、標高137.9m付近で自然堆積層を検出した。上層の旧耕作土掘削中に土師器・須恵器・瓦器・陶磁器等の遺物が出土した。いずれも細片であり、周辺からの流入と考えられる。このような状況はＢ～Ｆ地区で共通する。調査地内には、礫で構成される土石流と礫の少ない安定地盤が広がり、安定地盤上にて後述するピットや土抗の可能性のある土色変化を確認したものの、いずれも明確な掘形や埋土は確認できず、Ｂ地区では全体的に遺構・遺物の分布は希薄と言える状況である。

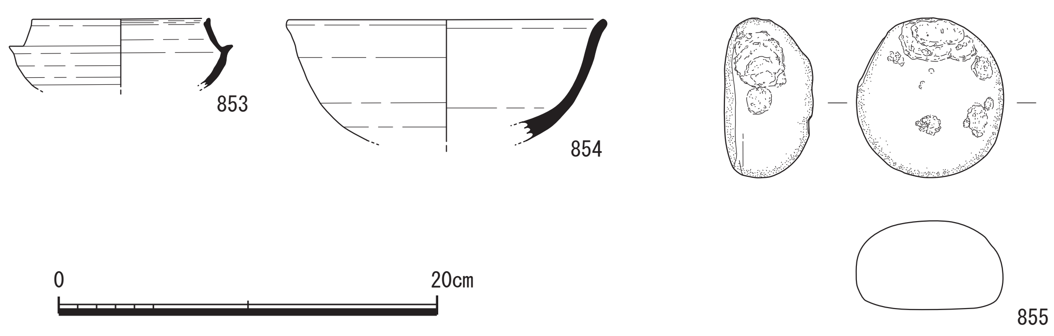
（３）検出遺構

ピットＳＰ501・502（第68・71図）中央やや西側の安定地盤面上にて検出した。いずれも径約0.3m・深さ0.15～0.25mを測り、一段下げの段階で、柱痕等は確認できない。出土遺物はなく時期不明であり、遺構ではなく落ち込みとなる可能性もある。

また、小規模調査の段階でＢ１トレンチにて検出したピット状の土色変化や、Ｂ５トレンチにて検出した隅丸長方形状の土坑と考えた部分については、掘削を進めても明確な掘形を確認できず、出土遺物についても、一段下げの段階で少量の土師器片を検出したのみで、遺構の可能性は



第71図　Ｂ地区ＳＰ501・502断面図



第72図　Ｂ地区出土遺物

低く、落ち込みと考える。

（4）出土遺物（第72図853～855）

853・855はＢ１トレンチから出土した。853は須恵器杯身であり、時期は陶邑編年ＴＫ23・47型式と考える。854はＢ５トレンチから出土した青磁椀口縁部である。855は安山岩製の敲石で、一方のみに敲打痕が認められる。

（5）小結

Ｂ地区全体を見ると、北部に設けた２・３・９トレンチでは、重機掘削面から0.4～0.6m下で安定地盤を検出したが、遺構は確認できなかった。南部の１・４～８・10トレンチでは、床土の直下から、西側の丘陵部からの土石流と判断する砂礫の堆積を検出した。トレンチ内では軟弱ながら砂を主とした安定地盤を確認した。精査を行った結果、床土層から摩滅した土師器・陶磁器破片がわずかに出土した。

本調査部分においても、当初、遺構の可能性があると判断した箇所の掘削と、周辺の遺構・遺物の分布状況の確認のために拡張して調査を行ったものの、顕著な遺構・遺物は確認できず、同地区の他のトレンチで検出したような土石流を複数確認したのみである。隣接するD地区も同様の状況であり、Ｂ地区・Ｄ地区の範囲に遺構の分布はみられない。

６．Ｃ～Ｆ地区の調査

調査対象地東部の標高130～138m付近に小規模トレンチを設定し、調査を行なった。以下、Ｃ地区から順に詳述する。

１）Ｃ地区（第73・74図）

調査対象地の東側、標高132.5～133.0m付近に位置する。耕作土除去後に４か所のトレンチを設定し、重機掘削を行った。以下では、各トレンチの概要について報告する。

Ｃ１トレンチ　幅３mの「キ」字状の調査区である。床土下0.6～0.7mでシルト質土からなる安定地盤を検出し精査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。また、西端部にて、部分的に谷状の落ち込みを確認した。

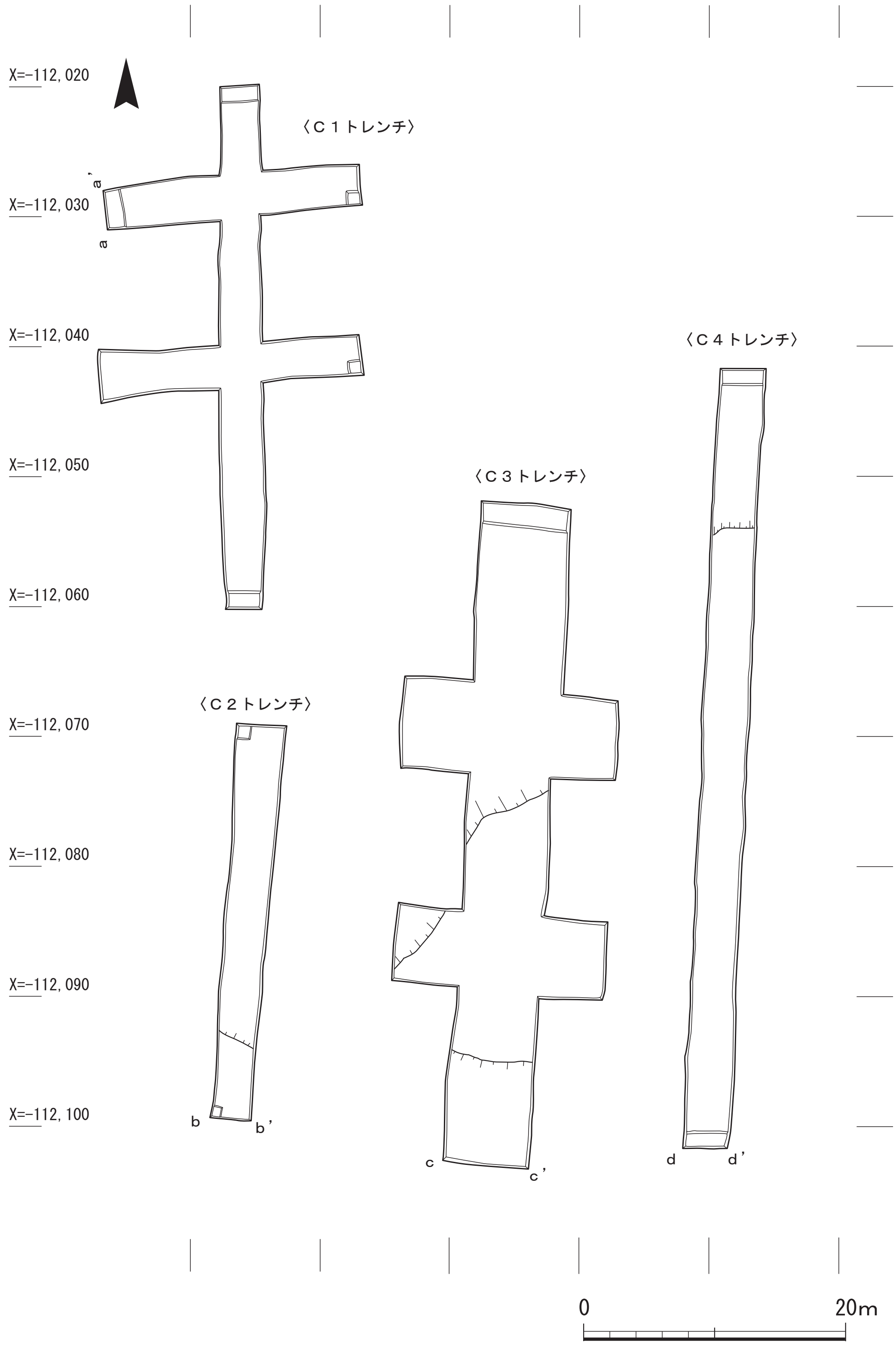
Ｃ２トレンチ　幅3.8m、長さ30.4mの調査区である。表土下1.0mで、シルト質土からなる安定地盤と、南側に谷地形を検出したものの、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

Ｃ３トレンチ　幅７mの「キ」字状の調査区である。表土下0.6mで、シルト質土からなる安定地盤と、西側に隣接するＣ２トレンチ南側で確認した谷地形の続きを検出した。この谷地形の断ち割りを行ったところ、標高131.8m付近にて自然堆積層を確認した。顕著な遺構・遺物は確認できなかったものの、谷地形内にて、土師器片や木片・有機質等を検出した。

Ｃ４トレンチ　幅3.6m、長さ60.2mの調査区である。表土下0.8mで、シルト質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確

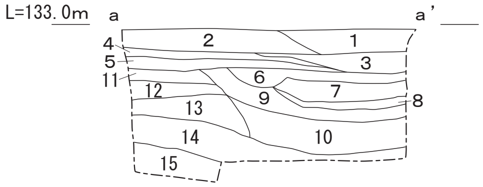
認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。顕著な遺構・遺物は確認できなかったものの、谷地形内にて、土師器片や木片・有機質等を検出した。

Ｃ地区全体では、すべてのトレンチで広範囲にわたり安定地盤を検出した。精査を行ったが、遺構は確認できなかった。しかし、２～４トレンチの南端部で南に下がる谷状地形の傾斜面を検



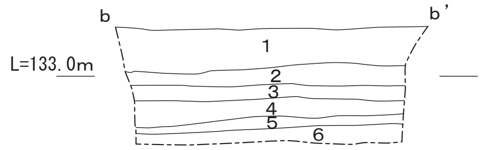
第73図　Ｃ１～４トレンチ配置図

〈Ｃ１トレンチ西壁〉



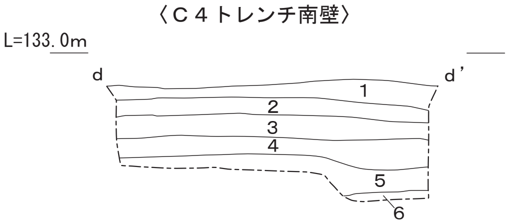
1．オリーブ灰色（10Y 4/2）中粒砂シルト
2．オリーブ黒色（10Y 3/2）極細粒砂シルト
3．暗オリーブ灰色（2.5GY 3/1）極細粒砂シルト
4．オリーブ黒色（7.5Y 3/2）極細粒砂シルト
5．暗赤褐色（2.5YR 3/1）極細粒砂シルト
6．灰褐色（7.5YR 4/2）細粒砂シルト
7．オリーブ黒色（7.5Y 3/1）極細粒砂シルト
8．黒褐色（10YR 2/2）極細粒砂〈有機物を多く含む〉
9．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）極細粒砂シルト
10．黒褐色（7.5YR 2/2）極細粒砂シルト
11．暗赤灰色（2.5YR 3/1）極細粒砂シルト
12．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）極細粒砂シルト〈0.1～0.3cmの礫を多く含む〉
13．灰黄褐色（10YR 4/2）極細粒砂
14．暗緑灰色（7.5GY 4/1）粗粒砂シルト
15．暗オリーブ灰色（2.5GY 3/1）細粒砂シルト

〈Ｃ２トレンチ南壁〉



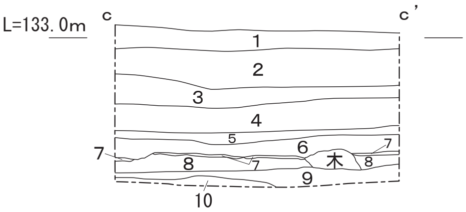
1．暗灰黄色（2.5Y 4/2）粗粒砂シルト
2．黒褐色（7.5YR 3/1）細粒砂シルト〈0.2～0.4cmの礫を含む〉
3．褐色（10YR 4/4）細粒砂シルト
4．灰黄褐色（10YR 4/2）細粒砂シルト
5．オリーブ褐色（2.5Y 4/4）極細粒砂
6．黒色（7.5YR 1.7/1）極細粒砂シルト

〈Ｃ４トレンチ南壁〉



1．黒褐色（2.5Y 3/2）粘質微砂
2．黒褐色（2.5Y 3/2）粘質微砂〈酸化マンガン多く含む〉
3．暗褐色（10YR 3/3）粘質微砂〈酸化マンガン含む〉
4．暗褐色（10YR 3/3）粘質微砂〈酸化マンガン多く含む〉
5．黒色（10YR 1.7/1）シルト〈木・有機物多く含む〉
6．灰色（7.5YR 5/1）細粒砂
7．灰オリーブ色（5Y 4/2）粘土

〈Ｃ３トレンチ南壁〉



1．黒褐色（2.5Y 3/2）粘質微砂
2．黒褐色（2.5Y 3/2）粘質微砂〈酸化マンガン多く含む〉
3．暗褐色（10YR 3/3）粘質微砂〈酸化マンガン含む〉
4．暗褐色（10YR 3/3）粘質微砂〈酸化マンガン多く含む〉
5．黒褐色（10YR 3/2）粘質微砂〈酸化マンガン多く含む〉
6．黒褐色（7.5YR 3/1）粘質極微砂〈小礫混じる〉
7．灰オリーブ色（5Y 4/2）粘土
8．黒褐色（7.5YR 3/1）シルト
9．黒色（7.5YR 1.7/1）シルト〈木・有機物多く含む〉
10．灰オリーブ色（7.5Y 5/2）砂礫〈0.2～5cm大〉

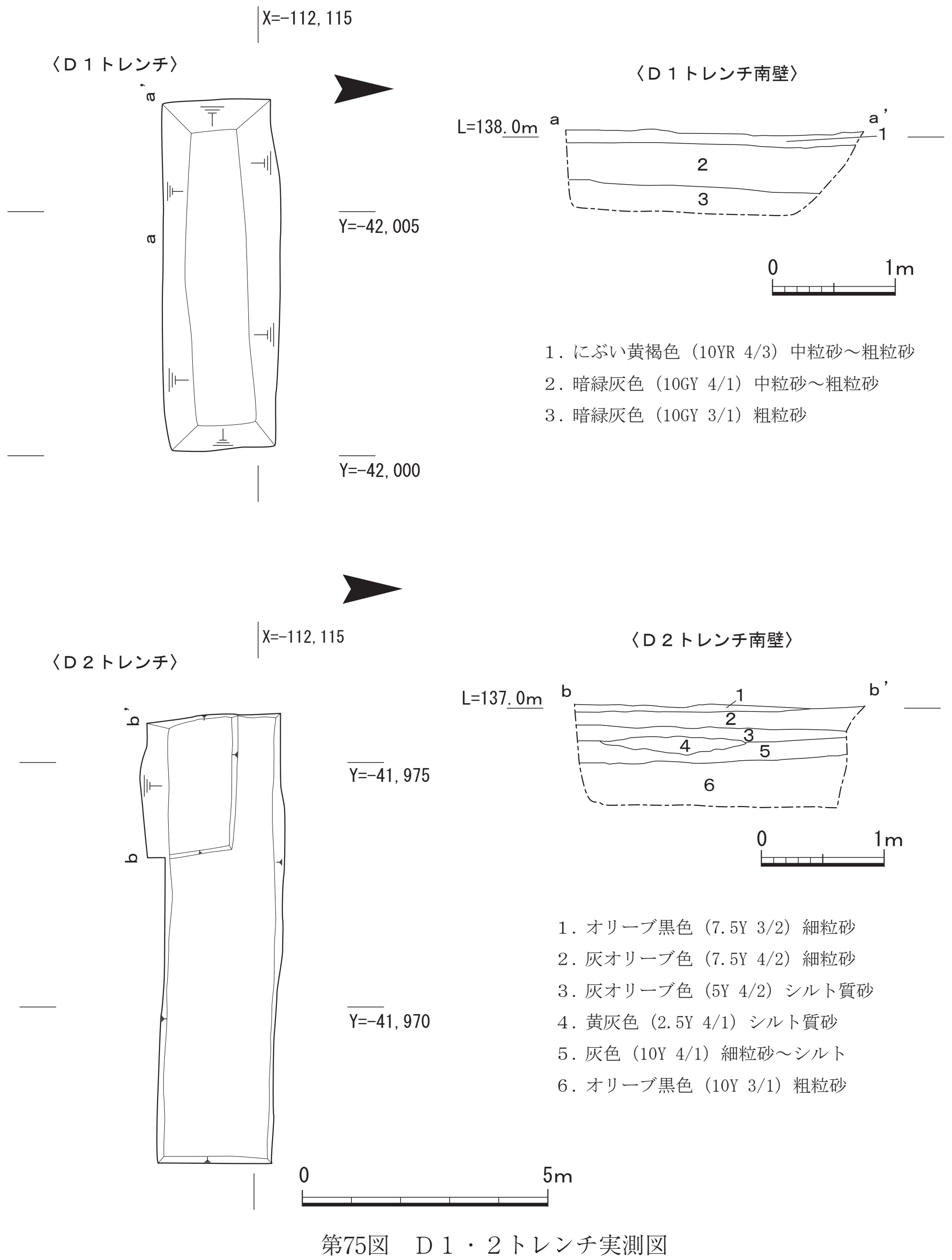
第74図　Ｃ１～４トレンチ断面図

出した。谷地形の下層には黒色粘質砂が堆積し、この中には少量の土師器の破片と樹枝や種子等が含まれていた。後述するＥ２トレンチ南西部の自然木やＦ５トレンチ拡張の第７次調査で確認された、灌漑・開発関係の遺構と関連する遺構がＣ地区南東部にまで広がる可能性がある。

２）Ｄ地区（第75図）

Ｂ地区と農道を挟んで南側の標高137～138m付近に２か所のトレンチを設定し調査を行った。

Ｄ１トレンチ　幅2.5m、長さ7.5mの調査区である。表土、旧耕作土を除去すると、全面で土



第75図　Ｄ１・２トレンチ実測図

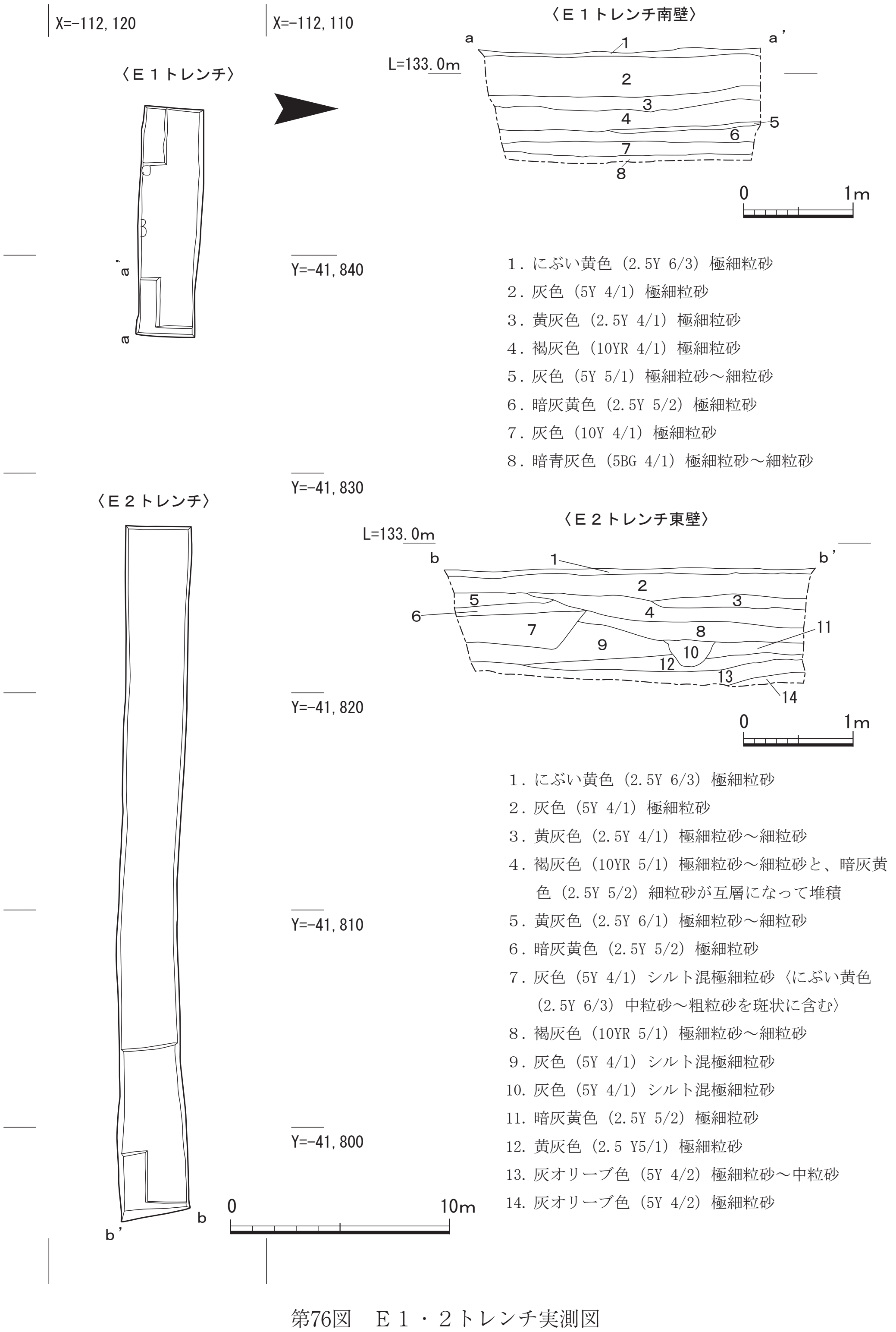
石流堆積層と考えられる礫層を検出し、遺構及び安定地盤は確認できなかった。

Ｄ２トレンチ　幅3.0m、長さ9.5mの調査区である。表土、旧耕作土を除去すると、Ｄ１トレンチとは対照的に、土石流堆積は確認できず、標高136.8m付近にてシルト質土からなる安定地盤を確認したが、遺構は確認できなかった。

Ｄ地区では、上述のようにほとんど遺構・遺物は確認できない。同様の状況は北側に隣接するＢ地区でも確認できることから、この付近の遺構の分布は希薄である。

３）Ｅ地区（第76・77図）

調査対象地南東部にあたり、農道を挟んで北側にＣ・Ｆ地区が分布する。標高130.5～133.2mの範囲にて３か所のトレンチを設定し調査を行った。



第76図　Ｅ１・２トレンチ実測図

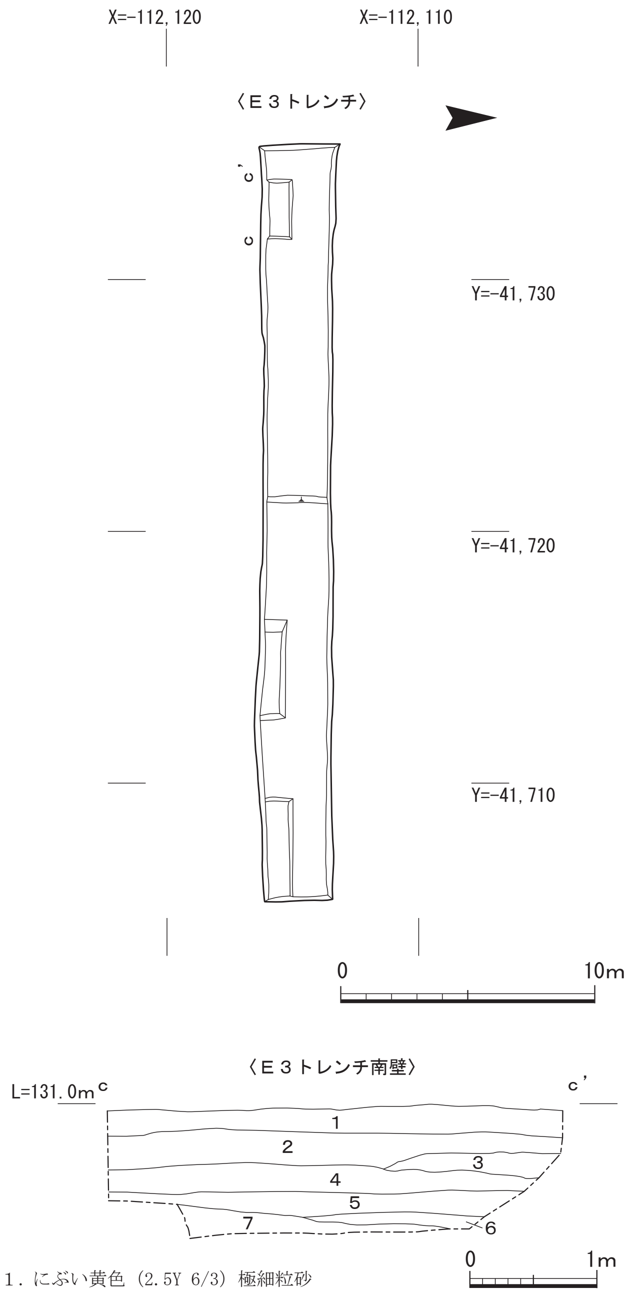
Ｅ１トレンチ　幅３ｍ、長さ11ｍの調査区である。表土、旧耕作土、洪水堆積層等が堆積し、標高約132.5ｍ付近で自然堆積層を確認した。自然堆積層直上の層には、土師器・須恵器などの遺物が含まれることから包含層の可能性もある。精査段階で古墳時代前期の土師器（布留式甕等）を含むピットまたは土坑状の土色変化を３か所確認したが、遺物を取り上げた時点で遺構の輪郭は現れず、地面の落ち込みに直上の層の土が堆積した可能性が高い。遺物が出土したことから、

遺構の有無等を確認するために水田範囲内で拡張を行ったが、遺構は確認できなかった。

Ｅ２トレンチ　幅３ｍ、長さ39mの調査区である。表土、旧耕作土、洪水堆積層等が堆積し、標高132.1m付近で、自然堆積層を確認した。検出面の北半は、北側のＣ３・４トレンチで検出した谷地形の続きと考えられる落ち込みを確認した。この埋土からは土師器・須恵器・瓦器等が出土した。Ｅ１トレンチと同様に、水田範囲内で拡張を行ったところ、トレンチ西端付近にて自然木等が出土したが、明確な遺構は確認できなかった。

Ｅ３トレンチ　幅３ｍ、長さ30mの調査区である。表土、旧耕作土、洪水堆積層等が堆積し、標高約130m付近にて自然堆積層を確認した。遺構は確認できなかった。

Ｅ地区については、明確な遺構は確認できないものの、古墳時代の土師器・須恵器が出土した。後述するＦ５トレンチの拡張である第７次調査では、Ｅ１・Ｅ２トレンチも拡張範囲に含まれた。



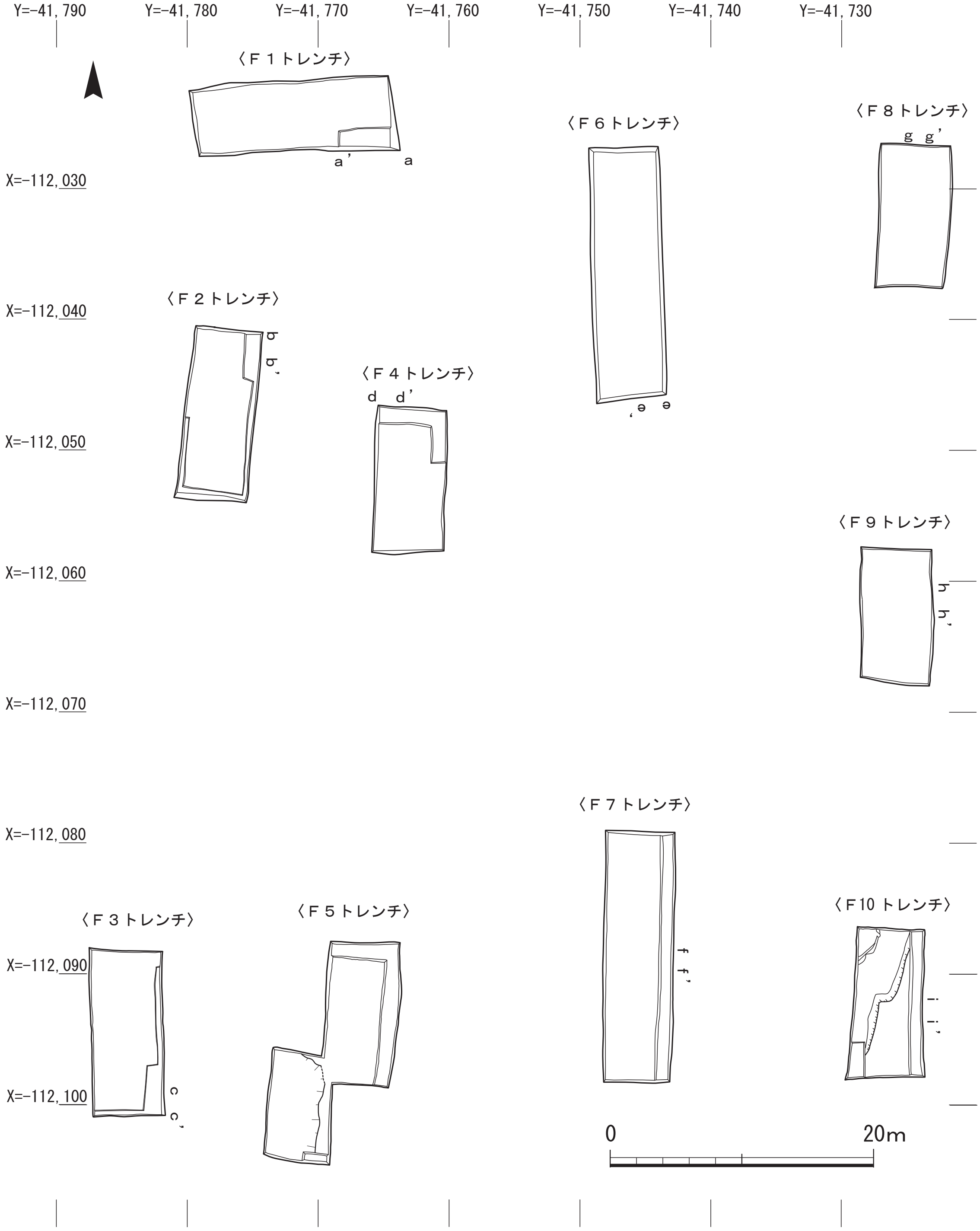
1．にぶい黄色（2.5Y 6/3）極細粒砂
2．にぶい黄色（2.5Y 6/3）細粒砂～中粒砂
3．灰白色（2.5Y 7/1）極細粒砂～細粒砂
4．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂～中粒砂
5．灰黄褐色（10YR 5/2）極細粒砂シルト
6．青灰色（10BG 5/1）極細粒砂
7．にぶい黄橙色（10YR 7/2）中粒砂～粗粒砂

第77図　Ｅ３トレンチ実測図

４）Ｆ地区（第78～82図）

調査対象地東端の調査区であり、農道を挟んで西側にＣ地区、南側にＥ地区が分布する。標高129.8～132.4m付近にて13か所のトレンチを設定し調査を行った。

Ｆ１トレンチ　幅５ｍ、長さ15mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂質土の堆積層を確認したのみである。また、断ち割り内からは顕著な湧水が確認でき

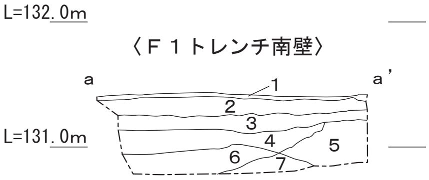


第78図　Ｆ１～10トレンチ配置図

た。

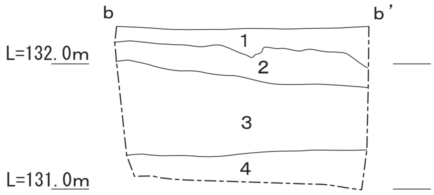
Ｆ２トレンチ　幅5.2m、長さ13.3mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤と中央部で土石流堆積を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂礫土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ３トレンチ　幅5.6m、長さ13mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行



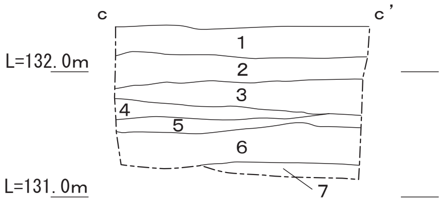
〈F1トレンチ南壁〉

1．黄褐色（2.5Y 5/3）中粒砂～粗粒砂
2．明緑灰色（7.5GY 7/1）極細砂～細粒砂
3．浅黄色（2.5Y 7/3）極細砂～細粒砂
4．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂～中粒砂〈東方向に傾斜するラミナ確認〉
5．明黄褐色（10YR 6/6）中粒砂～粗粒砂〈1～5cm 大の礫 15～20％含む〉
6．灰黄褐色（10YR 6/2）極細粒砂混シルト
7．青灰色（5BG 5/1）細粒砂混シルト〈1～1.5cm 大の礫 3％含む〉



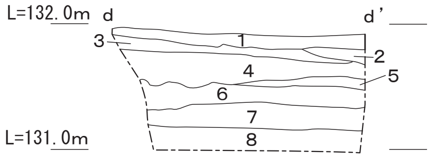
〈F2トレンチ東壁〉

1．黄褐色（2.5Y 5/3）中粒砂～粗粒砂
2．灰黄色（2.5Y 6/2）細粒砂
3．明褐色（7.5YR 5/6）粗粒砂
4．黒色（N 2/0）極細粒砂混シルト



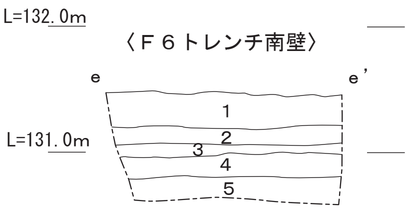
〈F3トレンチ東壁〉

1．暗灰黄色（2.5Y 5/2）極細粒砂～細粒砂
2．黄灰色（2.5Y 5/1）極細粒砂～細粒砂
3．黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒砂～細粒砂
4．灰色（5Y 6/1）極細粒砂～細粒砂
5．暗灰黄色（2.5Y 4/2）極細粒砂～細粒砂
6．暗緑灰色（10GY 4/1）極細粒砂～細粒砂
7．黒色（N2/0）極細粒砂混シルト



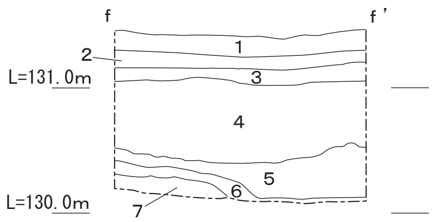
〈F4トレンチ北壁〉

1．灰黄褐色（10YR 4/2）細粒砂
2．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）極細粒砂～細粒砂
3．暗灰黄色（2.5Y 4/2）細粒砂
4．暗灰黄色（2.5Y 5/2）極細粒砂～細粒砂
5．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト
6．オリーブ黒色（5Y 3/1）極細粒砂～シルト
7．オリーブ黒色（5Y 2/2）極細粒砂～細粒砂
8．オリーブ黒色（10Y 3/1）中粒砂～細粒砂



〈F6トレンチ南壁〉

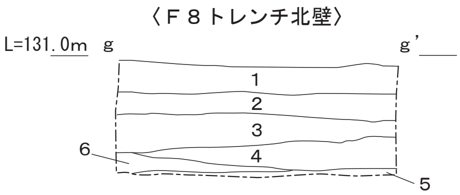
1．暗灰黄色（2.5Y 5/2）細粒砂
2．黒褐色（10YR 3/1）シルト質砂
3．灰黄褐色（10YR 4/2）シルト質砂
4．オリーブ黒色（5Y 3/1）シルト質砂
5．灰オリーブ色（5Y 4/2）細粒砂



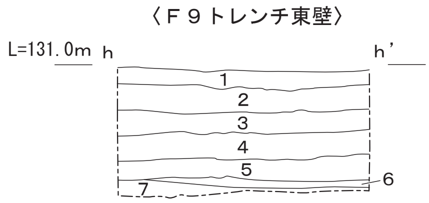
〈F7トレンチ東壁〉

1．灰オリーブ色（5Y 4/2）極細粒砂～細粒砂
2．暗灰黄色（2.5Y 5/2）中粒砂～細粒砂
3．オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中粒砂
4．黒褐色（2.5Y 3/2）粗粒砂～中粒砂
5．灰オリーブ色（2.5Y 5/2）中粒砂
6．灰色（7.5Y 4/1）中粒砂
7．暗オリーブ灰色（5GY 3/1）粗粒砂～中粒砂

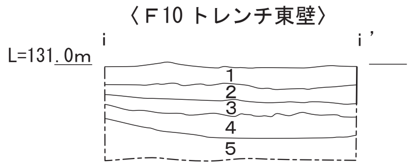
第79図　F1～4・6・7トレンチ断面図



1．灰色（5Y 6/1）極細粒砂～細粒砂
2．灰色（5Y 4/1）シルト混極細粒砂
3．灰色（5Y 5/1）シルト混極細粒砂
4．灰オリーブ色（5Y 5/2）極細粒砂～細粒砂
5．灰オリーブ色（5Y 4/2）極細粒砂～細粒砂
6．黄灰色（2.5Y 5/1）極細粒砂



1．灰色（5Y 6/1）極細粒砂～細粒砂
2．灰色（5Y 4/1）シルト混極細粒砂
3．灰色（5Y 5/1）シルト混極細粒砂
4．灰オリーブ色（5Y 5/2）極細粒砂～細粒砂
5．黄褐色（2.5Y 5/3）極細粒砂
6．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト混極細粒砂
7．暗オリーブ灰色（5GY 4/1）極細粒砂～細粒砂



1．灰オリーブ色（5Y 4/2）極細粒砂～細粒砂
2．暗灰黄色（2.5Y 5/2）中粒砂～細粒砂
3．オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中粒砂
4．灰オリーブ色（5Y 5/3）　粘土
5．黒褐色（2.5Y 3/2）粗砂～中粒砂

第80図　Ｆ８～10トレンチ断面図

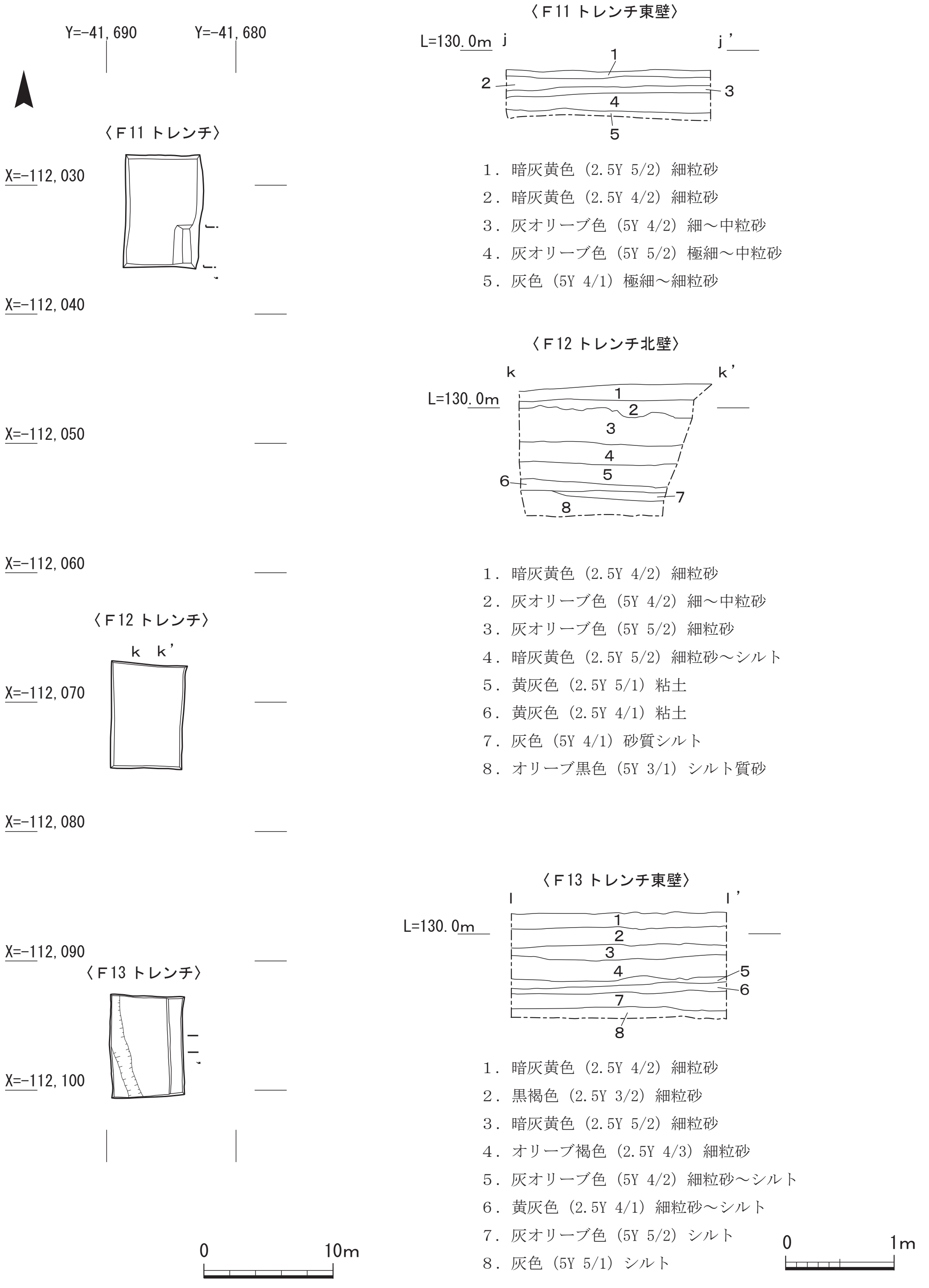
ったが、シルト質土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ４トレンチ　幅5.4m、長さ11.2mの調査区である。表土下0.5mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂質土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ５トレンチ（第82図）　幅５m、長さ11mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤を検出し、精査を行ったところ、南西隅角部の標高131.6m付近にて、古墳時代の土師器を多く含む黒褐色砂質土を確認した。この黒褐色砂質土の範囲を確定するため、南西隅部を拡張したところ、さらに南西に広がり、平面では全容を確認できない。南側を断ち割ると、深さ0.4mまで続き、明確な立ち上がりも確認できた。さらに、古墳時代の土師器も出土したことから、遺構と判断し、令和元年度後半期と、令和２年度の第７次調査でさらに拡張して調査を行った結果、古墳時代前期から中期前半の水利関連遺構、古代の条里に関する畦畔を確認した。調査の概略については、すでに公表しており[注3]、今後、正式な報告を行う予定である。

Ｆ６トレンチ　幅5.3m、長さ19.6mの調査区である。表土下0.6mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂質土の堆積層を確認したのみである。

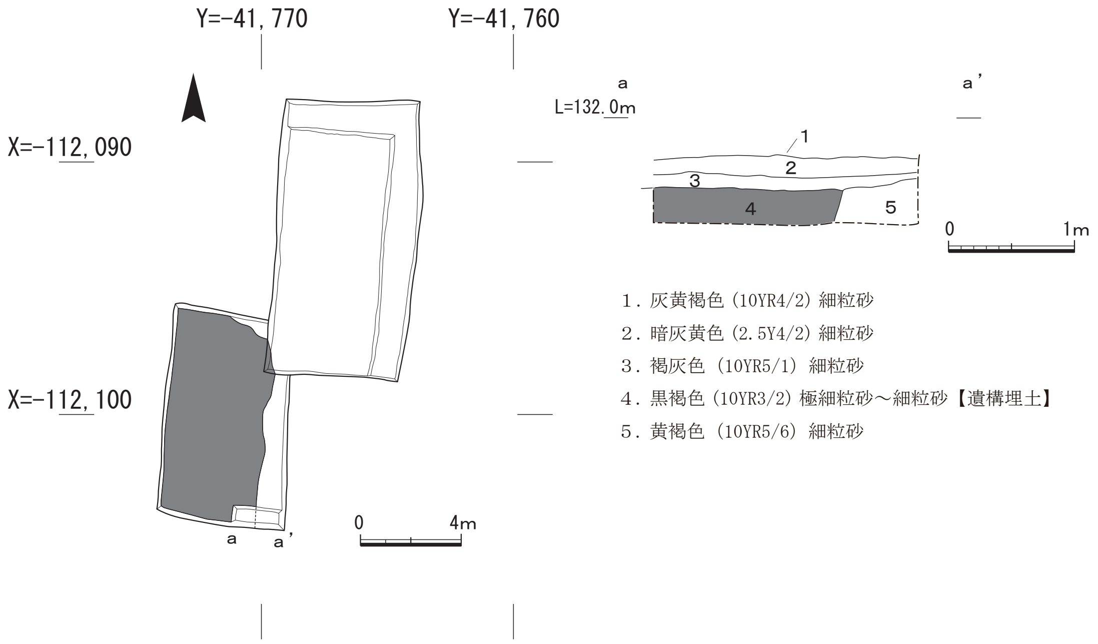
Ｆ７トレンチ　幅5.2m、長さ19.2mの調査区である。表土下0.5mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂礫土の堆積層を確認したのみである。



第81図　Ｆ11～13トレンチ実測図

Ｆ８トレンチ　幅5.4m、長さ11.2mの調査区である。表土下0.9mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂質土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ９トレンチ　幅5.6m、長さ10mの調査区である。表土下0.9mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行



第82図　Ｆ５トレンチ実測図

ったが、砂質土の堆積層を確認したのみである。

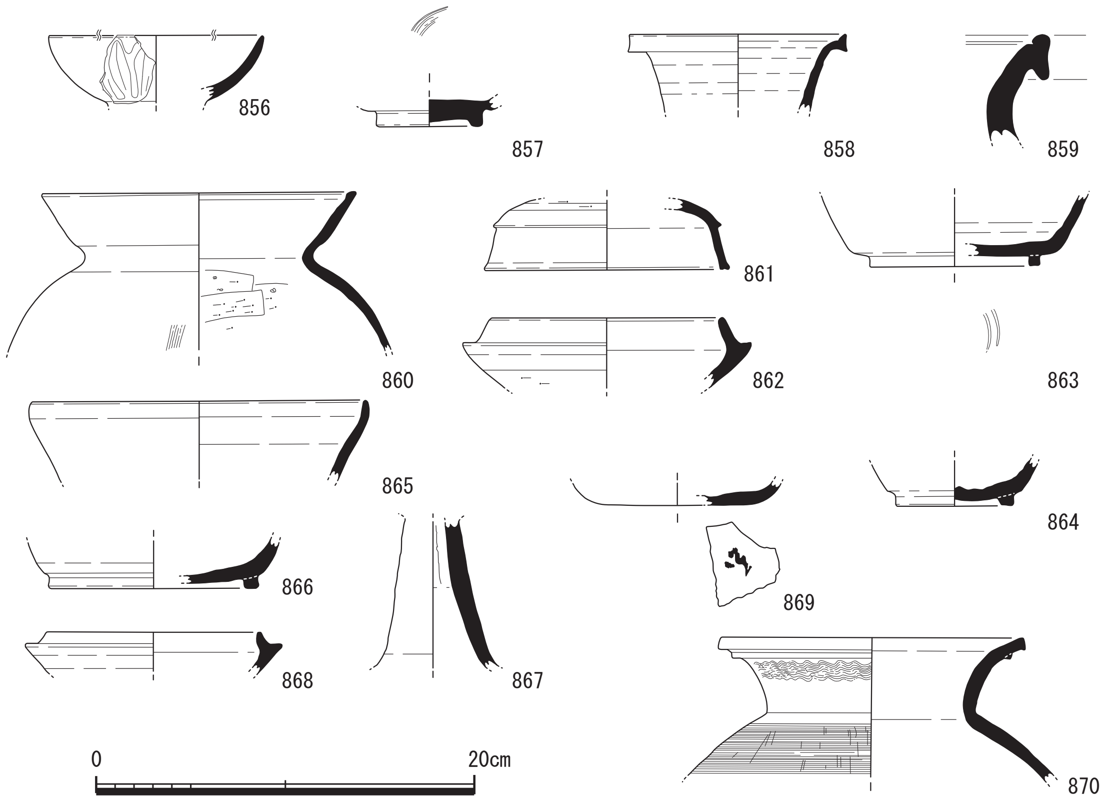
Ｆ10トレンチ　幅5.2m、長さ11.7mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤と、北東から南西方向の礫からなる洪水堆積を確認した。顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂礫土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ11トレンチ　幅5.7m、長さ8.8mの調査区である。表土下0.4mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、砂質土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ12トレンチ　幅5.9m、長さ8.4mの調査区である。表土下0.5mで、砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質土の堆積層を確認したのみである。

Ｆ13トレンチ　幅5.8m、長さ８mの調査区である。表土下0.5mで、砂質土からなる安定地盤と、北西から南東に延びる自然流路の痕跡を確認した。この自然流路の検出段階で、870の須恵器甕が出土したものの、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、シルト質の堆積層を確認したのみである。

Ｆ地区全体として、Ｆ３～10、12トレンチで安定面を確認したが、Ｆ１・２・11・13トレンチでは安定面と共に広範囲で洪水堆積層を確認した。隣接したトレンチであっても異なる堆積状況となることがわかり、全体として、礫や砂で構成される洪水堆積層と安定面が入り乱れて分布する状況が確認できる。



第83図　C～F地区出土遺物

5）出土遺物

①C地区

856はC２トレンチより出土した青磁皿である。外面に蓮弁文が確認できる。857はC3トレンチより出土した青磁椀の高台部であり、高台の内側には露胎部が確認できる。858はC4トレンチより出土した須恵器の壺の口縁部である。図化していないが、C２～４トレンチ南部の谷地形の中から、少量の土師器の破片と樹枝や種子等が出土した。

②D地区

出土遺物は、旧耕作土を掘削中に土師器・須恵器・瓦器・陶磁器片等の遺物が出土した。いずれも細片であり、周辺からの流入と考えられる。859はD２トレンチ精査時に出土した常滑焼の甕口縁部である。

③E地区

860はE１トレンチから出土した土師器甕である。口縁部の特徴から布留式甕と考えられ、内面には横方向の削りが確認できる。861～864はE２トレンチの精査時に出土した。861は須恵器杯蓋である。陶邑編年ＴＫ23・47型式に比定できる。862は須恵器杯身である。陶邑編年ＴＫ43型式に比定できる。863は須恵器杯Ｂである。高台はほぼ方形であり、高台内部に工具痕が２条確認できる。864は須恵器壺の底部である。高台径は６cmとやや小ぶりである。865はE３トレンチから出土した。須恵器甕の口縁部である。口縁端部が直立する。

④Ｆ地区

図化した遺物はいずれも精査時に出土した。866はＦ３トレンチより出土した須恵器杯Ｂである。867はＦ４トレンチより出土した土師器の高杯脚部である。やや細長い脚部であり、裾部付近のわずかに残存する箇所から、屈曲する可能性がある。色調は橙色を呈する。868はＦ５トレンチから出土した須恵器杯身である。869はＦ10トレンチより出土した須恵器杯身の底部である。底部外面に墨書が残存しており、不明瞭であるが「至」あるいは「玉」と記述されている。870はＦ13トレンチの自然流路跡より出土した須恵器の壺口縁部である。口縁端部に向かい外反させ、端部に面をつくる。端部からわずかに離して貼り付け突帯状の粘土紐を施す。肩部には、頸部の屈曲からわずかに下がった部分よりカキメが施される。時期は陶邑編年ＴＫ208型式頃と考える。

７．まとめ

１)遺構・遺物の分布

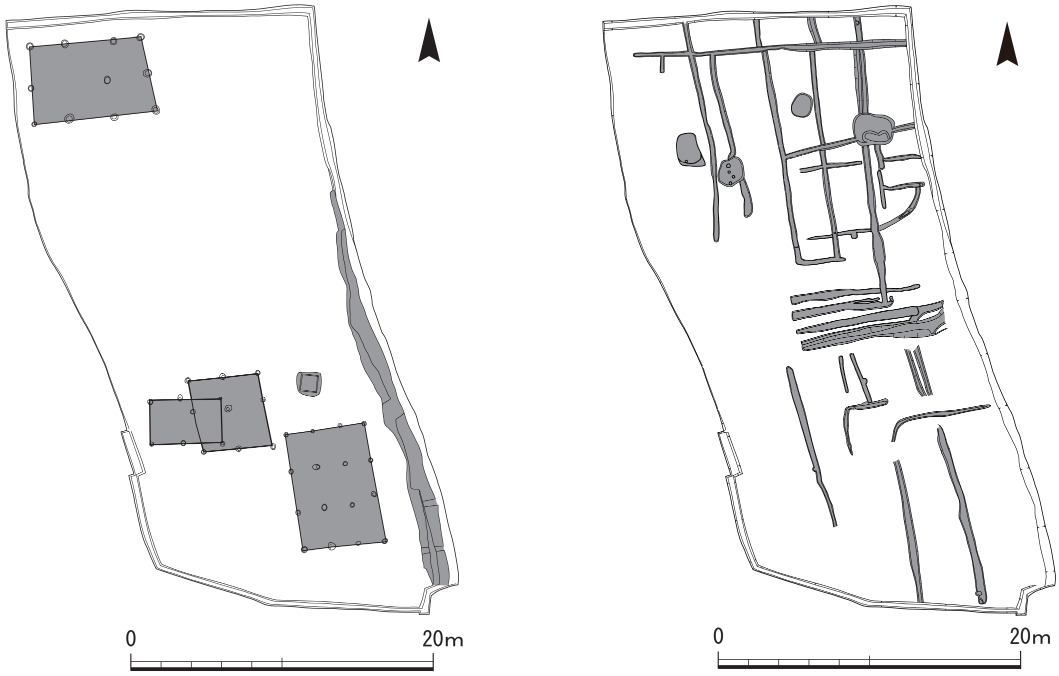
第３～５次調査を行った結果、遺跡範囲西端部の第４・５次調査のＡ１地区のみ、掘立柱建物や井戸などの居住域を確認した。この地点は、金生寺遺跡内でも特に丘陵部に近く、現況の集落に近接した地点である。未報告の第６～10次調査においても、明確な竪穴建物・掘立柱建物は確認できていない。Ａ１地区以外の居住域の範囲は不明であるものの、現況の集落と重複する部分に分布する可能性がある。Ｂ～F地区については、明確な集落関連の遺構は確認できなかったものの、Ｆ5トレンチでは、灌漑・開発関係の遺構が検出され、古墳時代前期後半から古代の遺物が出土した。なお、第4・5次調査区とは離れた、遺跡範囲の北端部に位置する第３次調査では、顕著な遺構・遺物は認められず、第４・５・７次調査地点との間に位置する地点で行われた第10次調査においても、顕著な遺構は確認できない。現時点では、遺跡範囲北部の遺構の分布は希薄であり、様相が不明瞭な状況である。

２)遺跡の変遷

第３～５次調査の内、多くの遺構・遺物を検出したＡ１地区を中心に、時期ごとの変遷をみていく。

（１)古墳時代～古代

この時期の明確な遺構は確認できなかったものの、ほとんどの地区の包含層中や遺構面精査中、遺構上層の混入遺物の中に、主に古墳時代の遺物が確認できることから、近隣に同時代の遺構が存在する可能性がある。Ａ１地区においても、包含層の他に、いずれも細片であり、混入と考えるが、土坑や溝から、布留式甕の口縁部や古墳時代の須恵器の破片が出土している。Ａ１地区の断ち割りから出土した緑色凝灰岩製管玉は、古墳の副葬品の可能性がある。金生寺遺跡より南方向の現在の中集落内に位置し、令和２年度に調査を行った法貴峠20号墳は、標高142mを測る丘陵裾よりさらに低い地点に所在しており、金生寺遺跡付近にも、削平・埋没した古墳が存在する可能性がある。



第84図　金生寺遺跡Ａ１トレンチ遺構変遷図(左：平安～中世、右：中世以降)

付近の遺跡では、南部の春日部遺跡で古墳時代中・後期の竪穴建物が複数確認されているものの、金生寺遺跡内では、未だ当該時期の建物等の明確な居住域は確認されていない。今後、これらの時期の遺構の確認が待たれる。古代については、F5トレンチ周辺の拡張調査である第７次調査において、条里に関する畦畔等が確認されており、付近に他の遺構が存在する可能性は高い。

（２）平安時代～中世前期

Ａ１地区のピットや包含層から、平安時代の「て」の字状口縁の土師器皿、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが一定量出土していることから、Ａ１地区周辺で、平安時代頃から人々の活動があったと考えられる。ただ、明確にこの時期の遺物を含む遺構は、今回の調査では確認できなかった。井戸ＳＥ210の廃絶直後の遺物の時期は、一番古いもので12世紀初頭であり、井戸の成立は11世紀後半に遡る可能性が高い。掘立柱建物や溝状遺構ＳＤ220についても、詳細な成立時期は不明であるものの、同様に11世紀後半代までさかのぼると考えられる。

12世紀には複数の掘立柱建物や井戸と、それらに伴う溝状遺構等から構成される宅地が存在したと考える。井戸については、井戸枠内や最下層の遺物の特徴から、12世紀初頭～前半には廃絶しており、井戸枠内埋土からの遺物から、井戸が廃絶してからも、一定期間は宅地が存続しており、Ａ１地区の宅地は、井戸上層や溝状遺構ＳＤ220に多量の遺物が投棄される12世紀後半～13世紀前半頃に廃絶したと考えられる。

（３）中世前期以降

宅地が廃絶した後に存在したと考えられる耕作溝を複数確認した。これらは重複している部分もあり、場所を変えながらある程度継続して、耕作地等として利用されていたと考える。また、これらの耕作溝を削平する土坑やピットも確認した。

この時期の居住域については、明確な建物遺構は確認できていないものの、より現在の法貴・中集落に近い金生寺遺跡第８次調査や法貴峠古墳群第２次調査などで、柱穴となりそうなピットや土抗等が確認されており、13世紀頃には、現在の法貴・中集落と重複する位置に集落が形成されたと考えられる。耕作地としての具体的な様相や存続時期については不明な点が多く、へそ皿など確認できない遺物もあり、継続して耕作地となっていたのか、断絶時期があったかは詳細にできない。

中世以降も前代に引き続き、基本的には耕作地として利用されていたと考える。Ａ１地区の北西部のＡ２地区で検出された集石遺構ＳＸ200は、17世紀後半から18世紀初頭の近世前期に位置付けられる。摂丹街道の近くに位置することから、耕作地以外にも何らかの土地利用はされていたと考えられる。（荒木瀬奈）

３）遺物からみた金生寺遺跡の特徴

金生寺遺跡の出土遺物で注目されるのは瓦器であるが、すでに詳述されているので、ここでは輸入陶磁器を主として、出土傾向をみていきたい。ただ、ここで対象としたのは、本調査地と小規模調査地の床土など、遺物を包含する層から出土した遺物がほとんどで、主要遺構から出土した遺物ではないものである。そのため、小片が多く、今回の報告では図示し得なかったものを、観察の対象とした。なお、点数は破片数である。

出土した輸入陶磁器は、中国製の白磁・青磁が主である。白磁では、椀Ⅳ・Ⅴ類が多く、11世紀後半から12世紀前半頃に位置付けられる。同時期の椀Ⅱ類も、少量含まれる。また、１点ではあるが、13世紀後半から14世紀前半頃に位置付けられる口禿の椀Ⅸ類がある。皿では、11世紀後半から12世紀前半頃に位置付けられるⅥ類や13世紀後半から14世紀前半頃に位置付けられる口禿のⅨ類が少数みられる。このほか、小椀や壺の一部とみられる小片も含まれる。以上の白磁は、不明のものも含めて、112点を数え、出土した輸入陶磁器のほぼ69％を占める。

青磁では、龍泉窯系と同安窯系の製品がみられる。龍泉窯系の製品が多く、同安窯系の製品の約６倍を占める。龍泉窯系の青磁では、外面に蓮弁文をもつ椀Ⅱ類が多い。13世紀前後から前半頃に位置付けられる。それに先行する椀Ⅰ類もある。また、14世紀初頭から後半頃に位置付けられる椀Ⅳ類や小椀Ⅳ類も含まれる。白磁椀Ⅸ類や白磁皿Ⅸ類の時期と部分的に重複するものか。さらに、口縁端部が輪花になる皿もある。同安窯系の製品では、外面に櫛目文をもつ椀がある。以上の青磁は、不明のものも含めて、44点を数え、出土した輸入陶磁器のほぼ27％を占める。

このほか、輸入陶磁器では、青白磁の小皿や合子がみられる。また、褐釉の直口壺が１点出土している。なお、直口壺の破片数は複数であるが、同一個体のため、１点とした。この直口壷は、平滑に張った肩部から頸部が直線的に立ち上がる。類例の少ない形状である。胎土は白く精良である。器胎は薄く焼成は堅緻である。蓋を伴うものか、口縁端部は無釉である。注目される遺物である。以上の青白磁と褐釉の点数は５点であり、出土した輸入陶磁器の４％を占める。

金生寺遺跡の輸入陶磁器を概観すると、白磁が多数を占めている。青磁の約2.5倍の出土数である。このような傾向が、時期的な様相を示すものか、または、地域的な事情に起因するのかど

付表３　輸入陶磁器数量表

<table>
<tr><td>種類</td><td colspan="11">白　磁</td><td colspan="10">青　磁</td><td colspan="3">青白磁</td><td>褐釉</td></tr>
<tr><td rowspan="2">器種</td><td rowspan="2" colspan="5">椀</td><td rowspan="2" colspan="3">皿</td><td rowspan="2">小椀</td><td rowspan="2">壺</td><td rowspan="2">不明</td><td colspan="8">龍　泉　窯　系</td><td colspan="2">同安窯系</td><td rowspan="2">小皿</td><td rowspan="2">合子</td><td rowspan="2">不明</td><td rowspan="2">壺</td></tr>
<tr><td colspan="4">椀</td><td>小椀</td><td colspan="3">皿</td><td>椀</td><td>皿</td></tr>
<tr><td>類</td><td>Ⅱ</td><td>Ⅳ</td><td>Ⅴ</td><td>Ⅸ</td><td>不明</td><td>Ⅵ</td><td>Ⅸ</td><td>不明</td><td></td><td></td><td></td><td>Ⅰ</td><td>Ⅱ</td><td>Ⅳ</td><td>不明</td><td>Ⅳ</td><td>Ⅰ</td><td>輪花</td><td>不明</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">数量</td><td rowspan="2">3</td><td rowspan="2">23</td><td rowspan="2">19</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">23</td><td rowspan="2">2</td><td rowspan="2">3</td><td rowspan="2">11</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">25</td><td>3</td><td>10</td><td>5</td><td>14</td><td>2</td><td>1</td><td>1</td><td>2</td><td>5</td><td>1</td><td rowspan="2">2</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td></tr>
<tr><td colspan="8">38</td><td colspan="2">6</td></tr>
<tr><td>小計</td><td colspan="11">112</td><td colspan="10">44</td><td colspan="3">4</td><td>1</td></tr>
<tr><td>総計</td><td colspan="25">161</td></tr>
</table>

付表４　須恵器系土器数量表

<table>
<tr><td>時代</td><td>古墳</td><td colspan="4">古　代</td><td>中　世</td><td>不　明</td></tr>
<tr><td>種類</td><td>須恵器</td><td>須恵器</td><td>緑釉</td><td>灰釉</td><td>篠鉢</td><td>東播</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">点数</td><td rowspan="2">45</td><td>46</td><td>15</td><td>7</td><td>14</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="4">82</td><td>64</td><td>527</td></tr>
<tr><td>総計</td><td colspan="7">718</td></tr>
</table>

うかについては、他の調査例との比較検討が必要である。ここでは、金生寺遺跡での出土傾向を示すにとどめる。

須恵器系のものについては、数は多いものの、小片が多く、時期や器種などが明確にわかるものは少ない。古墳時代の須恵器は、確認できたものは45点であり、須恵器系の製品で確認した点数のほぼ24％にあたる。今回の調査では、古墳時代の顕著な遺構は検出していない。ただ、調査地東側山地の山腹から山麓部には、古墳が多数築造されている。このような古墳が土石流などで破壊されて流失した結果、副葬品の一部が堆積した可能性も考えられる。今回の調査でも、土石流の痕跡を確認している。また、近隣の犬飼遺跡第４・５次調査でも、古墳時代前期の溝が横ずれを起こす程の地殻変動があったことを確認している。Ａ１地区で、緑色凝灰岩製管玉が出土しているのも、災害の傍証の可能性も考えられる。

古代については、確認できたものの総数191点のうち、82点を数え、ほぼ43％を占める。今回の調査では、古代の顕著な遺構は検出していないが、緑釉製品も含まれており、付近に何らかの古代の遺跡が存在することを示唆するものとみられる。なお､篠窯の製品として計上したものは、玉縁状の特徴的な口縁部をもつ鉢である。地理的に見て、不明製品の中にも篠窯のものが含まれている可能性は大きい。

東播系須恵器は、中世須恵器系の製品では代表的なものである。今回の調査でも、多数出土している。確認したのは､鉢である。64点を数え、ほぼ33％を占める。かなり多数を占めているが、東播から搬入された製品としては、甕などもあると考えられる。不明としたものの中にも、そのようなものが含まれている可能性は高い。輸入陶磁器とともに、他地域から搬入されたものの代

表的なものと言える。

計数の対象とはしていないものに、炻器系の製品がある。常滑・丹波・備前などの六古窯系のものである。中でも、口縁部が外反し内面に沈線状の段をもつ14世紀後半から15世紀頃に位置付けられる丹波の甕や、口縁部が幅広の16世紀頃に位置付けられる備前の擂鉢は、Ａ２地区で検出した集石遺構ＳＸ200からの出土遺物と共通する。中世後期段階の当地の土地利用を示す遺物とも言えよう。　（引原茂治）

４）Ａ１地区の宅地について

今回の調査では、Ａ１地区で検出した平安時代後期から中世前期にかけての宅地の様相が明らかになった点が特筆される。そこで、この宅地の詳細について見ていきたい。掘立柱建物は４棟あり、主屋（ＳＢ130・180）や付属屋（ＳＢ190・215）と推定される建物を確認した。一部、重複していることから、建て替えられて一定期間はこの宅地に居住されていたと考えられる。

井戸は廃絶から埋没、さらにそれが属する宅地自体の廃絶までの存続状況が判明する貴重な一例になった。曽我部町内で平安時代から中世にかけての井戸の検出例は他になく、亀岡盆地全体を見渡すと、千代川遺跡、北金岐遺跡、太田遺跡、大淵遺跡、時塚遺跡、佐伯遺跡等で近接する時期の平安時代後期から中世の木組みの井戸が確認されている。これらと比較すると、規模や深さ等の法量は平均的であるものの、ＳＥ210のような井戸枠の下に石敷きを敷設する構造は認められない。また、廃絶・埋没後も比較的丁寧に扱われている印象を受ける。また、上層や埋土からは多くの遺物が出土したことと同時に、埋土の自然化学分析と井戸枠部材の樹種同定により、宅地周辺の植生や木材利用等についての詳細な状況が判明した。

溝状遺構ＳＤ220については、全容は判明しなかったものの、北西･南東方向にのびる平面形や、掘立柱建物ＳＢ180に近接し、方位も揃えることから、宅地を区画する溝となる可能性がある。曽我部町内でこのような機能を持つ区画溝の可能性のある遺構としては、金生寺遺跡の南側に位置する春日部遺跡第２次調査で確認された溝ＳＤ290があげられる。ＳＤ290は南北19.4ｍ、東西41.1ｍのＬ字形で検出しており、幅3.3～4.6ｍ、深さ0.24～0.4ｍを測る。また、溝に設けられた土橋を１基確認している。ＳＤ290の内側には掘立柱建物４棟と柵列等が確認されており、時期は10世紀後半から12世紀後半と考えられる[注４]。時期的には、Ａ１地区の宅地よりもやや古い時期に成立し、埋没も数十年から半世紀ほど早いものの、重複している期間があり、平安時代後期の宅地と考えられる。ＳＤ220と春日部遺跡第２次調査のＳＤ290を比較すると、深さが0.4ｍ未満と浅く、掘形の断面形が半円形に近い緩やかな立ち上がりであることは近似するものの、ＳＤ290の方がより整った平面形であり、方位も正方位に近い。このように、近接する時期の宅地に伴う溝状遺構であっても、共通する部分と相違する部分が認められることから、用途・機能の相違などを含め、複数の類型に区分できる可能性があり、今後、他の事例も合わせて検討する必要がある。

宅地内部の遺構やその周辺からは多くの遺物が出土した。これらの中には、近隣で類例の認められない中国製の褐釉の直口壺（第61図835）や複数の輸入陶磁器の破片が含まれる。また、ＳＥ210の井戸枠内出土の瓦器椀の中には、樟葉型の他に少量の大和型（第31図14・23）と和泉型（27・

28)の特徴を持つものが認められる。特に和泉型瓦器椀の出土は、亀岡盆地では現状でＳＥ210からのもののみであり、これらの様々な地域からの物品を手に入れることができるような、ある程度有力な人物が宅地に居住していたと考える。

宅地に居住した人物の詳細については、中世前期に行われたと考えられる曽我部地域の開発に関わっていた可能性を提示しておきたい。曽我部地域における中世前期の開発では、12世紀代に比較的取水が容易な谷口付近に始まり、13世紀中頃に大規模化し、ほぼ、現在の景観の基礎となる水路や土地割が完成したと指摘される(注５)。Ａ１地区の宅地の北西約50m先には南西の谷口から北東方向へのびる法貴谷川が位置し、付近には現在の井堰が存在することから、上記で指摘される取水の容易な谷口付近に相当する。ただ、現在までの金生寺遺跡の調査では、中世前期の水利や開発に関係する遺構・遺物は確認していない。そこで、Ａ１地区の宅地の立地を見ると、土石流堆積の上に建物を建設している状況である。掘立柱建物の重複状況や、ＳＥ210やＳＤ220出土遺物の時期幅等から、少なくとも半世紀以上はこの地点に居住していたと考えられるが、その間にも、土石流に見舞われた可能性がある。また、遺構面上の多くの場所で土石流による角礫が露出しており、ＳＥ210やＳＤ220等の遺構埋土中や掘形にも礫が混入している状況が多々見られる。このような場所に敢えて住む理由を考えると、亀岡盆地の南の玄関口と言えるような交通の要衝であること以外にも、近くを流れる法貴谷川の取水が容易であることも利点としてあげられ、開発の開始にあたり、取水しやすい場所を押さえる必要があったことが想定できる。しかし、具体的根拠や他の事例との比較検討が不足しており、今後、分析検討していく必要がある。

以上のように、今回の調査によって多くの遺構･遺物を検出した。今後、これらの成果を元に、曽我部地域の遺跡の変遷状況や各遺構・遺物の詳細な分析を行っていきたい。

注１　位置と環境全体の記述については下記の文献を基にした。
　　桐井理揮・引原茂治・上井佐妃・名村威彦・黒坪一樹ほか2022「国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡　犬飼遺跡第2・3次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊　(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
　　亀岡市史編さん委員会2000『新修亀岡市史』資料編第1巻　亀岡市

注２　中澤 勝2012『市内遺跡発掘調査報告書』曽我部町内遺跡発掘調査　亀岡市教育委員会

注３　桐井理揮2021「金生寺遺跡第７次」『京都府埋蔵文化財情報』第139冊　(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注４　黒坪一樹2022「国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡　春日部遺跡第２次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊　(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注５　曽我部地域の中世の開発については下記の文献を基にした。
　　桐井理揮2022「３、犬飼遺跡と中世曽我部地域の景観」「国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡　犬飼遺跡第2・3次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊　(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

参考文献

石井清司・引原茂治・伊野近富1985「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37号　京都考古刊行会

伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学』出土木製品用材データベース　海青社
伊野近富1984『大内城跡』京都府遺跡調査報告書　第３集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富2021「京北町出土中世遺物と丹波型瓦器椀」『上中城跡の研究』龍谷大学文学部考古学実習室
伊野近富2021「丹波型瓦器椀の分類と編年」『京都府埋蔵文化財論集』第８集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
大阪府立近つ飛鳥博物館2006『陶邑の須恵器－年代のものさし―』
鐘方正樹2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧　同成社
亀岡市史編さん委員会1996『新修亀岡市史』本文編第1巻　亀岡市
久世康博2001「井戸はどうして埋められたのか(石を入れる)」『考古学論集』第５集
菅 博絵2022「犬飼遺跡第10次」『京都府埋蔵文化財情報』第142冊　(公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
中世土器研究会編1996『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
日本中世土器研究会2015『東播系須恵器　－編年と分布から考える－』中近世土器の基礎研究26
日本中世土器研究会2022『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
橋本久和1980『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
橋本久和2018『概論　瓦器椀研究と中世社会』真陽社
平尾政幸2019「土師器再考」『洛史　研究紀要』第12号　(公財)京都市埋蔵文化財研究所
堀内明博2001「近畿地方における古代から中近世の掘立柱建物－京都府･滋賀県･兵庫県の場合－」浅川滋男･箱崎和久編『埋もれた中近世の住まい』同成社
松井 忍・桐井理揮2021「犬飼遺跡７次」『京都府埋蔵文化財情報』第139冊　(公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
宮崎亮一・山本信夫2000『太宰府条坊跡ＸＶ』太宰府市の文化財　第49集　太宰府市教育委員会
山本 梓・引原茂治2020「丹波地域における瓦器椀の地域性」『京都府文化財情報』第138号　(公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

※その他、各遺跡の報告書等を参照したが、紙幅の都合上割愛した。

付 編 1　　Ｓ Ｅ ２ １ ０ と Ｓ Ｄ ２ ２ ０ の 自 然 科 学 分 析

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

調査区周辺の当時の古植生や土地利用を検討するために、井戸ＳＥ210と溝状遺構ＳＤ220の遺構埋土が採取された。さらに、井戸ＳＥ210の埋土については、現場において水洗別を行ったところ、大量の種実遺体が抽出された。以下では、堆積物試料および現場で取り上げられた種実遺体(以下、水洗別済み種実)について行った花粉分析、大型植物遺体分析、プラント・オパール分析について報告する。さらに、井戸ＳＥ210では、井戸構築材について放射性炭素年代測定も併せて実施した。なお、紙幅の都合上、分析結果の記載などの一部を割愛した。さらに、分析方法についても、既刊の犬飼遺跡の報告書(京都府埋蔵文化財調査研究センター2022)に示されているので、本分析報告では割愛した。

２．試料

花粉分析と大型植物遺体分析は、12世紀前半～中頃に機能および埋没したＳＥ210の埋土の５試料を分析する(付表５)。なお、水洗別済み種実については、結果表を参照頂きたい。放射性炭素年代測定は、ＳＥ210の井戸構築材で実施する。測定試料の情報、調製データは付表６のとおりである。さらに、測定試料と採取箇所を写真１、２に示す。

プラント・オパール分析は、12世紀後半～13世紀前半に機能および埋没したＳＤ220埋土の灰オリーブ色(7.5Y5/2)の砂礫を多く含むシルト１試料を分析する。埋土の断面写真は、考察部分の写真３に示す。

付表５　ＳＥ210埋土の分析試料一覧

分析試料No.	ＳＥ210埋土の層位	時期	堆積物の特徴	花粉	大型植物遺体	備考
1	８～10層	12世紀前半～中頃	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土	○	○	−
2	９～11層		灰色（5Y4/1）シルト質粘土	○	○	南東隅柱接続部
3	９～11層		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土	○	○	最下層（横桟内）
4	９～11層		オリーブ黒色（5Y3/1）シルト質粘土	○	○	埋土最下層
5	９・10層		灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土	○	○	掘形水洗

付表６　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－47750	試料No. 1 調査区：ＡⅠトレンチ 遺構：ＳＥ210 報告No.218	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

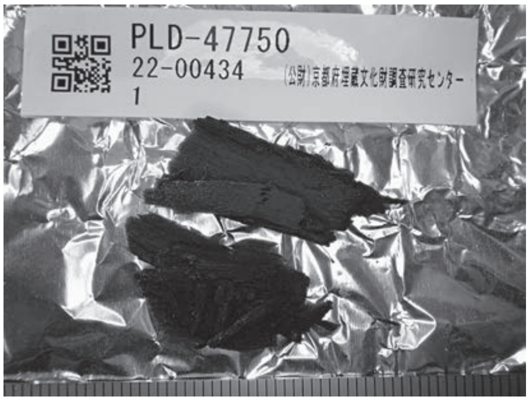


写真１　ＳＥ210の杭材（試料No.１）　　　　写真２　試料No.１（PLD-47750）

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

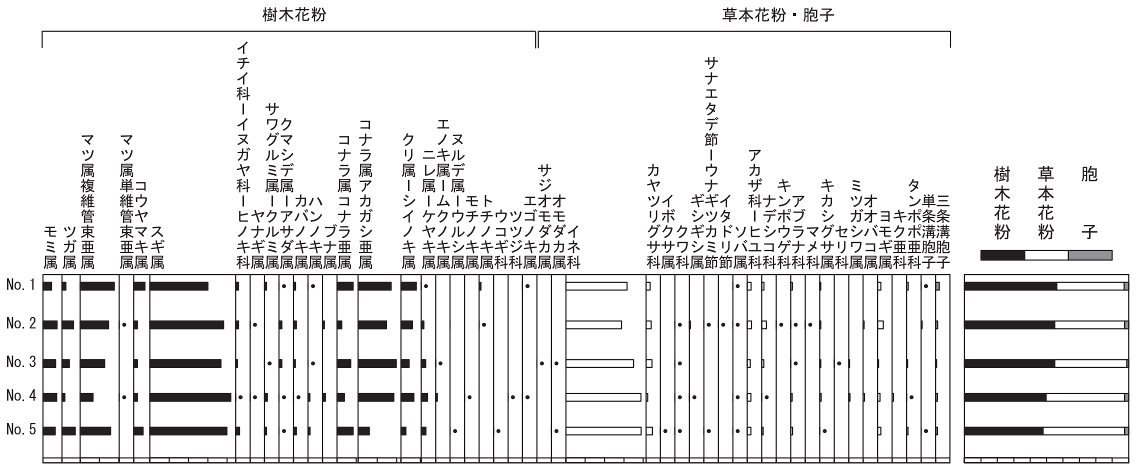
付表７に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代をそれぞれ示す。

付表７　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-47750 試料 No. 1 報告 No.218	-25.49 ± 0.28	980 ± 23	980 ± 25	1024-1047 cal AD (29.03%) 1083-1095 cal AD (11.35%) 1103-1124 cal AD (22.94%) 1141-1147 cal AD (4.94%)	996-1002 cal AD (1.58%) 1020-1052 cal AD (33.09%) 1078-1156 cal AD (60.77%)

付表８　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

イネ (個／ｇ)	イネ穎破片 (個／ｇ)	ネザサ節型 (個／ｇ)	ササ属型 (個／ｇ)	キビ族 (個／ｇ)	ウシクサ族 (個／ｇ)	不明 (個／ｇ)
180,600	12,100	14,300	1,100	5,500	6,600	13,200



10%　•：<0.5%　樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

第85図　花粉分布図

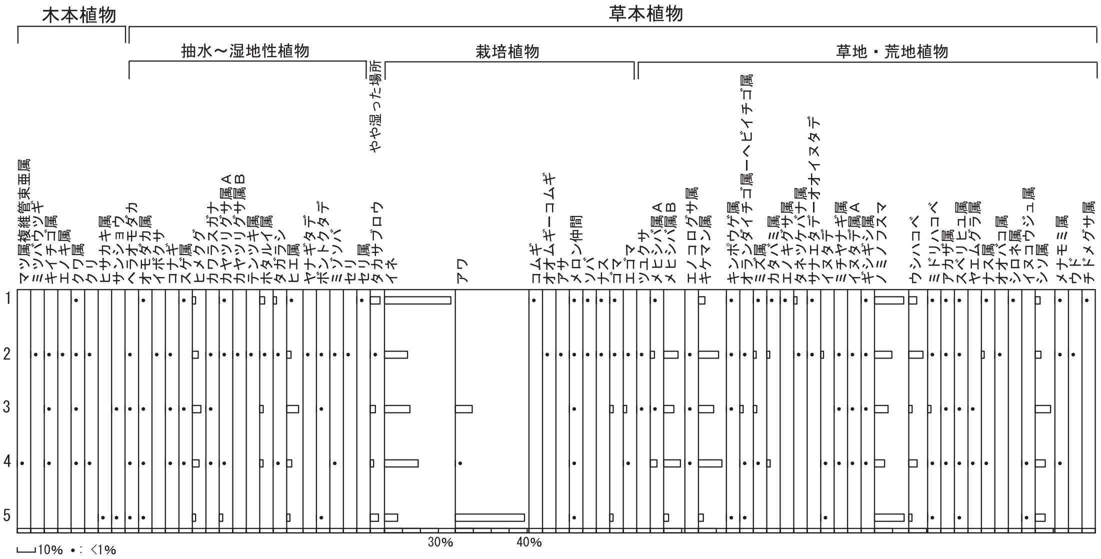
付表９　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
樹木						
Abies	モミ属	9	15	14	15	13
Tsuga	ツガ属	4	12	8	3	14
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	36	30	27	14	32
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属	−	1	−	1	−
Sciadopitys	コウヤマキ属	12	4	4	4	10
Cryptomeria	スギ属	61	78	78	88	81
Taxaceae − Cephalotaxaceae − Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	3	3	2	1	4
Salix	ヤナギ属	−	1	−	1	−
Pterocarya − Juglans	サワグルミ属－クルミ属	2	−	1	3	2
Carpinus − Ostrya	クマシデ属－アサダ属	1	3	3	1	1
Betula	カバノキ属	2	3	2	1	3
Alnus	ハンノキ属	1	−	1	2	2
Fagus	ブナ属	−	2	−	3	−
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	17	5	15	8	17
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	35	30	42	39	12
Castanea − Castanopsis	クリ属－シイノキ属	16	12	9	14	5
Ulmus − Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	1	3	5	7	5
Celtis − Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	−	−	1	2	−
Rhus − Toxicodendron	ヌルデ属－ウルシ属	−	−	−	−	1
Ilex	モチノキ属	−	−	−	1	−
Aesculus	トチノキ属	2	1	−	−	−
Araliaceae	ウコギ科	−	−	−	−	1
Ericaceae	ツツジ科	−	−	−	1	−
Styrax	エゴノキ属	1	−	−	1	−
草本						
Alisma	サジオモダカ属	−	−	1	−	−
Sagittaria	オモダカ属	−	−	1	−	1
Gramineae	イネ科	114	107	135	164	165
Cyperaceae	カヤツリグサ科	8	10	12	4	14
Aneilema	イボクサ属	−	−	−	−	1
Moraceae	クワ科	−	1	1	1	1
Rumex	ギシギシ属	−	2	−	1	−
Polygonum sect. Persicaria − Echinocaulon	サナエタデ節－ウナギツカミ節	−	1	−	−	1
Polygonum sect. Reynoutria	イタドリ節	−	1	−	−	−
Fagopyrum	ソバ属	1	1	−	1	2
Chenopodiaceae − Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	7	8	6	8	8
Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	9	4	2	3
Ranunculaceae	キンポウゲ科	−	1	−	−	−
Brassicaceae	アブラナ科	3	1	1	3	4
Leguminosae	マメ科	−	1	−	−	−
Rotala	キカシグサ属	2	2	2	3	1
Apiaceae	セリ科	−	−	1	−	−
Menyanthes	ミツガシワ属	−	−	2	3	−
Plantago	オオバコ属	−	2	−	3	−
Artemisia	ヨモギ属	6	11	2	5	7
Tubuliflorae	キク亜科	−	−	−	3	−
Liguliflorae	タンポポ亜科	3	−	2	1	3
シダ植物						
monolete type spore	単条溝胞子	1	2	−	−	2
trilete type spore	三条溝胞子	7	4	2	4	4
Arboreal pollen	樹木花粉	203	203	212	210	203
Nonarboreal pollen	草本花粉	148	158	170	202	211
Spores	シダ植物胞子	8	6	2	4	6
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	359	367	384	416	420
unknown	不明	2	3	2	6	4

付表10　井戸埋土の水洗別によって得られた大型植物遺体（括弧内は破片数）

	試料No.	1	2	3	4	5
	遺構	SE 210				
	層位	8～10層	9～11層	9～11層	9～11層	9・10層
分類群	水洗量（cc）	300	300	300	300	300
高木・小高木・低木						
マツ属複維管束亜属	葉				4（+）	
ミツバウツギ	種子		1			
キイチゴ属	核		1	2	5	
エノキ属	核		1			
クワ属	核	2	1	1		
クリ	果実		（2）		（10）	
ヒサカキ属	種子					1
サンショウ	種子					
栽培植物（水田作物）						
イネ	籾殻	92（++++）	79（++++）	15（++）	64（++）	16（+++）
	炭化籾殻	12（+）	12（+）	9（+）	10（+）	6（+）
	炭化種子（穎果）		2（2）	（3）		1
栽培植物（畑作物）						
アワ	有ふ果			10（13）	1	104（10）
コムギ	炭化種子（穎果）	2				
オオムギ－コムギ	炭化種子（穎果）					
アサ	核					
メロン仲間	種子	（3）	3（2）	（4）	1（2）	
ソバ	果実	（2）	1			
ナス	種子	1	（3）			
ゴマ	種子	（3）	（2）	（6）		（8）
エゴマ	果実			4	2	
水田雑草・湿生植物						
ヘラオモダカ	果実		1	2	5	2
	種子		1			
オモダカ属	果実	2				
	種子			1	1	1
イボクサ	種子					
コナギ	種子		4	1	1	
スゲ属	果実	1		1	1	
ヒメクグ	果実	6	24	8	14	4
カワラスガナ	果実		2	1	1	
カヤツリグサ属A	果実	1	3		2	6
カヤツリグサ属B	果実		3（2）			
テンツキ属	果実		2			
ホタルイ属	果実	5（5）	1（2）	2（2）	6（2）	2（4）
ヒエ属	有ふ果	2（2）	6（24）	4（16）	6（4）	（7）
	炭化種子（穎果）				1	
タガラシ	果実	4	1（3）		3（2）	
高地・田畑共通雑草						
ツユクサ	種子		4	1		
キンポウゲ属	果実	2	1	1		（2）
タネツケバナ属	種子	4	2			
ヤナギタデ	果実		1（4）			
サナエタデ－オオイヌタデ	果実	（2）	2（3）			
イヌタデ	果実		8（7）		2（5）	1
ボントクタデ	果実		（6）	1		1
ミゾソバ	果実		（3）		1（4）	
ミチヤナギ属	果実		5	2	1	
イヌタデ属A	果実		2	1	5	
ギシギシ属	果実	（3）	1	1	3	
ノミノフスマ	種子	45	69	13	20（4）	46
ウシハコベ	種子	14	57	3	17（4）	4
ミドリハコベ	種子	1	5（2）	4	1	2
シロネ属	果実					
イヌコウジュ属	果実				2	1
シソ属	果実	3（7）	11（24）	6（20）	13（23）	11（9）
	炭化果実		1			
タカサブロウ	果実	14（3）	7（2）	5	6（3）	12（3）
セリ	果実		1			
セリ属	果実	1				
高地畑・人里雑草						
メヒシバ属A	有ふ果	1	15	2	14	
メヒシバ属B	有ふ果		61	11	37	7
	炭化有ふ果		1			
エノコログサ属	有ふ果		2	1	1（2）	
キケマン属	種子	5（10）	82（3）	15（2）	50（4）	6
オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属	果実		（2）	3	1	1
ミズ属	果実	2	10	3	6	
カタバミ属	種子	1	13		8	
エノキグサ属	種子	（3）				
アカザ属	種子	1（2）	8	2	3	
スベリヒユ属	種子	（2）	7	2	2	（2）
ヤエムグラ属	種子			2	1	
ナス属	種子	（2）	8（2）		2	
オオバコ属	種子		4			
メナモミ属	果実		3		1（2）	
ウド	核		1			
チドメグサ属	果実	2（2）				
不明	芽			（++）		
不明	動物遺体					（+）
不明	昆虫遺体	（++）	（++）	（++）	（+++）	（+++）

+:1-9,++:10-49,+++:50-99,++++:100 以上



第86図　大型植物遺体分布図

（2）プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から、試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求めた(付表８)。

（3）花粉分析

５試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉24、草本花粉22、形態分類のシダ植物胞子２の、総計48である。これらの花粉･胞子の一覧表を付表９、分布図を第85図に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン(－)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

（4）大型植物遺体分析

埋土の水洗別による同定結果を付表10、第86図に示す。また､水洗別済み種実の同定結果を付表10に示す。埋土水洗別をした結果、木本植物では針葉樹の１分類群と、広葉樹の７分類群、草本植物の59分類群の、計67分類群が見いだされた。水洗別済み種実を同定した結果、木本植物では12分類群、草本植物では38分類群

付表11　水洗別済みの大型植物遺体
(括弧内は破片数)

分類群	遺構 層位	ＳＥ 210 ９－11層		 ９－10層
ブドウ属	種子	1		
モモ	核			1
ウメ	核（完形）	3		
	核（動物食痕）	2		
サクラ属サクラ節	核	2		
ナシ亜科	種子	3	(3)	
エノキ属	核	3	(6)	
オニグルミ	核（半割）			
	核（動物食痕）	2		
ウルシ属 - ヌルデ	内果皮			
イヌザンショウ	種子	4		
クマノミズキ	核	5		
エゴノキ	核			
ツユクサ	種子	3		
イボクサ	種子	1		
サンカクイ - フトイ	果実	2		
ホタルイ属	果実	45	(20)	
ジュズダマ	苞鞘	2	(4)	
メヒシバ属	有ふ果	1		
スズメノヒエ	有ふ果	4		
ヒエ属	炭化有ふ果	1		
イネ	籾殻	5	(+)	
	炭化種子 (頴果)	2		
アワ	有ふ果	0		
エノコログサ属	有ふ果	2		
オオムギ	炭化種子 (頴果)	1		
キケマン属	種子	154	(7)	
キンポウゲ属	果実	12	(2)	
ノブドウ	種子	1	(3)	
マメ科Ａ	種子	1		
マメ科Ｂ	炭化種子	1		
アサ	核	1	(5)	
メロン仲間	種子	22	(7)	
エノキグサ属	種子	2	(3)	
ヤナギタデ	果実	6		
サナエタデ - オオイヌタデ	果実	4		
イヌタデ	果実	74	(4)	
ボントクタデ	果実	12	(7)	
ウナギツカミ	果実	6		
ミゾソバ	果実	1		
ミチヤナギ属	果実	4		
イヌタデ属Ａ	果実	3		
ギシギシ属	果実	4		
ノミノフスマ	種子	3		
ウシハコベ	種子	1		
アカザ属	種子	13	(3)	
ヤエムグラ属	種子	12		
	炭化種子	1		
ナス	種子	13		
ゴマ	種子			
エゴマ	果実	30	(13)	
シソ属	果実	16	(9)	
タカサブロウ		1		
不明Ａ	種実	1		
不明	芽		(+)	
不明	昆虫遺体		(+)	

+:1-9,++:10-49,+++:50-99,++++:100 以上

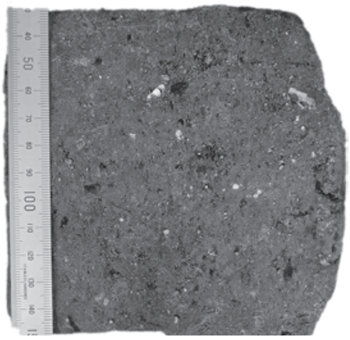


写真３　ＳＤ220埋土の試料断面

の、計50分類群が見いだされた。また、科以下の同定ができなかった芽を一括して不明芽とした。さらに、種実以外には、不明昆虫遺体と不明動物遺体も得られたが、同定の対象外とした。

上記で産出した同定の根拠として、末尾に写真４・５に種実の写真図版を示す。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

４．考 察

(１)放射性炭素年代測定

井戸ＳＥ210の杭材(試料No.１：PLD－47750)の測定結果(以下の較正年代は2σの値)は、^{14}C年代が980±25 BP、較正年代が996－1002 cal AD (1.58%)、1020－1052 cal AD (33.09%)、1078－1156 cal AD (60.77%)で、10世紀末～12世紀半ばの暦年代を示した。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、最終形成年輪を欠く部位不明の木材であり、試料の木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

(2)プラント・オパール分析

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体が180,600個/gと高密度に検出された。よって、ＳＤ220には意図的に直接廃棄されたものか自然堆積かは不明であるが、イネの葉身が多く堆積していたと考えられる。また、イネ穎破片の産出も見られ、ＳＤ220にはイネの籾殻も堆積していたと考えられる。なお、分析を行った溝埋土は、塊状無層理をなす淘汰不良の砂礫を多く含むシルトである(写真３)。層相から、埋土の由来は、溝周辺の表土の再堆積と推定される。よって、埋土に多量に含まれるイネについては、近傍から再堆積したものも含まれる可能性がある。

その他ではネザサ節型やササ属型、キビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体も検出された。ＳＤ220周辺には、これらのイネ科植物も生育していたと考えられる。

(３)花粉分析

いずれの試料においても、樹木ではスギ属が優占し、モミ属やツガ属、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属－シイノキ属などを伴っている。同一試料で行った大型植物遺体分析によると､マツ属複維管束亜属やクリがわずかに得られているのみで､花粉分析で産出が目立つ分類群の産出は少ない。大型植物遺体は試料採取地点周辺の植生を反映するのに対し、花粉は遺跡周辺のより広範囲な植生を反映する。よって、花粉分析で産出が目立つが、大型植物遺体で産出が稀な分類群の分布域は、遺跡周辺の広範囲な場所であると考えられる。花粉組成から遺跡周辺の古植生を推測すると、丘陵地などにはスギやツガ属、モミ属といった温帯性針葉樹林やコナラ属アカガシ亜属などからなる照葉樹林が分布を広げており、開けた明

るい場所にはマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ属、クリ属－シイノキ属などからなる二次林が分布していた可能性がある。なお、クリ属－シイノキ属については、花粉形態でクリ属とシイノキ属の区別が困難であるが、大型植物遺体でクリが産出している点から考えると、クリに由来する花粉が多く含まれている可能性がある。さらに、マツ属複維管束亜属とクリが大型植物遺体で得られている点から、マツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ属、クリ属－シイノキ属などからなる二次林は井戸(SE210)周辺に分布していた可能性がある。

草本花粉では、いずれの試料においてもイネ科が突出しているため、井戸（ＳＥ210）周辺にはイネ科植物が分布を広げていた可能性がある。また、全ての試料から検出された分類群としては、カヤツリグサ科やアカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属などが挙げられ、これらの草本類が井戸（ＳＥ210）周辺に分布を広げていた可能性がある。

付表12　メロン仲間種子の大きさ

	長さ	幅
ＳＥ 210	8.6	4.2
	7.3	3.3
	8.8	4.0
	6.6	3.4
	7.4	3.6
	7.1	3.3
	7.0	3.3
	6.1	3.0
	8.3	3.8
	7.2	3.7
	8.3	4.1
	7.4	3.6
	7.0	3.5
	8.0	4.1
	7.9	4.1
最小	6.1	3.0
最大	8.8	4.2
平均	7.5	3.7
標準偏差	0.8	0.4

（単位：mm）

あるいは、イネ科花粉については、大型植物遺体ではイネの籾殻が多く検出されているため、イネの籾殻に付着していたイネ花粉が検出されている可能性もある。栽培植物のソバ属も検出されるが、井戸（ＳＥ210）周辺でソバ栽培を行っていた可能性や、大型植物遺体でソバの果実が検出されているため、果実に付着していたソバ花粉が検出されている可能性がある。

その他では、サジオモダカ属やオモダカ属、イボクサ属、キカシグサ属といった水田雑草を含む分類群も検出された。大型植物遺体分析においても、イネとともに水田雑草の分類群が検出されており、井戸（ＳＥ210）周辺の水田から流れ込んだ可能性がある。

（4）大型植物遺体分析

井戸（ＳＥ210）の埋土から出土した大型植物遺体を同定した結果、草本植物を中心とした多種類の大型植物遺体が得られた。分析を行った井戸埋土は、廃棄前後から放置期に埋積した遺構周辺の地表堆積物を母材とする泥質堆積物で主に構成される。また、井戸周辺には、洪水流が供給されるような流路や溝が存在しない。よって、井戸を埋積した堆積物は、井戸が存在する居住域付近を領域とするかなり小さな集水域から供給されたと考えられる。大型植物遺体については、花粉化石よりも粒径や重量などが大きいため、親植物からの移動距離が相対的に小さくなる場合が多い（百原･南木, 1988）。上記から、今回井戸ＳＥ210から産出した大型植物遺体のほとんどは、局地性がかなり高いとみなされる。

栽培植物については、果樹のモモとウメ、水田作物のイネ、畑作物のアワ、オオムギ、コムギ、アサ、メロン仲間、ソバ、ナス、ゴマ、エゴマが得られた。

メロン仲間については、藤下（1984）によれば種子の大きさが、長さ6.0mm以下の雑草メロン型、

長さ6.1～8.0mmのマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上のモモルディカメロン型、のおおむね3群に分けられるとしている。今回、出土した状態の良い15点の大きさは、長さ6.1～8.8（平均7.5±0.8）mm、幅3.0～4.2（平均3.7±0.4）mmとなっており、藤下（1984）の分類に充てるとマクワウリ・シロウリ型～モモルディカメロン型の大きさであった（付表12）。

上述の栽培植物は、井戸が放棄された段階を中心に、人為（遺構への廃棄や祭祀など様々な人間の行為）もしくは自然（居住域内の残滓等の地表流による再堆積など）あるいはその複合的な移動営力を経て井戸内に堆積したと考えられる。水田作物と畑作物は、井戸周辺の耕作地から流れ込んで堆積した可能性がある。また、モモやウメは、井戸周辺にこれらの果樹が植栽されていて遺構内に果実が自然落下した状況も考えられる。

このほかの木本植物では、高木のマツ属複維管束亜属、サクラ属サクラ節、ナシ亜科、エノキ属、クワ属、クリ、オニグルミ、クマノミズキ、小高木のミツバウツギ、ヒサカキ属、エゴノキ、低木のキイチゴ属、ヒメコウゾ、ウルシ属－ヌルデ、サンショウ、イヌザンショウ、つる植物のブドウ属など、二次林や林縁を構成する種類が多く産出した。井戸が検出された居住域やそれを取り巻いていたと考えられる耕作地の周囲には、上述の木本が生育する領域が存在していたと推定される。また、栽培植物のウメと野生植物でも食用可能なオニグルミには、ネズミ類によるとみられる動物食痕が残る個体が確認された。半割のオニグルミの個体には打撃痕は見られなかった為、自然に割れた可能性がある。

草本植物では、抽水～湿地性植物のヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、コナギ、スゲ属、ヒメクグ、カワラスガナ、カヤツリグサ属A、カヤツリグサ属B、テンツキ属、サンカクイ－フトイ、ホタルイ属、タガラシ、ジュズダマ、スズメノヒエ、ヒエ属、ヤナギタデ、ボントクタデ、ウナギツカミ、ミゾソバ、セリ、セリ属、やや湿った道端に生育するタカサブロウが産出した。ほかに、乾いた草地や荒れ地、畑などに生育するツユクサやメヒシバ属A、メヒシバ属B、エノコログサ属、キケマン属、キンポウゲ属、マメ科A、マメ科B、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ属、タネツケバナ属、サナエタデ－オオイヌタデ、イヌタデ、ギシギシ属、ノミノフスマ、ウシハコベ、ミドリハコベ、アカザ属、スベリヒユ属、ヤエムグラ属、ナス属、オオバコ属、シロネ属、イヌコウジュ属、シソ属、メナモミ属、チドメグサ属が得られている。また、林縁に生育するノブドウとミズ属、ウドが得られた。

上記の草本のうち、水田雑草でもある種類、湿地に生育する種類、湿生～抽水植物は、井戸周辺の水田を中心とした耕作地や溝、池、流路や谷といった低所に形成されていた湿地などに生育していたとみられる。一方で、乾いた草地や荒れ地、畑などに生育する種類は、井戸の周囲の建物などが存在する乾いた場所に生育していたと考えられる。

放射性炭素年代測定（パレオ・ラボAMS年代測定グループ＝伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze）

花粉分析・プラント・オパール分析（森　将志）

大型植物遺体分析（バンダリ スダルシャン・辻　康男）

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337－360.

京都府埋蔵文化財調査研究センター(2022)京都府遺跡調査報告集　第185冊. 407p, 京都府埋蔵文化財調査研究センター.

百原　新・南木睦彦(1988)大型植物化石群集のタフォノミー. 植生史研究, 3, 13－23.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」: 3－20, 日本第四紀学会.

那須浩郎(2017)縄文時代にヒエは栽培化されたのか？SEEDS CONTACT, 4, 27－29.

Reimer, P.J.et al (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

米倉浩司・梶田　忠(2003-)BG Plants 和名－学名インデックス(YList), http://ylist.info

スケール　1,5,7,8,12-16,18-20：1mm,　2-4,6,9-11,17：5mm

1．ブドウ属種子（水洗別済み）、2．モモ核（完形）（水洗別済み）、3．ウメ核（完形）（水洗別済み）、4．ウメ核（動物食痕）（水洗別済み）、5．サクラ属サクラ節核（水洗別済み）、6．ナシ亜科果実（水洗別済み）、7．ナシ亜科種子（水洗別済み）、8．クワ属核（No.2）、9．クリ果実（No.4）、10．オニグルミ核（動物食痕）（水洗別済み）、11．オニグルミ核（半割）（水洗別済み）、12．イヌザンショウ種子（水洗別済み）、13．クマノミズキ核（水洗別済み）、14．カヤツリグサ属Ａ果実（No.2）、15．カヤツリグサ属Ｂ果実（No.2）、16．ホタルイ属果実（水洗別済み）、17．ジュズダマ苞鞘（水洗別済み）、18．メヒシバ属Ａ有ふ果（No.2）、19．メヒシバ属Ｂ有ふ果（No.2）、20．ヒエ属有ふ果（No.1）

写真４　金生寺遺跡のＳＥ210から出土した大型植物遺体（１）

スケール 21,22,24-34,36-42:1mm, 23,35:5mm

21. ヒエ属炭化有ふ果（水洗別済み）、22. ヒエ属炭化種子(穎果)（No.4）、23. イネ籾殻（水洗別済み）、24. イネ炭化籾殻（No.3）、25. イネ炭化種子(穎果)（水洗別済み）、26. アワ有ふ果（No.3）、27. エノコログサ属有ふ果（No.2）、28. オオムギ炭化種子(穎果) （水洗別済み）、29. コムギ炭化種子(穎果)（No.1）、30. キケマン属種子（水洗別済み）、31. タガラシ果実（No.1）、32. マメ科Ａ種子（水洗別済み）、33. マメ科Ｂ炭化種子（水洗別済み）、34. アサ核（水洗別済み）、35. メロン仲間種子（No.2）、36. ソバ果実（No.2）、37. イヌタデ属Ａ果実（No.2）、38. ナス種子（水洗別済み）、39. ナス属種子（No.2）、40. ゴマ種子（No.2）、41. エゴマ果実（水洗別済み）、42. シソ属果実（No. 4）

写真５　金生寺遺跡のＳＥ210から出土した大型植物遺体(２)

付編２　金生寺遺跡出土の土器の蛍光Ｘ線分析

株式会社パレオ・ラボ

１．はじめに

金生寺遺跡より出土した中世の土器について、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行った。

２．試料と方法

分析対象は、遺跡より出土した瓦器５点、黒色土器２点、土師器３点の合計10点である（付表13、写真６）。時期は、いずれも12世紀前半～13世紀初頭頃とみられている。

蛍光Ｘ線分析には、土器よりガラスビードを作製して分析試料とする、ガラスビード法を用いた。試料採取には、岩石カッターを使用した。採取した土器は、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面や破断面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をアルミナ製乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で750℃、６時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、0.9000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウムLi2B4O7と、メタホウ酸リチウムLiBO2を８：２の割合で調製した融剤4.5000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

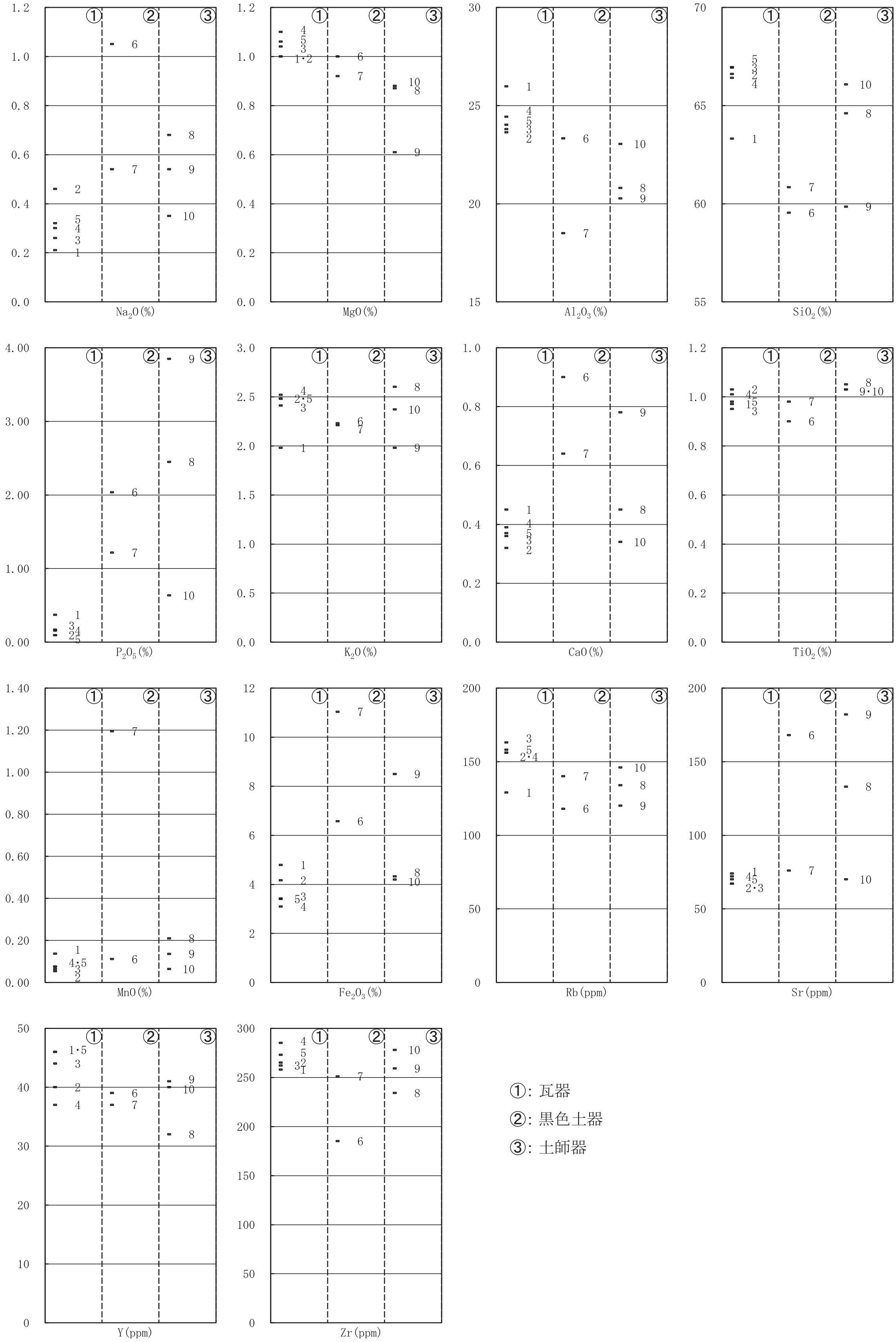
付表13　分析対象一覧

分析No.	報告番号	器種	器形	出土遺構	層序など
1	95	瓦器	椀	ＳＥ 210	上層
2	22	瓦器	椀	ＳＥ 210	井戸枠内
3	394	瓦器	椀	ＳＤ 220	a11
4	404	瓦器	椀	ＳＤ 220	a12
5	484	瓦器	皿	ＳＤ 220	a12
6	756	黒色土器	椀	精査	a12
7	682	黒色土器	椀	精査	t12
8	80	土師器	皿	ＳＥ 210	上層
9	59	土師器	皿	ＳＥ 210	上層
10	359	土師器	皿	ＳＤ 220	２層目青灰色土

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍

付表14　蛍光Ｘ線分析結果(mass%)

分析No.	報告番号	器種	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	分析No.
1	95	瓦器	0.21	1.00	26.0	63.3	0.372	1.98	0.45	0.97	0.137	4.79	99.2	129	74	46	258	1
2	22		0.46	1.00	23.6	66.6	0.095	2.48	0.32	1.03	0.053	4.16	99.8	156	67	40	265	2
3	394		0.26	1.04	23.8	66.9	0.169	2.41	0.36	0.95	0.064	3.42	99.4	163	67	44	262	3
4	404		0.30	1.10	24.4	66.4	0.156	2.52	0.39	1.01	0.075	3.09	99.5	156	72	37	285	4
5	484		0.32	1.06	24.0	67.0	0.093	2.48	0.37	0.98	0.075	3.40	99.7	158	70	46	273	5
6	756	黒色	1.05	1.00	23.3	59.5	2.036	2.23	0.90	0.90	0.111	6.57	97.6	118	168	39	185	6
7	682		0.54	0.92	18.5	60.8	1.215	2.21	0.64	0.98	1.194	11.03	98.1	140	76	37	251	7
8	80	土師器	0.68	0.87	20.8	64.6	2.449	2.60	0.45	1.05	0.209	4.32	98.0	134	133	32	234	8
9	59		0.54	0.61	20.3	59.9	3.847	1.98	0.78	1.03	0.136	8.49	97.5	120	182	41	259	9
10	359		0.35	0.88	23.0	66.1	0.634	2.37	0.34	1.03	0.064	4.19	99.0	146	70	40	278	10
最小値			0.21	0.61	18.5	59.5	0.093	1.98	0.32	0.90	0.053	3.09	97.5	118	67	32	185	最小
最大値			1.05	1.10	26.0	67.0	3.847	2.60	0.90	1.05	1.194	11.03	99.8	163	182	46	285	最大


Na2O(%)
MgO(%)
Al2O3(%)
SiO2(%)
P2O5(%)
K2O(%)
CaO(%)
TiO2(%)
MnO(%)
Fe2O3(%)
Rb(ppm)
Sr(ppm)
Y(ppm)
Zr(ppm)
①: 瓦器
②: 黒色土器
③: 土師器

第87図　各元素分布図

光X線分析装置MagiX（PW2424型）にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料、計18種類を用いた。定量元素は、ナトリウム（Na2O）、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al2O3）、ケイ素（SiO2）、リン（P2O5）、カリウム（K2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO2）、マンガン（MnO）、鉄（Fe2O3）の主成分10元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の微量成分４元素の、計14元素である。

３．結果

付表14に、蛍光Ｘ線分析の測定結果を示す。分析の結果、ナトリウム（Na2O）が0.21～1.05%、マグネシウム（MgO）が0.61～1.10%、アルミニウム（Al2O3）が18.5～26.0%、ケイ素（SiO2）が59.5～67.0%、リン（P2O5）が0.093～3.847%、カリウム（K2O）が1.98～2.60%、カルシウム（CaO）が0.32～0.90%、チタン（TiO2）が0.90～1.05%、マンガン（MnO）が0.053～1.194%、鉄（Fe2O3）が3.09～11.03%、ルビジウム（Rb）が118～163ppm、ストロンチウム（Sr）が67～182ppm、イットリウム（Y）が32～46ppm、ジルコニウム（Zr）が185～285ppmであった。

４．考察

第87図に、各元素の分布図を示す。

瓦器は、ほかの器種と比較してばらつきが少なく、比較的まとまった化学組成を示した。瓦器と比較すると黒色土器は、ナトリウム（Na2O）、リン（P2O5）、カルシウム（CaO）、鉄（Fe2O3）、ストロンチウム（Sr）が多く、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al2O3）、ケイ素（SiO2）、ジルコニウム（Zr）が少ない傾向がみられた。また、瓦器と比較すると土師器は、リン（P2O5）、ストロンチウム（Sr）が多く、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al2O3）が少ない傾向がみられた。瓦器は、黒色土器や土師器とは化学組成上異なる特徴を持っていると考えられ、材料的に異なると考えられる。特に、リン（P2O5）の含有量の差は顕著であった。

一方、黒色土器と土師器間を比較すると、マグネシウム（MgO）は黒色土器の方が多く、チタン（TiO2）は土師器の方が多い傾向がみられたが、全体的に瓦器ほどの違いはなく、分布が重複している元素が多かった。化学組成上の明瞭な差異は見出せなかった。

（竹原弘展）

〈参考文献〉

中井 泉編2005『蛍光Ｘ線分析の実際』朝倉書店 242p

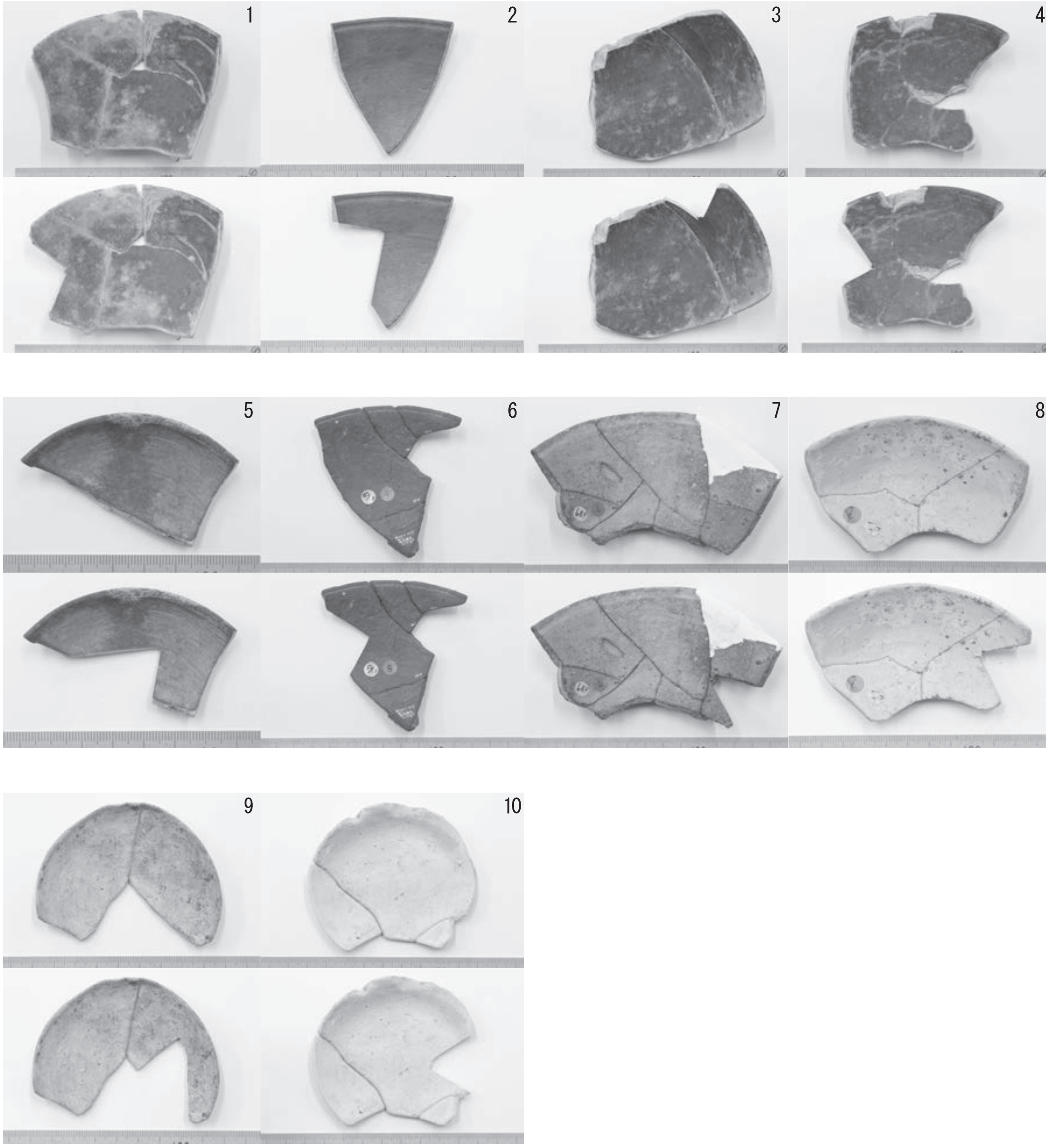


写真６　分析対象土器(上段：試料採取前、下段：試料採取後)

付表15　金生寺遺跡第４・５次調査出土土器・土製品観察表

〈凡例〉
・小数点第２位を四捨五入、第１位で表示　・残存率は基本的に口径で表記　・該当なし；－　・計測不可；/
・(　　)；復元(底・口)径・残存高　・口)口縁部、頸)頸部、底)底部・高台、脚)脚部、鍔)鍔径、全)全体

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
1	土師器	皿	A 1	S P 62 (S B 130)	(8.8)	1.0	－	1/12	外面：橙（2.5YR7/6） 内面：灰白（10YR8/2）	密
2	瓦器	椀	A 1	S P 46 (S B 130)	(13.7)	(3.1)	－	1/12	暗灰（N3/0）	やや密（1mm 大の灰色砂粒を少し含む）
3	土師器	皿	A 1	S P 195 (S B 180)	(13.2)	(1.8)	－	1/12	橙（2.5YR7/6）	密（1mm 以下の灰・白色砂粒含む）
4	土師器	皿	A 1	S P 147 (S B 180)	8.1	1.3	－	完形	灰白（2.5Y8/1）	密
5	瓦器	椀	A 1	S P 22 (S B 180)	(14.0)	(3.9)	－	1/12	灰（N4/0）	密
6	瓦器	椀	A 1	S P 147 (S B 180)	14.0	(3.9)	－	3/12	暗灰（N3/0）	密
7	瓦器	椀	A 1	S P151 (S B 180)	/	(3.5)	14.0	1/12	暗灰（N3/0）	密
8	瓦器	椀	A 1	S P151 (S B 180)	－	(2.1)	7.0	底）2/12	黒（2.5GY2/1）	密
9	瓦質土器	羽釜	A 1	S P 195 (S B 180)	(22.8)	(2.6)	鍔） (26.5)	鍔）1/12 以下	内：灰白（N8/0） 外：褐灰（10YR5/1）	密（2mm 以下の灰白・黒・白色砂粒多く含む）
10	瓦器	椀	A 1	S P 195 (S B 180)	－	(1.5)	5.8	底）4/12 弱	灰（N4/0）	密（0.5mm 以下の黒・白・灰色の砂粒少量含む）
11	土師器	皿	A 1	S P 29 (S B 190)	(8.0)	(1.4)	－	1/12	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（赤色斑粒含む）
12	白磁	椀	A 1	S P 32 (S B 190)	/	(2.0)	－	1/12 以下	灰白（10YR8/1）	堅緻
13	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	－	(1.6)	6.2	底）11/12 全）20%	暗灰（N3/0）	密　(0.5mm 以下灰色砂粒微細量含む）
14	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	－	(4.3)	6.0	底）12/12 全）30%	暗灰（N3/0）	密（１mm 大灰色砂粒１つ他はほぼなし）
15	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	－	(1.3)	(5.6)	底）1/12 全）10%	暗灰（N3/0）	密（0.5mm 以下灰色砂粒白色砂粒微細量含む）
16	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	－	(2.4)	(7.0)	（底）1/12 未満	暗灰（N3/0）	密　(0.5mm 以下灰色砂粒微細量含む）
17	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	－	(2.3)	5.6	底）4/12 全）10%	暗灰（N3/0 ～ 4/0）	密　(0.5mm 以下灰色砂粒微細量含む）
18	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	15.8	(5.0)	－	口)3/12 全) 20%	黒（N2/0）	密（0.5mm 以下灰色砂粒微細量含む）
19	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	14.0	(3.7)	－	1/12	暗灰（N3/0）	密
20	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	14.0	(5.0)	－	2/12	暗灰（N3/0）	密
21	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	14.8	(4.6)	－	口）2/12 強 全）10%	暗灰（N3/0）	密　(砂粒なし）
22	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	13.0	(5.0)	－	1/12	暗灰（N3/0）	密
23	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	12.6	(3.9)	－	口)2/12 全) 10%	暗灰（N3/0）	密　(砂粒なし）
24	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	(15.7)	(3.7)	－	1/12 以下	暗灰（N3/0）	密
25	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	(13.6)	(4.2)	－	1/12 以下	暗灰（N3/0）	密
26	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	14.5	(3.2)	－	1/12	灰（N4/0）	密
27	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	12.6	(4.1)	－	口）2/12 全）10%	暗灰（N3/0）	密　(0.5mm 以下灰色砂粒微細量含む）
28	瓦器	椀	A 1	S E 210 井戸枠内	14.0	(3.6)	－	2/12	灰（N4/0）	密　(微小の白・黒色粒含む）
29	土師器	皿	A 1	S E 210 井戸枠内	10.2	(1.7)	－	3/12	にぶい橙（5YR7/4）	密（赤色斑粒を含む）
30	土師器	皿	A 1	S E 210 井戸枠内	10.2	1.5	－	6/12	にぶい黄橙（10YR7/2）～浅黄橙（10YR8/3）	密　(１mm 大の白い石、灰色の石１～ 2%含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
31	土師質	鍋	A 1	S E 210 井戸枠内	25.6	(15.1)	−	5/12	黒(5Y2/1)	やや粗(0.5mm 前後白砂粒多め)
32	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.4	−	完形	浅黄橙(7.5YR8/3)〜 にぶい橙(7.5YR7/3)	密　(1mm 大の白色・赤褐色砂粒、赤色斑粒を含む)
33	土師器	皿	A 1	S E 210	8.3	1.7	−	完形	灰白(10YR8/2)	密　(1mm 以下の白色・黒色・赤褐色砂粒、雲母を含む)
34	土師器	皿	A 1	S E 210	8.6	1.7	−	完形	にぶい黄橙(10YR7/2)	密　(1mm 大の白色・灰白砂粒を含む)
35	土師器	皿	A 1	S E 210	8.9	1.7	−	ほぼ完形	灰白(2.5Y8/2)	密(1mm 以下の白色・黒色・褐色砂粒、雲母含む)
36	土師器	皿	A 1	S E 210	8.4	1.5	−	8/12	にぶい橙(7.5YR7/4)	密
37	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.5	−	完形	灰白(10YR8/2)	密(1mm 以下の白色・灰色・黒色砂粒を含む)
38	土師器	皿	A 1	S E 210	8.1	1.6	−	完形	にぶい橙(5YR7/4) 灰白(10YR8/2)	密　(1mm 以下の黒色・褐色砂粒含む、石英?含む)
39	瓦器	皿	A 1	S E 210	8.9	1.5	−	完形	灰(N4/0)	やや密　(0.5mm 以下茶白砂粒少量)
40	土師器	皿	A 1	S E 210	7.2	1.6	−	5/12	灰白(7.5YR8/1) 断面は部分的に灰	密(1mm 以下の黒っぽい砂粒、ごく細かい白色の砂粒を含む)
41	土師器	皿	A 1	S E 210	7.4	1.2	−	2/12	内外面:淡橙(5YR8/3) 断面:灰(N6/0)	密(0.5mm 以下の白色・茶色の砂粒を含む)
42	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.2	−	2/12 強	浅黄橙(7.5YR8/3)	密
43	土師器	皿	A 1	S E 210	7.4	1.2	−	2/12 強	にぶい橙(5YR7/4)	密
44	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.3	−	ほぼ完形	淡橙(5YR8/3)〜橙(2.5YR7/6)	密
45	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.5	−	完形	灰白(10YR8/2)	密　(1mm 以下の白色・黒色・褐色砂粒と 5 mm 大の灰色砂粒を含む、雲母含む、赤色斑粒含む)
46	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.3	−	5/12	灰白(10YR8/2)	密(1mm 以下の灰色･褐色砂粒、雲母含む)
47	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.4	−	8/12	灰白(10YR8/2)	密
48	土師器	皿	A 1	S E 210	8.9	1.4	−	ほぼ完形	にぶい橙(7.5YR 7/4)	密(1mm 以下の白色黒色砂粒赤色斑粒、雲母含む)
49	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.6	−	5/12	灰白(2.5Y8/2)	密
50	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.3	−	6/12	灰白(10YR8/2) にぶい橙(7.5YR7/4)	密　(1mm 以下の白色・褐色砂粒・赤色斑粒・雲母を含む)
51	土師器	皿	A 1	S E 210	7.9	1.3	−	1.5/12	淡橙(5YR8/4)	密(0.5mm 以下の黒色・赤茶色の砂粒を含む)
52	土師器	皿	A 1	S E 210	9.0	1.5	−	ほぼ完形	淡橙(5YR8/3)〜にぶい橙(5YR7/4)	密
53	土師器	皿	A 1	S E 210	9.0	1.5	−	2/12	にぶい橙(7.5YR7/3)	密(赤色斑粒を含む)
54	土師器	皿	A 1	S E 210	7.7	1.4	−	4/12	内・外面口縁:灰白(7.5YR8/1) 外面底部:褐(10YR5/1)	密(0.5mm 以下の白色・茶色の砂粒を含む)
55	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.6	−	全)5/12	灰白(10YR8/1)	密(0.5mm 以下の黒色・白色の砂粒を含む、器表に雲母多い)
56	土師器	皿	A 1	S E 210	8.4	1.6	−	全)7/12	浅黄橙(7.5YR8/3)	密(0.5mm 以下の赤茶色・黒色・白色の砂粒を含む)
57	土師器	皿	A 1	S E 210	8.5	1.7	−	11/12	浅黄橙(7.5YR8/4)	密
58	土師器	皿	A 1	S E 210	7.7	1.2	−	全)5/12	内外面:灰白(7.5YR8/1)〜褐灰(7.5YR5/1)	密(0.5mm 以下の赤茶色・黒っぽい色の砂粒を含む)
59	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.5	−	8/12	橙(2.5YR7/6)〜浅黄橙(7.5YR8/3)	密
60	土師器	皿	A 1	S E 210	8.3	1.6	−	4.5/12	灰白(7.5YR8/2)	密(ごく細かい黒っぽい砂粒・赤茶色の砂粒を含む)
61	土師器	皿	A 1	S E 210	8.4	1.5	−	ほぼ完形	浅黄(2.5Y7/3)	密　(1mm 以下の白色、褐色砂粒赤色砂粒・雲母を含む)
62	土師器	皿	A 1	S E 210	8.5	1.2	−	全)6/12	灰白(7.5YR8/2)	密(1mm 以下の茶色の砂粒、0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む)
63	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.1	−	3/12 強	灰白(10YR8/2)	密(1.5mm 以下の白色・褐色砂粒少し含む)
64	土師器	皿	A 1	S E 210	7.8	1.9	−	11/12	外面:灰白(7.5YR8/2) 内面:橙(5YR6/6)〜褐灰(7.5YR6/1)	密
65	土師器	皿	A 1	S E 210	7.8	1.2	−	1.5/12	灰白(10YR8/1)	密(0.5mm 以下の黒色の砂粒を含む)

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
66	土師器	皿	A 1	S E 210	8.6	1.1	－	6/12	灰白（10YR8/2）	密
67	土師器	皿	A 1	S E 210	8.6	(1.3)	－	3/12	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む）
68	土師器	皿	A 1	S E 210	8.4	1.2	－	6/12	灰白（10YR8/2）	密
69	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.5	－	全）4/12	灰白（7.5YR8/1） 内面底部付近：灰（N4/0）	密（1mm 以下の黒っぽい砂粒を含む）
70	土師器	皿	A 1	S E 210	8.7	1.2	－	4.5/12	内外面：橙（2.5YR6/6） 断面：明褐灰（5YR7/2）	密（1mm 以下の赤茶色の砂粒を多く含む）
71	土師器	皿	A 1	S E 210	8.7	1.5	－	4.5/12	橙（5YR7/6）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む）
72	土師器	皿	A 1	S E 210	8.8	1.2	－	2/12 弱	橙（2.5YR6/6）	密
73	土師器	皿	A 1	S E 210	9.0	1.2	－	3/12 弱	橙（2.5YR7/6）	密
74	土師器	皿	A 1	S E 210	8.4	1.7	－	完形	灰白（2.5Y8/2）	密
75	土師器	皿	A 1	S E 210	9.2	1.4	－	1.5/12	灰白（7.5YR8/1）断面は部分的に灰	密（ごく細かい白色の砂粒、黒っぽい砂粒を含む）
76	土師器	皿	A 1	S E 210	8.6	1.6	－	5/12	にぶい橙（7.5YR 7／4）	やや密（0.5mm 前後茶、グレー砂粒少量）
77	土師器	皿	A 1	S E 210	9.4	(1.3)		2/12	内外面：灰白（10YR8/1） 断面：一部灰白（2.5Y7/1）	密（精良、ごく細かい黒色・茶色の砂粒を含む）
78	土師器	皿	A 1	S E 210	9.8	1.4	－	2/12	灰黄（2.5Y6/2）	密
79	土師器	皿	A 1	S E 210	13.0	(2.0)	－	1/12	灰白（10YR8/2）	密
80	土師器	皿	A 1	S E 210	13.8	2.9	－	3/12	灰白（10YR8/2）～浅黄橙（7.5YR8/4）	密
81	土師器	皿	A 1	S E 210	15.7	1.7	－	1/12 弱	灰白（10YR8/2）	密
82	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	5.8	5.8	口）12/12 全）95%	暗灰（N4/0） 灰白（5Y8/1）	密　（砂粒なし）
83	瓦器	椀	A 1	S E 210	－	(1.9)	5.9	底）完存	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
84	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.0	5.4	5.8	口）7/12 全）70%	暗灰（N3/0） 灰白（N8/0）	密　（砂粒なし）
85	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.9	5.6	6.2	口）3/12 底）9/12	黒（N2/0）	やや粗
86	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.2	4.8	5.9	6/12 強	暗灰（N3/0）	やや密
87	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.0	5	5.8	—	暗灰（N3/0）	やや密
88	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	5.4	5.5	口）4.5/12 全）50%	暗灰（N3/0） 灰白（N8/0）	密　（砂粒なし）
89	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	5.0	5.8	1/12	暗黒（N3/0）	やや密（0.5mm 以下茶、黒砂粒少量含む）
90	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.2	5.4	5.8	口）5/12 全）40%	暗灰（N4/0） 灰白（5Y8/1）	密　（砂粒なし）
91	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.8	5.4	5.1	口）3/12 弱 全）25%	灰（5/0）	密　（1mm 以下明灰色砂粒少量）
92	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.0	6.0	5.6	口）11/12 全）90%	暗灰（N4/0） 灰白（5Y8/1）	密
93	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	4.8	6.0	4/12	灰（7.5Y6/1）	やや密（0.5 ～ 1 mm 灰色砂粒少量含む）
94	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	4.9	6.3	口）3/12 底）4/12	オリーブ黒（7.5Y3/1）	やや密
95	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.0	5.5	5.9	口）4/12 弱 底）6/12 強	暗灰（N3/0）	やや密
96	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.6	5.7	5.7	4/12	暗灰（N3/3）	やや密（0.5mm 以下茶色砂粒少量含む
97	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.5	5.0	6.2	口）2/12 全）20%	暗灰（N4/0） 内面 : 灰白（7.5Y7/1）	密　（0.5mm 以下淡灰色砂粒含む）
98	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	4.9 歪みあり	8.8	口）5/12 強 全）45%	暗灰（N3/0）	密　（0.5mm 以下白色砂粒含む）
99	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.3	5.5	7.3	1.5/12	内外・断面中心部：灰（N4/0） 断面器表：白（N9/0）	密（ごく細かい白い砂粒を含む）
100	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.8	(4.3)	－	2/12	内外面：灰（N4/0） 断面：褐灰（10YR6/1）	密（ごく細かい白い砂粒・黒っぽい砂粒を含む）
101	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.2	(4.2)	－	3/12 強	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の茶色の砂粒を含む）
102	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.2	(3.4)	－	2/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（10YR8/1）	密（ごく細かい白い砂粒を含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
103	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.1	(4.7)	−	2/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい白い砂粒を含む）
104	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.8	(3.8)	−	口）3/12 全）15%	暗灰（N3/0）	密　(0.5mm 大白色砂粒微細量含む）
105	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.4	(4.1)	−	1.5/12	暗灰（N3/0）	密
106	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.7	(3.7)	−	1/12 強	灰（N5/0）	密
107	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.7	(3.9)	−	3 /12 強	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N4/0）	密（ごく細かい白・黒色の砂粒を含む）
108	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.8	(3.8)	−	1.5/12	内外：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色の砂粒を含む）
109	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.0	(4.3)	−	4/12 弱	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N6/1）	密（ごく細かい黒色の砂粒を含む）
110	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.8	(4.3)	−	4/12	内外：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）〜灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色の砂粒を含む）
111	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.8	(4.3)	−	1.5/12	内外：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色の砂粒を含む）
112	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.6	(3.7)	−	2/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰（N5/0）〜灰白（N8/0）	密（精良）
113	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.0	(3.8)	−	3/12	灰白（N8/0）（摩滅）	密（0.5mm 以下の黒っぽい砂粒を含む）
114	瓦器	椀	A 1	S E 210	−	(3.8)	6.0	底）完存	内外：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N4/0）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
115	瓦器	椀	A 1	S E 210	−	(1.5)	4.5	底）3/12	内面：灰白（N7/0）摩滅 外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒い砂粒を含む）
116	須恵器	鉢	A 1	S E 210	25.7	(2.7)	−	1/12	灰（N6/1）	やや粗　（1 mm 前後白、グレー砂粒含む）
117	土師器	皿	A 1	S E 210	8.6	1.3	−	4.5/12	内：褐灰（7.5YR4/19） 外：明褐灰（7.5YR7/2） 断面：灰（N4/0）	密（0.5mm 以下の白色・赤茶色・黒っぽい砂粒を含む）
118	土師器	皿	A 1	S E 210	8.4	1.5	−	ほぼ完存	にぶい黄橙（10YR7/2）〜褐灰（10YR6/1）	密
119	土師器	皿	A 1	S E 210	7.4	1.4	−	2/12 強	灰白（5YR8/2）	密
120	土師器	皿	A 1	S E 210	7.9（口縁歪みあり）	1.5	−	9/12	灰白（2.5Y8/2）	密　(1mm 以下の白色、灰色、黒色砂粒を含む雲母含む）
121	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.4	−	4/12	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm 以下の茶色・灰色の砂粒含む）
122	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.4	−	4/12	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の黒色の砂粒・ごく細かい光沢のある砂粒を含む）
123	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.4	−	9/12	灰白（10YR8/2）	密（1mm 以下の白色･褐色砂粒、赤色斑粒、雲母含む）
124	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.3	−	9/12	外：にぶい橙（5YR7/4） 灰白（7.5YR8/2） 内：灰白（10YR8/1）	密　(1mm 以下の白色砂粒含む、赤色斑粒含む）
125	土師器	皿	A 1	S E 210	7.3	1.4	−	3/12	灰白（7.5YR8/1） 断面：中心部少し灰	密（0.5mm 以下の黒っぽい砂粒を含む）
126	土師器	皿	A 1	S E 210	7.7	1.5	−	3/12 強	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の黒っぽい砂粒やごく細かい白色の砂粒を含む、1mm 大の灰色砂粒も含む）
127	土師器	皿	A 1	S E 210	8.1	1.5	−	2 /12 強	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや密　（ごく細かい白・茶砂粒少量）
128	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.7	−	7/12	にぶい橙（5YR7/4）	密
129	土師器	皿	A 1	S E 210	8.0	1.7	−	3/12 強	灰白（7.5YR8/1） 断面：褐灰	やや密（0.5mm 以下の茶色・白色・黒色の砂粒含む、1mm 大のも含む）
130	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.2	−	5/12	内：淡橙（5YR8/3） 外：橙（5YR7/6） 断面：褐灰（10YR6/1）	密（0.5mm 以下の白色・こげ茶色・赤茶色の砂粒を含む）
131	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.3	−	全）8/12	内外：浅黄橙（7.5YR8/3） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（1 mm 以下の赤茶色・黒色の砂粒を含む、1mm 〜 2mm の白色の砂粒も混じる）
132	土師器	皿	A 1	S E 210	8.2	1.1	−	4/12 弱	内外：橙（2.5YR6/1） 断面：灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の赤茶色・黒っぽい砂粒を含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
133	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.4	1.0	－	4/12	灰白（7.5YR8/1） 断面：中心部は灰	密（0.5mm 以下の白色・茶色・黒色の砂粒を含む）
134	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.2	(1.1)	－	4 /12	にぶい黄橙（10YR7/2）	密
135	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.2	1.4	－	4/12 弱	灰白（10YR8/2）	密（0.5mm 以下の赤色砂粒を少し含む）
136	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.8	(1.4)	－	1/12 強	灰白（10YR8/1）	密
137	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.4	1.6	－	2/12	内外面：灰白（7.5YR8/2） 断面：灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒・1mm 以下の灰色・茶色の砂粒を含む）
138	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	9.0	1.3	－	4/12	にぶい橙（5YR7/4）	密
139	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.7	1.2	－	2/12	灰白（10YR8/2）	密（0.5mm 以下の灰色・茶色・黒っぽい砂粒を含む）
140	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.9	1.8	－	5/12	橙（5YR7/6）	密
141	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.8 ～ 9.0	1.6	－	完存	浅黄橙（10YR8/3）	密
142	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.2	1.4	－	11/12	淡橙（５YR8/3）	密　(2～４mm 大の白い石、黒い石２～３％含む）
143	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.4	1.5	－	6/12	浅黄橙（7.5YR8/4）	密
144	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	9.0	1.5	－	1.5/12	内面：灰白（10YR7/1） 外面：褐灰（10YR4/1） 部分的に浅黄橙 (7.5YR8/3)	密（0.5mm 以下の白色砂粒、黒っぽい砂粒を含む）
145	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.9	1.2	－	2/12	灰白（7.5YR8/1）	密（１mm 以下の白色の砂粒少しこげ茶色の砂粒多く、0.5mm 以下の黒色の砂粒多くを含む）
146	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.8	1.5	－	2/12 強	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm 以下の赤色砂粒・微細な雲母を少し含む）
147	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	9.2	1.2	－	2/12 強	灰白（10YR8/2）	密（1 ～ 0.5mm 以下の白色砂粒、黒っぽい砂粒を含む）
148	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	10.2	(1.5)	－	2/12 強	内外面：灰白（7.5YR8/1） 断面：中心一部褐灰	やや粗（1.5mm 以下の黒っぽい砂粒、白色の砂粒を含む）
149	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	9.9	(1.6)	－	1.5/12	灰白（7.5YR8/1）	密（１mm 以下の茶色砂粒を少し含む）
150	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	9.4	1.3	－	2/12 強	褐灰（10YR6/1）	密（１mm 以下の白色・赤色砂粒をわずかに含む）
151	瓦器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.8	1.6	－	1.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
152	瓦器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.7	1.4	－	4.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白色の砂粒を含む）
153	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	11.1	(1.4)	－	1/12	淡橙（5YR8/3）	密（0.5mm 以下の赤色・黒色砂粒をわずかに含む）
154	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	13.8	(1.5)	－	1/12 強	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（１mm 以下の赤色砂粒含む）
155	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	12.0	(2.2)	－	1.5/12	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の黒色の砂粒を含む）
156	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	14.0	(2.3)	－	1/12	淡橙（5YR8/3）	密（１mm 以下の赤色砂粒を少し含む）
157	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	13.7	(2.5)	－	1/12	浅黄橙（7.5YR8/3）	やや粗（１mm 以下の赤色・白色砂粒多めに含む）
158	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	15.7	(2.4)	－	1/12	内外面：淡橙（5YR8/3） 断面：淡赤橙（2.5YR7/3）	密（１mm 以下の赤茶色の砂粒、0.5mm 以下の黒っぽい砂粒を含む）
159	土師器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	13.8	(3.7)	－	2/12	灰白（10YR8/2）	密
160	瓦器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	9.0	1.1	－	2.5/12	暗灰（N3/0）	密
161	瓦器	皿	Ａ１	ＳＥ 210	8.8	1.5	－	全）8/12	内外：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N5/0）	密（ごく細かい白色の砂粒を含む）
162	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	13.7	4.9	7.2	2/12	灰（N4/0）	密
163	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	14.7	(4.3)	－	2/12 弱	灰白（2.5Y8/1）～灰（N4/0）	密
164	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	14.7	(3.3)	－	2/12	暗灰（N3/0）	密
165	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	14.4	(4.6)	－	2/12 弱	灰（N4/0）	密
166	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	15.0	(4.0)	－	1/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）・灰白（N7/0）	密（ごく細かい黒色の砂粒を含む）
167	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	15.1	(3.4)	－	2/12 弱	灰（N4/0）	密
168	瓦器	椀	Ａ１	ＳＥ 210	(13.8)	(2.8)	－	1/12 以下	暗灰（N3/0）	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
169	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.4	(3.6)	－	2/12 弱	暗灰（N3/0）	密
170	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.9	(5.1)	－	3/12	灰（N4/0）	密
171	瓦器	椀	A 1	S E 210	(13.7)	(3.1)	－	1/12	灰（N4/0）	密（1 mm 以下の黒色粒少し含む）
172	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.0	5.2	5.1	口）1.5/12 底）3/12 強	暗灰（N3/0）	やや密
173	瓦器	椀	A 1	S E 210	(14.7)	4.5	6.8	口）1/12 以下 底）2/12 弱	内外面：摩滅以外の部分は暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む）
174	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.5	(3.1)	－	2/12 弱	暗灰（N3/0）	密
175	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.0	(3.5)	－	1/12 強	灰（N4/0）	密
176	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.8	(3.5)	－	1.5/12 弱	外面：灰（N4/0） 内面：摩滅 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色の砂粒を含む）
177	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.4	(4.0)	－	2/12 強	内外：灰（N6/0）摩滅 断面：器表側灰白（N8/0）中心部灰（N4/0）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
178	瓦器	椀	A 1	S E 210	(13.8)	(4.3)	－	1/12	灰（N4/0）	密
179	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.0	(3.1)	－	1.5/12 弱	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N4/0）	密（ごく細かい白色の砂粒、0.5mm 以下の黒色の砂粒を含む）
180	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.1	(4.6)	－	2/12	内外面：灰（N5/0）摩滅著しい 断面：灰白（N8/0）・灰（N6/0）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
181	瓦器	椀	A 1	S E 210	13.6	(3.8)	－	2/12 弱	内外面：灰（N5/0）摩滅著しい 断面：灰白（N8/0）・灰（N4/0）	密（ごく細かい白色の砂粒を含む）
182	瓦器	椀	A 1	S E 210	15.2	(3.3)	－	1.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（1 ～ 0.5mm 以下の白色砂粒をやや多く含む）
183	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.1	(2.8)	－	1.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
184	瓦器	椀	A 1	S E 210	(13.8)	(3.5)	－	1/12	黒（10Y2/1）	密
185	瓦器	椀	A 1	S E 210	14.0	(3.8)	－	2/12 強	灰（N5/0）	密
186	瓦器	椀	A 1	S E 210	－	(3.3)	5.6	底）6/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む）
187	瓦器	椀	A 1	S E 210	－	(2.8)	6.0	底）6/12 弱	内外面：灰白（2.5Y8/1） 断面：灰（N6/0）	密（0.5mm 以下の濃い茶色・黒っぽい砂粒、ごく細かい白色の砂粒を含む、1 ～ 2mm の砂粒も混じる）
188	瓦器	椀	A 1	S E 210	－	(2.5)	5.6	底）4/12 強	暗灰（N3/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒少し含む）
189	瓦器	椀	A 1	S E 210	6.7	(9.5)	－	底）3/12 強	灰（5Y4/1）	密
190	瓦器	椀	A 1	S E 210	－	(1.4)	6.6	底）2/12	灰（N4/0）	密
191	瓦器	椀	A 1	S E 210	－	(1.4)	5.8	底）2/12	暗灰（N3/0）	密
192	土師質	羽釜	A 1	S E 210	－	(4.6)	鍔）(26.0)	鍔）1/12 以下	内面：明褐灰（7.5YR7/2） 外面：褐灰（7.5YR4/1） 断面：黒褐（7.5YR3/1）	やや粗（1.5mm 以下の白色の砂粒、0.5mm 以下の黒色・透明の砂粒をやや多く含む）
193	須恵器	鉢	A 1	S E 210	20.6	残存長 5.6	－	1.5/12	外面：灰（N5/0） 内･断面：明青灰（5PB7/1）	やや粗（0.5mm 以下の白い砂粒多め、1 ～ 3mm 大も混じる。黒色の砂粒を少し含む）
223	土師器	皿	A 1	S D 220	7.4	1.1	－	4/12	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（灰色、透明砂粒、赤色斑粒含む）
224	土師器	皿	A 1	S D 220	7.6	1.0	－	3/12	灰白（2.5Y8/2）	密（雲母含む）
225	土師器	皿	A 1	S D 220	7.9	1.5	－	ほぼ完存	浅黄橙（7.5YR8/4）	密（4mm ～ 1.5mm 大の黒白色、黒色、白色砂粒や 0.5mm 以下の黒色、褐色、雲母砂粒を含む
226	土師器	皿	A 1	S D 220	8.8	1.0	－	5/12	淡橙（5 YR 7／ 4）	密（5 mm ～ 2 mm 大の茶色・白色砂粒や 1 mm 以下の白色・灰色砂粒を含む）
227	土師器	皿	A 1	S D 220	8.5	1.4	－	5/12	灰白（7.5YR8/ 2） (10YR8/2)	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
228	土師器	皿	A 1	S D 220	9.4	1.5	－	3/12	灰白（2.5Y8/2）	密（1mm 以下の白色砂粒、雲母を含む）
229	土師器	皿	A 1	S D 220	7.8	1.5	－	3/12	にぶい橙（5YR7/3） 灰白（10YR8/2）	密（黒色砂粒、赤色斑粒を含む）
230	土師器	皿	A 1	S D 220	8.5	1.4	－	10/12	にぶい黄橙（10YR7/3）	やや密（0.5mm 以下黒色、茶色、白色砂粒少量含む）
231	土師器	皿	A 1	S D 220	8.4	1.3	－	8/12	灰白（10YR8/2 ～ 8/1）	密
232	土師器	皿	A 1	S D 220	8.3	1.5	－	11/12	灰白（2.5Y 8 /2）	密（２mm 以下の黒灰色・黒色・白色砂粒を含む）
233	土師器	皿	A 1	S D 220	8.2	（1.1）	－	2/12	にぶい橙（5YR7/4）	密（１mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
234	土師器	皿	A 1	S D 220	8.7	1.6	－	口）10/12 全）11/12	淡橙（５YR8/ ４）	密（１mm 以下の黒色・灰色粒を含む）
235	土師器	皿	A 1	S D 220	（8.2 ）	1.7	－	1/12	灰白（2.5Y8/1）	密（1mm 以下の透明・褐色砂粒を含む）
236	土師器	皿	A 1	S D 220	8.8	1.3	－	4/12	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（赤色斑粒・雲母含む）
237	土師器	皿	A 1	S D 220	8.6	（1.5）	－	4/12	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（2.0mm 以下の白色砂粒、赤色斑粒を含む）
238	土師器	皿	A 1	S D 220	8.8	1.2	－	2/12	—	密（２mm 大の赤色・白色砂粒を含む、ごく細かい褐色・雲母を含む）
239	土師器	皿	A 1	S D 220	9.5	1.7	－	2/12	内面：灰白（10YR8/2） にぶい橙（5YR7/4） 外面：褐灰（10YR5/1）	密
240	土師器	皿	A 1	S D 220	8.7	1.6	－	完存	灰白（7. 5 Y R 8/2）～にぶい橙（5Y R 7/3）	密（２mm 以下の白黒色砂粒を含む）
241	土師器	皿	A 1	S D 220	10.0	（2.2）	－	3/12	内面：にぶい橙（5YR7/4） 外面：灰白（7.5YR8/1） 断面：褐灰（10YR6/1）	密（0.5mm 以下の黒色・ごく細かい白色砂粒）
242	土師器	皿	A 1	S D 220	11.4	（2.5）	－	4/12	灰白（10YR8/2）	密（黒褐色砂粒・雲母含む）
243	土師器	皿	A 1	S D 220	13.5	2.2	－	8/12	浅黄（2.5Y7/3）	やや密　（0.5mm 以下茶色、雲母含む）
244	土師器	皿	A 1	S D 220	13.0	2.9	－	5/12	不明	密
245	土師器	皿	A 1	S D 220	13.4	2.3	－	3/12	灰白（10YR8/2）	密（雲母含む）
246	土師器	皿	A 1	S D 220	13.2	（2.3）	－	2/12	内外面：灰白（10YR8/2） 断面：暗灰（N3/0）	密（１mm 以下の白色・黒色・灰色砂粒を含む）
247	土師器	皿	A 1	S D 220	13.6	2.7	－	2/12	灰白（10YR8/1）	密（1mm 大の白色・黒色砂粒を含む）
248	土師器	皿	A 1	S D 220	13.6	（3.0）	－	3/12	灰白（2.5Y8/2）	密
249	土師器	皿	A 1	S D 220	13.8	2.8	－	ほぼ完形	にぶい黄橙（10YR7/2）	やや密（１mm 以下　茶色砂粒少量）
250	土師器	皿	A 1	S D 220	14.6	（2.2）	－	2/12	灰白（2.5Y8/2）	密
251	土師器	皿	A 1	S D 220	14.6	2.8	－	2/12	灰白（2.5Y8/2）	密（雲母含む）
252	土師器	皿	A 1	S D 220	14.0	（2.2）	－	2/12	灰白（10YR8/2）	密（透明砂粒含む）
253	土師器	皿	A 1	S D 220	（15.0 ）	2.6	－	1/12	灰白（2.5Y8/2）	密
254	土師器	皿	A 1	S D 220	（15.0 ）	2.6	－	1/12	灰白（5Y8/1）	密（透明砂粒含む）
255	土師器	皿	A 1	S D 220	（15.2 ）	（3.0）	－	1 /12 強	内外面：灰白（10YR8/2） 断面：暗灰（N3/0）	やや密（１mm 以下の黒色・白色砂粒を含む）
256	土師器	甕か	A 1	S D 220	（18.2）	（1.9）	－	1.5/12	内面：明褐灰（7.5YR7/2） 外面:にぶい橙（7.5YR6/4） 断面：灰白（7.5YR8/1）	やや粗（１mm 以下の白色・半透明・茶色の砂粒）
257	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.8	5.2 ～ 5.7	7.4	ほぼ完形	黒（N2/0）	やや密
258	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.6	（5.8）	7.2	口）2/12 底）3/12	灰（N4/0）～灰白（N8/0）	やや密（１mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
259	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	5.6	6.6	ほぼ完形	暗灰（N4/0）	密
260	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.6	5.3	6.6	口）10/12 強 全）90%	暗灰（N3/0）	密
261	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	5.1	6.2	口）11/12 以上 全）95%	灰　（N4/0 ～ 5/0）	密
262	瓦器	椀	A 1	S D 220	－	（2.0）	7.0	底）完存	暗灰（N3/0）	密
263	瓦器	椀	A 1	S D 220	－	（1.8）	6.9	底）7/12	内外面：灰（N ４/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい白色の砂粒を含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
264	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(0.9)	6.8	底) 2/12	灰 (N6/0)	密
265	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.6	5.5	6.6	12/12	黒褐 (2.5Y3/1)	密
266	瓦器	椀	A 1	S D 220	15.2	4.9	6.9	2/12	暗灰 (N3/0)	密 (1mm 以下の白色・黒色粒を含む)
267	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.6	4.9	5.6	5/12	灰 (N4/0)	密
268	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.2	5.2	6.8	口) 1 /12 底) 完存	灰白 (7.5YR8/1)	密
269	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.6	5.5	6.6	口) 9/12 底) 6/12	暗灰 (N3/0) 灰白 (2.5Y8/1)	密
270	瓦器	椀	A 1	S D 220	15.7	5.1	6.7 ~ 7.0	5/12 強	暗灰 (N3/0) 灰白 (5Y8/1)	密
271	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.9	5.5	5.9	口) 8.5/12 全) 80%	暗灰 (N4/0)	密
272	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.8	4.9	5.6	3/12	内面：灰白 (5Y8/1) 外面：灰白 (5Y8/2)	やや粗 (まれに 5mm 大の灰色砂粒が見受けられるが 1mm 以下の黒色・白色砂粒が含まれる)
273	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	5.1	−	口) 2/12 弱 全) 25%	外面：灰 (N4/0) 内面：灰白 (N7/0)	密
274	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.2	5.1	6.6	7 /12	黒 (N2/0) ~褐灰 (10YR4/1)	密
275	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0 ~ 14.5	5.3	6.3	10/12	黒 (2.5GY2/1)	密
276	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	4.85	−	3/12	灰 (7.5Y4/1)	密
277	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.6	5	5.9	ほぼ完存	暗灰 (N4/0)	密
278	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	5.5	7.2	底) 2/12	暗灰 (N3/0)	密
279	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.4	5.1	6.8	口) 6/12 底) 8/12	オリーブ黒 (7.5Y3/1) 灰白 (5Y8/1)	密
280	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.9	(4.3)	−	2/12	暗灰 (N3/0)	密
281	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.4)	(4.5)	−	1.5/12	暗灰 (N3/0) ~灰 (N6/0)	やや粗 (微小な白色・黒色粒が含まれる)
282	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.6	(4.6)	−	2/12	灰 (N6/0) ~灰 (N5/0)	やや粗 (1mm 以下の白色・黒色砂粒を含む)
283	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(4.2)	−	2/12	暗灰 (N3/0)	密
284	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.8)	(3.5)	−	1/12 強	暗灰 (N3/0)	密 (1mm 以下の黒色・白色砂粒を含む)
285	瓦器	椀	A 1	S D 220	15.0	(4.4)	−	6/12 強	暗灰 (N3/0) ~灰白 (N7/0)	やや粗 (1 mm 以下の白色・黒色粒を含む)
286	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(4.1)	−	1/12	灰白 (2.5Y8/2)	密
287	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(4.3)	−	1/12	灰 (N4/0)	密
288	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.1	(4.3)	−	3/12	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	密
289	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	4.1	−	1/12	灰 (N5/0)	密
290	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(4.0)	−	2/12	灰 (N4/0) ~灰白 (7.5Y8/1)	やや粗 (まれに 2 mm 大の白色砂粒が見受けられるが、1 mm 以下の白色・黒色砂粒が主体で含まれる)
291	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.5	(4.2)		2/12	暗灰 (N3/0)	密
292	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.8	(4.5)	−	6/12 強	灰 (N4/0)	やや密 (微細な砂粒を含む)
293	瓦器	椀	A 1	S D 220	(15.0)	(4.0)	−	1/12	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	密
294	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.7	(4.15)	−	5/12	灰 (N4/0)	やや粗 (1 mm 以下の白色・黒色砂粒を含む)
295	瓦器	椀	A 1	S D 220	(15.0)	(4.0)	−	1/12	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	密
296	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(3.8)	−	1/12 以下	灰 (N4/0)	密
297	瓦器	椀	A 1	S D 220	(15.0)	(3.0)	−	1/12	暗灰 (N3/0)	密
298	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.3	(4.4)	−	2/12	暗灰 (N3/0) ~灰白 (N7/0)	やや密 (1 mm 以下の黒色・白色砂粒を含む)
299	瓦器	椀	A 1	S D 220	(13.8)	(3.0)	−	1.5/12	灰 (N4/0) ~灰白 (2.5GY8/1)	やや密 (1 mm 以下の黒色・白色砂粒を含む)
300	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.2	(4.8)	−	2/12	暗灰 (N3/0)	密
301	瓦器	椀	A 1	S D 220	15.0	(4.4)	−	2/12	暗灰 (N3/0)	密
302	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.0	(4.4)	−	4/12	灰 (N4/0)	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
303	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(4.3)	−	3/12	灰（N4/0）	密
304	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(3.0)	−	1/12	灰（N4/0）	密
305	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.6)	(3.9)	−	1/12	暗灰（N3/0）	密
306	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(3.2)	−	1/12	暗灰（N3/0）	密
307	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.6)	(3.2)	−	1/12	オリーブ黒（7.5Y3/1）	密
308	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.4	(4.2)	−	5/12	オリーブ黒（7.5Y3/1）	密（1 ～ 3mm 大の白色、透明灰色砂粒を含む）
309	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.4)	(3.2)	−	1/12	黒（2.5GY2/1）	密
310	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(4.2)	−	5/12	暗灰（N3/0）	やや密（5mm 大の灰色砂粒含む）
311	瓦器	椀	A 1	S D 220	(15.0)	(4.2)	−	1/12	暗灰（N3/0）	密
312	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(3.9)	−	1/12	灰（N4/0）	密
313	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.4)	(3.3)	−	1/12	灰（N4/0）	密（１mm 大の白色砂粒含む）
314	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.4	(3.5)	−	3/12	淡橙（5YR8/3） 灰白（10YR8/2）	密
315	瓦器	椀	A 1	S D 220	(15.0)	(3.6)	−	1/12	灰白（5Y8/1）	密
316	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.4	(4.0)	−	2/12	灰（N5/0）	密
317	瓦器	椀	A 1	S D 220	15.6	(3.9)	−	4/12	灰（N4/0）～灰白（N7/0）	やや密（１mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
318	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(4.1)	−	4/12	暗灰（N3/0）	密
319	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(2.6)	−	2/12	灰（N4/0）	密
320	瓦器	椀	A 1	S D 220	(12.2)	(3.3)	−	1/12	灰白（2.5Y8/1）	密
321	瓦器	椀	A 1	S D 220	14.0	(4.4)	−	4/12	灰（N4/0）	密
322	瓦器	椀	A 1	S D 220	(13.8)	(4.7)	−	1/12	灰（N4/0）	密
323	瓦器	椀	A 1	S D 220	13.9	(5.1)	−	2/12	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
324	瓦器	椀	A 1	S D 220	(13.0)	(4.1)	−	1/12	灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を含む）
325	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(3.7)	−	1/12 以下	暗オリーブ灰白(2.5GY3/1)	密
326	瓦器	椀	A 1	S D 220	(14.0)	(2.9)	−	1/12	灰白（2.5Y8/1）	密（褐色砂粒含む）
327	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.1)	6.0	底）5/12	灰白（10YR8/2）	密
328	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.1)	6.4	底）3/12	灰白（5Y8/2）	密
329	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.3)	7.0 ～ 7.2	底）8/12	灰白（5Y8/1）・灰（N6/0）	密（白色砂粒含む）
330	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.3)	6.6	底）5/12	暗灰（N3/0）	密
331	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.2)	6.0	底）3/12	暗灰（N3/0）	密
332	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.1)	6.4	底）9/12	暗灰（N3/0）	密
333	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.9)	7.4	底）3/12	暗灰（N3/0）	密
334	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.7)	6.7	底）完存	灰（N4/0）	密
335	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(1.6)	(6.4)	底）1/12	暗灰（N3/0）	密
336	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(2.6)	7.2	底）3/12	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
337	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(2.0)	6.6	底）2/12	灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を含む）
338	瓦質土器	羽釜	A 1	S D 220	21.1	(4.9)	鍔）27.0	2/12	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（N7/0）	密（1mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
339	土師器	羽釜	A 1	S D 220	20.9	10.4	−	6/12	にぶい橙（5YR7/4）	やや密（１mm 大の白色・黒色・褐色砂粒、赤色斑粒含む）
340	土師器	羽釜	A 1	S D 220	20.2	(12.0)	−	1 /12 以下	灰（5Y4/1）	密（１mm 大の白色砂粒含む）
341	土師器	羽釜	A 1	S D 220	(29.4)	(2.8)	−	1/12	灰黄（2.5Y7/2）	密（1mm 大の白色・灰々・半透明砂粒、雲母含む）
342	瓦質土器	羽釜	A 1	S D 220	30.0	(6.0)	−	/	灰（7.5Y4/1）	密（1mm 大の白色砂粒含む、雲母含む）
343	土師質	羽釜	A 1	S D 220	−	(2.9)	鍔）39.6	鍔）1/12	にぶい赤褐（5YR5/4）～明赤褐（5YR5/6）	やや粗（4 ～ 2 mm 大の光沢のある白濁色や灰濁色砂粒や、1mm 以下の白色・灰色・褐色砂粒を多く含む

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
344	瓦質土器	鍋	Ａ１	ＳＤ220	26.6	(5.2)	－	3/12	灰（N5/0）	密　(1～2mm大の白色・半透明褐色・灰色砂粒を含む)
345	瓦質土器	鍋	Ａ１	ＳＤ220	(29.2)	(7.0)	－	1/12	灰（N4/0）	密　(1mm大の白色半透明、透明砂粒を含む)
346	須恵器	甕	Ａ１	ＳＤ220	頸) 44.0	(8.5)	－	頸) 2/12	灰白（7.5Y7/1） 灰（7.5Y6/1）	密（1～5mm大の白色、黒色砂粒含む）
347	須恵器	甕か	Ａ１	ＳＤ220	－	－	－	/	灰（N5/0）	密（白色砂粒含む）
348	須恵器	甕	Ａ１	ＳＤ220	－	－	－	/	内面：灰白（2.5Y7/1） 外面：オリーブ灰（2.5GY5/1）	密（1～2mm大の白色・黒色・灰色砂粒含む）
349	土師器	皿	Ａ１（ａ11）	ＳＤ220	(11.7)	(1.3)	－	1/12強	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm以下の赤茶色・白色の砂粒、ごく細かい黒っぽい砂粒を含む）
350	土師器	皿	Ａ１（ａ11）	ＳＤ220	(9.8)	1.2	－	1.5/12	にぶい橙（5YR7/4）	やや密（1.5～1mm以下の赤茶色の砂粒多く含む、白色の砂粒も含む）
351	土師器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	(10.0)	0.9	－	1/12強	にぶい橙（7.5YR7/4）	密（1.5mm以下の灰色砂粒を含む）
352	土師器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	(8.4)	(1.0)	－	1/12強	外面：灰白（10YR8/2） 内面：灰白（10YR8/1）	密
353	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	7.8	1.1	－	3/12	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm以下の黒っぽい色・灰色・白色の砂粒を少し含む）
354	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ220	8.1	1.3	－	5/12	灰黄（2.5Y7/2）	やや密　(0.5mm前後茶色、白色少し)
355	土師器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	8.8	1.6	－	3/12	外面にぶい橙（5YR7/4） 内面：灰白（10YR8/2）	密
356	土師器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	8.4	1.4	－	3/12強	にぶい橙（5YR7/4）	密
357	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ220畦４	7.4	1.4	－	2/12強	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm以下の黒色・茶色・白色砂粒）
358	土師器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	8.8	1.3	－	6/12	外面：淡橙（5YR8/4） 内面：にぶい橙（5YR7/4）	密
359	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ220	8.4	1.3	－	9/12強	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（3mm以下の白色・黒褐色・褐色・黒色砂粒やクサリ礫を含む）
360	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	7.9	1.3	－	ほぼ完存	淡橙（5YR8/3）	密（1mm以下の白い砂粒、灰色の砂粒を少し含む）
361	土師器	皿	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	8.8	1.2	－	5/12	浅黄橙（7.5YR8/3）～淡赤橙（2.5YR7/4）のマーブル状	密
362	土師器	皿	Ａ１（ａ11）	ＳＤ220	8.0	1.3	－	2/12	にぶい黄橙（10YR7/3）	密（0.5mm以下位の茶色・白色・黒色砂粒少量含む）
363	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	7.8～8.0	1.4	－	11/12	浅黄橙（10YR8/3）	密
364	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.3	1.3	－	全）6/12	灰白（5YR8/2） 断面：灰（N6/0）	密（ごく細かい白色・黒色・茶色の砂粒を含む）
365	土師器	皿	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	(8.8)	(1.4)	－	1/12	内外面：橙（2.5YR7/6）～浅黄橙（7.5YR8/3） 断面：褐灰（10YR6/1）	密（1mm以下の褐色・灰色粒を含む）
366	瓦器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.1	1.2	－	3/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	やや粗（0.5mm以下の白い砂粒、黒っぽい砂粒を含む）
367	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.3	1.5	－	全）7/12	内外面：淡橙（5YR8/4） 断面：暗灰（N3/0）	密（0.5mm以下の黒色砂・茶色の砂粒を少し含む）
368	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ220畦２	9.0	1.5	－	2/12	にぶい橙（7.5YR7/3）	密（1mm大の白色・半透明砂粒・雲母含む）
369	土師器	皿	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	8.2	1.3	－	2.5/12	にぶい橙（7.5YR7/4）	密（1mm以下の白色・茶色砂粒、0.5mm以下の灰色砂粒）
370	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.5	1.6	－	11/12	淡橙（5YR8/3）	密（ごく細かい半透明の砂粒、1mm以下の黒っぽい砂粒を含む）
371	土師器	皿	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	9.0	(1.4)	－	2/12	浅黄橙（7.5YR8/3）～橙（5YR6/6）のマーブル状	密
372	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.8	1.2	－	2/12強	淡橙（5YR8/3）	密（1mm以下の白い砂粒 0.5mm以下の黒っぽい砂粒を含む、2mm大の灰色砂粒も混じる））
373	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.8	1.1	－	4/12	灰白（10YR8/2） 内面の一部が赤みを帯びている	密（0.5mm以下の白・黒っぽい色の砂粒を少し含む）
374	土師器	皿	Ａ１（ｒ13）	ＳＤ220	8.8	1.3	－	4.5/12	内面：灰褐（10YR6/1） 外面：浅黄橙（7.5YR8/3）	やや粗（ごく細かい白色・黒色・透明砂粒、器表に雲母多く付着）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
375	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	9.2	1.0	−	2/12	明褐灰（7.5YR7/2）	密（ごく細かい黒っぽい砂粒、0.5mm 大の白い砂粒含む）
376	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ220	9.8	1.8	−	10/12	にぶい黄橙（10YR7/3）	やや粗（0.5mm 前後茶色砂粒）
377	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	8.7	1.4	−	全）10/12	淡橙（5YR8/4）	密（0.5mm 以下の白色・黒色・赤茶色の砂粒を少し含む）
378	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	9.2	1.2	−	全）3/12	内外面:浅黄橙（7.5YR8/3） 断面：褐灰（7.5YR5/1）	密（１mm 以下の黒い砂粒、茶色の砂粒を少し含む）
379	土師器	皿	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	(9.0)	(1.9)	−	1.5/12	橙（2.5YR6/6）	密（１mm 以下の白色・灰色・赤茶色砂粒を多く含む）
380	土師器	皿	Ａ１（ｇ12）	ＳＤ220	(12.1)	(3.5)	−	2/12 弱	灰白（2.5Y8/2）	やや密（ごく細かい茶色・白色砂粒含む）
381	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	12.7	2.2	−	3/12	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm 以下の白い砂粒、薄茶色の砂粒を含む、）
382	土師器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	(11.7)	(1.8)	−	1/12	灰白（2.5Y8/2）	やや密（ごく細かい茶褐色砂粒少量含む）
383	土師器	皿	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	(13.8)	(2.8)	−	1/12 強	灰白（10YR8/2）	密
384	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ220 畦２	(13.8)	(1.9)	−	1/12	灰白（10YR8/2） にぶい橙（7.5YR7/4）	密（１mm 以下の褐色砂粒・雲母含む）
385	瓦器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	(13.6)	(1.9)	−	1/12 以下	外面：灰白（10YR8/2） 内面：灰（N4/0）	密
386	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	(14.8)	(2.0)	−	1/12 弱	淡橙（5YR8/3） 断面：灰（N6/0）	密（１mm 以下の茶色い砂粒、ごく細かい白色や・黒っぽい砂粒を含む））
387	土師器	皿	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	13.8	(2.3)	−	3/12 弱	灰白（10YR8/2）	密
388	土師器	皿	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	(15.4)	(2.2)	−	1/12 強	内外面：灰白（7.5YR8/2） 断面：灰（N3/0）	密（0.5mm 以下の灰色・白色・黒色の砂粒を含む）
389	土師器	杯	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	−	(1.2)	7.0	底）2/12 強	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm 以下の薄茶色・白色砂粒少し含む）
390	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	(13.9)	(2.5)	−	1.5/12	灰（N5/0）～灰白（2.5GY8/1）	密（１mm 以下の灰色・黒色・褐色砂粒を含む）
391	土師器	甕	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	(18.0)	(3.9)	−	1/12	明褐灰（7.5YR7/2）～褐灰（10YR5/1）	やや密（0.5mm ～２mm の白色砂粒含む）
392	土師器	甕 or 鍋	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	(27.4)	(4.3)	−	1.5/12	内外面：灰白（7.5YR8/2） 断面：褐灰（10YR4/1）	粗（１mm 以下の黒色・茶色・透明の砂粒、0.5mm 以下の白色、半透明の砂粒を多く含む）
393	土師器	甕 or 鍋	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	−	(2.2)	−	−	外面：灰黄褐（10YR6/2） 内面：黒褐（10YR3/1）	やや密（１mm 大の白色・半透明砂粒を含む）
394	瓦器	椀	Ａ１（ａ11）	ＳＤ220	14.2	5.0	−	口）2/12 底）12/12	灰（N ４/0）	密（１mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
395	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	14.3 ～ 14.8	5.4	7.2	口）10/12 全）80%	灰（N4/0）	密
396	瓦器	椀	Ａ１（ｇ13）	ＳＤ220	13.8	5.3	6.7	完形	暗灰（N4/0）	密
397	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	14.8	4.9	6.2	口）4/12 全）30%	暗灰（N3/0）	密
398	瓦器	椀	Ａ１（ａ11）	ＳＤ220	(15.0)	5.2	−	1.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0・N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・灰色砂粒少し含む、３～４mm 大の白色砂粒）
399	瓦器	椀	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	(13.6)	5	6.4	1/12	灰（7.5Y4/1）	密
400	瓦器	椀	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	17.0	5.2	6.5	3/12	黒（5Y2/1）	密（ごく細かい白色砂粒少量含む）
401	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220 畦２	15.0	5.5	7.2	4/12	灰（N4/0）	密（１mm 以下の黒色・白色砂粒を含む）
402	瓦器	椀	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	14.2	5.0	−	全）7/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒っぽい色の砂粒を含む）
403	瓦器	椀	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	14.6	5.0	6.5	口）3/12 底）1/12	灰（10Y4/1）～灰白（N8/0）	密
404	瓦器	椀	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	14.0	5.8	5.6	3/12	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
405	瓦器	椀	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	(14.2)	5	6.9	口）1/12 強 底）１/2	灰白（2.5Y8/1）	密
406	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220 畦２	15.0	4.8	6.1	2/12	暗灰（N3/0）	密
407	瓦器	椀	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	(14.5)	4.9	6.7	1.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N6/0）	密
408	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	14.7	4.5	6.5	3/12	灰（5/0）	密（２mm 大黒色粒がまれに見受けられるが微小な灰色粒が含まれる

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
409	瓦器	椀	Ａ１ （ｓ12）	ＳＤ220	(14.1)	4.8	6.0	口）1/12以下 底）4.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm以下の白い砂粒、黒っぽい砂粒を含む）
410	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	14.5	5.3	6.6	口）6/12強 底）完存	灰（N5/0）～灰白（N8/0）	密（１mm以下の白色・黒色砂粒を含む）
411	瓦器	椀	Ａ１ （ｓ12）	ＳＤ220	(14.1)	5.6	7.0	1.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（10YR8/1）	密（0.5mm以下の黒っぽい砂粒を含む）
412	瓦器	椀	Ａ１ （ｓ12）	ＳＤ220	13.6	4.9	－	2/12	灰（10Y4/1）	密
413	瓦器	椀	Ａ１ （ｓ12）	ＳＤ220	13.6	5.3	－	3/12	暗灰（N3/0）	密
414	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	(14.6)	(4.1)	－	1/12強	灰（N4/0）～灰（N6/0）	密
415	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220畦４	(15.2)	(3.7)	－	1.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N5/0）	密（0.5mm以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
416	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	(15.6)	(3.6)	－	1/12	灰（N4/0）	密(1mm以下の灰色砂粒を含む)
417	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220畦４	(14.8)	(5.0)	－	1/12以下	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（10YR8/1）	密（0.5mm以下の黒色砂粒を少し含む）
418	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	13.6	(4.6)	－	2/12弱	灰（10Y4/1）～灰白（5Y8/1）	密
419	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220畦４	13.8	(4.9)	－	2/12	内面：暗灰（N3/0） 外面：灰白（5YR8/2）	密（0.5mm以下の白色・こげ茶色砂粒少し含む）
420	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	14.0	(4.4)	－	2/12	暗灰（N3/0）	密
421	瓦器	皿	Ａ１ （ａ12）	ＳＤ220	14.6	(4.4)	－	2/12	オリーブ黒（10Y3/1）～灰（5Y4/1）	密
422	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	(14.6)	3.9	－	1/12強	灰（N4/0）	密
423	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	(14.0)	(3.8)	－	1/12以下	灰（N4/0）	密（0.5mm以下の白色砂粒を含む）
424	瓦器	椀	Ａ１ （ｓ12）	ＳＤ220	(13.0)	(3.1)	－	1.5/12	内外面：灰（N6/0） 外面口縁：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（精良）
425	瓦器	椀	Ａ１ （ａ12）	ＳＤ220	13.0	(4.0)	－	2/12強	灰(N4/0)～灰白(7.5Y8/1)	密
426	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	13.8	(4.6)	－	5/12	暗灰（N3/0）	密(1mm以下の白色砂粒を含む)
427	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	14.4	4.0	－	2/12	灰（N4/0）	密
428	瓦器	椀	Ａ１ （ｔ12）	ＳＤ220	(15.0)	(3.8)	－	1/12強	オリーブ黒（10Y3/1）～灰（10Y4/1）	密
429	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220畦２	14.0	(3.8)	－	2/12	暗灰（N3/0）	密
430	瓦器	椀	Ａ１ （ａ12）	ＳＤ220	(14.3)	(3.0)	－	1/12強	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
431	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	(15.0)	(4.0)	－	1/12	灰（N4/0）	密(1mm以下の白色砂粒を含む)
432	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	(13.2)	(3.4)	－	1/12	黒（N2/0）	密(2mm以下の灰色砂粒を含む)
433	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	(13.8)	(3.4)	－	1.5/12	灰（N4/0）	密（1mm以下の黒色・灰色・白色砂粒を含む）
434	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	(14.8)	(3.2)	－	1.5/12	灰（N4/0）～灰白（N7/0）	密（１mm以下の褐色・灰色砂粒を含む）
435	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	(15.4)	(3.0)	－	1/12	灰（N4/0）	密（0.5mm以下の白色砂粒を含む）
436	瓦器	椀	Ａ１ （ｂ11）	ＳＤ220	14.3	(3.3)	－	2/12弱	灰（N5/0）	密（2mm以下の黒・灰色粒を含む）
437	瓦器	椀	Ａ１ （ｓ12）	ＳＤ220	(14.0)	(2.9)	－	1/12	灰（N5/0）	密
438	瓦器	椀	Ａ１ （ｔ12）	ＳＤ220	(14.0)	(4.3)	－	1/12	灰（N4/0）	密
439	瓦器	椀	Ａ１ （ａ12）	ＳＤ220	(13.7)	(4.4)	－	1/12	黒（N2/0）	密
440	瓦器	椀	Ａ１ （ａ12）	ＳＤ220	(14.4)	(4.0)	－	1/12強	灰（N4/0）～灰白（N7/0）	密
441	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	(15.0)	(4.2)	－	1/12	暗灰（N3/0）	密（1.5mm以下の白色砂粒を含む）
442	瓦器	椀	Ａ１ （ｔ12）	ＳＤ220	13.4	(3.9)	－	3/12強	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）～灰白（7.5Y8/1）	密
443	瓦器	椀	Ａ１ （ａ11）	ＳＤ220	14.4	4.3	－	2/12	内面：灰白（10YR8/1） 外面：浅黄橙（7.5YR8/3）～灰白（10YR8/1） 断面：暗灰（N3/0）	密（ごく細かい黒っぽい砂粒、灰色砂粒）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
444	瓦器	椀	A 1（t 12）	S D 220	13.1	(3.4)	−	2/12 弱	灰白（2.5Y8/1）	密　(0.5mm、3 mm の白色、乳白色の粉をわずかに含む)
445	瓦器	椀	A 1（b 1）	S D 220	(13.2)	(3.0)	−	1/12 以下	内外面：灰（N5/0）	密（1 mm 以下の灰褐色や黒色砂粒を含む）
446	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	15.6	(4.1)	−	4/12	内外面：灰（N4/4） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色の砂粒を含む）
447	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	13.4	(3.4)	−	4/12 弱	内外面：灰（N4/4） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白い砂粒、黒い砂粒を含む）
448	瓦器	椀	A 1	S D 220 畦 4	14.0	(3.1)	−	2/12	外面：灰（N4/0） 内面：灰白（N8/0） 断面：灰白（N8/0）・暗灰（N3/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒少し含む）
449	瓦器	椀	A 1	S D 220 畦 1	14.7	(4.2)	−	2/12 強	内面：褐灰（10YR4/1） 外面：灰白（10YR8/1） 断面：黒褐（10YR3/1	やや密（1 mm 以下の白色砂粒、0.5mm 以下の黒色砂粒少し含む）
450	瓦器	椀	A 1（a 11）	S D 220	13.7	(4.5)	−	2.5/12	暗灰（N4/0）	密
451	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	(13.8)	4.2	−	1/12 強	暗灰（N3/0）〜灰白（N7/0）	密
452	瓦器	椀	A 1（b 11）	S D 220	12.8	4.2	−	2/12	灰（N4/0）	密
453	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	(14.0)	(4.7)	−	1/12	暗灰（N3/0）〜灰（N4/0）	密（1 mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
454	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	15.0	(4.6)	−	3/12	黒（2.5GY2/1）	密
455	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	14.1	(3.8)	−	2.5/12	内外面：灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N6/0）	密（0.5mm 以下の白い砂粒、黒っぽい砂粒を含む）
456	瓦器	椀	A 1（b 11）	S D 220	(14.6)	3.9	−	1/12 強	暗灰（N3/0）	密
457	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	(13.9)	(4.2)	−	1/12 強	内面：暗灰（N3/0）〜灰白（N7/0） 外面：暗灰（N3/0）	密（1 mm 以下の白色・灰色・黒色砂粒を含む）
458	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	14.0	(4.2)	−	2/12	灰（N4/0）	密（1 mm 以下の灰色砂粒を含む）
459	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	(14.2)	(4.2)	−	1/12	灰（N4/0）	密
460	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	12.8	(4.1)	−	2/12	淡橙（5YR8/3）（灰白もあり）	密 (0.5mm 以下の黒っぽい砂粒・茶色の砂粒を含む、1.5mm 大の半透明の砂粒も混じる）
461	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	−	(1.0)	(6.8)	底）1/12 以下	灰（10Y4/1）〜灰白（5Y8/1）	密
462	瓦器	椀	A 1（b 11）	S D 220	−	1.9	6.4	3/12 強	暗灰（N3/0）	密
463	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	−	(1.2)	6.8	完存	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の黒っぽい砂粒を含む）
464	瓦器	椀	A 1（a 11）	S D 220	−	(1.5)	(8.0)	底）1/12	灰（N4/0）	密
465	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	−	(3.7)	6.4	底）4/12	灰（N4/0）	密
466	瓦器	椀	A 1	S D 220	−	(2.8)	6.6	底）3/12	暗灰（N3/0）	密（1.5mm 以下の灰色砂粒を含む）
467	瓦器	椀	A 1（s 12）	S D 220	−	(1.9)	7.7	底）6/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	粗（1 mm 以下の黒っぽい砂粒を含む、2 〜 3mm 大の白い砂粒も混じる）
468	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	−	(2.8)	5.9	4/12	暗灰（N3/0）	密
469	瓦器	椀	A 1（b 11）	S D 220	−	(2.0)	6.5	3/12	外面：灰（N4/0） 内面：暗灰（N3/0）	密
470	瓦器	椀	A 1（b 11）	S D 220	−	(1.9)	(6.4)	1/12	灰（N4/0）	密
471	瓦器	椀	A 1（b 11）	S D 220	−	(3.5)	(5.6)	底）1.5/12	灰（N4/0）〜灰白（N7/0）	密（1 mm 以下の白色、灰色砂粒を含む）
472	瓦器	椀	A 1	S D 220 畦 2	−	(2.4)	6.8	底）7/12	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
473	瓦器	椀	A 1	S D 220 畦 2	−	(2.7)	6.8	底）2/12	暗灰（N3/0）	密
474	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	−	(1.6)	6.8	4/12	灰（N4/0）〜灰白（5Y8/1）	密
475	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	−	(1.4)	5.9	ー	灰（N4/0）〜灰白（N7/0）	密
476	瓦器	椀	A 1（a 12）	S D 220	−	(1.2)	(5.6)	底）1/12 以下	灰（N4/0）	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
477	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	－	（1.2）	6.9	底）2/12強	灰（N4/0）～灰白（N8/0）	密（１mm以下の黒色・白色砂粒を含む）
478	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	－	（1.2）	6.2	4/12	暗灰（N3/0）	密
479	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220	－	（1.5）	6.4	3/12	灰（N4/0）	密
480	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	－	（1.1）	6.3	底）7/12	暗灰（N3/0）～灰白（N8/0）	密（１mm以下の黒色・白色砂粒を含む）
481	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ220畦２	－	（1.6）	6.4	底）3/12	黒（N2/0）	密
482	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	－	（0.6）	5.4	底）3/12	外面：　灰（N5/0）	密（１mm以下の灰色砂粒を含む）
483	瓦器	椀	Ａ１（ｂ11）	ＳＤ220	－	（0.8）	5.9	2/12	灰白（10YR8/2）	密
484	瓦器	皿	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	8.4	1.4	－	3/12	灰（N4/0）	密
485	黒色土器	椀	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	15.0	（2.9）	－	2/12	黒褐（2.5Y3/1）	密（ごく細かい雲母？含む
486	黒色土器	椀	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	－	（1.6）	6.8	底）3/12	内面：灰褐（7.5YR5/2） 外・断面：にぶい褐（7.5YR6/3）	密（0.5mm以下の白色・黒っぽい砂粒を含む）
487	瓦質土器	鍋	Ａ１（ｒ13）	ＳＤ220	／	（4.5）	－	1/12以下	灰白（5Y8/1）	密（１mm以下の灰色・白色・半透明の砂粒含む、雲母を含む）
488	土師器	鍋	Ａ１（ａ11）	ＳＤ220	（22.4）	（7.4）	－	1.5/12強	内面：体部灰白（2.5Y8/1）・口縁灰（N4/0） 外面：体部灰白（N7/0）・口縁灰（N4/0）	粗（1.5mm以下の白色・半透明の砂粒、1mm以下の黒色・透明砂粒多く含む）
489	瓦質土器	鍋	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	23.6	6.8	－	2/12	外：暗灰（N4/0） 内：灰白（5Y8/1）	やや密（２mm以下の白・暗灰色砂粒含む）
490	瓦質土器	三足羽釜	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	15.6	（5.2）	－	5/12	内外面：明褐灰 鍔端部・脚部：にぶい橙（5YR7/4）	粗（1.5mm以下の白色・半透明の砂粒、１mm以下の透明の砂粒を少し、黒っぽい砂粒を多く含む。２mm大の半透明の黒い砂粒も混じる）
491	瓦質土器	三足羽釜	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	長（7.2）	幅3.6	厚3.1	－	－	－
492	瓦質土器	羽釜	Ａ１	ＳＤ220	（20.8）	（3.2）	－	1/12	内外面：灰（N4/0）　断面：灰白（10YR8/1）	やや粗（0.5mm以下の白色・半透明・透明・黒色の砂粒多く含む）
493	瓦質土器	羽釜	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	（23.2）	（4.8）	－	口）1/12以下 鍔）1.5/12弱	内外面：黒（N2/0） 断面：灰白（10YR7/1）	粗（1.5mm以下の白い砂粒、１mm以下の透明・黒っぽい砂粒を多く含む。器表に0.5mm以下の透明の砂粒、雲母が多く付着）
494	瓦質土器	羽釜	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	（23.9）	（5.2）	－	1/12	内面：灰白（10YR8/1） 外面：黒褐（10YR3/1） 断面：灰（N4/0）	粗（1.5mm以下の半透明の砂粒、１mm以下の白色・黒色の砂粒を多く含む。器表に雲母が多く付着）
495	土師器	羽釜	Ａ１（ｓ12）	ＳＤ220	－	（5.8）	－	－	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（１～２mm大の白色・透明・褐色砂粒、赤色斑粒を含む）
496	須恵器	鉢	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	28.5	11.2	－	2/12	灰白（N7/0）	やや密　（１～５mm大の白色・灰色砂粒を含む）
497	須恵器	鉢	Ａ１	ＳＤ220	－	（7.9）	8.8	底）完存	灰（N6/0）	密（１～５mm大の白色・灰色・黒色砂粒含む）
498	須恵器	鉢	Ａ１（ａ12）	ＳＤ220	（26.0）	（4.4）	－	1/12以下	灰（N6/0）	密
499	須恵器	鉢	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	（31.6）	（4.8）	－	1.5/12	外面）灰（N5/0） 内・断面）灰（N6/1）	やや密（1.5mm以下の白色・黒色・灰色・茶色の砂粒、１mm以下の透明の砂粒をやや多く含む）
500	須恵器	鉢	Ａ１	ＳＤ220畦２	－	（4.2）	－	－	灰（N6/0）	密
501	須恵器	鉢	Ａ１（ｔ12）	ＳＤ220	－	（3.1）	－	－	灰（N6/0）	密（１mm大の白色・灰色・黒色砂粒含む）
502	須恵器	鉢	Ａ１	ＳＤ220	16.0	（2.9）	－	－	灰（N6/0）	やや密（0.5mm以下の白色・黒色砂粒少量含む）
503	須恵器	底部	Ａ１（ｒ13）	ＳＤ220	－	（1.3）	5.4	底）2/12	灰白（N7/0）	密（１mm以下の黒色砂粒含む）
504	須恵器	鉢	Ａ１（ｒ13）	ＳＤ220	（23.2）	（3.5）	－	1/12	灰白（5Y8/1）	密（３mm大の灰色砂粒含む）
505	須恵器	甕	Ａ１	ＳＤ220畦３	（19.9）	（5.9）	－	2/12弱	内面口縁部：灰（N6/6） 内外面体部・断面：灰白（N8/0）	やや粗（２mm以下の黒色・白色砂粒）
506	須恵器	甕	Ａ１（ｇ12）	ＳＤ220	（21.7）	（3.3）	－	1/12	黄灰（2.5Y6/1）	密（１mmまでの白色砂粒少量含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
507	須恵器	甕	A 1（s 12）	S D 220	(25.0)	(6.8)	−	1/12 以下	灰（N6/0）	密（1mm 程度の白色砂粒含む）
508	須恵器	杯	A 1（g 12）	S D 220	(13.8)	(2.6)	−	1/12	灰白（N7/0）	密（ごく細かい白色砂粒少量含む）
509	灰釉陶器	壺	A 1（s 12）	S D 220	−	(4.8)	7.8	底）3/12	灰白（2.5Y8/1）（高台面一部淡橙色を帯びる）	密(1mm 以下の白い砂粒を含む)
510	須恵器	甕	A 1（r 12・13）	S D 220	−	/	−	−	外面：灰（N6/0） 内面：紫灰（5YR6/1）	やや密（1 mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む、2 〜 6 mm 大の灰色砂粒を含む）
511	青磁	椀	A 1（a 11）	S D 220	−	(2.5)	−	−	釉調：灰白（5Y7/2） 素地：灰白（5Y8/1）	精良
512	青磁	椀か	A 1（s 12）	S D 220	−	/	−	−	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰（7.5YR6/1）淡緑灰	密（精良　ごく細かい黒・白色砂粒を含む）
513	土師器	杯	A 1	S K 40	(13.8)	3.0	−	1/12	褐灰（10YR6/1）	やや密（0.5mm 以下の白色砂粒少量含む）
514	瓦器	椀	A 1	S K 40	(13.6)	(3.0)	−	1/12	暗灰（N3/0）	密（ごく細かい黒色の砂粒を含む）
515	須恵器	鉢	A 1	S K 40	−	(2.0)	9.6	底）3/12 弱	灰白（N7/0）	やや密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を多く含む）
516	須恵器	甕	A 1	S K 40	/	(2.1)	−	1/12 以下	灰（N6/1）	やや密（1mm 以下の灰・茶色の砂粒少量含む）
518	土師器	甕	A 1	S K 41	(20.0)	(2.5)	−	1/12 以下	褐灰（10YR4/1）	やや粗（0.5mm 以下の白色・黒色・茶色の細かい砂粒を多く含む）
519	瓦器	椀	A 1	S K 41	(14.8)	(2.5)	−	1.5/12	黒（N2/0）	密
520	青磁	椀	A 1	S K 41	/	(1.2)	−	1/12 以下	釉）オリーブ灰（10Y6/2） 素地）灰白（N8/0）	密
521	土師器	鉢	A 1	S K 79	頸）(12.2)	(4.3)	−	頸）1/12 以下	灰白（10YR8/2）	やや粗（1mm 前後の赤茶・灰色砂粒）
522	土師器	甕	A 1	S K 80	(13.4)	(2.7)	−	1/12	内面：明赤褐（5YY5/6） 外面：橙（5YR7/6）	やや密（0.5mm 以下白・灰色砂粒含む）
523	瓦器	椀	A 1	S K 80	(13.8)	(3.1)	−	1/12 以下	灰（N4/0）	密（ごく細かい白色砂粒少量含む）
524	須恵器	𤭯	A 1	S K 80	体）(11.0)	(5.0)	−	体）2/12	灰（N6/1）	やや密（0.5mm 白・灰色砂粒少量含む）
525	須恵器	甕か	A 1	S K 80	−	−	−	−	青灰（5B5/1）	やや粗（1mm 前後の白色砂粒を多く含む）
526	瓦器	皿	A 1	S K 116	9.4	(2.0)	−	2/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	やや密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む）
527	土師器	皿	A 1	S K 226	(10.4)	1.3	−	1.5/12	にぶい橙（5YR7/4）	やや密（ごく細かい茶系砂粒少量含む）
528	瓦器	椀	A 1	S D 3	13.7	4.8	6.4	4/12 強	内面：灰（N5/0） 外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（10YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を含む）
529	土師器	皿	A 1	S D 3	8.2	1.5	−	5/12	内外）灰褐（7.5YR5/2） 断面）淡橙（5YR8/3）・褐灰（7.5YR5/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を少し含む）
530	土師器	皿	A 1	S D 3	8.4	1.6	−	3/12 強	内面：橙（2.5YR7/8） 外･断面:浅黄橙（.5YR8/3）	密（1mm 以下の半透明・茶色の砂粒、0.5mm 以下の黒っぽい砂粒）
531	白磁	小椀	A 1	S D 12	(8.6)	(2.7)	−	1.5/12	素地：白（N9/0） 釉調：少し青みがかる	密（精良）
532	瓦器	皿	A 1	S D 20	(11.1)	(2.0)	−	1/12 以下	内外面：灰（N4/0） 断面：にぶい黄褐（10YR7/2）	密（ごく細かい黒っぽい砂粒、白色砂粒）
533	瓦器	皿	A 1	S D 34	6.9	1.5	−	2.5/12	内外面：灰（N6/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の茶色っぽい砂粒）
534	瓦器	椀	A 1	S D 34	(14.2)	(4.2)	−	1/12 以下	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（精良）
535	須恵器	鉢	A 1	S D 34	(28.9)	(2.5)	−	1/12 以下	外面口縁部：灰（N5/0） その他：灰白（N8/0）	やや粗（1mm 以下の茶色・半透明の砂粒、0.5mm 以下の白色砂粒をやや多く含む）
536	白磁	椀	A 1	S D 34	−	(1.5)	4.1	底）3/12	釉調：灰白（5Y7/1） 素地：白（N9/0）	密（ごく細かい白色砂粒を少し含む）
537	瓦器	椀	A 1	S D 35	−	(2.1)	5.6	底）5/12	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
538	土師器	皿	A 1	S D 35	8.4	1.1	−	3/12	灰白（10YR8/2）・淡橙（5YR8/4）	密
539	瓦器	椀	A 1	S D 34・35	14.1	4.7	−	3/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密 (0.5mm 以下の黒っぽい砂粒)

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
540	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ35・34	12.8	(3.0)	－	2/12強	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい白色・灰色砂粒を少し含む）
541	白磁	椀	Ａ１	ＳＤ34・35	(14.0)	(2.0)	－	1/12以下	釉調：灰白（5Y7/1） 素地：白（N9/0）	密
542	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ42	－	(1.2)	(5.6)	底）1/12	暗灰（N3/0）	密
543	須恵器	椀	Ａ１	ＳＤ42	(16.5)	(2.8)	－	1/12	灰白（N7/0）	密
544	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ71	(14.0)	(3.6)	－	1/12	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	密
545	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ71	－	(2.3)	4.6	底）5/12	灰（N4/0）	密（黒色砂粒を含む）
546	青磁	椀	Ａ１	ＳＤ71	／	(2.7)	－	／	釉調：オリーブ灰（5GY6/1） 素地：灰白（N8/0）	精良
547	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ72	6.2	1.5	－	2/12弱	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm以下の茶色の砂粒）
548	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ72	8.2	1.6	－	7/12	灰白（2.5Y8/2）	密（0.5mm以下の黒色・灰色・白色砂粒を含む）
549	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ72	9.0	1.1	－	3/12	淡橙（5YR8/3）	密（0.5mm以下の白色・茶色の砂粒を少し含む）
550	須恵器	鉢	Ａ１	ＳＤ72	－	(3.0)	－	1/12以下	内外面：灰白（N7/0） 口縁端部：灰（N6/0）	やや粗（1mm以下の白色砂粒、0.5mm以下の黒っぽい砂粒）
551	土師器	鍋	Ａ１	ＳＤ73	頸）13.8	(3.0)	－	頸）1.5/12	黄灰（2.5Y4/1）	やや粗（2mm以下の白・茶・黒色の砂粒含む）
552	須恵器	鉢	Ａ１	ＳＤ73	／	(2.5)	－	1/12以下	内外面：灰白（N8/0） 口縁端部：灰（N4/0）	やや粗（0.5mm以下の白色・半透明・黒っぽい砂粒）
553	須恵器	壺	Ａ１	ＳＤ74	－	(2.4)	／	底）1/12以下	灰（N6/0）	やや粗（1.5mm以下の白色砂粒やや多く含む）
554	白磁	椀	Ａ１	ＳＤ74	－	(2.4)	6.7	底）2/12強	釉調：灰白（2.5Y8/1） 素地：白（N9/0）	密（ごく細かい白色・赤色砂粒を少し含む）
555	土師器	甕か	Ａ１	ＳＤ76	(9.2)	(2.4)	－	1.5/12	灰白（7.5YR8/2）	やや粗（1.5～1mm以下の薄茶色の砂粒、1mm以下の白色・灰色の砂粒やや多く含む）
556	土師器	杯か	Ａ１	ＳＤ76	13.4	(4.1)	－	2/12	内面：にぶい橙（5YR6/4） 外面：にぶい赤褐（2.5YR5/4） 断面：赤橙（10R6/8）～褐灰（5YR5/1）	粗（1.5～1mm以下の白色・半透明・透明・黒っぽい砂粒を多く含む）
557	土師器	甕	Ａ１	ＳＤ77	／	(2.4)	－	1/12以下	明褐灰（7.5YR7/1）	粗（1mm以下の白色・半透明・雲母の砂粒、0.5mm以下の透明・黒っぽい砂粒をやや多く含む）
558	土師器	甕	Ａ１	ＳＤ77	／	(1.3)	－	1/12以下	内面：灰白（7.5YR8/2） 外面：にぶい橙（5YR7/4） 断面：褐灰（10YR5/1）	やや密（1mm以下の白色・半透明の砂粒、0.5mm以下の赤茶色の砂粒
559	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ77	(12.1)	(2.3)	－	1/12以下	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（精良）
560	瓦器	椀	Ａ１	ＳＤ77	(15.3)	(2.4)	－	1/12以下	口縁以外：白（N9/0）	密（0.5mm以下の黒っぽい砂粒を少し含む）
561	須恵器	片口鉢	Ａ１	ＳＤ77	(28.7)	(3.3)	－	1/12以下	内外面：灰白（N7/0） 口縁端部：黒（N2/0）	やや粗（1mm以下の白色・黒っぽい砂粒やや多く含む）
562	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ77	(15.4)	(1.9)	－	1/12以下	内面：灰白（7.5YR8/2） 外面：にぶい橙（5YR7/3） 断面：灰白（7.5YR8/1）	密（1mm以下の薄茶色の砂粒、0.5mm以下の白色の砂粒を少し含む）
563	須恵器	甕/壺	Ａ１	ＳＤ89	－	頸）12.0	－	／	青灰（5Ｂ6/1～5/1）	やや粗（1mm以下の白色砂粒多く含む、2～3mm大の砂粒含む）
564	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ90	(8.9)	1.4	－	1/12以下	明褐灰（7.5YR7/1）	密（ごく細かい白色・半透明の砂粒を少し含む）
565	瓦器	皿	Ａ１	ＳＤ93	(8.8)	(1.7)	－	1/12以下	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm以下の白色・灰色っぽい砂粒を少し含む）
566	瓦器	皿	Ａ１	ＳＤ93	(7.7)	1.5	－	1.5/12	内面：灰（N4/0）） 外面：灰（N6/0） 断面：灰白（N8/0）	やや粗（1mm以下の白色砂粒やや多く含む）
567	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ103	7.8	1.25	－	3/12	淡橙（5YR8/3）	やや粗（1mm以下の灰色・赤色・褐色砂粒少し含む）
568	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ103	(8.8)	1.2	－	1/12	灰白（7.5YR8/2）	密
569	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ103	8.4	(1.3)	－	3/12弱	にぶい橙（5YR7/4）	密（0.5mm以下の赤色砂粒少し含む）
570	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ103	8.9	1.1	－	2/12	灰白（7.5YR8/2）	密
571	土師器	皿	Ａ１	ＳＤ103	(13.8)	(2.2)	－	1.5/12	灰白（7.5YR8/2）	密
572	瓦器	皿	Ａ１	ＳＤ103	8.6	1.5	－	6/12弱	暗灰（N3/0）	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
573	瓦器	椀	A 1	S D 103	11.8	(3.5)	−	2/12 弱	灰（N4/0)	密
574	瓦器	椀	A 1	S D 103	(13.7)	(3.3)	−	1.5/12	灰（N4/0)	密
575	瓦器	椀	A 1	S D 103	(13.7)	(2.6)	−	1.5/12	暗灰（N3/0)	密
576	瓦器	椀	A 1	S D 103	(13.7)	(4.8)	−	1.5/12	灰（N4/0)	密
577	瓦器	椀	A 1	S D 103	(15.3)	(4.1)	−	1/12 強	暗灰（N3/0)	密
578	瓦器	椀	A 1	S D 103	−	(2.9)	5.6	底）3/12	表面：灰白（10YR8/1) 断面：灰白（10YR7/1)	密
579	瓦器	椀	A 1	S D 103	−	(9.5)	5.9	底）3/12 強	灰白（2.5Y8/1)	密
580	瓦器	椀	A 1	S D 103	−	(2.0)	5.9	底）5/12	暗灰（N3/0)	密
581	土師器	皿	A 1	S D 105	7.8	1.5	−	2/12 弱	灰白（7.5YR8/1)	密
582	瓦器	椀	A 1	S D 105	(13.7)	(5.4)	−	1/12	暗灰（N3/0)	密
583	瓦器	椀	A 1	S D 105	−	(1.5)	5.8	底）5/12 弱	灰白(2.5Y8/1)暗灰(N3/0)	密
584	瓦器	皿	A 1	S D 105	7.9	1.6	−	全）11/12	灰（N4/0)	密（２mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
585	土師器	皿	A 1	S D 114	(13.6)	(1.8)	−	1/12 強	口縁部:淡赤橙（2.5YR7/4) 底部：褐灰（5YR5/1)	密（１mm 以下の赤色砂粒少し含む）
586	瓦器	椀	A 1	S P 1	(13.9)	(3.2)	−	1/12	内外面：黒（N2/0)	密（１mm 以下の黒・白色砂粒含む）
587	瓦器	椀	A 1	S P 1	14.3	4.9	−	口）3/12 強 底）6/12	内面：灰白（10YR8/1）～灰（N5/0) 外面：明黄褐（10YR7/6)～暗灰（N3/0)	密（１mm 以下の黒・白・褐色砂粒を含む）
588	白磁	椀	A 1	S P 8	(15.1)	(2.3)	−	1/12 以下	素地：灰白（7.5Y8/1) 釉調：灰白（10YR8/2)	密
589	須恵器	壺	A 1	S P 51	−	(1.5)	(11.1)	底）1/12	にぶい黄橙（10YR7/2)	密（0.2mm 以下の白・黒色の砂粒を含む）
590	土師器	皿	A 1	S P 56	(9.2)	0.7	−	1.5/12	明褐灰（5YR7/1)	密（1mm 以下の赤茶色・黒色の砂粒を少し含む）
591	土師器	皿	A 1	S P 56	10.2	(1.2)	−	4/12	にぶい橙（7.5YR7/2)	密（褐色砂粒、赤色斑粒、雲母を含む）
592	瓦器	皿	A 1	S P97	8.4	1.8	−	5/12 強	内外面：灰（N4/0) 断面：灰白（2.5Y8/1)	密（ごく細かい白色・灰色の砂粒を少し含む）
593	土師器	皿	A 1	S P 107	(9.9)	(1.4)	−	1.5/12	灰白（10YR8/2)	密（１mm 以下の黒・白色砂粒を含む）
594	瓦器	皿	A 1	S P 115	8.0	1.2	−	9/12	灰白（10YR8/2)	密（雲母含む）
595	瓦器	椀	A 1	S P134	(12.6)	(4.6)	−	1.5/12	内外面：暗灰（N3/0) 断面：灰白（N8/0)	密（ごく細かい白色の砂粒をやや多く含む）
596	瓦器	椀	A 1	S P 135	13.8	(2.5)	−	2/12 弱	黒（N2/0)	密
597	土師器	台付皿	A 1	S P 135	−	(2.2)	(9.2)	底）1/12	内外面：淡橙（5YR8/3) 断面：暗灰（N3/0)	密（１mm 以下の黒色砂粒を含む）
598	瓦器	椀	A 1	S P 135	−	(1.1)	5.5	底）4.5/12	灰白（5Y8/1)	密（１mm 以下の灰・白色砂粒を含む）
599	土師器	皿	A 1	S P 137	16.8	(2.6)	−	3/12	内外面：灰白（7.5YR8/1) 断面：灰（N6/0)	密（１mm 以下の赤茶色・ごく細かい黒色の砂粒を少し含む）
600	瓦器	椀	A 1	S P 137	14.8	5.4	6.2	3/12	内外面：暗灰（N3/0) 断面：灰白（10YR8/1)	密（１mm 以下の黒っぽい砂粒、こげ茶色・ごく細かい白色の砂粒を少し含む）
601	土師器	皿	A 1	S P 141	(7.9)	1.0	−	1.5/12	内面：褐灰（7.5YR5/1) 外面：明褐灰（7.5YR7/2)	密（１mm 以下の白・褐色砂粒を含む）
602	土師器	皿	A 1	S P 141	8.4	1.1 強	−	2/12	内面）灰白（10YR8/1) 外面）灰白（7.5YR8/2)	密（１mm 以下の黒・灰色砂粒を含む）
603	瓦器	椀	A 1	S P 141	(14.4)	(4.6)	−	1.5/12	黒（7.5Y2/1)	密（ごく細かい白色砂粒少量含む）
604	瓦器	椀	A 1	S P 141	(13.9)	(3.3)	−	1/12	暗黒（N3/0)	密（ごく細かい砂粒、金色雲母含む）
605	土師器	皿	A 1	S P 145	(7.3)	1.1	−	1.5/12	灰白（10YR8/2）～橙(2.5YR7/6)	密（１mm 以下の灰色砂粒）
606	土師器	皿	A 1	S P 162	(15.1)	(2.8)	−	1.5/12	内面：灰白（7.5YR8/2) 外面：浅黄橙（7.5YR8/3)・灰白（7.5YR8/1) 断面：灰（N4/0)	密（0.5mm 以下の赤茶色・白色・黒っぽい砂粒を少し含む）
607	土師器	皿	A 1	S P 167	(7.9)	1.7	−	1/12	浅黄橙（7.5YR8/4)	密（２mm 以下の褐色・黒色・白色砂粒を多く含む）
608	瓦器	椀	A 1	S P 167	14.4	5.2	6.9	6/12	暗灰（N3/0)	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
609	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 168	7.8	1.4	−	3/12	内外面：灰白（7.5YR8/2）〜淡橙（5YR8/3） 断面：灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の赤茶色・ごく細かい白色の砂粒を少し含む）
610	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 173	7.7	(2.3)	−	3/12	内外面：にぶい橙(5YR7/4) 断面：橙（2.5YR7/6）	密（0.5mm 以下の赤茶色・黒色の砂粒を含む）
611	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 173	15.0	5.5	6.1	8/12	暗灰（N3/0）	密
612	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 173	(14.1)	(4.7)	−	1.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の白色・茶色の砂粒を少し含む）
613	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 174	(14.8)	(4.6)	−	1.5/12	灰（N4/0）	密（1mm 以下の黒・白・灰色の砂粒含む）
614	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 179	(13.4)	(2.6)	−	1/12	黒（N2/0）	密
615	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 184	15.0	(4.1)	−	4/12	暗灰（N3/0）	密（1mm 以下の黒色砂粒含む）
616	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 184	(14.9)	(4.4)	−	1.5/12	暗灰（N3/0）	密（ごく細かい白・黒色砂粒少量を含む）
617	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 191	14.0	(3.4)	−	2/12	暗灰（N3/0）	密
618	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 198	(8.7)	(1.2)	−	1/12 以下	灰白（10YR8/2）	密（1mm 以下の黒色クサリ礫を含む）
619	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 206	12.6	2.8	−	3/12 弱	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（1mm 以下の赤茶色・0.5mm 以下の黒色砂粒を含む）
620	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 206	(13.9)	2.7	−	1/12 以下	内面：赤灰（2.5YR4/1） 外・断面：浅黄橙（7.5YR8/3）	密（1mm 以下の赤茶色・こげ茶色の砂粒を少し含む）
621	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 206	13.7	(4.6)	−	4/12 弱	内面：暗灰（N3/0） 外面：灰白（2.5YR8/1）・灰（N4/0）	密（1mm 以下の白色砂粒、・0.5mm 以下の黒色砂粒を少し含む）
622	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 209	(15.5)	(2.8)	−	1/12 以下	にぶい橙（5YR7/4）	密（1mm 以下の白･半透明白色･黒色砂粒やクサリ礫を含む）
623	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 211	14.8	(5.1)	−	5/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
624	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 212	13.6	5.2	6.0	3/12 強	灰（N4/0）	密（1mm 以下の白色砂粒、・0.5mm 以下の黒色砂粒を少し含む）
625	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 213	8.4	1.0	−	2/12 強	淡橙（5YR8/4）	密（1mm 以下の褐・白色砂粒含む）
626	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 213	14.7	(4.6)	−	2/12 強	内面：淡赤橙（2.5YR7/4） 外面：浅黄橙（7.5YR8/4）	密（1mm 以下の黒・白色砂粒含む）
627	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 214	(15.8)	(3.8)	−	1/12	にぶい黄橙（10YR7/2）	密（ごく細かい黒色砂粒少量含む）
628	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 218	−	(3.9)	6.2	底）3/12	内面：灰（N4/0） 外面：灰白（10YR8/2）〜灰（N4/0）	密（1mm 以下の黒・白色砂粒含む）
629	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 225	9.0	1.6	−	5 /12	にぶい橙（5YR7/4）・浅黄橙（7.5YR8/3）	密（雲母含む）
630	瓦器	椀	Ａ１	ＳＰ 225	13.7	(4.1)	−	2/12	暗灰（N3/0）	密（ごく細かい白色砂粒ごく少量を含む）
631	土師器	羽釜	Ａ１	ＳＰ 225	(26.8)	(1.4)	−	1/12	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗（0.5mm 以下の白・茶・グレーの砂粒多く含む）
632	土師器	羽釜	Ａ１	ＳＰ 225	(25.2)	(6.7)	−	1.5/12	浅黄橙（7.5YR8/3 〜 7/3）	密(1mm 大の白色･半透明･褐色･赤色砂粒を含む)
633	土師器	皿	Ａ１	ＳＰ 227	9.6	1.6 〜 2.0	−	全）11/12 強	内・断面：赤橙（10R6/8） 外面：橙（2.5YR6/6）〜にぶい橙（5YR7/4）	やや密（1mm 以下の赤茶色の砂粒、・0.5mm 以下の黒っぽい・半透明・白色の砂粒を含む）
634	土師器	台付皿	Ａ１	ＳＰ 231	−	(1.4)	底）3.9	底）9/12	橙（5YR7/6）	密（1mm 以下の白・黒色の砂粒や朱色クサリ礫を含む）
635	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	精査	10.1	1.6	−	全）11/12	橙（5YR7/6）	やや密（1mm 以下の赤茶・白色の砂粒、、2 〜 3mm 大の灰色の砂粒も混じる）
636	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	精査	(9.2)	0.8	−	1.5/12	橙（2.5YR6/6）	密（0.5mm 以下の黒色・茶色の砂粒を含む）
637	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	排水溝	(10.2)	0.8	−	1/12 以下	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや密（1mm 以下の赤茶色・白色砂粒を含む）
638	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	精査	10.1	1.5	−	2/12 強	口縁：灰白（2.5Y8/1）〜 底部：褐灰（10YR6/1）	密（0.5mm 以下の黒色・茶色砂粒を含む）
639	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	精査	10.1 〜 11.0	1.2	−	8/12 強	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒）
640	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	精査	10.3	(1.4)	−	4/12	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗（0.5mm 前後の赤色・茶色・グレー・白色砂粒含む）
641	土師器	皿	Ａ１（ｔ 12)	断割	(7.8)	1.0	−	1/12	灰白（7.5Y Ｒ 8/2）	密（１mm 以下の赤色砂粒を少し含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
642	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	8.0	1.4	−	3/12	灰白（7.5YR8/1）	やや密（1.5mm 以下の灰色砂粒、1 mm 以下のこげ茶色砂粒、0.5mm 以下の白色・赤茶色の砂粒を含む）
643	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	8.8	1.6	−	3/12	内面：浅黄橙（7.5YR8/3） 外面：淡橙（5YR8/4） 断面：暗灰（N3/0）	密（0.5mm 以下の薄茶色の砂粒を含む）
644	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	9.5	1.4	−	2/12 強	内外面：灰白（7.5YR8/2） 断面:灰（N4/0）(部分的に)	密（0.5mm 以下の黒色・茶色の砂粒を含む）
645	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	8.7	1.8	−	5/12	内外：淡橙（5YR8/4） 断面：暗灰（N3/0）	密（1 mm 以下の赤茶色・白色の砂粒を少し含む）
646	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	14.8	2.2	−	4/12 弱	内外面：灰白（5YR8/1 ～ 8/2）・褐灰（7.5YR4/1） 断面：灰（N4/0）	密（1 mm 以下の白色・灰色・茶色の砂粒を少し含む）
647	土師器	皿	A 1（t 12）	排水溝	13.1	(2.2)	−	3/12	内外：灰白（10YR8/1） 断面：灰（N4/0）	密（精良）
648	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	(12.6)	(2.0)	−	1.5/12	内面：褐灰（7.5YR6/1） 外面：灰白（7.5YR8/2） 断面：灰（N5/0）	密（ごく細かい白色・黒色の砂粒を含む）
649	土師器	皿	A 1（t 12）	攪乱	14.9	2.35	−	3.5/12	灰白（10YR8/2）	密
650	土師器	皿	A 1（t 12）	精査	10.6	1.3	5.6	3/12 弱	内・断面：橙（5YR6/6） 外面：浅黄橙（7.5YR8/3）	やや密（1.5mm 以下のこげ茶色の砂粒、0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒含む）
651	土師器	甕	A 1（t 12）	東排水溝	(17.4)	(3.2)	−	1/12 以下	内面：浅黄橙（7.5YR8/3） 外面：明褐灰（7.5YR7/2） 断面：灰白（7.5YR8/1）	粗（1 mm 以下の半透明・茶色の砂粒、0.5mm 以下の透明・白色・黒色の砂粒を多く含む）
652	土師器	鉢	A 1（t 12）	精査	(13.4)	(4.4)	−	1.5/12	外面：淡橙（5YR8/3） 内面：灰白（7YR8/2） 断面:にぶい褐（7.5YR6/3）	密（1mm 以下の赤茶色・黒っぽい砂粒を含む）
653	土師器	鍋	A 1（t 12）	精査	/	(3.1)	−	1/12 以下	内面：灰白（7.5YR8/2） 外面：褐（7.5YR4/3） 断面：暗灰（N3/0）	やや粗（1 mm 以下の赤茶色・半透明の砂粒、0.5mm 以下の黒っぽい砂粒をやや多く含む）
654	土師器	高杯	A 1（t 12）	精査	13.6	(2.0)	脚）4.7	2/12	にぶい黄橙（10YR7/4）	やや粗（0.5mm 以下の白色・グレー・茶色砂粒含む）
655	瓦器	椀	A 1（t 12）	東排水溝	13.9	5	6.4	4/12 強	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（ごく細かい黒色・白色の砂粒を含む）
656	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	(14.2)	5.1	6.8	1/12 以下	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（1.5mm 以下の黒色砂粒含む）
657	瓦器	椀	A 1（t 12）	攪乱	13.6	5.2	5.6	口）2/12 底）5/12	暗灰（N3/0）	密
658	瓦器	椀	A 1（t 12）	排水溝	13.3	4.8	6.0	3/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒・黒っぽい砂粒を含む）
659	瓦器	椀	A 1（t 12）	東排水溝	15.7	5	6.7	3/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒っぽい砂粒を含む）
660	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	14.9	4.3	7.2	4/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白・黒・茶色の砂粒を含む）
661	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	14.4	5.45	5.6	7/12	内外面：暗灰（N3/0）・灰白（N8/0）	密（1 ～ 3 mm の白色砂粒少し含む）
662	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	13.9	5.1	−	5/12	暗灰（N3/0）	やや密（0.5mm 前後の白色・グレー砂粒少量含む）
663	瓦器	椀	A 1（t 12）	攪乱	13.6	(3.7)	−	2/12	灰（N4/0）	密（1 mm 以下の灰色砂粒を少し含む）
664	瓦器	椀	A 1（t 12）	断割	14.3	(4.5)	−	3/12 強	暗灰（N3/0）	密
665	瓦器	椀	A 1（t 12）	東排水溝	(13.4)	(4.4)	−	1/12 以下	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色砂粒を含む）
666	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	(15.1)	(3.0)	−	1.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒を少し含む）
667	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	13.9	(3.5)	−	4/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N7/0）	密（1 mm 以下のこげ茶色の砂粒、・ごく細かい白色の砂粒を含む）
668	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	12.4	(4.5)	−	2/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の灰色・白色砂粒を含む）
669	瓦器	椀	A 1（t 12）	断割	14.2	(3.7)	−	4/12	オリーブ黒（5Y3/1）	密
670	瓦器	椀	A 1（t 12）	精査	14.8	(4.4)	−	3/12	暗灰（N3/0）	やや密（ごく少量の細かい白色砂粒含む）
671	瓦器	椀	A 1（t 12）	東排水溝	11.4	(4.1)	−	2/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰白（N7/0）	密（ごく細かい白色・黒っぽい砂粒を含む）

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 （cm）	器高 （cm）	底径 （cm）	残存率	色　調	胎　土
672	瓦器	椀	Ａ１ （ｔ12）	撹乱	13.7	（4.7）	－	2.5/12	灰（5/0）	密（1mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
673	瓦器	椀	Ａ１ （ｔ12）	撹乱	－	（1.7）	（5.8）	底）1.5/12	暗灰（N3/0）	密
674	瓦質 土器	羽釜	Ａ１ （ｔ12）	断割	18.0	（4.0）	－	3/12	黒（2.5Y2/1）	やや粗（1.5mm）
675	瓦質 土器	羽釜	Ａ１ （ｔ12）	精査	（20.9）	（5.4）	－	1/12	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（2.5YR8/1）	やや粗（1mm 以下の黒色・半透明・透明の砂粒を含む、2mm 大の黒色砂粒も混じる）
676	瓦質 土器	羽釜	Ａ１ （ｔ12）	精査	（23.2）	（2.8）	－	1.5/12 弱	外面：にぶい褐（7.5YR6/2） 内面：灰白（10YR8/1）	粗（1mm 以下の白色・透明の砂粒、2mm 以下の半透明の砂粒、0.5mm 以下の黒色砂粒やや多く含む）
677	瓦質 土器	羽釜	Ａ１ （ｔ12）	精査	（23.1）	（3.4）	－	1.5/12 弱	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（7.5YR8/1）	やや粗（1.5mm 以下の白色・透明・黒色砂粒を含む）
678	土師器	三足 羽釜 か	Ａ１ （ｔ12）	精査	長（8.3）	幅 （1.8）		―	外面：橙（.5YR7/6） 内・断面：灰白（10YR7/1）	粗（1.5mm 以下の白色・半透明砂粒、1mm 以下の黒色砂粒）
679	瓦質 土器	鍋	Ａ１ （ｔ12）	精査	（24.6）	（2.4）	－	1/12 弱	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（7.5YR8/1）	やや粗（0.5mm 以下の白色・黒色・こげ茶色・半透明・透明の砂粒を含む）
680	瓦質 土器	鍋	Ａ１ （ｔ12）	精査	（26.2）	（5.5）	－	1/12 以下	黒（N1.5/0）	やや粗（1mm 以下の白色・グレーの砂粒やや多めに含む）
681	瓦質 土器	鍋	Ａ１ （ｔ12）	精査	（29.0）	（3.3）	－	1.5/12	灰白（10YR8/1）	粗（1mm 以下の半透明の砂粒、0.5mm 以下の白色・透明・黒色砂粒を含む）
682	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	14.8	5.3	8.0	口）2/12 強 底）3/12	にぶい黄橙（10YR6/3）	密（3mm 以下の褐色・白色の砂粒多く含む）
683	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	15.7	5.5	6.8	―	褐灰（10YR4/1）	密（ごく細かい白色砂粒含む）
684	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	15.6	（4.6）	－	3.5/12	にぶい褐（7.5YR5/3）	やや粗（１mm 以下の白色・薄茶色・黒っぽい砂粒をやや多く含む）
685	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	（16.5）	（3.7）	－	1.5/12	内外面：にぶい黄橙（10YR6/3） 断面：灰白（7.5YR8/1）	やや粗（1.5mm 以下の灰色砂粒、1mm 以下の茶色・白色砂粒、0.5mm 以下の黒色砂粒含む）
686	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	（15.6 ）	（4.0）	－	1.5/12	赤橙（10Ｒ6/6）	やや粗(2mm 以下の白色の砂粒、1mm 以下の黒色・茶色砂粒を含む）
687	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	－	（1.4）	7.0	底）12/12	灰黄（2.5Y7/2）	やや粗（１mm までの白色・茶色・黒色砂粒含む）
688	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	－	（2.0）	底）7.0	底）3/12	にぶい橙（5YR6/4）	やや粗（1mm 以下の白・茶色の砂粒を含む、2mm 大のこげ茶色砂粒も混じる）
689	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	15.5	4.9	5.4	5/12	黒（5Y2/1）	密
690	黒色 土器	椀	Ａ１ （ｔ12）	撹乱	15.1	5.0 ～ 4.4	5.6	口）7/12 底）4/12	黒（N2/0）～褐灰（10YR4/1）	密（１mm 以下の白色砂粒を含む）
691	須恵器	杯	Ａ１ （ｔ12）	精査	15.8	5.3	7.4	3.5/12	灰白（2.5YR8/1）	密（1mm 以下の白色・灰色砂粒含む、3mm 大の灰色砂粒も混じる）
692	須恵器	杯	Ａ１ （ｔ12）	撹乱	－	（3.2）	11.4	底）4/12	灰白（N7/0）	密
693	白磁	椀	Ａ１ （ｔ12）	精査	／	4.9	－	1/12 以下	素地：白（N9/0） 釉調：灰黄（2.5Y9/2）	やや粗（1mm 以下の白色砂粒、ごく細かい黒色砂粒含む）
694	須恵器	鉢	Ａ１ （ｑ12）	断ち割り	－	（4.1）	9.0	底）4.5/12	内外面：灰白（N7/0） 断面：紫灰（5RP6/1）	やや粗（１mm 以下の黒色砂粒を多く含む、0.5mm 以下の白色砂粒を少し含む）
696	土師器	皿	Ａ１ （ｑ13）	精査	8.8	1.8	－	5/12	内外面：浅黄橙（7.5YR8/3） 断面：暗灰（N3/0）	やや密（１mm 以下の赤茶色・半透明・灰色の砂粒を含む）
697	瓦器	皿	Ａ１ （ｑ13）	精査	10.0	1.4	－	7/12 強	内外面：黒（N2/0） 断面：灰白（2.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒を含む）
698	瓦器	椀	Ａ１ （ｑ13）	精査	（15.2）	（3.3）	－	1.5/12 弱	内外面：黒（N2/0） 断面：灰白（2.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色の砂粒を少し含む）
699	瓦質 土器	羽釜	Ａ１ （ｑ13）	精査	（22.0）	（2.7）	－	1/12 弱	内面：灰褐（7.5YR6/2） 外面：灰褐（7.5YR5/2） 断面：暗灰（N3/0）	粗（1.5mm 以下の透明・半透明の砂粒、0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を多く含む）
700	土師器	鍋	Ａ１ （ｑ13）	精査	（25.0）	（4.2）	－	1/12	内面：灰白（7.5YR8/1） 一部にぶい橙（5YR7/4） 外面：橙（2.5YR6/6）	粗（２mm 以下の赤茶色の砂粒、１mm 以下の白色・透明・半透明・黒色砂粒を多く含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
701	須恵器	杯蓋	A 1（q 13）	精査	(15.7)	(1.6)	−	1.5/12	外面：灰（N6/0） 内面：灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を含む、２mm 大も混じる）
702	土師器	甕	A 1（r 13）	精査	(17.8)	(2.3)	−	1/12	内面：にぶい黄橙（10YR7/2） 外面：灰白（7.5YR8/2） 断面：灰白（10YR8/1）	やや粗（１mm 以下の黒っぽい砂粒、0.5mm 以下の白色・半透明の砂粒をやや多く含む）
703	土師器	羽釜	A 1（r 13）	精査	(28.4)	(5.1)	−	1/12 以下	内面：にぶい橙（5YR6/4） 外面：にぶい橙（5YR7/4） 断面：橙（5YR6/6）	粗（１～３mm の白色・半透明・灰色っぽい砂粒、1.5mm 以下の黒色砂粒、１mm 以下の赤茶色の砂粒を多く含む）
704	瓦器	椀	A 1（r 13）	精査	14.4	5.1	7.6	2.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（１mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
705	瓦器	椀	A 1（r 13）	精査	15.0	5	6.8	4/12	灰白（2.5Y8/1）	密（１mm 以下の白色・黒っぽい砂粒を含む）
706	土師器	皿	A 1（s 12）	精査	7.8	1.3	−	11/12	灰白（10YR8/2）	密（２mm 以下の黒色・白色・褐色の砂粒を多く含む）
707	土師器	皿	A 1（s 12）	精査	15.4	2.7	−	4.5/12	内面:にぶい橙（7.5YR7/4） 外面：灰白（7.5YR8/1） 断面：褐灰（10YR5/1）	密（1mm 以下の白色砂粒を少し含む、１mm 以下の赤茶色の砂粒が器表に多く見られる）
708	土師器	羽釜	A 1（s 12）	精査	(21.0)	(5.4)	−	1/12 以下	内外面鍔の下方：灰褐（7.5YR8/1） 外面鍔周辺：浅黄橙（7.5YR8/3） 断面：灰白（7.5YR8/1）	粗（1.5mm 以下の白色・黒色・透明の砂粒、1mm 以下の赤茶色の砂粒、２mm 以下の半透明の砂粒を多く含む、３～５mm 大も混じる）
709	瓦質土器	羽釜	A 1（s 12）	精査	18.4	(4.9)	−	2/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	やや密（0.5mm 以下の白色・黒色・半透明の砂粒を含む）
710	灰釉陶器	椀	A 1（s 12）	精査	−	(1.8)	7.4	底）7/12	灰白（2.5Y8/1）もう少し灰色がかる	密（0.5mm 以下の白色砂粒、ごく細かい黒色砂粒を含む）
711	土師器	皿	A 1（s 13）	土器集中部 精査	8.3	1.5	−	全）11/12 以上	内面：にぶい橙（5YR7/4） 外面：灰白（5YR8/2） 断面：暗灰（N3/0）	密（１mm 以下の黒っぽい砂粒、・茶色の砂粒を含む）
712	土師器	皿	A 1（s 13）	土器集中部	9.2	1.3	−	2/12 強	灰白（7.5YR8/1 ～ 8/2）（外面に少し灰色っぽい部分がある）	密（ざらついている。0.5mm 以下の白色・灰色の砂粒を含む）
713	土師器	皿	A 1（s 13）	精査	8.3	1.4	−	全）6/12	灰白（7.5Y R 8/1）	密（0.5mm 以下の白い砂粒、透明・半透明の砂粒を含む）
714	瓦器	皿	A 1（s 13）	精査	(9.2)	1.3	−	1.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒少し含む）
715	土師器	皿	A 1（s 13）	土器集中部 精査	13.8	(2.6)	−	9/12	内面：浅黄橙（7.5YR8/3） 外面：灰白（10YR8/2）	密（２mm 以下の白色・褐色・黒色砂粒含む
716	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 精査	(14.1)	5.5	6.0	口）1/12 以下 底）7/12	暗灰（N3/0）	密（１mm 以下の白色・灰色砂粒少量含む
717	瓦器	椀	A 1（s 13）	精査	−	(2.4)	6.2	底）6/12 強	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N4/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒少し含む）
718	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 ①	−	(3.1)	6.1	底）9/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	やや粗（0.5mm 以下の半透明の砂粒（雲母）・黒色・白色砂粒を多く含む。ざらついている）
719	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 ③	(15.2)	4.8	5.7	1.5/12	外面：灰（N4/0） 内面：摩滅 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白い砂粒を含む）
720	瓦器	椀	A 1（s 13）	②	14.9	5.7	5.7	全）10/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（１mm 以下の白い砂粒、半透明の砂粒を少し含む）
721	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 精査	15.0	5.3	5.6	口）3/12 底）5/12	暗灰（N3/0）	密（0.1mm 以下の白色砂粒少し含む
722	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 ①	(15.7)	5.3	(7.8)	口）1/12 以下　底）1.5/12 強	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白い砂粒を含む）
723	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 ①	(15.5)	(4.2)	−	1.5/12	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密（精良。極細の白色砂粒、半透明の砂粒を含む）
724	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 ①	13.7	(4.0)	−	2.5/12	内外：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白い砂粒を含む）
725	瓦器	椀	A 1（s 13）	土器集中部 ⑦	(15.5)	(4.5)	−	1.5/12	内面：暗灰（N3/0） 外面：灰（N6/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白い砂粒を含む）
727	瓦器	椀	A 1（t 14）	精査	(14.2)	5.6	6.2	口）1/12 以下 底）完存	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒っぽい砂粒を少し含む）
728	瓦器	椀	A 1（t 14）	精査	−	(1.4)	5.7	底）6/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・中心灰（N4/0）	ごく細かい白色砂粒、0.5mm 以下の黒色砂粒含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
729	瓦器	皿	A 1（t 14）	精査	8.6	(1.7)	−	2/12	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい白色砂粒を含む）
730	土師器	皿	A 1（a 11）	排水溝	14.9	2.5	−	3/12	口縁内外面：橙（2.5YR7/6） 体部内外面：灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の黒っぽい砂粒・1.5mm 大の薄茶色の砂粒を含む）
731	瓦器	椀	A 1（a 11）	溝	13.9	5.3	6.4	3/12 強	内外面）灰（N4/0） 断面）灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色砂粒を少し含む）
732	白磁	椀	A 1（a 11）	排水溝	−	(3.4)	5.6	底）4.5/12	素地：白（N9/0） 釉調：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1mm 以下の白色砂粒を含む）
733	土師器	皿	A 1（a 12）	精査	10.0	1.0	−	2/12	外面：にぶい橙（7.5YR6/4） 内面：にぶい橙（5YR7/4） 一部：褐灰（10YR4/1）	密（1 mm 以下の黒っぽい・白色・赤茶色の砂粒を少し含む）
734	土師器	鍋	A 1（a 12）	精査	(17.5)	(5.8)	−	1.5/12	外面：にぶい橙（5YR7/4） 内面：明褐灰（7.5YR7/2） 断面：明赤褐（5YR5/6）	やや粗（1～2 mm の白色・半透明の砂粒を多く含む）
735	瓦器	椀	A 1（a 12）	攪乱	−	(3.9)	6.9	底）9/12	内外面：灰（N6/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒を少し含む）
736	白磁	皿	A 1（s 13）	取り上げ⑧土器集中部	(9.2)	2.5	3.2	口）1/12 以下 底）4/12	素地：灰白（2.5Y8/1） 釉調：灰白（2.5Y8/2）	密（精良、ごく細かい白色砂粒を含む）
737	白磁	椀	A 1（a 12）	精査	/	(2.1)	−	1/12 以下	素地：白（N9/0） 釉調：灰白（2.5Y8/1）	密（精良）
738	瓦器	椀	A 1（a 13）	精査	12.6	(4.3)	−	2/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）・灰（N5/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒少し含む）
739	瓦器	椀	A 1（a 13）	精査	−	(2.3)	6.4	底）4/12 強	内外面：暗灰（N3/0） 断面・器表：灰白（10YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色砂粒少し含む）
740	瓦器	皿	A 1（a 13）	精査	9.3	1.9	−	全）11/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（2.5YR8/1）	密（1 mm 以下の白色砂粒・0.5mm 以下の黒っぽい砂粒を少し含む）
741	瓦器	椀	A 1（b 11）	断割	(13.2)	4.8	6.0	口）1.5/12 底）4/12	暗灰（N3/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒含む
742	白磁	椀	A 1（b 11）	攪乱	(14.0)	(3.9)	−	1/12 強	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰白（2.5Y8/1）	密
743	土師器	皿	A 1（b 12）	精査	(10.0)	(0.9)	−	1.5/12	内外面：淡橙（5YR8/4） 断面：灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の白色・黄色・黒っぽい砂粒含む）
744	土師器	皿	A 1（b 12）	精査	7.8	1.6	−	7/12	内面：浅黄橙（7.5YR8/3） 外面：灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm 以下の白色砂粒少し含む）
745	青磁	椀	A 1（b 12）	精査	(14.6)	(3.15)	−	1/12	素地：灰白（N7/0） 釉調：灰オリーブ（5Y5/2）	密（精良）
747	白磁	皿	A 1（a 13）	精査	/	(4.75)		/	灰オリーブ（5Y6/2）	精良
748	土師器	高杯	A 1	東壁	最大値 5.2	(6.7)	−	/	浅黄橙（7.5YR8/3）	粗（1.5mm 以下の白色・赤茶色・灰色・透明砂粒、1mm 以下の黒色砂粒、4mm 大茶色砂粒）
749	須恵器	鉢	A 1（b 13）	精査	(25.4)	(3.2)	−	1/12 以下	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色砂粒含む）
750	須恵器	甕	A 1（b 13）	精査	(30.0)	(4.7)	−	1/12 以下	内外面：灰白（N4/0） 断面：灰白（2.5YR8/1）	やや粗（1 mm 以下の黒色・白色・灰色の砂粒をやや多く含む）
751	瓦質土器	羽釜	A 1（b 14）	精査	(24.8～26.0)	(3.5)	−	1/12 以下	内外面：褐灰（10YR4/1） 断面：灰白（10YR8/2）	密（1 mm 以下の茶色の砂粒を少し含む）
752	白磁	椀	A 1（b 13）	排水溝	15.0	(2.1)	−	1/12 以下	灰白（5 Y7/2）	精良
753	須恵器	壺	A 1（b 区）	足跡検出面精査	−	(3.0)	(13.2)	底）1.5/12	内外面：灰白（N7/0） 断面他：（灰白 2.5Y）	密（1 mm 以下白色砂粒、0.5mm 以下黒色砂粒）
754	緑釉陶器	椀	A 1	排水溝北東側	(14.8)	(3.0)	−	1/12 以下	釉調：オリーブ（5Y5/4） 素地：灰白（2.5Y7/1）	密（精良）
755	黒色土器	椀	A 1（a 12）	精査	15.6	5	6.0	2/12	褐灰（10YR4/1）	密（ごく細かい白色砂粒含む）
756	黒色土器	椀	A 1（a 12）	精査	15.8	4.7	3.9	2/12	暗灰（N3/0）	密（1 mm 以下の白色砂粒・雲母を含む）
757	緑釉陶器	椀	A 1	排土中	−	(1.7)	(8.6)	底）1/12	釉調：暗オリーブ（5Y4/3） 素地：灰（5Y6/1）	精良
758	陶器	天目茶碗	A 1	南東部包含層	(11.1)	(2.9)	−	1/12 強	釉調：にぶい赤褐（5YR4/4）・黒褐（5YR2/1） 素地：灰白（2.5Y8/1）	密
759	土師器	土錘	A 1	排水溝	長 3.8	幅 1.3	−	完存	にぶい橙～灰（7.5YR7/4～5Y6/1）	密 （1 mm 以下の白色、黒色砂粒を含む）
760	土師器	皿	A 1（1 区）	南部　旧耕作土	(9.3)	1.2	−	1/12 強	内面：にぶい橙（5YR7/4） 外面：灰白（7.5YR8/2） 断面：褐灰（5YR6/1）	密（精良、ごく細かい茶色・黒っぽい砂粒少し含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
761	瓦器	皿	A 1（1区）	南部　旧耕作土	(9.0)	(1.3)	－	1.5/12 弱	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（N8/0）	密
762	瓦器	椀	A 1（1区）	床土	－	(2.35)	7.0	底）2/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：白（N9/0）	密（精良）
763	瓦質土器	羽釜	A 1（1区）	南部　旧耕作土	(24.0)	(3.1)	－	1/12 以下	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（5Y7/1）	粗（1.5mm 以下の白色・半透明・黒っぽい砂粒を非常に多く含む）
764	須恵器	壺／甕	A 1（1区）	床土	－	－	－	／	灰（N6/0）	やや密（1 mm 以下の白色･黒色･半透明の砂粒を含む）
765	須恵器	皿／杯	A 1（1区）	南部　旧耕作土	－	(1.6)	5.6	底）3/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒・1 mm 以下の黒色砂粒を含む）
766	須恵器	壺	A 1（1区）	旧耕作土　精査	13.0	(3.7)	－	底）1.5/12	内外面：灰白（N7/0） 断面：灰黄褐（10YR6/2）	密（0.5 ～ 1 mm 以下の白色砂粒を含む）
767	須恵器	鉢	A 1（1区）	南部　旧耕作土	(22.0)	(4.8)	－	1/12 以下	灰白（N7/0 ～ N8/0）	密（1 mm 以下の白色砂粒、ごく細かい黒色砂粒を含む）
768	灰釉陶器	椀	A 1（1区）	南部　旧耕作土	(16.1)	(5.3)	－	1/12 以下	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰黄（2.5Y6/2）	密（精良、ごく細かい白色・黒色砂粒を含む）
769	灰釉陶器	椀	A 1（1区）	旧耕作土	－	(2.2)	8.4	底）2.5/12	灰白（N8/0）	密（1 mm 以下の黒っぽい砂粒、ごく細かい白色砂粒を少し含む）
770	灰釉陶器	短頸壺	A 1（1区）	南部旧耕作土	(11.1)	(2.2)	－	1.5/12	素地：灰白（N7/0） 断面：灰白（2.5YR8/1） 釉調：オリーブ灰（10Y6/2）	密（0.5mm 以下の黒色・白色砂粒を含む）
771	灰釉陶器	壺	A 1（1区）	南部旧耕作土	頸）(8.6)	(2.9)	－	頸）1/12 強	素地：灰白（N7/0）と（N8/0）の間 釉調：灰白（2.5Y8/1）	やや密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を含む、3 mm 大の茶色っぽい砂粒も混じる）
772	灰釉陶器	壺	A 1（1区）	東拡張床土清掃	－	(3.0)	5.8	底）3/12	灰白（10YR8/1）	密（0.5mm 以下の黒色・白色砂粒を含む）
773	緑釉陶器	椀	A 1（1区）	南部旧耕作土	－	(2.2)	(8.5)	底）1.5/12	素地：灰白（N8/0） 釉調：オリーブ黄（5Y6/4）	精良（0.5mm 以下の白色砂粒を少し含む）
774	白磁	椀	A 1（1区）	旧耕作土	(14.7)	(1.4)	－	1/12 以下	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰白（5Y8/1）	精良
775	白磁	椀	A 1（2区）	旧耕作土	－	(2.1)	6.8	底）5/12 弱	素地：白（N9/0） 釉調：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を少し含む）
777	瓦質土器	羽釜	A 1（2区）	旧耕作土	(22.4)	(3.35)	－	1/12 以下	内面：灰（N4/0） 外面：灰（N5/0）鍔部ー淡橙（5YR8/3） 断面：暗灰（N3/0）	やや粗（1 mm 以下の白色･黒色･透明砂粒を多く含む）
778	瓦器	皿	A 1（2区）	南部旧耕作土	8.1	1.6	－	2/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい黒色砂粒を少し含む）
779	土師器	土錘	A 1（2区）	精査	長 3.8	最大径 1.1	孔径 0.3	－	体部：浅黄橙（7.5YR8/3） 断面：明褐（7.5YR5/1）	密
780	須恵器	杯蓋	A 1（2区）	重機掘削	(16.9)	(1.3)	－	1/12 以下	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
781	須恵器	壺	A 1（2区）	旧耕作土　精査（上から3層目）	9.8	(1.4)	－	2/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
782	須恵器	鉢	A 1（2区）	旧耕作土　にぶい黄褐色粘質細砂	(29.3)	(3.0)	－	1/12 以下	青灰（5PB6/1）	やや密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒をやや多く含む）
783	須恵器	壺か	A 1（2区）	北部床土	－	(3.1)	－	／	内外面：灰（N6/0） 断面：灰赤（7.5R6/2）	
784	須恵器	鉢	A 1（2区）	中央床下	－	(3.1)	7.2	底）3/12	灰（N6/0）	やや粗（1 mm 以下の白色・半透明・黒色砂粒含む、2 mm 大の砂粒も混じる）
785	須恵器	杯か	A 1（2区）	北部床土	－	(1.9)	5.0	5/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、ごく細かい白色砂粒を含む）
786	緑釉陶器	椀	A 1（2区）	北部～西部旧耕作土	－	(1.5)	7.2	底）3/12	素地：上部・灰白（N7/0） 下部・灰白（7.5YR8/1） 釉調：オリーブ灰（10Y6/2）	密（精良、ごく細かい白色砂粒を含む）
787	陶器	天目茶碗	A 1（2区）	中央部旧耕作土	／	(3.8)	－	－	素地：灰白（2.5Y8/1） 釉調：黒（10YR1.7/1）	密（ごく細かい白色砂粒を少し含む）
788	瀬戸	椀	A 1（2区）	床下（灰色砂）・中央床土・足跡検出面精査	12.2	(4.4)	－	3/12 弱	素地：灰白（N8/0）よりやや薄茶 釉調：浅黄（2.5Y7/3）	密（ごく細かい黒っぽい砂粒を含み、少しざらつきがある）
789	青磁	椀	A 1（2区）	南部旧耕作土	(16.2)	(4.0)	－	1/12 以下	素地：白（N9/0） 釉調：灰オリーブ（5Y6/2）	密（精良）
790	土師器	足付皿	A 1（4区）	旧耕作土	9.8	1.7	－	2/12 弱	外面：褐灰（10YR4/1） 内･断面：灰白（7.5YR8/1）	密（ごく細かい黒色砂粒を含む）
791	土師器	皿	A 1（4区）	旧耕作土	7.2	1.25	－	4/12	灰白（7.5YR8/1）	密（0.5mm 以下の半透明･白色･茶色・黒色砂粒を少し含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
792	瓦器	皿	A 1（4区）	旧耕作土	9.1	1.6	－	3/12 強	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい白色砂粒を少し含む）
793	瓦器	椀	A 1（4区）	断ち割り	12.0	4.3	－	2/12 弱	外面：暗灰（N3/0） 内面：灰（N5/0） 断面：灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒、1mm 以下の黒色砂粒を含む）
794	瓦質土器	擂鉢	A 1（4区）	旧耕作土	最大径 27.2	（5.5）	－	不明	外面：黒（N2/0） 内断面：灰（N4/0） 器表面：灰白（10YR8/1）	やや粗（1 mm 以下の白色・灰色砂粒を含む）
795	須恵器	杯	A 1（4区）	旧耕作土精査	－	（1.3）	6.1	底）5/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を含む）
796	青磁	皿	A 1（4区）	床土灰色砂	（16.4）	（1.5）	－	1/12 以下	素地：灰白（N8/0） 釉調：明緑灰（7.5GY7/1）	密
797	青磁	椀	A 1（4区）	床土灰色砂	－	（2.9）	（4.3）	底）1.5/12	素地：灰白（2.5Y8/1） 釉調：黄褐（2.5Y5/3）	精良（ごく細かい白色砂粒を少し含む）
798	土師器	皿	A 1（5区）	床土灰色砂	7.5	（1.15）	－	6/12	灰白（7.5YR7/1） 外面底部：明褐灰（7.5YR7/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
799	須恵器	杯	A 1（5区）	北側床土	－	（2.0）	6.6	底）4.5/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を含む）
800	白磁	椀	A 1（5区）	北側床土	－	（2.1）	5.6	底）3.5/12	素地：白（N9/0） 釉調：灰白（5Y8/1）	密（ごく細かい黒色砂粒を含む）
801	土師器	皿	A 1（6区）	東部南側拡張床土	9.4	1.2	－	3/12	内面：橙（5YR7/6） 外面：橙（2.5YR6/6） 断面：褐灰～灰白（7.5YR5/1 ～ N8/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色・茶色の砂粒を含む、1 mm 大の砂粒も混じる）
802	土師器	皿	A 1（6区）	東部南側拡張床土	（9.8）	（0.8）	－	1.5/12	内面：灰白（7.5YR8/1） 外面:にぶい橙（7.5YR7/4） 断面：橙（7.5YR7/6）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒を少し含む）
803	土師器	皿	A 1（6区）	精査	9.6	1.6	－	3/12	内・断面：にぶい橙（5YR7/4） 外面：灰白（5YR8/1 ～淡橙（5YR8/3）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒少し含む）
804	土師器	皿	A 1（6区）	精査	8.9	1.8	－	ほぼ完存	灰白（2.5Y8/2）	密（1 mm 以下の濃褐色・灰色砂粒を含む）
805	土師器	皿	A 1（6区）	精査	8.0	1.5	－	完存	内：橙（5YR6/6） 外：灰白（10YR8/2）	密（1 mm 以下の白・褐・黒色砂粒や雲母を含む）
806	土師器	皿	A 1（6区）	東土器検出中	9.2	1.7	－	3/12	内面：灰褐（7.5YR4/2） 外断面：橙（2.5YR6/6）	やや粗（0.5mm 以下の白色・黒っぽい色・茶色の砂粒を含む）
807	土師器	皿	A 1（6区）	床土	10.3	1.9	－	4.5/12	淡橙（5YR8/4） 断面：灰白（5YR8/1）	やや密（1 mm 以下の白色・黒色砂粒、0.5mm 以下の茶色砂粒を含む）
808	瓦器	皿	A 1（6区）	重機掘削後	8.5	1.8	－	ほぼ完存	内外面：灰（N4/0） 断面：灰白（10YR8/1）	密（ごく細かい白色・黒色砂粒を少し含む）
809	瓦器	皿	A 1（6区）	東部床土	9.9	1.4	－	3/12	内外面：灰（N5/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒、ごく細かい黒色砂粒を含む）
810	瓦器	皿	A 1（6区）	西部北拡張床土	8.4	1.4	－	6/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0）	密（ごく細かい白色砂粒を少し含む）
811	瓦器	皿	A 1（6区）	床土	9.5	1.7	－	2/12	外面：暗灰（N3/0） 内面：暗灰（N3/0）～灰白（N7/0） 断面：灰白（N8/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒を少し含む）
812	瓦器	皿	A 1（6区）	床土	9.3	（1.8）	－	3/12 弱	外面：暗灰（N3/0） 内・断面：灰（N6/0）	密（ごく細かい白色砂粒を含む）
813	瓦器	椀	A 1（6区）	床土	14.4	5.8	6.0	7/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N7/0））	密（1 mm 以下の白色・黒色・灰色砂粒を少し含む）
814	瓦器	椀	A 1（6区）	北側床土	（15.3）	4.8	5.4	1/12 強	外面：暗灰（N3/0） 内面：ほぼ摩滅、灰白に近い 断面：灰白（N8/0）	やや密（1 mm 以下の黒色砂粒、ごく細かいの白色砂粒を含む）
815	瓦器	椀	A 1（6区）	東部南拡張床土	15.2	5.1	－	5/12 弱	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（10YR8/1）	密（1 mm 以下の白色砂粒を少し含む）
816	瓦器	椀	A 1（6区）	床土	15.4	6	6.1	3/12 強	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（2.5Y8/1）	密（1 mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
817	瓦器	椀	A 1（6区）	床土	14.3	5.8	6.0	2.5/12	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（N8/0））	やや密（1 mm 以下の黒色砂粒、0.5mm 以下の白色砂粒を含む）
818	瓦質土器	鍋	A 1（6区）	東部南拡張床土	（25.3）	（2.6）	－	1/12	外面:にぶい褐（7.5YR6/3） 内面：灰白（10YR8/1）	やや粗（1 mm 以下の白色・半透明・黒っぽい砂粒を含む、1.5 ～ 2 mm 大も混じる）
819	土師質	鍋	A 1（6区）	重機掘削後	（26.0）	（3.7）	－	1/12 以下	外面：暗灰（N3/0） 内面：灰白（10YR8/2） 断面：灰白（N8/0 ～ 10YR8/1）	粗（1.5mm 以下の白色・半透明・黒色・茶色っぽい砂粒を多く含む）

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土
820	白磁	椀	A 1（6区）	東土器検出	/	(1.9)	－	1/12 以下	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰黄（2.5Y7/2）	密
821	白磁	椀	A 1（6区）	北床土	(17.8)	(2.8)	－	1/12 以下	素地：白（N9/0） 釉調：灰白（2.5Y8/1）	密（ごく細かい黒色砂粒を少し含む）
822	白磁	椀	A 1（6区）	南床土	(15.0)	(2.0)	－	1.5/12	素地：灰白（7.5YR8/2） 釉調：灰白（10YR8/2）	密
823	白磁	椀	A 1（6区）	南拡張床土	(16.0)	(2.6)	－	1/12 弱	素地：灰白（10YR8/1）よりやや白っぽい 釉調：灰白（10YR8/1）	密（ごく細かい黒色砂粒、0.5mm 以下の白色砂粒を含む）
824	青磁	椀	A 1（6区）	南拡張床土	(14.6)	(3.9)	－	1/12 強	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰オリーブ（5Y4/2）	密（精良、ごく細かい白色砂粒を含む）
825	青磁	皿	A 1（6区）	南拡張床土	－	(1.6)	3.2	底）6/12	素地：灰白（N8/0） 釉調：明オリーブ（5GY7/1）	密（精良）
826	備前	擂鉢	A 1（6区）	南拡張床土	(32.7)	(4.9)	－	1/12 以下	灰（N6/0）部分的に黄灰（2.5Y6/1）	粗（1～2mm の白色・灰色砂粒含む、3～9mm 大の白色・灰色の石粒が混じる）
827	須恵器	鉢	A 1（10区）	精査	(21.5)	(4.3)	－	1/12 以下	灰白（2.5Y8/1）	やや密（0.5mm 以下の黒色砂粒多く含む）
828	瓦質土器	鉢	A 1（10区）	精査	(27.8)	(6.3)	－	1/12 以下	内外面：暗灰（N3/0） 断面：灰白（7.5YR8/1）	やや密（0.5mm 以下の灰色砂粒、1.5mm 大の透明砂粒）
829	土師器	皿	A 1（11区）	床土	8.4	1.6	－	5/12 弱	灰白（7.5YR8/2）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、ごく細かい赤茶色の砂粒を含む）
830	黒色土器	椀	A1（12区）	精査	15.2	5.1	高台径 6.0	口）3/12 強	灰（N 4/0）	密（1mm 以下の白色砂粒、まれに 3mm 大の白色砂粒を含む）
831	青磁	椀	A 1（11区）	床土	－	(3.3)	6.0	底）3.5/12	素地：灰白（N8/0） 釉調：オリーブ灰（2.5GY6/1）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒を少し含む）
833	瀬戸	鉢	A 1（12区）	精査	(19.5)	(3.6)	－	1.5/12	釉調：浅黄（2.5Y7/3） 素地：灰白（10Y8/1）	密
834	須恵器	長胴壺	A 1（6区）	東部北拡張	(11.3)	23.0	－	1/12 強	灰（N6/0）	やや粗（0.5～2mm 以下の白色砂粒をやや多く含む）
835	輸入陶磁器	壺	A 1（10区、t・s13、a 12）	精査	7.2	(10.2)	－	2/12	素地：灰白（5Y8/1） 釉調：にぶい黄褐（10YR5/3）	精良（微細な灰色砂粒を少し含む）
836	土師器	皿	A 2	S X 200	8.1	1.7	－	9/12	にぶい黄橙（10YR7/3）	密（0.5mm 以下の灰・白色砂粒含む）
837	土師器	皿	A 2	S X 200	11.0	2	－	3/12	にぶい橙（5YR7/3）	密（1mm 以下の白･灰色の砂粒、雲母を多く含む）
838	土師器	皿	A 2	S X 200	8.0	1.8	－	5/12 強	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（1mm 以下の灰褐・白色の砂粒、雲母を含む）
839	土師器	皿	A 2	S X 200	8.3	1.9	－	9/12	にぶい橙（7.5YR7/4）	密（1mm 以下の白・黒・灰色の砂粒、雲母を含む）
840	土師器	皿	A 2	S X 200	7.9	1.9	－	全）11/12	浅黄橙（7.5YR8/3）	密（0.5mm 以下の灰色砂粒少量含まれる）
841	土師器	皿	A 2	S X 200	7.5	1.8	－	完存	灰白（7.5YR8/2）	やや密（1～2mm 以下の白・赤茶・黒色の砂粒含む、器表に雲母多く付着）
842	陶磁器	白磁	A 2	S X 200	－	(2.1)	5.8	底）9/12	釉調：灰白（7.5Y7/1） 素地：灰白（N8/0）	精良
843	備前	擂鉢	A 2	S X 200	27.1	11.9	11.6	3/12 強	灰赤（10R4/2）	密（3mm 以下の白・褐色砂粒含む）
845	丹波	甕	A 2	S X 200	39.8	61.9	24.0	口）2/12 底）3/12	外面：にぶい赤褐（5YR5/4） 内面：橙（2.5YR6/6）	やや粗（1mm～5mm 位のしろ・グレーの石粒を含む）
846	陶磁器	皿	A 2	S X 200	9.8	2.3	5.9	底）3/12	素地：灰白（2.5Y8/2） 釉調：浅黄（2.5YR7/4）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒を少量含む）
847	唐津	椀	A 2	S X 200	(11.5)	－	4.1	口）1/12 強 底）7/12	釉調：灰黄（2.5Y7/2） 素地：にぶい橙（5YR6/4）	密（1mm 以下の白色・黒色砂粒含む
848	染付	小椀	A 2	S X 200	－	2.2	3.0	底）3/12	素地）明青灰（5B7/1）染付）暗青灰（5B4/1）	
853	須恵器	杯身	B 1	東側拡張部東壁（床土）	(9.3)	(3.7)	－	1.5/12 強	明青灰（5PB7/1） 外面の一部：灰（N4/0）	やや粗（1mm 以下の白色・黒色砂粒をやや多く含む）
854	青磁	椀	B 5	重機埋戻し（表採）	(16.6)	(6.4)	－	1.5/12	素地：灰白（N8/0） 釉調：明オリーブ灰（2.5GY7/1）	密（0.5mm 以下の白色砂粒、ごく細かい黒色砂粒を含む）
856	青磁	皿	C 2	床土	(11.3)	(3.6)	－	1/12 以下	素地：白（N9/0） 釉調：緑灰（7.5GY6/1）	精良
857	青磁	椀	C 3	南端床土	－	(1.40)	5.2	底）3/12 強	素地：灰白（N8/0） 釉調：灰オリーブ（7.5Y5/2）	精良
858	須恵器	壺	C 4	中央部床土	(11.3)	(4.0)	－	1.5/12 弱	内外面：灰白（N7/0） 断面：赤灰（5 R 6/1）	精良

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土
859	陶磁器	甕	Ｄ２	北壁黒褐色土	/	(5.5)	－	－	内面：灰赤（2.5YR5/2） 外面：灰赤（2.5YR4/2） 断面：褐灰（7.5YR6/1）	１～２mm の白色砂粒や１mm 以下の白色・黒色砂粒を多く含む）
860	土師器	甕	Ｅ１	南側黒褐色土精査	16.5	(8.2)	頸）12.0	4/12	明赤褐（5YR5/6）	良（1.5mm 以下の白色砂粒を多く含む）
861	須恵器	蓋	Ｅ２	青灰色粘質土（谷地形）精査	(12.8)	(3.7)	－	1/12	内外面：灰（N6/0） 断面：灰赤（2.5YR6/2）	密（１mm 以下の白色・黒色の砂粒含む
862	須恵器	杯	Ｅ２	拡張部最上層（旧耕作土）	(12.1)	(3.7)	鍔）15.2	口）1/12 以下 鍔）2/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色砂粒を含む）
863	須恵器	杯Ｂ	Ｅ２	拡張部最上層（旧耕作土）	－	(3.7)	8.8	底）2/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の黒色・白色砂粒を含む）
864	須恵器	壺	Ｅ２	重機掘削（現代耕作土床土）	－	(2.4)	6.0	底）4/12	灰（N6/0）	密（まれに６mm 大の白色砂粒が見られるが主体は１mm 以下の白色・黒色の砂粒含む
865	須恵器	甕	Ｅ３	排土中	(17.6)	(4.15)	－	1/12 強	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色の砂粒含む
866	須恵器	杯	Ｆ３	壁面整地（表土下－20cm 現代耕作土）	－	(2.6)	10.8	底）2/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒少量含む
867	土師器	高杯	Ｆ４	西側南端付近	(3.70)	(7.8)	最大 6.4	－	橙（2.5YR6/8）	密（６～３mm 大の黒色・赤色・白色砂粒、１mm 以下の灰色・赤色・白色砂粒多く含む
868	須恵器	杯	Ｆ５	拡張排土内	(11.0)	(2.2)	鍔）13.6	1.5/12	灰白（N7/0）	密（１mm 以下の白色・黒色砂粒含む
869	須恵器	杯（墨書入り）	F10	西面掃除中	－	(1.2)	(7.0)	底）2/12 弱	灰白（N7/0）	密（１mm 以下の白色砂粒を含む）
870	須恵器	甕	F13	床面精査自然流路一段下げ	15.9	(7.6)	－	2/12	内面：灰（N6/0） 外面：灰（N5/0）	密（１mm 以下の白色・黒色砂粒含む

付表16　金生寺遺跡第４・５次調査出土木製品・木材観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ	幅	高さ・厚さ	木取り	樹種	備　考
194	井戸枠横桟(東側)	A1	ＳＥ210	112.3	9.2	5.6 ～ 5.8	芯去材	ブナ科クリ属クリ	両端のみ手斧痕あり
195	井戸枠横桟（西側）	A1	ＳＥ210	111.6	8.2	5.6 ～ 6.0	芯去材	ブナ科クリ属クリ	表面に手斧痕あり
196	井戸枠横桟(南側)	A1	ＳＥ210	111.8	9.8	6.6	芯去材	ブナ科クリ属クリ	両端の手斧痕顕著
197	井戸枠横桟(北側)	A1	ＳＥ210	111.6	9.0	6.6	芯去材	ブナ科クリ属クリ	
198	井戸枠支柱（北東）	A1	ＳＥ210	45.2	6.0	5.4	芯去材	ブナ科クリ属クリ	全体的に歪みあり
199	井戸枠支柱（南東）	A1	ＳＥ210	48.2	6.5	6.0	芯去材	ブナ科クリ属クリ	
200	井戸枠支柱（北西）	A1	ＳＥ210	46.6	6.2	5.4	芯去材	ブナ科クリ属クリ	
201	井戸枠支柱（南西）	A1	ＳＥ210	46.0	6.4	5.6	芯去材	ブナ科クリ属クリ	歪みなくまっすぐで整っている
202	井戸枠支柱	A1	ＳＥ210	48.0	6.6	5.8	芯去材	ブナ科クリ属クリ	
203	井戸枠支柱	A1	ＳＥ210	47.8	6.4	5.9	芯去材	ブナ科クリ属クリ	上下小口切断痕あり
204	井戸枠縦板	A1	ＳＥ210	51.0	17.0	1.0	板目	ヒノキ科アスナロ属	
205	井戸枠縦板か	A1	ＳＥ210	42.4	6.5	1.1	板目	ヒノキ科ヒノキ属	のこぎり痕らしきものあり
206	井戸枠縦板か	A1	ＳＥ210	40.5	5.7	0.7	追柾目	マツ科ツガ属	表面・裏面共に加工が施されている
207	井戸枠縦板か	A1	ＳＥ210	33.9	5.7	1.2 ～ 1.6	板目	スギ科スギ属スギ	
208	井戸枠縦板か	A1	ＳＥ210	16.4	7.2	1.3	板目	マツ科モミ属	
209	井戸枠縦板か	A1	ＳＥ210	21.3	5.5	0.6	柾目	マツ科ツガ属	のこぎりで加工したような痕あり
210	椀	A1	ＳＥ210	口径 19.5	底径 8.6	器高 7.3	横木取り	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	口縁残存率：8/12 底部：100%

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ	幅	高さ・厚さ	木取り	樹種	備　　考
211	加工木	A1	ＳＥ 210	19.9	13.1	5.1	板目	マツ科モミ属	表面に手斧痕らしき凸凹あり
212	もえさし	A1	ＳＥ 210 下層	6.9	2.0	0.5	柾目	ー	
213	もえさし	A1	ＳＥ 210 下層	8.4	1.3	0.7 ～ 0.9	柾目	マツ科マツ属 [二葉松類]	
214	もえさし	A1	ＳＥ 210 下層	7.4	2.0	1.5	柾目	ー	
215	もえさし	A1	ＳＥ 210	11.0	1.0	1.2	柾目	マキ科マキ属イヌマキ	断面立方体
216	もえさし	A1	ＳＥ 210	10.2	1.3	0.7	柾目	マツ科マツ属 [二葉松類]	
217	もえさし	A1	ＳＥ 210 南側掘形	9.0	1.2	0.7	板目	マツ科マツ属 [二葉松類]	
218	杭	A1	ＳＥ 210	27.0	6.4	5.4	芯持丸木	ー	年代測定試料
219	杭	A1	ＳＥ 210	17.3	7.0	3.1	芯持丸木か	マツ科モミ属	２分の１欠損
220	加工木	A1	ＳＥ 210 下層	14.9	4.0	3.4	心持丸木	ー	
221	加工木	A1	ＳＥ 210	13.2	5.9	0.7	板目	ヒノキ科ヒノキ属	加工が施されている
222	加工木	A1	ＳＥ 210	10.9		7.8	心持丸木	ヒノキ科ヒノキ属	欠損した芯持材

付表17　金生寺遺跡第４・５次調査出土石製品観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	法量（cm）			重量（ｇ）	材質	備　　考
				長さ	幅	厚さ			
695	管玉	Ａ１	排水溝	2.2	1.7	—	1.1	緑色凝灰岩	両面穿孔
726	滑石鍋	Ａ１（ｓ 13）	精査	(7.5)	(9.0)	0.8 ～ 1.2	91.3	滑石	内面：灰（Ｎ 6/1） 外面：黒褐（10YR3/1） 鍋の再利用か
746	碁石か	Ａ１（ｂ 12）	精査	2.0	1.7	0.7	3.3		灰白（５Ｙ 8/1）
850	硯	Ａ２	ＳＸ 200	6.3	9.8	2.3 ～ 1.25			
851	一石五輪塔	Ａ２	ＳＸ 200	26.8	13.0	11.5		安山岩	
852	宝篋印塔	Ａ２	ＳＸ 200	14.2	14.7	—		安山岩	高さ 14.4㎝
855	敲石	Ｂ１	精査	8.5	7.8	4.7	480	安山岩	

付表18　　金生寺遺跡第４・５次調査出土銭貨・銅製品観察表

報告番号	銭貨名 / 製品名	地区	出土地点	法量（cm）			重さ（ｇ）	国	初鋳年	備　　考
				径 / 長さ	厚さ	幅				
517	開元通寶	Ａ１	ＳＫ 40	2.4	0.1	−	1.4	唐	621 年	
776	元豊通寶	Ａ１（２区）	精査	2.4	0.1	−	2.2	北床	1078 年	
832	聖宋元寶	Ａ１（11 区）	精査	7.2	0.1	−	1.3	北床	1101 年	
849	銅板	Ａ２	ＳＸ 200	(5.2)	0.1	(3.1)	−	−	−	

図　　　　　版

(1)調査地全景(北から)

(2)調査地全景(東から)

(1)小規模調査A-1・2地区
(上が東)

(2)小規模調査B-1・2地区
(上が東)

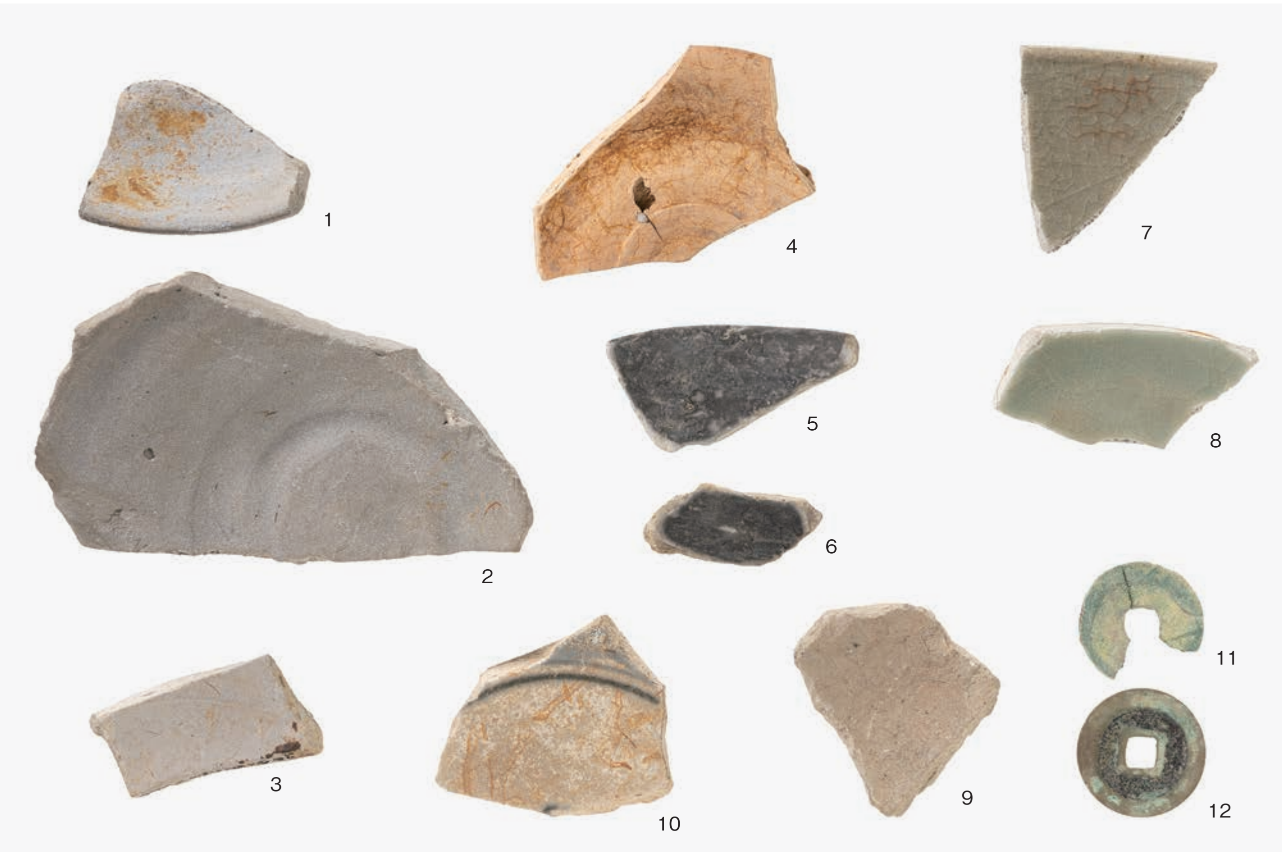
(3)調査C地区(上が東)

(1) A-1地区ピットP-6検出状況
（東から）

(2) C地区ピットP-1・２検出状況
（北から）

(3) C地区ピットP-5検出状況
（東から）

(1)出土遺物(表面)



(2)出土遺物(裏面)

(1)Ａ１地区全景(北から)

(2)Ａ１地区全景(北東から)

(1)A１地区全景(北西から)

(2)A１地区全景(南東から)


(1)Ａ１・２地区全景(上が北)


(2)Ａ１地区全景(東から)

(1)小規模Ａ１トレンチ全景
（南から）

(2)小規模Ａ１トレンチ６区遺物
出土状況（東から）

(3)小規模Ａ１トレンチ６区遺物
出土状況（南から）


(1)A1地区北壁断面(南西から)


(2)Ａ１地区東壁北側断面
(南西から)


(3)Ａ１地区東壁南側断面
(北西から)

(1)掘立柱建物SB130検出状況
(東から)

(2)掘立柱建物SB130完掘状況
(南から)

(3)掘立柱建物SB130柱穴SP70
断面(南から)

(1)掘立柱建物SB180検出状況(西から)

(2)掘立柱建物SB180検出状況(北から)

(1)掘立柱建物SB180検出状況
(西から)

(2)掘立柱建物SB180検出状況
遠景(西から)

(3)掘立柱建物SB180完掘状況
(西から)

(1)掘立柱建物SB180柱穴SP147
遺物出土状況(北から)

(2)掘立柱建物SB180柱穴SP148
断面(北から)

(3)掘立柱建物SB180柱穴SP192
断面(北から)

(1)掘立柱建物SB190検出状況
(南から)

(2)掘立柱建物SB190完掘状況
(南から)

(3)掘立柱建物SB190柱穴SP24
断面(北東から)

(1)掘立柱建物SB215検出状況
(南から)

(2)掘立柱建物SB215完掘状況
(南西から)

(3)掘立柱建物SB215柱穴SP21
断面(南から)

(1)井戸SE210検出時土器
出土状況(南から)

(2)井戸SE210堀形検出状況
(東から)

(3)井戸SE210上層土器検出時畦
断面(東から)


(1)井戸SE210上層土器検出状況(西から)


(2)井戸SE210上層土器検出状況近景(南から)


(1)井戸SE210畦断面(東から)


(2)井戸SE210断面(東から)


(3)井戸SE210木材・木製品等
出土状況(東から)

(1)井戸SE210木材・木製品等出土状況(東から)

(2)井戸SE210木材・木製品等出土状況近景(南から)

(1)井戸SE210井戸枠検出状況（東から）

(2)井戸SE210井戸枠検出状況（南から）

(1)井戸SE210井戸枠縦板
検出状況(北東から)

(2)井戸SE210井戸枠南西隅部
近景(北東から)

(3)井戸SE210井戸枠南西隅部
支柱除去後近景(北東から)


(1)井戸SE210井戸枠横桟検出状況(東から)


(2)井戸SE210井戸枠横桟検出状況(南から)

(1)井戸SE210井戸枠横桟
北東隅部近景(上が北)

(2)井戸SE210井戸枠横桟
北西隅部近景(南東から)

(3)井戸SE210井戸枠横桟
南東隅部近景(北西から)

(1)井戸SE210井戸枠除去後
石敷き検出状況(東から)

(2)井戸SE210井戸枠除去後
石敷き検出状況(南から)

(3)井戸SE210井戸枠除去後
石敷き中央部検出状況
(東から)

(1)井戸SE210石敷き裏込め土
検出状況(東から)

(2)井戸SE210石敷き裏込め土
断面(東から)

(3)井戸SE210完掘状況(東から)

(1)溝状遺構SD220遺物出土状況(東から)

(2)溝状遺構SD220遺物出土状況(南から)

(1)溝SD220遺物出土状況(北から)

(2)溝状遺構SD220遺物出土状況(西から)

図版第28　金生寺遺跡第４・５次

(1)溝状遺構SD220畦２断面
（南から）

(2)溝状遺構SD220畦４断面
（南から）

(3)溝状遺構SD220完掘状況
（南西から）

⑴土坑SK40検出状況（南から）

⑵土坑SK40完掘状況（西から）

⑶土坑SK41完掘状況（東から）

(1)土坑SK79完掘状況(南西から)

(2)土坑SK80角礫検出状況
(西から)

(3)土坑SK80完掘状況(西から)

(1) ピットSP173遺物出土状況
（東から）

(2) ピットSP167遺物出土状況
（西から）

(3) ピットSP227遺物出土状況
（南西から）

(1)ピットSP115遺物出土状況
（東から）

(2)溝SD235・236完掘状況
（南から）

(3)調査区北東側耕作溝検出状況
（南から）

(1)集石遺構SX200調査前状況
（東から）

(2)集石遺構SX200調査前状況
（東から）

(3)集石遺構SX200トレンチ
掘削状況（東から）


(1)集石遺構SX200検出状況(南から)


(2)集石遺構SX200検出状況(東から)

(1)集石遺構SX200断面
(南西から)

(2)集石遺構SX200断面
(北東から)

(3)集石遺構SX200遺物出土状況
(西から)

(1)B地区遠景(南から)

(2)B・D地区全景(上が北)

(1)B1トレンチ全景(南から)

(2)B1トレンチ全景(北から)

(3)B1トレンチ北壁断面(南から)

(1)Ｂ５トレンチ全景(南から)

(2)Ｂ５トレンチ西壁断面
(南東から)

(3)Ｂ５トレンチ北壁断面
(南から)


(1)B地区本調査区西側全景
（南から）


(2)B地区本調査区中央部全景
（南から）


(3)B地区本調査区東側全景
（南から）

(1)B地区本調査区北壁中央部断面(南から)

(2)B地区本調査区SP501断面(東から)

(3)B地区本調査区SP502断面(東から)


(1)B2トレンチ全景(南から)


(2)B2トレンチ北壁断面(南から)


(3)B3トレンチ全景(南東から)


(4)B3トレンチ全景(南から)

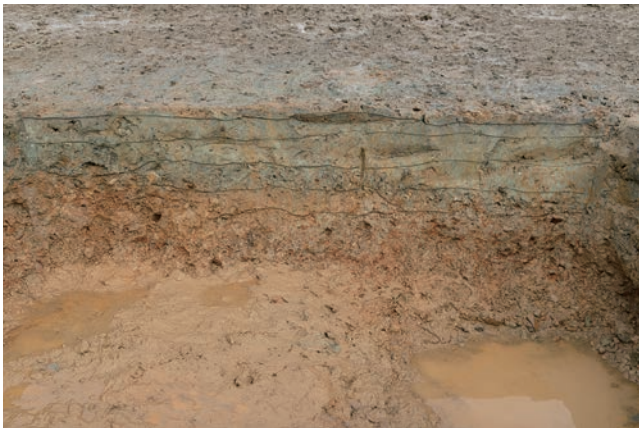

(5)B4トレンチ全景(南から)


(6)B4トレンチ北壁断面(南から)


(7)B6トレンチ全景(南から)


(8)B6トレンチ北壁断面(南から)


(1)B7トレンチ全景(南から)


(2)B7トレンチ北壁断面(南から)


(3)B8トレンチ全景(南から)


(4)B8トレンチ北壁断面(南から)


(5)B9トレンチ全景(南から)


(6)B9トレンチ北壁断面(南から)


(7)B10トレンチ全景(南から)


(8)B10トレンチ北壁断面(南から)

(1)小規模調査Ｃ・Ｅ・Ｆ地区遠景(南から)

(2)小規模調査Ｃ・Ｅ・Ｆ地区遠景(北から)

(1) Ｂ地区・小規模調査Ｃ～Ｆ地区遠景(西から)

(2)小規模調査C・E・F地区全景(上が北)


(1)C1トレンチ全景(北から)


(2)C1トレンチ西壁断面(東から)


(3)C2トレンチ全景(南から)


(4)C2トレンチ南壁断面(北から)


(5)C3トレンチ全景(南から)


(6)C3トレンチ南壁断面(北から)


(7)C4トレンチ全景(南から)


(8)C4トレンチ南壁断面(北から)


(1)D1トレンチ全景(東から)


(2)D1トレンチ南壁断面(北から)


(3)D2トレンチ全景(東から)


(4)D2トレンチ南壁断面(北から)


(5)E1トレンチ全景(東から)


(6)E1トレンチ南壁断面(北から)


(7)E3トレンチ南壁西側断面(北から)


(8)E3トレンチ南壁中央部断面(北から)

(1)E2トレンチ拡張後全景
(東から)

(2)E2トレンチ東壁断面(西から)

(3)E2トレンチ拡張部自然木等
検出状況(東から)

(1)F5トレンチ拡張部検出状況全景(北から)

(2)F5トレンチ拡張区南壁断面(北から)

(3)F5トレンチ南西隅部遺物出土状況(北東から)


(1)F1トレンチ全景(西から)


(2)F1トレンチ南壁断面(北から)


(3)F2トレンチ全景(北から)


(4)F2トレンチ東壁断面(西から)


(5)F3トレンチ全景(南から)


(6)F3トレンチ東壁断面(西から)


(7)F4トレンチ全景(南から)


(8)F4トレンチ北壁断面(南から)


(1)F6トレンチ全景(南から)


(2)F6トレンチ南壁断面(北から)


(3)F7トレンチ全景(南から)


(4)F7トレンチ東壁断面(西から)


(5)F8トレンチ全景(南から)


(6)F8トレンチ北壁断面(南から)


(7)F9トレンチ全景(南から)


(8)F9トレンチ北壁断面(南から)


(1)F10トレンチ全景(南から)


(2)F10トレンチ東壁断面(西から)


(3)F11トレンチ全景(南から)

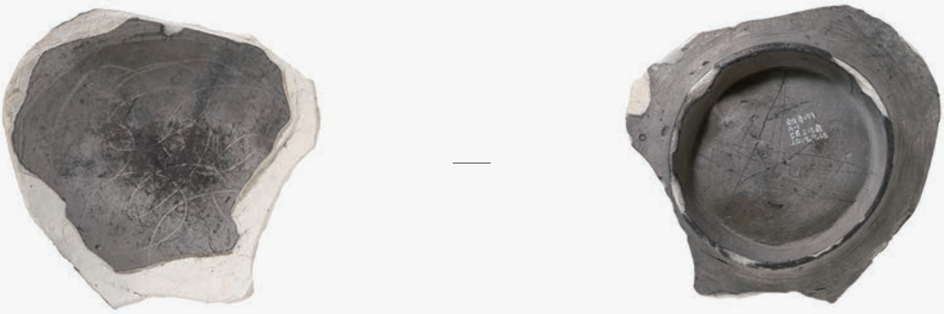

(4)F12トレンチ全景(南から)


(5)F12トレンチ東壁断面(西から)


(6)F13トレンチ全景(北から)

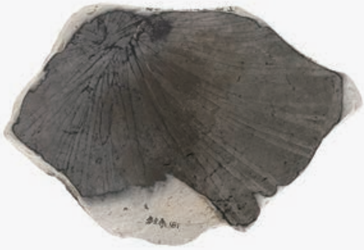

(7)F13トレンチ全景(南から)


(8)F13トレンチ東壁断面(南西から)



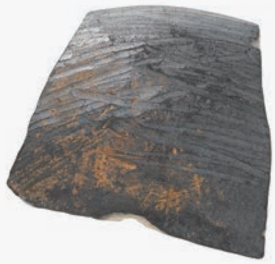
13

14



17

18



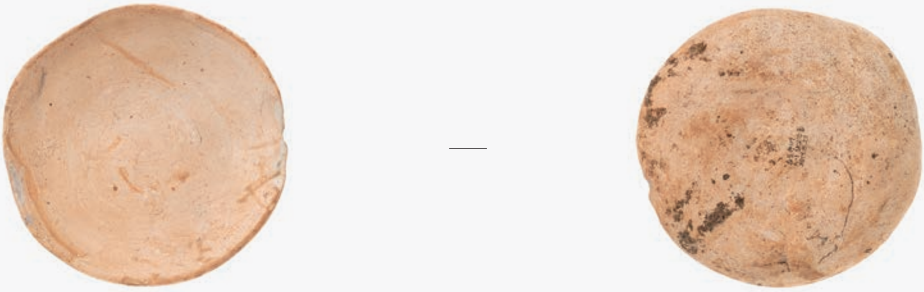
19

27

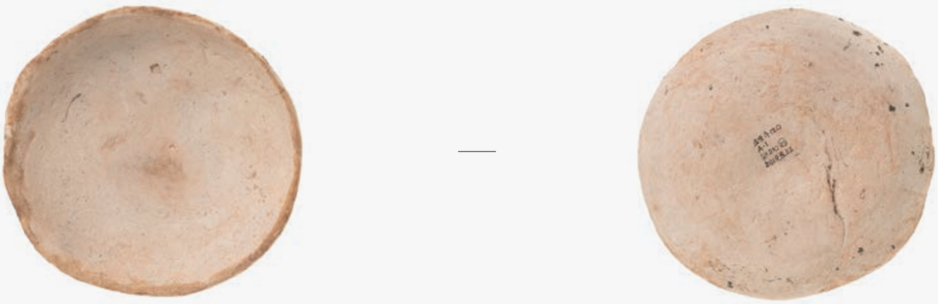
28

31

出土遺物１　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物１

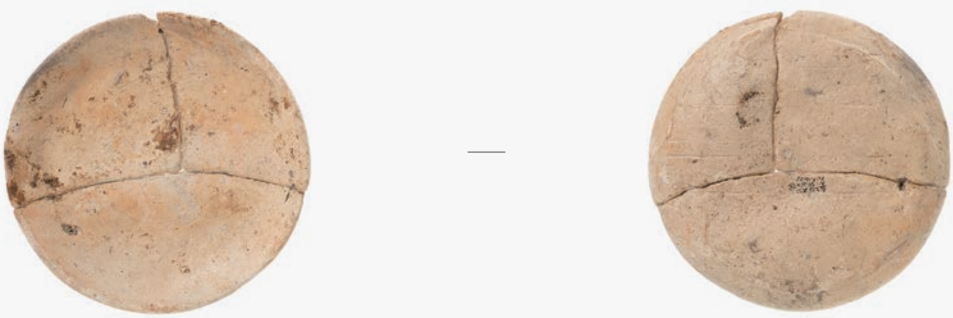


32



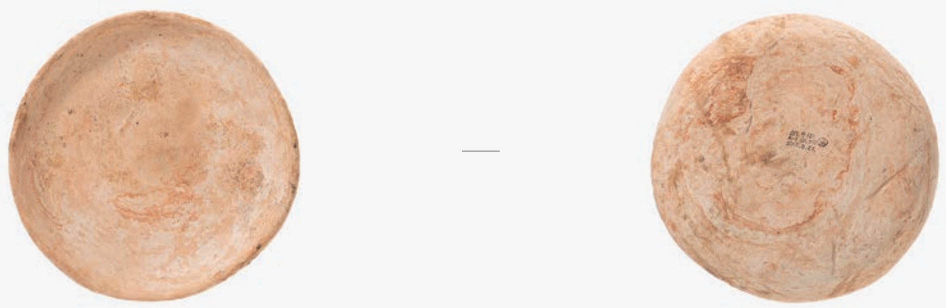
33

35

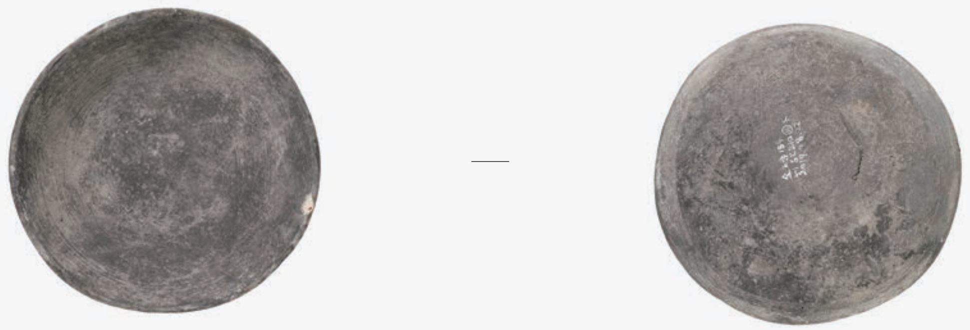


34

出土遺物２　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物２



38



39

82

84

出土遺物３　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物３

194

195

196

197

出土遺物４　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物４


198


199


200


201


202


203


204

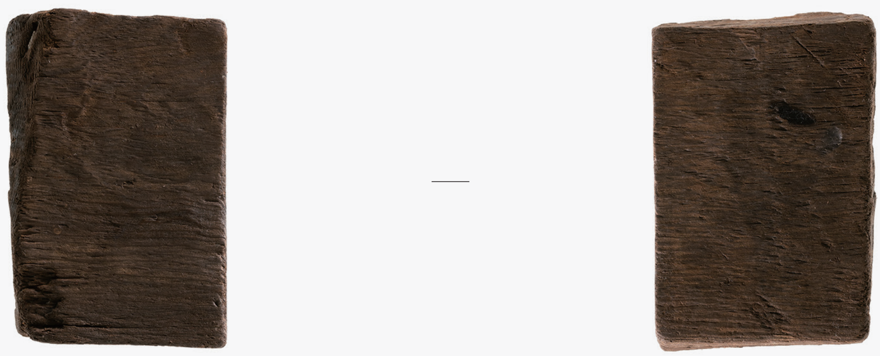

205


206

出土遺物５　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物５

210

210 復元



211

213

215

216

217

出土遺物６　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物６


218


219


220


208


221


222

出土遺物７　Ａ１地区井戸ＳＥ210出土遺物７

図版第 59

395

257

396

260

265

277

261

259

275

462

268

出土遺物８　Ａ１地区溝状遺構ＳＤ220出土遺物１

243

249

344

345

339

340

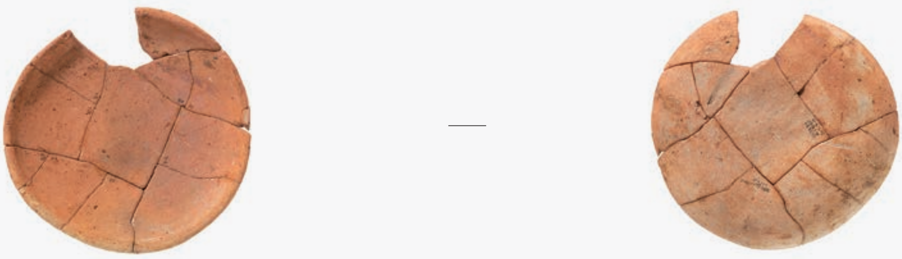
496

510

346

出土遺物９　Ａ１地区溝状遺構ＳＤ220出土遺物２

4



633

611

632

748

734

出土遺物10　A 1 地区出土遺物 1

図版第 62

690

689

683

755

793

830

出土遺物11　Ａ１地区出土遺物２

834

788

835

726

746

695

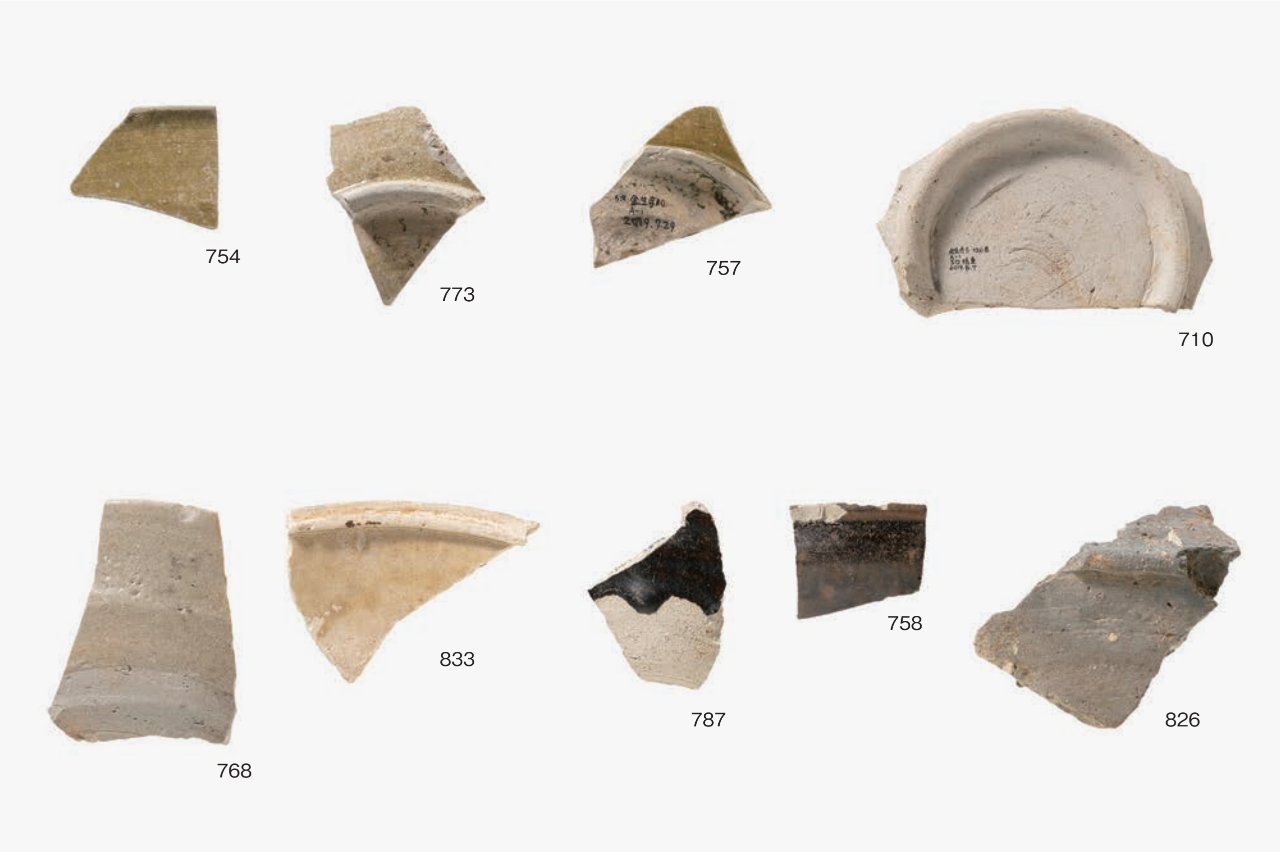
517

776

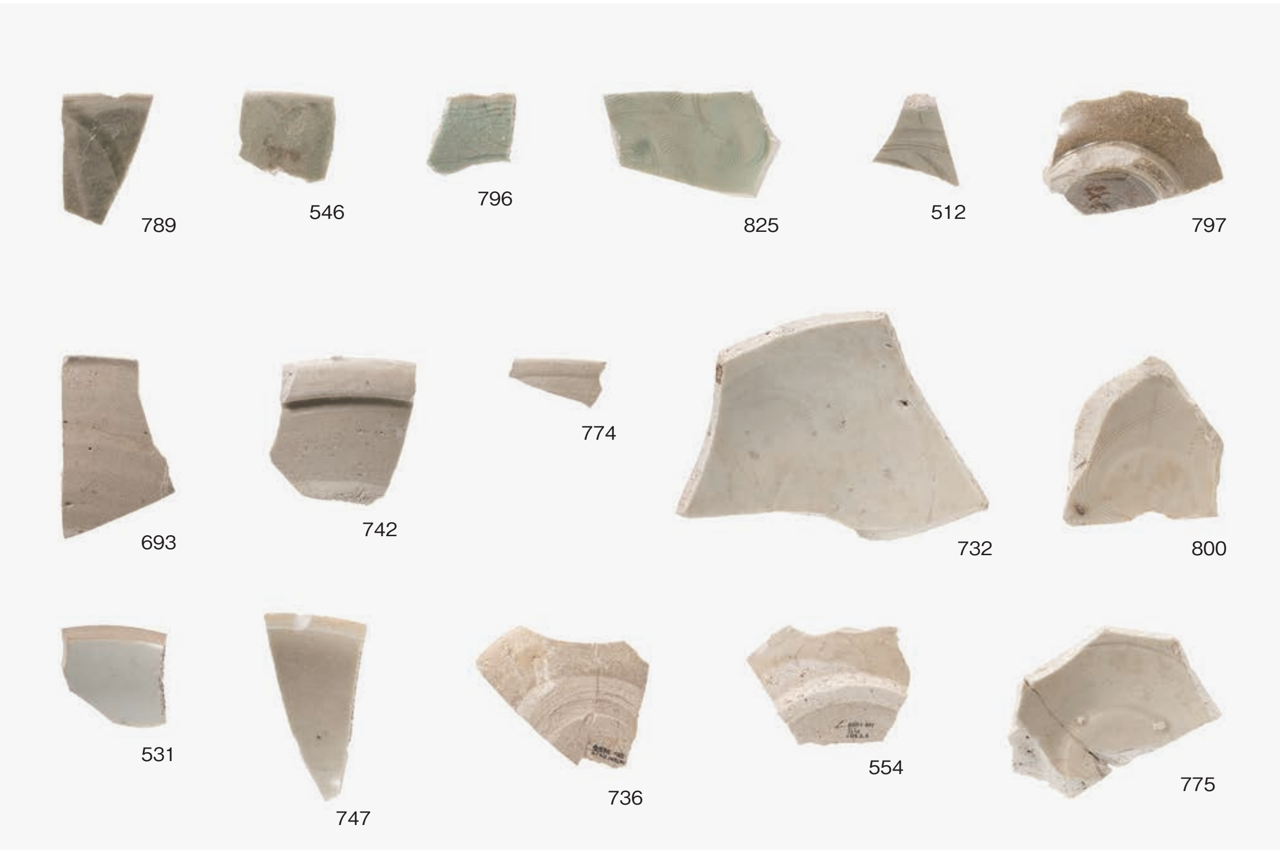
832

出土遺物12　Ａ１地区出土遺物３

図版第 64



(1)出土遺物13　A 1 地区出土遺物 4



(2)出土遺物14　A 1 地区出土遺物 5


841


840

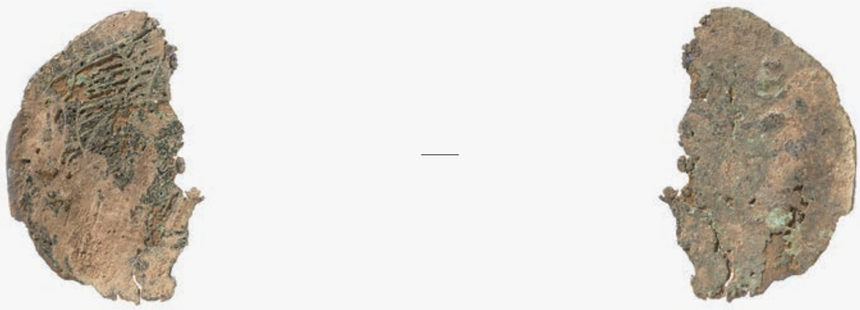

839


843


848


847


850


849


851

出土遺物15　Ａ２地区集石遺構ＳＸ200出土遺物１


852


852


852


852

(1)出土遺物16　A２地区集石遺構ＳＸ200出土遺物２


857


856


854


859


855


869

(2)出土遺物17　B～D、F地区出土遺物

報告書抄録

ふ　り　が　な	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書　　　　名	京都府遺跡調査報告集
副　書　名	
巻　　　　次	第191冊
シ リ ー ズ 名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第191冊
編　著　者　名	荒木瀬奈、黒坪一樹、引原茂治、山本 梓
編　集　機　関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所　　在　　地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番の3　Tel. 075（933）3877
発 行 年 月 日	西暦2023年３月31日

<table>
<tr><th>ふりがな</th><th>ふりがな</th><th colspan="2">コード</th><th>北緯</th><th>東経</th><th>調査期間</th><th>調査
面積</th><th>調査原因</th></tr>
<tr><th>所収遺跡名</th><th>所在地</th><th>市町村</th><th>遺跡
番号</th><th>°　′　″</th><th>°　′　″</th><th></th><th>㎡</th><th></th></tr>
<tr><td>金生寺(こんしょうじ)遺跡第３次</td><td>京都府亀岡市(きょうとふかめおかし)曽我部町犬飼中(そがべちょういぬかいなか)金生寺(こんしょうじ)ほか</td><td rowspan="3">262064</td><td rowspan="3">55</td><td>34°　59′　37.17″</td><td>135°　32′　37.74″</td><td>20180611～
20180918</td><td>968</td><td rowspan="3">ほ場整備</td></tr>
<tr><td>金生寺(こんしょうじ)遺跡第４次</td><td>京都府亀岡市(きょうとふかめおかし)曽我部町法貴(そがべちょうほうき)コモ原(はら)</td><td rowspan="2">34°　59′　20.27″</td><td rowspan="2">135°　32′　21.04″</td><td>20181203～
20190307</td><td>3,806</td></tr>
<tr><td>金生寺(こんしょうじ)遺跡第５次</td><td>京都府亀岡市(きょうとふかめおかし)曽我部町法貴(そがべちょうほうき)コモ原(はら)</td><td>20190417～
20200319</td><td>5,232</td></tr>
</table>

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金生寺（こんしょうじ）遺跡第３次	散布地		柱穴	元祐通寶	
金生寺（こんしょうじ）遺跡第４次	散布地	平安～中世	柱穴	土師器、瓦器	小規模調査
金生寺（こんしょうじ）遺跡第５次	散布地	平安～中世	掘立柱建物、井戸、溝	土師器、瓦器椀	4次調査を拡張

所収遺跡名	要　　約
金生寺（こんしょうじ）遺跡第３次	平安時代後期の可能性のあるピットを検出。
金生寺（こんしょうじ）遺跡第４次	小規模調査を実施し、中世の遺構や遺物を確認。
金生寺（こんしょうじ）遺跡第５次	第４次調査の調査区を拡張。掘立柱建物４棟、井戸、溝などを検出。井戸からは廃絶後及び埋没後に投棄された土師器皿や瓦器椀が多く出土した。

京都府遺跡調査報告集 第191冊

令和５年3月31日

発行　公益財団法人
　　　京都府埋蔵文化財調査研究センター
　　　〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
　　　Tel（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
　　　http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
　　　〒602-8358　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
　　　Tel（075）467-5151　　Fax（075）467-5152